松原市文化財報告　第４冊

河　合　遺　跡

松原市立学校給食センター建設工事に伴う河合遺跡C６－３－14発掘調査報告書

令和２ (2020) 年３月

松原市教育委員会

写真上が北

１．Ⅰ区SB６長舎検出状況（西から）

２．Ⅰ区SB５・SB６長舎完掘状況（北から）

１．Ⅲ区SB３・SB４長舎完掘状況（北から）

２．Ⅳ区完掘状況（南から）

３．Ⅲ区SK3003遺物出土状況（南から）

４．Ⅳ区SX2019遺物出土状況（南から）

１．SX2019出土土師器・須恵器

２．自然流路出土漆容器

松原市文化財報告　第４冊

河　合　遺　跡

松原市立学校給食センター建設工事に伴う河合遺跡Ｃ６－３－14発掘調査報告書

令和２年 (2020) ３月

松原市教育委員会

例言

１．本書は、大阪府松原市河合５丁目238－１の一部、238－３、238－４、238－６に所在する河合遺跡（調査番号：Ｃ６－３－14）の発掘調査報告書である。

２．本調査は新学校給食センター建設工事に伴う事前発掘調査として松原市教育委員会が実施したもので、現地調査期間は平成21年（2009）５月11日から平成22年（2010）３月20日までの実働188日である。現地調査は芝田和也・岡本武司が担当した。また、現地での遺構実測・写真撮影については木村健明（(株)アート）が補助した。現地調査終了後、平成25年度（2013）に大矢祐司を担当として整理作業を開始し、令和元年度（2019）に本書の刊行をもって終了した。

３．現地調査実施年度・整理作業開始年度・整理作業終了年度の組織体制は以下の通りである。
平成21年度／松原市教育委員会事務局 生涯学習部 地域教育振興課 市史文化財係
　課長　大木美穂子、参事　西井宏樹、主幹　足立俊彦、係長　芝田和也、主査　岡本武司
平成25年度／松原市教育委員会事務局 生涯学習部 地域教育振興課 市史文化財係
　課長　西井宏樹、参事　芝田和也、主幹兼係長　足立俊彦、係員　大矢祐司
令和元年度／松原市教育委員会事務局 教育総務部　文化財課 文化財係
　課長　芝田和也、係長　大矢祐司

４．本書の執筆は、第１・２章を芝田・大矢がおこない、第４章第２～４節は文中に示した。その他の箇所の執筆と編集については大矢がおこなった。

５．調査にあたっては、以下のとおり作業を委託した。
発掘調査作業／平成21年度／株式会社アート
出土遺物注記・接合・補強／平成25年度／株式会社文化財サービス
出土遺物接合・補強／平成26年度／株式会社地域文化財研究所
出土遺物実測／平成27年度／株式会社地域文化財研究所
遺構・遺物図面トレース／平成28年度／株式会社地域文化財研究所
出土遺物写真撮影／平成29年度／株式会社地域文化財研究所
出土木製品樹種同定・保存処理／平成25年度／株式会社古環境研究所
出土木製品樹種同定・保存処理／平成26年度／株式会社吉田生物研究所
花粉化石・植物珪酸体分析／平成21年度／文化財調査コンサルタント株式会社
放射性炭素年代測定分析／平成28年度／株式会社パレオ・ラボ

６．発掘調査及び整理作業の実施にあたっては、下記の方々のご協力を得るとともにご指導を賜った。記して謝意を表したい（敬称略、五十音順）。
大阪府教育委員会、大阪府立狭山池博物館、松原市文化財保護審議会、植田隆司、上田 睦、
影山美智与、木村健明、工楽善通、阪田育功、高島 徹、森屋直樹、山根 航、山本 彰

７．発掘調査で得られた出土遺物や図面・写真等の記録類については、すべて松原市教育委員会が保管している。広く利用されることを希望する。

凡例

1．本書で用いた座標値は、すべて世界測地系（測地成果2000）による平面直角座標系第Ⅵ系の数値で、m単位で表記した。

2．本書で用いた水準値は、すべて東京湾平均海面（2000年平均成果、平成19年度観測値）を基準とする海抜高で、m単位で表記した。また値の前にはTPを付した。

3，本書の図中にある方位は全て座標北である。なお、真北は座標北より東に00°15′44″、磁北は真北より西に7°20′偏る。角度変換は、調査地内に設置した4級基準点4A2（X-158524.563,Y-42428.208）の数値を利用し、国土地理院ホームページ内のサイトを利用しておこなった。

4．地層の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』1998年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いて目視により比定した。

5．発掘した遺構は、各調査区ごとで検出順にアラビア数字の通し番号をつけ、遺構台帳に登録した（例：S001）。現地調査終了後、遺構の種別を示す記号と調査区番号（ローマ数字よりアラビア数字に変換）を遺構番号の前に付した（例：SD1001）。また、複数遺構の組み合わせからなる掘立柱建物のような遺構については、遺構の種類ごとにアラビア数字で通し番号をつけ、遺構の種別を示す記号の後ろに付した（例：SB１）。なお、遺構種別の記号については、以下のとおりである。

SA：柵・塀、SB：掘立柱建物、SD：溝、SE：井戸、SK：土坑、SP：柱穴・ピット、SX：落ち込み・その他不明遺構、NR：自然流路

6．遺構図・断面図・平面図は適宜縮尺を変えており、図ごとにスケールバーを表示し、キャプションに縮尺を表示した。

7．遺物の実測図は、須恵器の断面を黒色、黒色土器・瓦・瓦器・瓦質土器の断面を灰色（K40%）で塗り表現した。また、縮尺については１/４を基本とし、石器・石製品は１/２、甕・礎板など一部については１/６とした。

8．出土遺物の同定については下記文献に依った。

古代の土器研究会編 1992『古代の土器1 都城の土器集成』真陽社.

佐藤 隆2000「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮趾の研究　第十一』,大阪市文化財協会.

佐藤 隆2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年-陶邑編年の再構築に向けて-」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号.

佐藤 隆2004「8世紀の須恵器編年と難波宮･平城京の並行関係-陶邑編年の再構築に向けて･その2-」『大阪歴史博物館研究紀要』第3号.

神野 恵･森川 実2010「1.土器類」『図説 平城京辞典』柊風舎.

9．遺構図面及び遺物実測図は、Adobe社製IllustratorCS6,CCでトレースと調整を行いAI形式のデータを保管している。

10. 遺物写真については、TIFF形式及びJPEG形式のデータを保管している。

11. 本書の編集は、Adobe InDesignCCで行いINDD形式及びPDF形式でデータを保管している。

本文目次

例言
凡例
目次（本文・図版・図・表・写真）
第１章　経緯と経過……001
　第１節　調査に至る経緯……001
　第２節　調査の経過……001
第2章　位置と環境……005
　第１節　歴史と環境……005
　　第１項　地理的環境……005
　　第２項　歴史的環境……006
　第2節　既往の調査……006
第３章　調査の成果……010
　第１節　層序……010
　第２節　遺構と遺物……015
　　第１項　概要……015
　　第２項　層中出土遺物……015
　　第３項　自然流路（NR）……027
　　第４項　柵・掘立柱塀（SA）……033
　　第５項　掘立柱建物（SB）……036
　　第６項　溝（SD）……062
　　第７項　井戸（SE）……074
　　第８項　土坑（SK）……077
　　第９項　柱穴・小穴（SP）……087
　　第10項　落ち込み（SX）……087
第４章　自然科学分析……093
　第１節　分析の目的及び概要……093
　第２節　放射性炭素年代測定……093
　　第１項　資料と方法……093
　　第２項　結果……094
　　第３項　考察……094
　第３節　花粉分析・植物珪酸体分析……096
　　第１項　はじめに……096
　　第２項　分析試料について……096
　　第３項　分析方法……096
　　第４項　分析結果……097
　　第５項　花粉分帯……097
　　第６項　既知の結果との比較……101
　　第７項　溝SD2002の性質について……103
　　第８項　井戸SE2073の掘削時期と周辺の植生……103
　　第９項　調査地周辺の古植生の変遷……105
　　第10項　まとめ……106
　第４節　樹種同定……108
　　第１項　試料と方法……108
　　第２項　結果……108
　　第３項　考察……108
第５章　総括……109

図目次

図１　調査地位置図　１：100000……001
図２　調査地位置図　１：2500……001
図３　調査地区割図　１：1000……002
図４　遺構保存範囲図　１：400……004
図５　河合遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地分布図　１：25000……005
図６　調査地及び周辺主要調査地位置図　１：10000……007
図７　河合遺跡C７－２－７大溝周辺遺構図　１：500……009
図８　河合遺跡・南新町遺跡出土遺物　１：２、１：４……009
図９　南新町遺跡C６－３－７・10遺構図　１：600……009
図10　Ⅰ区東壁断面図　水平１：100、垂直１：50……010
図11　Ⅰ区南壁断面図　水平１：100、垂直１：50……011
図12　Ⅱ・Ⅲ区西壁断面図　水平１：100、垂直１：50……012
図13　Ⅳ区西壁断面図　水平１：100、垂直１：50……013
図14　Ⅳ区北壁断面図　水平１：100、垂直１：50……013
図15　Ⅰ区包含層及び側溝出土土師器・須恵器・瓦　１：４……015
図16　Ⅱ区包含層出土土師器・黒色土器・陶器　１：４……016
図17　Ⅱ区包含層出土須恵器　１：４……017
図18　Ⅱ区包含層出土丸瓦　１：４……018
図19　Ⅱ区包含層出土平瓦　１：４……019
図20　Ⅱ区側溝出土土器・土製品・陶器・石器　１：４
　（94のみ１：２）……020
図21　Ⅲ区包含層出土土器・石器・瓦　１：４
　（110のみ１：２）……021
図22　Ⅳ区包含層及び側溝出土土器・土製品・陶器・
　石器　１：４（124のみ１：２）……022
図23　３層上面遺構検出時出土遺物　1：4（156～158は1：2）……023
図24　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区（北区）遺構図（北半分）　１：250……024
図25　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区（北区）遺構図（南半分）　１：250……025
図26　Ⅰ区（南区）遺構図　１：250……026
図27　NR1246遺構図・断面図　１：300（断面図は１：100）……028
図28　NR1246出土土師器・須恵器・瓦　１：４……029
図29　NR2005・3110遺構図　１：300……030
図30　NR2005・3110断面図　１：50……031
図31　NR2005・3110出土土師器・須恵器・木製品　１：４……032
図32　SA１遺構図・断面図　１：80……034
図33　SA２遺構図・断面図　１：80……034
図34　SA３遺構図・断面図　１：80……034
図35　SA４遺構図・断面図　１：80……034
図36　SA５遺構図・断面図　１：80……034
図37　SA６遺構図・断面図　１：80……035
図38　SA７遺構図・断面図　１：80……035
図39　SA８遺構図・断面図　１：80……035
図40　掘立柱建物集成（１）　１：200……038

図41　掘立柱建物集成（２）　１：200……039
図42　SB１遺構図・断面図　１：60……040
図43　SB２遺構図・断面図・出土土師器　１：60
（出土土師器は１：４）……041
図44　SB３遺構図・断面図　１：80……042
図45　SB４－Ⅰ遺構図・断面図　１：80……043
図46　SB４－Ⅱ遺構図・断面図　１：80……044
図47　SB５遺構図・断面図　１：100……045
図48　SB６遺構図・断面図　１：120……046
図49　SB３～６出土土師器・須恵器・埴輪　１：４……047
図50　SB７遺構図・断面図及び柱穴礎板出土状況図
１：80（出土状況図のみ１：40）……048
図51　SB７（SP1174）出土礎板　１：６……049
図52　SB８遺構図・断面図　１：80……050
図53　SB８出土土師器・須恵器・製塩土器　１：４……050
図54　SB９遺構図・断面図　１：80……051
図55　SB９出土土師器・黒色土器　１：４……051
図56　SB10出土須恵器　１：４……051
図57　SB10遺構図・断面図　１：100……052
図58　SB11遺構図・断面図　１：40……053
図59　SB11出土礎板・須恵器　１：６・１：４……053
図60　SB12（SP4057）出土須恵器　１：６……053
図61　SB12遺構図・断面図　１：60……054
図62　SB13遺構図・断面図　１：50……055
図63　SB14遺構図・断面図　１：50……056
図64　SB14出土土師器・須恵器　１：４……056
図65　SB15遺構図・断面図　１：80……057
図66　SB15出土土師器・須恵器　１：４……057
図67　SB16遺構図・断面図　１：40……058
図68　SB16出土須恵器　１：４……058
図69　SB17遺構図・断面図　１：50……059
図70　SB17出土土師器・須恵器・瓦　１：４……060
図71　SB18遺構図・断面図　１：60……061
図72　SB19遺構図・断面図　１：60……061
図73　SB18・19出土土師器・瓦　１：４……061
図74　SD1011・1186遺構図・断面図　１：250・１：40……062
図75　SD1021遺構図・断面図　１：100・１：40……063
図76　SD1021出土製塩土器・須恵器　１：４……063
図77　SD1022・1092遺構図・断面図　１：150・１：40……064
図78　SD1022出土土師器・須恵器　１：４……065
図79　SD1064平面図・断面図　１：50……065
図80　SD1064出土須恵器　１：４……065
図81　SD1189遺構図・断面図　１：80・１：40……066
図82　SD1189出土須恵器・瓦　１：４……066
図83　SD2002・4079遺構図・断面図及び出土土師器・
須恵器　１：200・１：40、１：４……067
図84　SD2003出土須恵器　１：４……068
図85　SD2014遺構図・断面図及び出土土師器・
須恵器・瓦　１：200・１：40、１：４……068
図86　SD2018出土土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦　１：４……069
図87　SD2018・SD2019検出時出土土師器・須恵器　１：４……069
図88　SD2016・2017・2023遺構図・断面図　1：150・1：40……070
図89　SD2023出土土師器・須恵器・瓦　１：４……071
図90　SD2091遺構図・断面図　１：80・１：40……072
図91　SD2091出土土師器・須恵器・瓦・金属製品　１：４……072
図92　SD2107・2108・2135・2136遺構図・断面図
１：60・１：40……073
図93　SD2135・2136出土土師器・須恵器　１：４……073
図94　SE1104遺構図・断面図、出土製塩土器　1：40、1：4……074
図95　SE2012遺構図・断面図　１：40……074
図96　SE2013遺構図・断面図　１：40……075
図97　SE2073遺構図・断面図　１：40……075
図98　SE2013・2073出土土師器・須恵器　１：４……075
図99　井戸検出位置図　１：500……076
図100　SK1003遺構図・断面図　１：40……077
図101　SK1004遺構図・断面図　１：40……077
図102　SK1003・1004出土須恵器　１：４……077
図103　SK1091遺構図・断面図　１：40……078
図104　SK1091出土土師器・須恵器　１：４……078
図105　SK1111遺構図・断面図　１：40……078
図106　SK1111出土須恵器　１：４……078
図107　SK1158遺構図・断面図　１：50……079
図108　SK1158出土土師器・須恵器　１：４……079
図109　SK2031遺構図・断面図　１：40……080
図110　SK2032遺構図・断面図　１：40……080
図111　SK2039遺構図・断面図　１：40……080
図112　SK3121遺構図・断面図　１：40……080
図113　SK1205・2031・2032・2039・3121出土土師器・
須恵器　１：４……080
図114　SK2072遺構図・断面図　１：80……081
図115　SK2072出土土師器・須恵器　１：４……082
図116　SK2072出土瓦・埴輪　１：４……083
図117　SK2148遺構図・断面図　１：50……084
図118　SK3003遺構図・断面図　１：20……084
図119　SK2177遺構図・断面図　１：40……084
図120　SK2195遺構図・断面図　１：40……084
図121　SK4076遺構図・断面図　１：40……084
図122　SK3003出土土師器・須恵器・製塩土器・石製品
１：４（408のみ１：２）……085
図123　SP2181遺構図・断面図　１：40・１：20……086
図124　SP2056遺構図・断面図　１：40・１：20……086
図125　SP3011・3015遺構図・断面図　１：40・１：20……086
図126　SP2056・2181・3011・3015出土須恵器・製塩土器
・磁器　１：４……086
図127　SX2006出土須恵器　１：４……087
図128　SX2019遺物出土状況図　１：20……087
図129　SD2018・SX2019遺構図・断面図　１：100・１：80……088
図130　SX2019出土土師器・黒色土器・製塩土器・
埴輪　１：４……089
図131　SX2019出土須恵器　１：４……090
図132　SX2026遺構図・断面図　１：40……091
図133　SX2026出土土師器・須恵器・金属製品　１：４……091
図134　測定試料(PLD－34062～PLD－34064)写真及び
暦年較正、ウィグルマッチングの結果（写真上
：採取前、写真下：採取後）……095

図135　単体試料の暦年較正結果（左：PLD－34065、右：PLD－34066）……095
図136　調査グリッド平面図（試料採取地点）……096
図137　Ⅳ区北壁断面図（試料採取位置）……096
図138　SD2002断面図（試料採取位置）……096
図139　SE2073断面図（試料採取位置）……096
図140　花粉ダイアグラム（北壁）……098・099
図141　花粉ダイアグラム（SD2002：溝）……098
図142　花粉ダイアグラム（SE2073：井戸）……099
図143　植物珪酸体ダイアグラム（Ⅳ区北壁）……100
図144　植物珪酸体分析（SD2002）……100
図145　植物珪酸体ダイアグラム（SE2073）……101
図146　松原市内での花粉分析実施地点……103
図147　C６－３－10（南新町遺跡）東壁北端の花粉ダイアグラム……104
図148　C６－３－10（南新町遺跡）S001の花粉ダイアグラム……104
図149　切り合い遺構の変遷……109
図150　遺構変遷案　１：1000……110
図151　造営計画復元案　１：500……112
図152　全体遺構図　１：400……113・114

表目次

表１　発掘調査日誌（抄）……003
表２　柵・掘立柱塀一覧……035
表３　掘立柱建物一覧……037
表４　ウィグルマッチング測定試料および処理……093
表５　単体測定試料および処理……093
表６　放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果……095
表７　単体試料の放射性炭素年代測定、暦年較正の結果……095
表８　植物珪酸体同定レベル……097
表９　微化石概査結果……097
表10　花粉組成表……100・101
表11　植物珪酸体組成表……102
表12　河合遺跡における樹種同定結果……108
表13　柱間距離計測値……111

写真目次

写真１　遺構保存状況（１）……003
写真２　遺構保存状況（２）……003
写真３　学校給食センター基礎部分（南から）……003
写真４　遺跡案内板と学校給食センター（南西から）……003
写真５　学校給食センター基礎掘削工事箇所堆積状況……014
写真６　Ⅳ区第３層上面偶蹄類足跡……014
写真７　Ⅳ区第３層上面鋤跡……014
写真８　Ⅳ区北壁堆積状況……014
写真９　SB７（SP1174）礎板出土状況（西から）……049
写真10　SE2073分析試料採取状況……075
写真11　SX2006完掘状況（南西から）……087
写真12　花粉化石及び植物珪酸体顕微鏡写真……107
写真13　河合遺跡出土木製品顕微鏡写真……108

図版目次

巻頭図版１　調査区全景垂直モザイク写真
巻頭図版２　Ⅰ区遺構写真
　１．Ⅰ区SB６長舎検出状況（西から）
　２．Ⅰ区SB５・SB６長舎完掘状況（北から）
巻頭図版３　Ⅱ～Ⅳ区遺構写真
　１．Ⅲ区SB３・SB４長舎完掘状況（北から）
　２．Ⅳ区完掘状況（南から）
　３．Ⅲ区SK3003遺物出土状況（南から）
　４．Ⅳ区SX2019遺物出土状況（南から）
巻頭図版４　出土遺物集合写真
　１．SX2019出土土師器・須恵器
　２．自然流路出土漆容器
図版１　河合遺跡C６－３－14 遠景写真
　１．調査地遠景・平成21(2009)年７月23日撮影（北から）
　２．調査地遠景・平成21(2009)年７月23日撮影（西から）
図版２　調査区壁面地層
　１．Ⅳ区北壁東側NR2005東肩付近（南から）
　２．Ⅳ区北壁西端（南から）
　３．Ⅲ区西壁（東から）
　４．Ⅰ区南壁（北から）
図版３　自然流路[NR]（１）
　１．Ⅰ区NR1246完掘状況（北から）
　２．Ⅰ区NR1246整地範囲完掘状況（北から）
　３．Ⅲ区NR1246完掘状況（北から）
　４．Ⅰ区NR1246・1259断面B（北から）
　５．Ⅰ区NR1246断面C（南西から）

図版４　自然流路 [NR]（２）
１．Ⅱ区NR1246・NR2005・NR3110完掘状況（西から）
２．Ⅱ区NR2005断面B（南西から）
３．Ⅱ区NR2005断面D（南から）
４．Ⅳ区NR2005[4078]土師器壺出土状況（東から）
５．Ⅲ区NR3110漆壺出土状況（南から）
図版５　Ⅰ区掘立柱建物[SB]（１）
１．Ⅰ区（南区）東側遺構完掘状況（北から）
２．SB１・SB２総柱建物検出状況（北から）
３．SP1010（SB２）断面（東から）
４．SP1031（SB２）断面（東から）
図版６　Ⅰ区掘立柱建物[SB]（２）
１．SB５・SB13検出状況（北から）
２．SP1254（SB５）断面（東から）
３．SP1167（SB５）断面（東から）
４．SB５・SB13完掘状況（北から）
５．SP1139（SB13）断面（西から）
６．SP1140（SB13）断面（西から）
図版７　Ⅰ区掘立柱建物[SB]（３）
１．SB６・SB７完掘状況（北から）
２．SP1173（SB６）断面（南から）
３．SP1185（SB６）遺物出土状況（西から）
４．SP1185（SB６）断面（北から）
５．SP1183（SB６）礎板出土状況（西から）
６．SB７完掘状況（西から）
７．SP1174（SB７）断面（南東から）
８．SP1192（SB７）断面（南から）
図版８　Ⅱ・Ⅲ区掘立柱建物[SB]
１．Ⅱ区SB３・SB４完掘状況（東から）
２．Ⅲ区SB10・SB11・SB15・SB16完掘状況（北から）
図版９　Ⅱ～Ⅳ区掘立柱建物[SB]
１．SP2117（SB９）断面（南から）
２．SP2144（SB９）礎板出土状況（南から
３．SP3070（SB11）礎板出土状況（東から）
４．SP3088（SB11）礎板出土状況（南から）
５．SP4057（SB12）遺物出土状況（西から）
６．SP4057（SB12）断面（西から）
７．SP2096（SB14）断面（南東から）
８．SP2025（SB17）断面（南から）
図版10　溝[SD]（１）
１．SD1011断面A（西から）
２．SD1021断面B（東から）
３．SD1022断面（南から）
４．SD1186断面B（東から）
５．SD1189断面（東から）
６．SD2002断面B（南から）
７．SD2002断面D（西から）
８．SD2002遺物出土状況（南から）
図版11　溝[SD]（２）
１．SD2014断面（南から）
２．SD2018断面（南から）
３．SD2016断面（東から）
４．SD2017断面（東から）
５．SD2023断面A（西から）
６．SD2023断面B（西から）
７．SD2107・SD2108断面（東から）
８．SD2136断面（東から）
図版12　井戸[SE]・土坑[SK]
１．SE2012・SE2013完掘状況（北西から）
２．SE2012断面（東から）
３．SE2013断面（東から）
４．SE2073完掘状況（東から）
５．SE2073断面（東から）
６．SK1003断面（西から）
７．SK1091断面（北から）
８．SK1091遺物出土状況（東から）
図版13　土坑[SK]
１．SK1111遺物出土状況（南から）
２．SK1111断面（南から）
３．SK1158東西断面（南東から）
４．SK1158東西断面西半（南から）
５．SK2072南北断面（西から）
６．SK2072東西断面（北から）
７．SK2072完掘状況（北から）
８．SK2148断面（東から）
図版14　土坑[SK]・落ち込み[SX]
１．SK2177断面（南から）
２．SK3121断面（南から）
３．SK3003断面（西から）
４．SK4076断面（南から）
５．Ⅳ区SX2019[4004]遺物出土状況（西から）
６．Ⅳ区SD2018・SX2019断面A（南西から）
７．Ⅱ区SD2018・SX2019断面B（南西から）
８．Ⅱ区SX2026断面（北から）
図版15　側溝・包含層・遺構面　出土石器・土器・瓦
図版16　NR1246・NR2005　出土土器・瓦
図版17　NR2005・NR3110・SB3・SB6・SB14・SB15・SB16・SB17・SB19　出土土器
図版18　SB8　出土土器
図版19　SB14・SB15・SB17・SB18・SP2181　出土土器
図版20　SD1021・SD1189・SD2002・SD2003・SD2023・SD2091・SD2135・SD2136　出土土器・瓦
図版21　SE2013・SE2073・SK1091・SK1158・SK2072・SK3003　出土土器・埴輪
図版22　SX2006・SX2019　出土土器

第１章　経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

今回調査を実施することとなった契機は、市内２箇所の学校給食センターの老朽化に伴い松原市河合５丁目に新たな学校給食センターの建設が計画されたことである（図１・２）。建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「河合遺跡」の範囲内に位置するため、事業課である学校給食課と協議を実施した。その後、埋蔵文化財確認調査依頼書が提出され、平成20年（2008）10月１日～10月３日に確認調査（調査番号：Ｃ６－３－13）を実施した。

建設予定地は、北より空地・東西方向の道路・旧松原市立第５保育所である。北側の空地については、昭和60年度に確認調査（調査番号：Ｃ６－３－２）を実施し古代の柱穴等を確認している。また、東西方向の道路については同年度に管路部分を発掘している（調査番号：Ｃ６－３－４）。そのため、南側にトレンチを８箇所設定し、調査を実施した。結果、全トレンチで古代の遺構と遺物を確認し、Tr.３・４・６の北端及びTr.８で旧市立第５保育所の建物基礎により遺構面が削平されている状況を確認した（図３）。

確認調査後、事業課に対し保育所建物部分を除外した箇所について発掘調査が必要であると回答し、協議を実施した。協議の結果、遺構の損壊を免れることができない4,490㎡について本発掘調査を実施し記録保存の処置をとることとなり、事業課より平成21年（2009）２月24日付で埋蔵文化財発掘の通知及び本発掘調査依頼書が提出された。その後、発掘調査作業を実施する事業者を競争入札により選定し、５月11日より調査を開始した。

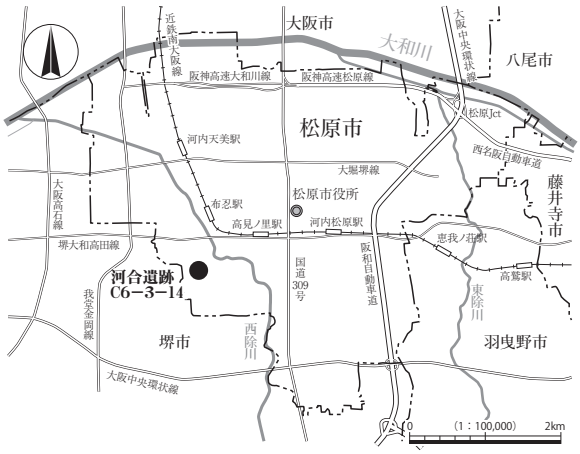


図１　調査地位置図　１：100000

第２節　調査の経過

発掘調査は、調査地内にある道路と住宅の解体が必要であり、また残土置場を確保する必要もあったため、調査区を４地区（図３のⅠ～Ⅳ区）に分割して実施した。

まず、盛土及び旧耕作土を重機で掘削し、遺構面までの包含層は人力で掘削した。次に、遺構検出・掘削を実施しながら、適宜、平面図・断面図・遺物出土状況図などを作成した。遺構完掘後は航空写真を撮影し、遺構が切り合う箇所に残した畔を掘削して調査を完了し、掘削土で埋め戻した。

遺構の記録図面は、遺構図については電子平板（株式会社CIBIC製「遺構くん」）で作成し、一部出土状況を手実測で作成した。遺構断面図と壁面図については、全て手実測で実施した。

遺構の記録写真は、センサーサイズAPS－Cのデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS Kiss X2,EF-S18-55mm f/3.5-5.6 IS）で撮影した。撮影画像のデータ取得はJPEG形式（4,272×2,848px,72ppi,bitdepth８,sRGB）である。また、重要な遺構については６×７判カメラで撮影した。使用したフィルムはモノクロフィルム及びカラーポジフィルムの２種類である。

遺構の航空写真については、各調査区毎に撮影した垂直写真を合成しモザイク写真を作成したが、測量・図化は実施していない。

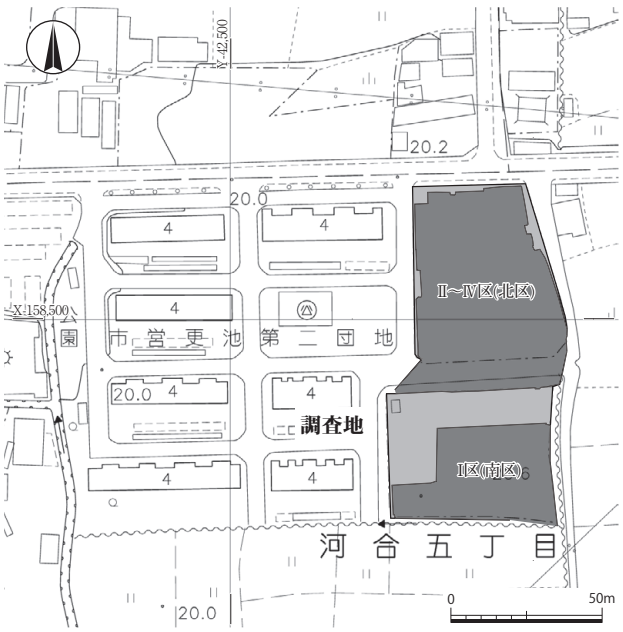


図２　調査地位置図　１：2500

各地区の日程は表１のとおりである。各地区間の日付が連続しないのは、埋め戻しや排土の移動などの工程が挟まるためである。まずⅠ区とⅡ区の調査を実施し、Ⅲ区は道路移設の遅れに伴いⅡ区の残土置場としていた部分（100㎡）を先行調査した。既設道路部分についても下水道工事との関係で東半分を先行調査し、工事業者に引き渡した上で、西側の調査をおこなった。他地区での調査の遅れを取り戻すため、Ⅳ区は一部作業をⅢ区と併行して実施した。

調査成果の重要性を鑑みて、平成22年（2010）１月のⅢ区調査時には松原市文化財保護審議会委員による現地視察を実施した。なお、現地説明会については調査地内での見学者の安全確保が困難であることなどから実施せず、報道機関への情報提供のみを実施した。３月５日には報道機関へ情報を提供、９日には記者への現地レクチャーを実施、翌日には奈良時代の役所跡として各紙に記事が掲載された。

その後、４月初旬に大阪府教育委員会事務局文化財保護課より、遺跡の重要性を鑑み保存についての検討を打診された。しかし、既存施設の老朽化や衛生管理の点から学校給食センターの建設が必要不可欠であったため、建設と保存を両立する形で検討を進めた。事業課の学校給食課及び設計担当の建築住宅課とともに、官衙遺構の特徴といえる長舎SB３～６を構成する柱穴を可能な限り保存することができるよう検討し、大阪府と協議を重ねた。その結果、（１）完全に掘り方を保存できる柱穴、（２）掘り方上端は削平されるが下端の一部を保存できる柱穴、（３）保存不可能な柱穴、に分かれる形となった（図４）。

最終的に大阪府教育委員会事務局文化財保護課の了承を得た保存についての考え方は以下の６点であり、６月１日の市長定例記者会見で内容が発表された。

１．敷地南側の外部排水処理施設の形状及び位置を変更する。
２．遺構と重なる部分の基礎構造見直し。地中梁の梁高を小さくし、掘削深度をおさえることで、遺構への影響度を最大限弱める。
３．施工にあたり、遺構を保存できる箇所については遺構直上で機械掘りから手掘りに切り替えて掘削する。なお、掘削には文化財担当職員が立ち会う。
４．施設周辺の環境整備についても文化財担当職員立ち会いのもとで、慎重に行う。
５．給食センターの建物外に位置する保存遺構は路面表示を行い、説明板設置など市民への周知を行う。
６．給食センター建設予定地に接する市営団地の整備にあたっては、市営団地にまたがって存在すると考えられる遺構の範囲を確認する調査を実施し、整備計画の中で遺構保存の検討を行っていく。

なお、記者発表の内容については、６月22日の読売新聞に「河合遺跡 大半を保存　給食センター 松原市が設

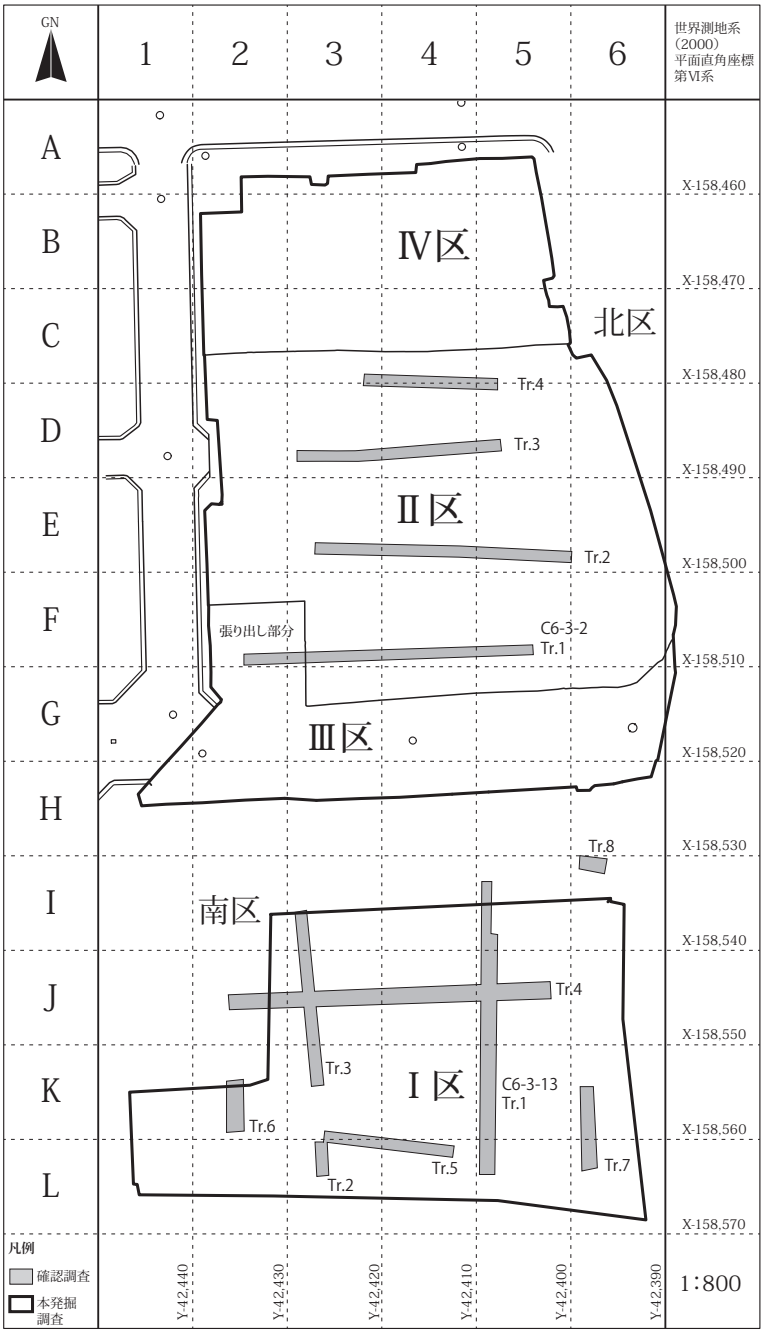


図３　調査地区割図　１：1000

表１　発掘調査日誌（抄）

平成21年(2009)

05.11 準備工開始。
05.15 準備工完了。
05.18 Ⅰ区機械掘削開始。
05.27 Ⅰ区機械掘削完了。
05.28 Ⅰ区包含層及び側溝の人力掘削開始。
06.01 Ⅰ区西端より遺構面及び遺構の検出を開始。
06.15 Ⅰ区包含層掘削及び遺構検出完了。
06.16 Ⅰ区東側南部より遺構掘削開始。
07.09 大阪府教育委員会現地視察。
07.13 Ⅰ区遺構掘削終了。
07.23 Ⅰ区航空写真撮影。
07.24 Ⅰ区下層遺構 (自然流路) 掘削開始。
08.07 Ⅰ区下層遺構完掘写真撮影。
08.07 Ⅰ区下層遺構調査終了。
08.10 Ⅰ区排土運搬開始。
08.19 Ⅰ区排土運搬完了。
08.20 Ⅱ区機械掘削開始。
08.28 Ⅱ区機械掘削完了。Ⅰ区埋め戻し完了。
08.31 Ⅱ区包含層人力掘削及び遺構面検出開始。
10.05 Ⅱ区東端から遺構掘削開始。包含層掘削時の排土搬出。
10.06-07 雨のため作業中止（台風接近）。
10.08 Ⅱ区排水作業（北半分水没のため）。
10.09 Ⅱ区南東部遺構面検出完了。遺構掘削開始。
10.13 Ⅱ区南西部遺構面検出完了。人力掘削土搬出開始。
10.15 Ⅱ区遺構面検出完了。
10.16 Ⅱ区中央部遺構掘削開始。包含層掘削時の排土を順次Ⅲ区張り出し部分に搬出。
11.06 Ⅱ区遺構掘削完了。
11.12 Ⅱ区航空写真撮影。
11.24 Ⅱ区調査完了部分より埋め戻し開始。
11.27 Ⅱ区調査完了。
12.08 Ⅱ区埋め戻し完了。
12.09 Ⅲ区張り出し部分 (Ⅱ区調査時排土置き場) 機械掘削開始。
12.10 Ⅲ区張り出し部分包含層人力掘削開始。
12.17 Ⅲ区張り出し部分遺構面検出完了。
12.22 Ⅲ区張り出し部分遺構掘削開始。

平成22年(2010)

01.08 Ⅲ区張り出し部遺構掘削完了。
01.13 Ⅳ区機械掘削開始。
01.14 Ⅳ区東側で地中に障害物を確認したため、西半分のみ機械掘削を先行。
01.15 Ⅲ区既設道路の舗装撤去開始。
01.16 Ⅲ区既設道路の舗装撤去完了。
01.19 Ⅲ区東半分機械掘削開始。Ⅳ区西半分機械掘削完了。
01.20 Ⅲ区東半分包含層人力掘削及び遺構検出開始。
01.21 Ⅲ区西側機械掘削。Ⅲ区東半分遺構掘削開始。
01.22 Ⅲ区西半分包含層掘削及び遺構検出開始。
01.26 松原市文化財保護審議会現地視察。
01.27 Ⅲ区東半分遺構掘削完了。西半分包含層掘削及び遺構検出完了。
01.29 Ⅲ区東半分航空写真撮影。西半分の遺構掘削開始。
02.02 Ⅳ区西半分遺構面検出開始。
02.03 Ⅳ区西半分遺構面検出完了。
02.05 Ⅳ区西半分遺構掘削開始。
02.10 Ⅳ区東側機械掘削開始。
02.12 Ⅳ区東側機械掘削完了。包含層人力掘削開始。
02.16 Ⅳ区東側遺構検出開始。
02.18 Ⅳ区東側遺構検出完了。遺構掘削開始。
02.23 Ⅳ区東側遺構掘削完了。
03.03 Ⅲ・Ⅳ区航空写真撮影。
03.05 報道機関に情報提供。
03.08 Ⅲ・Ⅳ区調査終了。遺構図面等最終確認。
03.09 新聞記者への現地レクチャー。
03.11 Ⅲ・Ⅳ区埋戻し開始。大阪府立狭山池博物館現地視察。
03.17 Ⅲ・Ⅳ区埋戻し終了。現地調査完了。

写真１　遺構保存状況（１）

写真２　遺構保存状況（２）

写真３　学校給食センター基礎部分（南から）

写真４　遺跡案内板と学校給食センター（南西から）

図４　遺構保存範囲図　１：400

計変更へ」という見出しで掲載されている。

その後、決定した考え方に従って施工されていることを確認するため、地域教育振興課市史文化財係が工事立会を実施し、遺構が保存されたことを確認した（写真１・２）。また、遺構保存が叶わなかった箇所についても随時立会を実施し状況を確認した（写真３）。

なお、現地調査終了後の平成22年度には大阪府立狭山池博物館の秋期企画展「古代西除川沿いの集落景観」への出土遺物貸出し、大阪府立近つ飛鳥博物館の冬季企画展「歴史発掘おおさか」に伴う講演会での「松原市河合遺跡－地方官衙の発見－」と題した成果報告、『たじひのだより　松原市文化財情報誌No.10』への調査概要の掲載など、調査成果の普及に努めた。

第２章　位置と環境

第１節　歴史と環境

第１項　地理的環境

松原市は、大阪府の中ほどに位置する面積16.66㎢、人口119,477人（2020年2月1日現在）の市で、昭和30年（1955）２月１日に松原町・天美町・布忍村・恵我村・三宅村が合併して誕生した。市域は東西約5.8km、南北約5.1kmで、地形は北より南に向かいなだらかに傾斜しており、南端の丹南で標高約39m、大和川に接する北端の天美北で標高約10mである。南北走する台地の間に沖積平野が存在する扇状地状の地形で、西除川左岸が陶器山丘陵から伸びる泉北台地、右岸が羽曳野丘陵から伸びる河内台地（瓜破台地）である。両台地は主に更新世以降の河成堆積層で形成された段丘面をなし、面上には浅い谷筋（開析谷・構造谷）や窪地が発達している。歴史時代には、これらを利用して耕地化のための溜池や用水路が多く造られた。

市域の主要河川としては、河内台地の東側を流れる東除川と泉北台地の東側を流れる西除川が存在し、現在の西除川は７世紀初頭に築造された狭山池（大阪狭山市）の西除口を水源とし、東除川は狭山池と羽曳野丘陵西斜面を水源としている。また、市域北端を西から東に流れる現大和川は、石川との合流地点から北ないしは北西に流れていた本流を宝永元年（1704）に堺浦まで付け替えた人工河川である。

市域西側を北西流する西除川は、これまでの発掘調査成果により沖積平野部では近世まで両岸で河川氾濫と農地への土地改良が繰り返されてきたことが明らかとなっている。

堀遺跡では９世紀後半～10世紀以降より近世に至る西除川河岸と堤が検出され、周辺に氾濫堆積物と作土層が累重している様子が確認されている（地村ほか2010）。その後、中世末～近世（16世紀前半以降）には人口堤防により流れが固定化されたことで天井川化し、周辺も西除川や他の流路より供給された堆積物により沖積リッジが中世後期に形成され始め近世に本格的に発達する（井上2013,井上2017）。また、正確な範囲は不明であるが、元和６年（1621）に西除川右岸の堤が切れて城連寺村の水田が150～200cmの砂で覆われた災害記録が後年の村明細帳にも残っている（日下1980）。

なお、西除川は宝永元年に大和川が開削されたことで行き場を失い、高木村の北で北西に曲げて大和川に排水

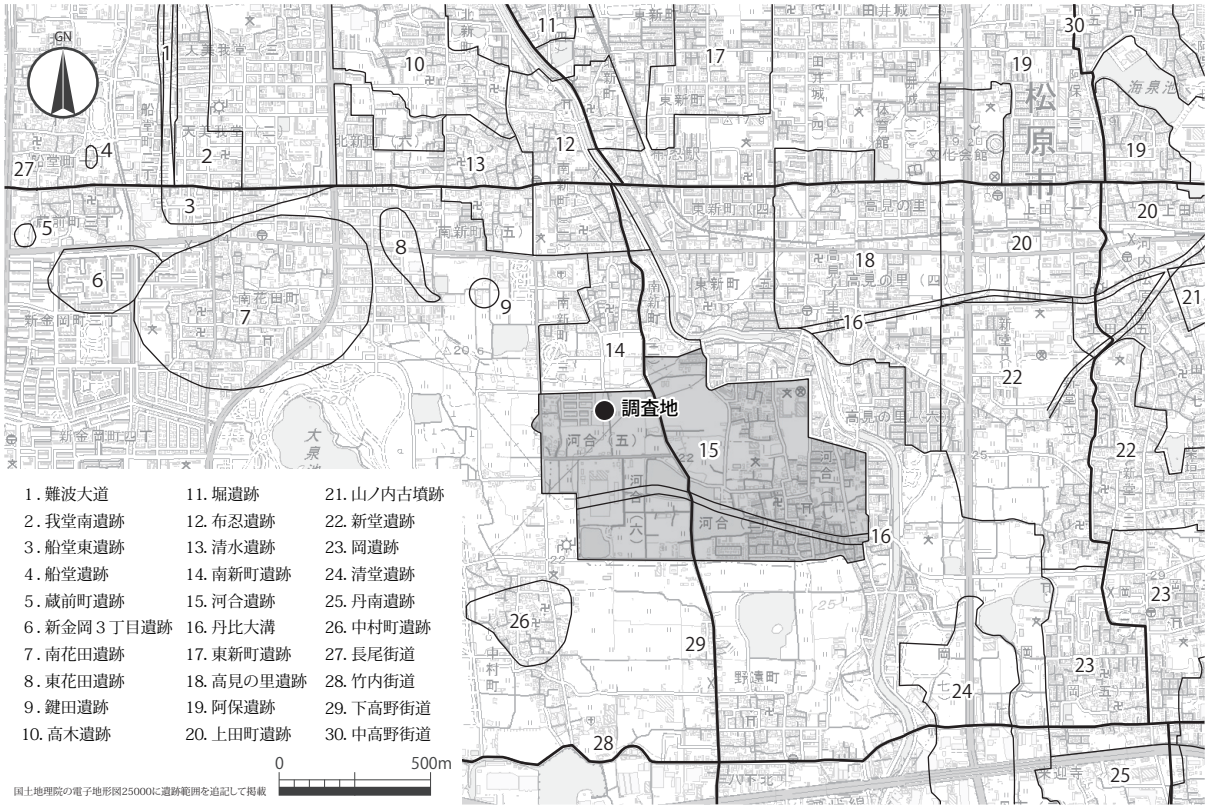


図５　河合遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地分布図　１：25000

する形に付け替えられている。そして、旧川床と河川敷は大和川付け替え工事により村高の66.1％が川床となり土地を失った城連寺村の代替地の一つ「富田新田」として耕地化されている（山口1985）。

今回調査を実施した河合遺跡は、市域南西部の西除川左岸に位置している。泉北台地上に立地し、国土地理院（1983）の土地条件図では洪積段丘下位（1965年版では洪積段丘中位）に分類されている。また、地質調査所の地質図では完新世後背湿地に分類されている（宮地ほか1998）。西除川左岸は川沿いの低地面と段丘面の比高差が小さく、右岸の松原市岡から新堂で見られるような大きな段丘崖が存在せず、明瞭な崖面は川より400～500m西側の大泉緑地付近でしか確認できない。日下（1980）による西除川流域の地形分類では、明瞭な崖面が見られず適切ではないと前置きした上で周辺段丘面より地形がスムーズに連続するここと表層地質の性格から中位段丘に分類している。

古天野川の名残である西除川が左岸段丘面に寄り添い、右岸段丘面に比して標高が低く左岸に沖積段丘面（日下による分類）が見られないことについて、足利（1985）は中位段丘形成期以降における東高西低の地盤運動を想定している。実際、左岸の河内台地では段丘面の西端で褶曲が確認されており（趙2001）、松原市岡から大阪市瓜破東にかけて推定活断層の存在が指摘されている（中田ほか2008）。以上のように、西除川左岸については右岸と異なる様相で堆積が進んでおり、遺跡の形成過程にも影響を及ぼしたと考えられる。

第２項　歴史的環境

河合遺跡の位置する河合地区は、昭和32年（1957）10月15日に松原市へ編入される以前は中・野遠・南花田・蔵之前とともに北八下村の一部で、先述の地理的要因もありこれらの地域と深い関係にあった。

松原市域は、10世紀に成立した『和名抄』に記された河内国丹比郡に含まれ、郡を構成する里（後に郷へと改称）のうち三宅郷・依羅郷・田邑郷（・土師郷）と八下郷の一部に属する。そして、丹比郡は遅くとも11世紀後半には丹北・丹南・八上の３郡に分割される（直木1985）。河合地区はこれ以降、明治29（1896）年に南河内郡が成立するまで八上郡に属する。

一帯は江戸時代には河州八上郡河合村と呼ばれ、天正11（1583）年８月に羽柴秀吉が福島市松（正則）に八上郡川合郷を与えた記録が残っている。その後、江戸時代には３人の領主が支配する時期が続き、元文２(1737)年以降は譜代大名秋元氏と旗本片桐氏の合給支配となり、その状況は廃藩置県まで続いた。村は慶長13（1608）年に片桐且元によって改修された狭山池用水の灌漑範囲に含まれており、池の西樋より西除川を通った水を河合井堰より汲み上げ古池などの溜池と水田に配水していた。西除川左岸の段丘上に位置し狭山池の西樋より水をうける西樋筋の番水に属する村は、慶長17年（1612）の水割賦帳によると45か村あった（川内2008）。

近世に完成した狭山池の水を東除川と西除川を利用して送り段丘上に堰上げて溜池に貯水する灌漑網であるが、小山田（2012）によると西除川左岸での形成時期は12～13世紀とされる。６世紀後半～７世紀には、段丘内に存在する浅い谷筋とそこを流れる自然河川を利用して田畠を営み、７世紀に西除川より取水し依網池に向かって伸びる段丘内の谷を流れる自然流路へ水を落とすための河合大溝が開削されたことで河川灌漑方式が採用されたと考えられている。

第２節　既往の調査

河合遺跡は、東西1,100m・南北700mの範囲に及ぶ弥生～近世の集落跡・官衙跡で、北は縄文～中世の集落跡である南新町遺跡と接している（図５）。遺跡の中央には南北方向に下高野街道が通っており、遺跡の南側には東西方向にのびる河合大溝（丹比大溝）が存在する。

過去には河合西遺跡と河合南遺跡として周知されており、河合の集落から古池にかけての一帯で弥生時代のサヌカイト製石鏃が表採されることで知られていた（松原市郷土史研究会1971、嶋田1978）。

遺跡は北が縄文時代～中世の集落跡である南新町遺跡と接しており、両遺跡の位置する地形にほぼ差はない。今回の調査地が河合遺跡の北端に位置するため、両遺跡で実施された発掘調査のうち今回の調査成果に関係するものを以下紹介する（図６）。なお、松原市調査分については未整理のため、帰属時期などについては今後変更する可能性がある。

本調査地のすぐ北東に位置する南新町遺跡Ｃ６－３－９（更池東西線道路築造に伴う調査、未報告）では、縄文時代の土坑より石鏃・石核・剝片が出土しており、調査区西端で飛鳥時代の掘立柱建物が１棟検出されている。建物は南北２間（4.5m）×東西３間（7.7m）で、調査区の更に南へ続くがは不明である。建物の主軸は座標北より約１°西偏するのみでほぼ正方位である。その東には南東－北西方向を長軸とする区画小溝が検出されている。調査地内の地形は建物のある場所から東に低く

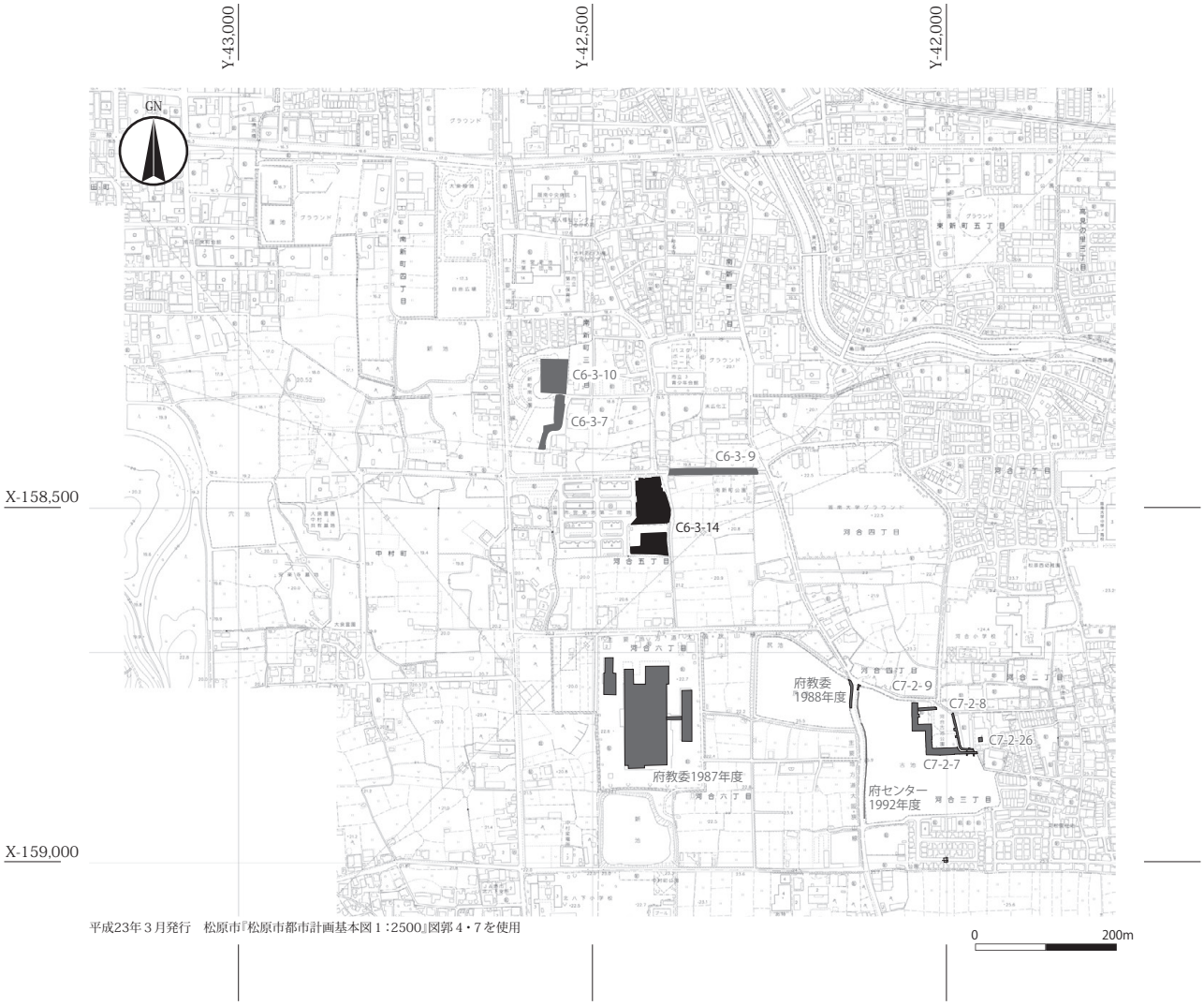


図６　調査地及び周辺主要調査地位置図　１：10000

なることから、谷の傾斜面を利用した畑と考えられる。また、平安時代の掘立柱建物、土坑、水田も検出されている。特殊な遺物としては、不定形の土坑であるS105より石帯（図８上段）が出土している。

調査地北西の南新町遺跡Ｃ６－３－10（新町南公園施設整備に伴う調査、未報告）では、古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物、溝、水田と奈良時代の幅２ｍを超える溝（水路）が検出されている（図９）。北西－南東方向に伸びる幅0.5m、深さ0.2m程度の溝２条については、幅員５～６ｍの道路遺構と考えられる。奈良時代の溝に切られていることと他の遺構との関係から、担当者は条里遺構に先行する陶邑編年Ⅱ型式５段階頃の斜行道と推定している（岡本2011）。なお、後述するようにこの道路遺構は本調査地のSD2023（図88）に接続する可能性がある。奈良時代の溝については、ほぼ正方位であり当地における条里制を考える手がかりになると考えられる。出土遺物は土師器や須恵器の他に金銅製耳環と水晶原石がある。

河合３丁目に所在する古池の池底と堤体下で実施された河合遺跡Ｃ７－２－７・８・９（公園造成工事に伴う調査、未報告）では、奈良時代～鎌倉時代の遺構が確認されている。奈良時代に属するものは、２棟以上の掘立柱建物と柱穴群、南西－北東方向に流れる幅約4.8m、深さ約2.0ｍの大溝、井戸、土坑が検出されている。S205大溝は、後述する大阪府教育委員会による調査で発見された大溝１に接続すると考えられている。

柱穴群のうち、溜め池東側堤下から検出した一辺約１ｍを測る柱穴掘形からは飛鳥時代後期～奈良時代の土師器・須恵器の破片とともに秤の錘（図８中段）が出土している。錘は高さ2.3㎝（体部高1.6㎝、鼻紐高0.7㎝・幅0.55～0.65㎝・長さ1.2㎝・紐穴径0.25㎝）、底径2.3～2.5㎝、最大幅2.8㎝、重さ60.515ｇを測る。半球形の体部頂上に鼻紐がつき、紐穴付近に付着物はみられない。隋・唐いずれの制度の一両をも超える重さであるため、竿秤の錘と考えられている。

また、径約３ｍ、深さ1.2ｍを測る素掘り井戸からは奈

良時代後期の土師器鍋・鉢・皿・墨跡が残る杯、須恵器杯・硯に転用された杯蓋（図８下段）、斎串、曲物などが出土しており、明らかに一般集落と様相が異なる。

鎌倉時代の遺構は、柱穴や土坑などとともに径約２ｍを測る素掘り井戸を検出しており、井戸内からは鎌倉時代中頃の土師器や瓦器（椀・盃）が出土している。集落跡が池底で確認されたことにより古池の築造時期が鎌倉時代中頃を遡らないことが確実となり、西除川に設けた河合井堰より水を汲み上げて古池に落とす溜池灌漑の成立時期の上限が明らかとなった。同じ西除川左岸の台地に位置する丈六大池（堺市東区）は築造年代が弘長３年（1263）以前で、池の所在する興福寺領日置荘が12世紀中頃に成立し以後活発に水利開発が進められており（小山田2012）、当地も時期を同じくして開発が進められたと考える。

更には、この調査区の東側で実施した河合遺跡Ｃ７－２－26（民間開発事業、未報告）においては奈良～平安時代の掘立柱建物が３棟検出されている。

今回の調査地南西で大阪府教育委員会が実施した調査（図６の府教委1987年度）では、幅約12m・深さ約２m・検出長約65mの溝（大溝１）を検出している。ほぼ直線に伸びた溝の主軸はN－73°－Eで、調査区西端で南肩に南北方向の溝（大溝２）が接続している。整地土と考えられる上層からは中世前期の遺物が出土し、下層最上面からは神功開寶（初鋳765年）が、下層からは７世紀後半～８世紀中葉頃の土器や木器が出土している。遺物には人面墨書土器・ミニチュア竈・人形など特殊なものが含まれている（山本ほか1987）。調査担当者の一人である山本は、遺物から大溝の開削時期を７世紀中頃かそれ以前とし、平安時代には小流となり中世には埋没して整地されたとした。そして、この河合の大溝を『住吉大社神代記』の「針魚川」に比定し、西除川からの導水を目的とした灌漑水路であると推測している（山本1989）。

この調査地より西側では、府道大阪狭山線（下高野街道）の道路拡幅に伴い古池の池床部分で（財）大阪府文化財センターが調査を実施している（図６の府センター1992年度）。調査地北側のＡ地区では北端で奈良時代の土師器片を含む幅9.6mの大溝（遺構23）が検出され、南側のB地区でも奈良時代の遺物と遺構が確認されている。調査担当者の入江は、現在の古池樋門のすぐ南で検出された大溝を大阪府教育委員会の調査で検出された大溝１及び松原市教育委員会の調査したS205と一連のものと考え、西除川より導水する大溝の経路を復元している。また、溝幅と断面形状より通常の農業用灌漑水路ではなく律令時代の運河であった可能性を示唆している（入江1993）。

河合遺跡内の3地点で確認された大溝は河合大溝（なお、周知の埋蔵文化財包蔵地としては西除川右岸の河内台地に開削された大溝とあわせて丹比大溝の名称で登録されている）と呼ばれ、小山田（1999）によると、同じ７世紀台に台地上に開削された丹比大溝（芝田1993）とともに在地首長世界を超えて統一的に実施された国家的勧農政策に基く西除川流域の治水計画により施工されたものとされる。

以上、紹介してきた河合遺跡及び南新町遺跡での調査成果は、以下報告する古代官衙遺構を西除川両岸に伸びる台地の開発史の中に位置付けるために併せて検討が必要な資料である。

引用文献

足利健亮1985「地形発達と地質」『松原市史』第1巻,松原市役所,pp.26-31.

井上智博編2013『瓜破北遺跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第238集,pp.11-13.

井上智博編2017『瓜破北遺跡２』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第285集,pp.7-9.

入江正則1993『河合遺跡』,財団法人大阪文化財センター,pp.8-11.

岡本武司2011「南河内における古代道路-古代丹比地域における古代道路の復元-」『大阪府立狭山池博物館研究報告』7,27p.

川内眷三2008「松原市域と狭山池用水」『松原市史』第2巻,pp321-338.

建設省国土地理院1983『土地条件調査報告書(大阪地区)』,pp38-41.

小山田宏一1999「古代の開発と治水」『狭山池 論考編』,狭山池調査事務所,pp26-28.

小山田宏一2012「中世西除川左岸の水利開発」『中世狭山池の水下世界』大阪府立狭山池博物館図録13,pp50-67.

日下雅義1980『歴史時代の地形環境』,古今書院,pp.262-282.

芝田和也1993「丹比大溝の発掘調査」『第8回はびきの歴史シンポジウム:古代の開発 古市大溝の果たした役割』,羽曳野市・羽曳野市教育委員会,pp.38-47.

嶋田 暁1978『松原市の考古誌』,松原市役所,pp.28-29.

地村邦夫・西口陽一2010『堀遺跡』,大阪府教育委員会,78p.

趙 哲済2001「瓜破台地北東部の段丘について」『大阪市文化財協会 研究紀要』第4号,財団法人大阪市文化財協会,pp.7-16.

直木孝次郎1985「律令制と民衆」『松原市史』第1巻,松原市役所,pp.138-155.

中田 高・岡田篤正・鈴木康弘・渡辺満久・池田安隆2008『都市圏活断層図』大阪南部第2版,国土地理院.

松原市郷土史研究会1971『松原市の史蹟・河合(旧北八下村)編』,松原市教育委員会・松原市郷土史研究会,pp.1-6.

宮地良典・田結庄良昭・寒川 旭1998『大阪東南部地域の地質』地域地質研究報告５万分の１地質図幅京都(11)第63号,地質調査所,pp.69-74.

山口之夫1985「新田の開発」『松原市史』第1巻,松原市役所,pp.625-631.

山本 彰・山上 弘1987『河合遺跡-松原市河合町所在-』,大阪府教育委員会.

山本 彰1989「「針魚川」小考」『大阪文化財論集-財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集-』pp.498-500.

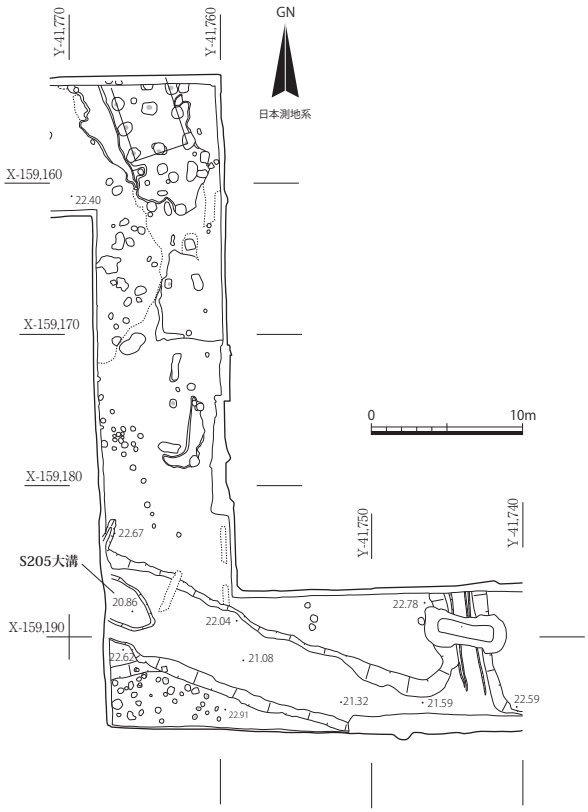


図７　河合遺跡C７－２－７大溝周辺遺構図　１：500

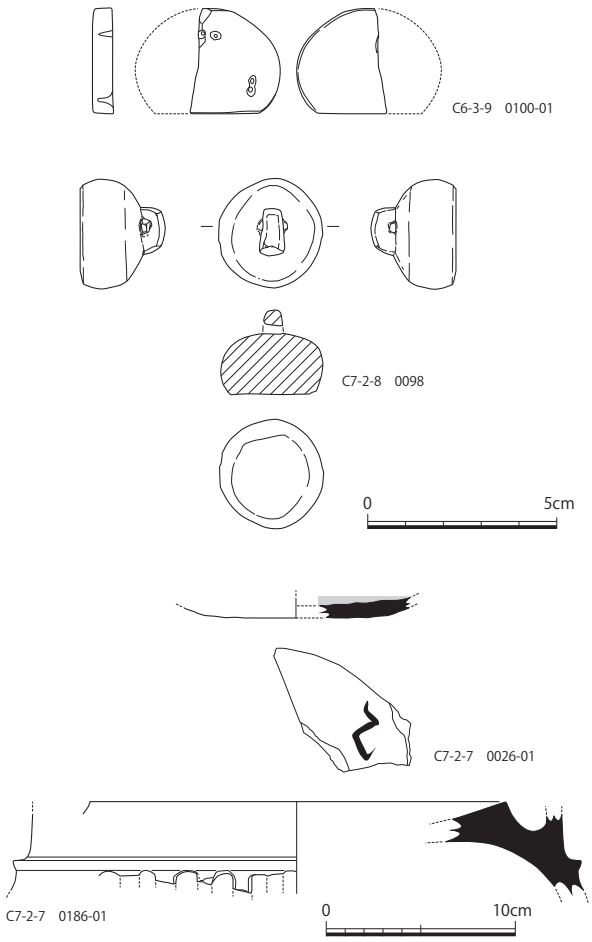


図８　河合遺跡・南新町遺跡出土遺物　１：２、１：４

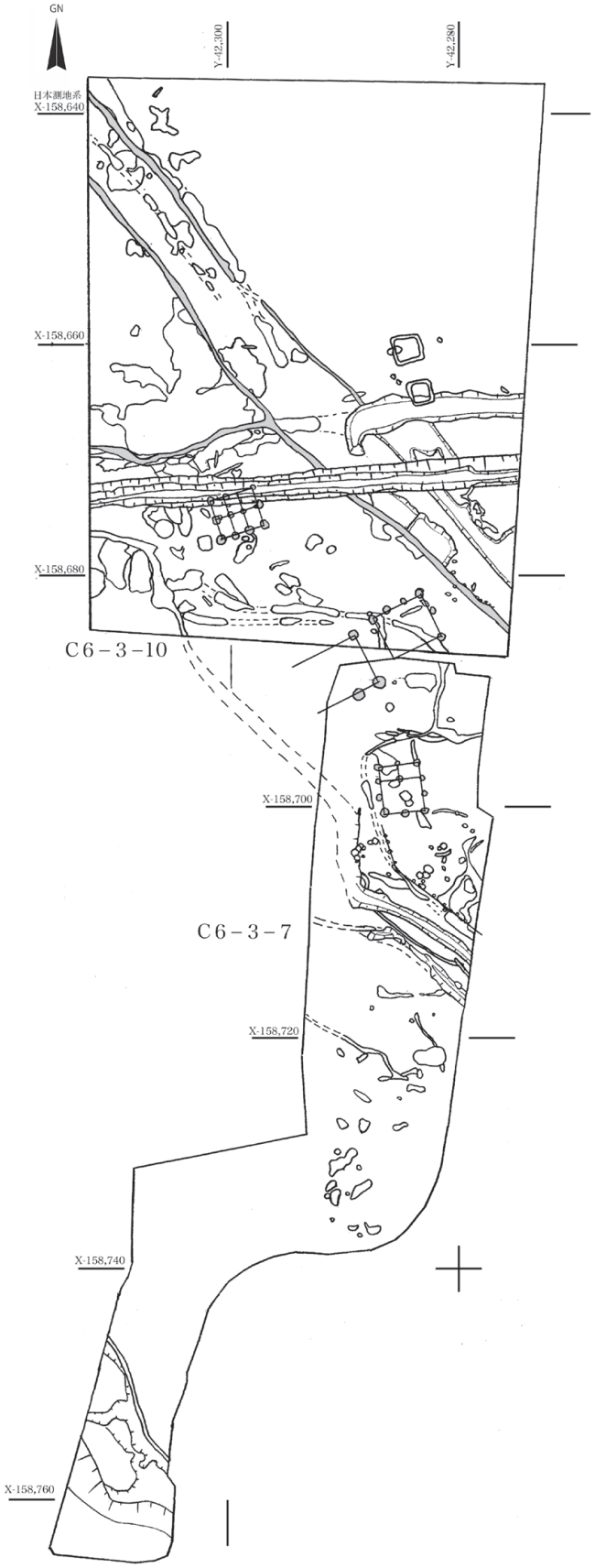


図９　南新町遺跡C６－３－７・10遺構図　１：600

第３章　調査の成果

第１節　層序

調査地の堆積状況であるが、松原市が調製した地形図（昭和54年撮影）では、調査地はTP＋20.6～20.8m（以下TPを略）まで盛土されている。調査地より東側の耕作地は、南から北に向かって20.47～19.98mと低くなる。南側の耕作地は東から西に向かい20.43～20.21mと低くなる。西側は市営更池第二団地との間に南北方向の道路があり、20.44～20.36mである。団地の西端は19.7～19.94mであり西に向かって下がる。北に接する東西方向の道路は20.16mで、更に北の畑地は19.23m。

段丘上に立地するため全体的に堆積は薄いが、北区（Ⅱ～Ⅳ区）と南区（Ⅰ区）で様相は若干異なる。盛土で造成された現地表面より遺構面までの深さは60～110cmである。

南区では、現地表下約40～90cmまでが現代の盛土（第０層）で、それより下は３層に大別できる（図11・12）。

第１層は近現代の作土層で、19.9～20.5mの間に堆積する。層中より伸びる植物根痕は第３層に達している。黄灰色（2.5Y5/1）粗砂～細礫混じり粘質シルトで、耕起に伴うブロック土を含む。斑鉄が多く認められる。南壁西側では、下部10cm程は色調が明るくやや砂質のシルトが堆積しており、最上部に層状斑鉄が認められる。

第２層は厚さ15cm程の古代～近世の作土層または古土壌層で、主に古代の遺物（図15）を包含する。最上部に層状班鉄が、全体に鉄・マンガン斑紋が認められるにぶい黄色（2.5Y6/4）粘質シルト。西端では、下に灰色（5Y5/1）粗砂混じり粘質シルトが堆積しており、古土壌または作土と思われる（図版２－４）。

第３層は遺構面基盤層で、上面は19.7～20.0m。自然堆積層と考える。明黄褐色（2.5Y7/6）～黄褐色（10YR5/6）及び灰色（N7/）の粘土層で、植物根痕や乾裂痕と思われるひび割れが多く認められる。下に行くほど礫質になる。調査後の工事立会で、厚さ30cm程の泥質堆積直下に砂礫が80cm以上堆積する状況を確認している（写真８）。

北区では、現地表下50cmまでが盛土層（第０層）である。その下には、近現代作土層である第１層（層厚25cm前後）が全域に存在する。暗黄褐色（2.5Y4/1）

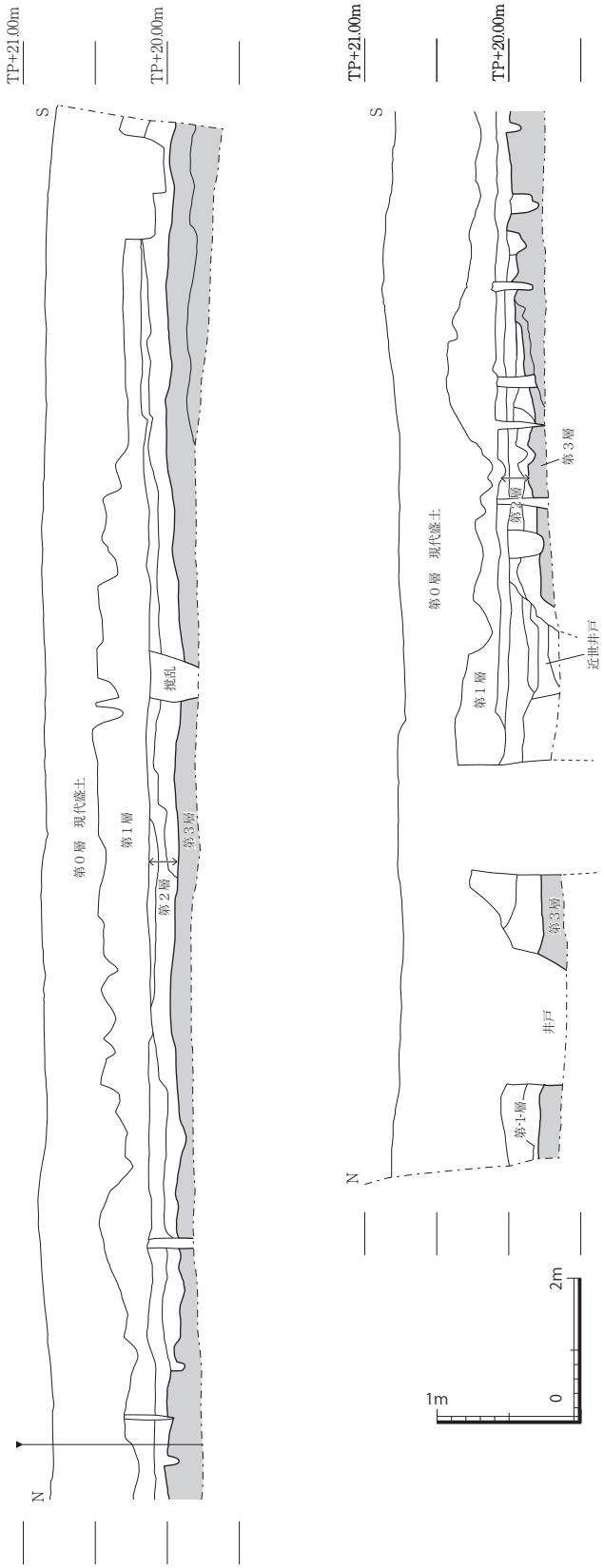


図10　Ⅰ区東壁断面図　水平１：100、垂直１：50

図11　Ⅰ区南壁断面図　水平１：100、垂直１：50

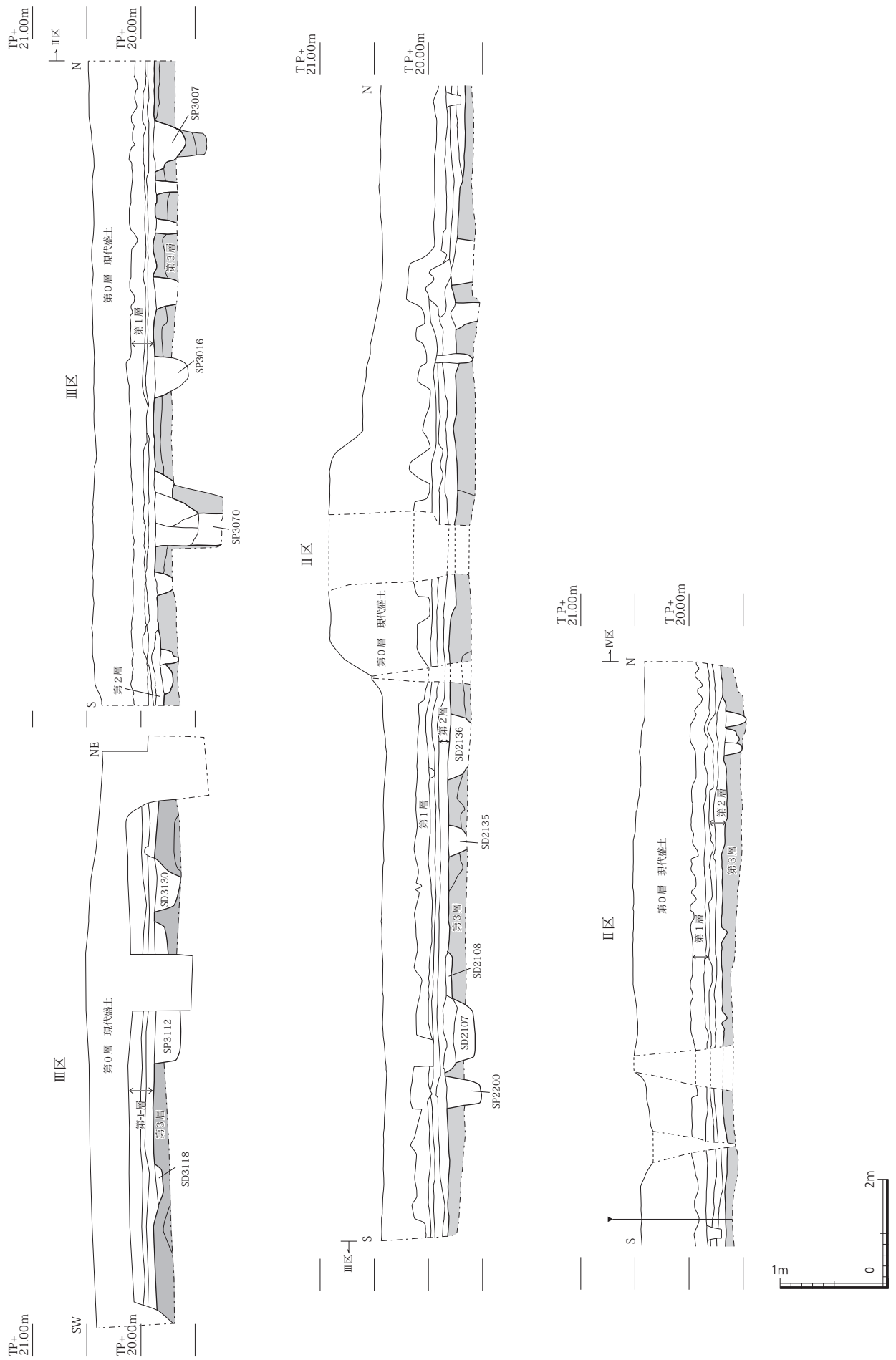


図12　Ⅱ・Ⅲ区西壁断面図　水平１：100、垂直１：50

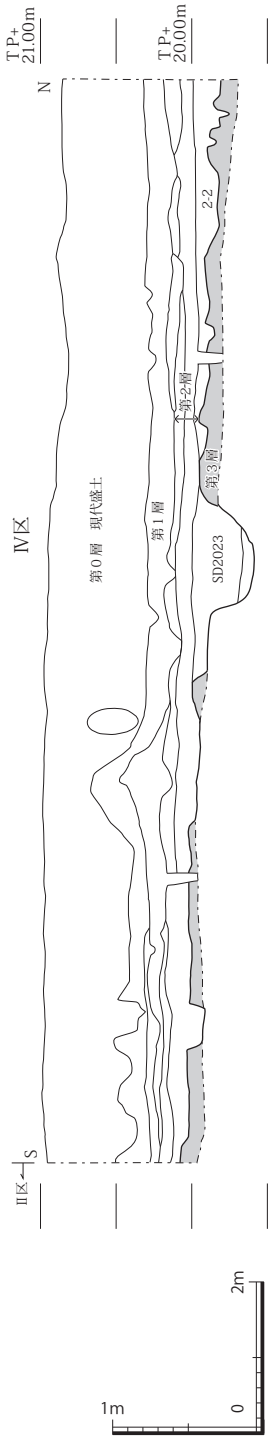
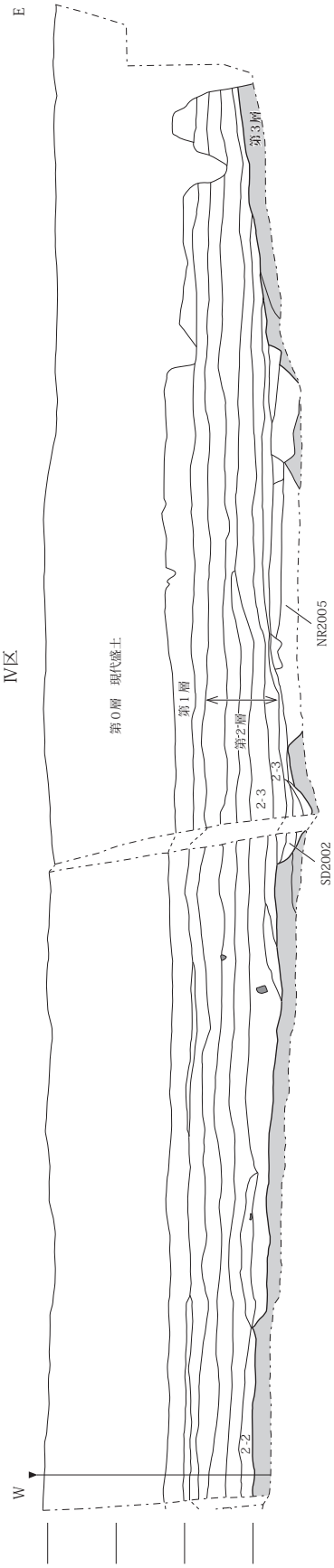


図13　Ⅳ区西壁断面図　水平１：100、垂直１：50



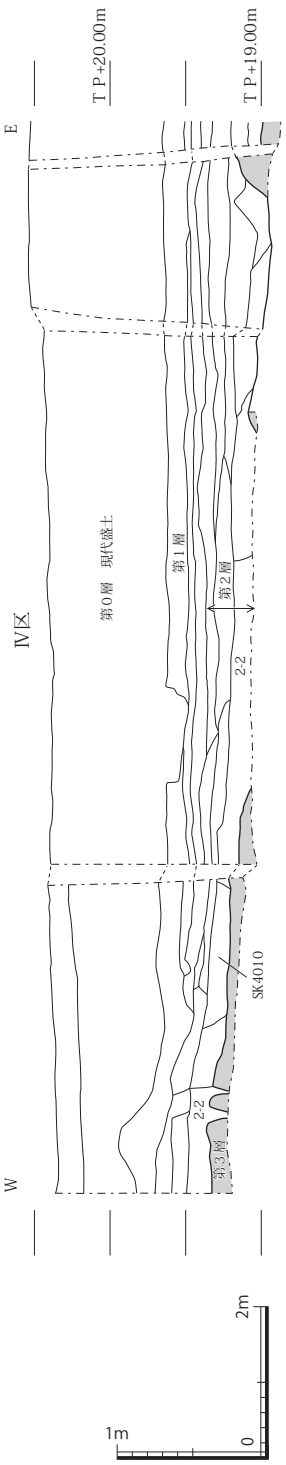


図14　Ⅳ区北壁断面図　水平１：100、垂直１：50

～灰オリーブ色（5Y6/2）粗砂混じり粘質シルトで植物根痕は第３層に達している。また、第１層直下は南区と同様に層状斑鉄が認められる。

第２層は、縄文時代～近世の遺物（図16～22）を包含する作土または古土壌層。粗砂～細礫混じり褐灰色（10YR4/1）粘質シルトで、東側に向かって水分を多く含むようになり色調が灰色系へと変化していく。全体に鉄・マンガン斑紋が認められる。層厚は10～50㎝で、Ⅱ区からⅣ区に向かい厚くなる。なお、図14で２－２と注記した層は、最上部に層状斑鉄が認められSK4010と後続するSB14を構成する柱穴SP4015が上面から掘り込まれており、上面が飛鳥～奈良時代の地表面と考える。２－３はNR2005埋没後の表土層の可能性がある。Ⅳ区北壁で花粉分析の実施した結果、第２層のうち２－２、－３を含む下半分からは古代～中世（MK－Ⅲ帯）、上半分からは中世～近世（MK－Ⅱ帯）の特徴を示す花粉帯が確認されており、いずれも水田として利用された可能性が高い（第４章第３節）。

第３層は遺構面基盤層で、上面は19.7～20.0m。自然堆積層と考える。上面で偶蹄類の足跡（写真６）や鋤痕（写真７）を検出しており、上層で行われた耕作の影響が及んでいる。第２層に瓦器椀や土製玩具が含まれていることから、第３層上面の遺構は鎌倉時代以降に帰属するものを含むことが分かる。堆積は東西で様相が異なる。西側は黄褐色（10YR5/6）粗砂～細礫混じり粘土または明黄褐色（10YR7/6）粘土で（写真８・図版２－２）、細礫は風化または腐朽礫。植物根痕や乾裂痕と思われるひび割れが多く認められ、Ⅲ区では最上部にマンガンが集積している。東側は灰色（10Y4/1）粗砂～細礫または粘質シルト混じりの砂礫層である（図版２－１）。上面で縄文時代の尖頭器（図23）が出土しており、粘土の堆積が縄文時代早期である可能性もある。

北区と南区では古代以降の作土層（第２層）の厚さが異なり、北に向かって厚くなる。また、南区では西から東に向かい厚くなる。調査地内では東半分の土地利用形態が異なり、北区ではNR2005などの飛鳥時代の遺物を含む流路のみであるのに対し、南区では建物（SB１・２）を検出している。このことから、南区の微高地が北区との間で終息していると考える。

遺構検出面である３層上面の標高は、北区では全体的に西が高く、東が低い様相を示す。更に南西から北東にかけてもわずかに下がっていく。南西が19.6m、南東及び北西が19.4m、北東が19.0mである。一方、南区はほぼ19.8m前後とほぼ平坦で、東西方向も比高差がない。

写真５　学校給食センター基礎掘削工事箇所堆積状況

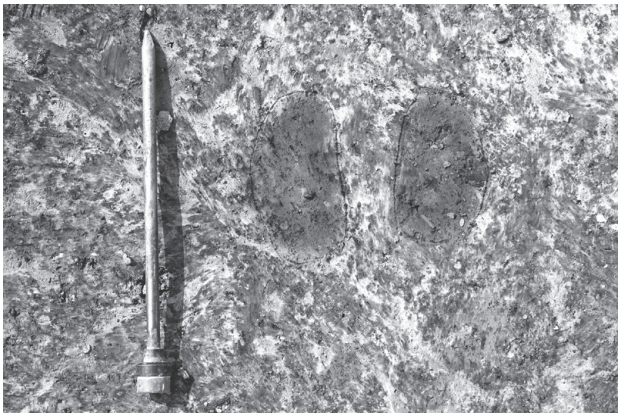


写真６　Ⅳ区第３層上面偶蹄類足跡

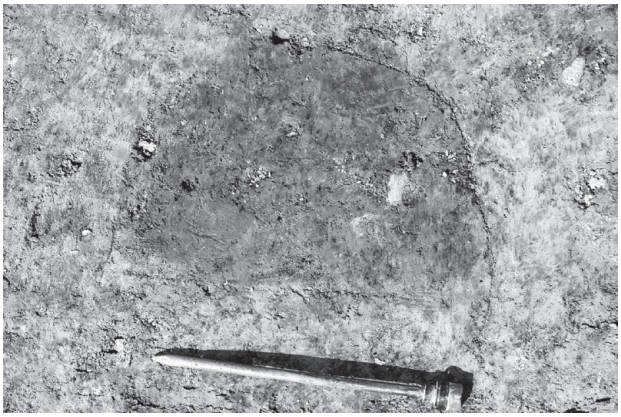


写真７　Ⅳ区第３層上面鋤跡

写真８　Ⅳ区北壁堆積状況

第２節　遺構と遺物

第１項　概要

今回の調査で検出した遺構については、凡例に記したとおり調査区ごとに通し番号を付した。Ⅰ区がS001～S259、Ⅱ区がS001～S206、Ⅲ区がS001～S198、Ⅳ区がS001～S080である。調査区をまたぐ遺構は、調査区ごとに番号を付したため、現地調査終了後に統合した。また、掘削の結果遺構とならなかったものは欠番とした。その結果、最終的な遺構数は717となった。なお、調査区をまたぐ遺構については、NR1246［2011・3192］のように統合した遺構番号についても角括弧の中に記載している。

出土遺物は、コンテナ（内寸543×340×200㎜）換算で35箱分の量が出土した。洗浄・注記・接合の各作業が終了した後、残存径１/４以上の土器、掘立柱建物構成柱穴出土遺物、土師器竈、黒色土器、陶磁器、製塩土器、埴輪、瓦、石器、石製品、金属製品から実測対象を抽出した。また、出土数の少ない器種については残存状況が悪い個体についても実測対象として抽出した。

今回の整理作業では遺物の数量計測を実施しておらず、掲載した遺物は出土量や組成比率を反映していない。あくまで、遺構の帰属する時期を判定し、性格を推定することに主眼をおいて整理担当者が任意で抽出した結果である。

第２項　層中出土遺物

人力で掘削した第２層より出土した遺物である。最も古いものは縄文時代早期の有舌尖頭器で、埴輪や古墳時代後期の須恵器なども少量出土している。出土量が最も多いと思われるのは奈良時代の土器で、飛鳥時代に帰属するものがそれに次ぐ。また、平安時代に帰属するものも一定量出土している。鎌倉時代の遺物は遺構より出土せず、層中より少量出土したのみである。

Ⅰ区包含層及び側溝（図15）　土師器・須恵器・瓦が出土している。須恵器のうち、１は杯B蓋。器高が低く、口縁の屈曲が強い。２は杯Aで、平底の底部はヘラ切り後未調整である。３・４は杯Bで底部外周端に高台を付す。５・７・８は壺。５は器壁厚より壺と考えたが、杯・皿の底部の可能性もある。７は口縁部外面にヨコハケ調整を施す。８は口縁部が外方にまっすぐ開く。６は高杯で、脚柱部のみ残存する。沈線が一条巡るのみで透かし孔がないタイプである。

土師器は、９が高杯の脚部。外面調整は不明で、内面はユビオサエ後にナデ調整を施す。

瓦は軒丸瓦が２点出土している。12は青谷式の複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当で、中房より上を欠く。蓮華文の周りを珠文が巡り、その外側を圏線が巡る。周縁は残りが悪く、素文か鋸歯文か判断できない。瓦当厚2.3～2.6cmで、裏面を丁寧なナデ調整で仕上げている。８世紀半ばの所産と考える。13は複弁蓮華文軒丸瓦で、中房より上

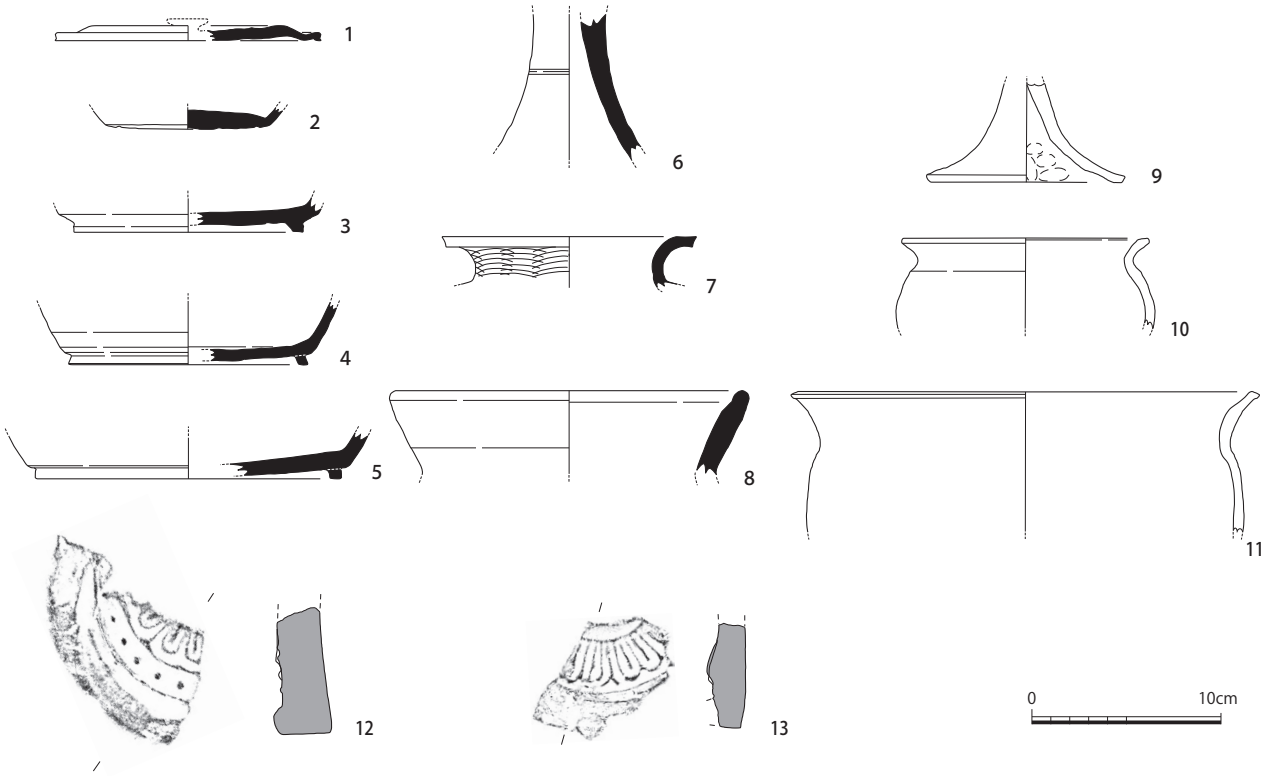


図15　Ⅰ区包含層及び側溝出土土師器・須恵器・瓦　１：４

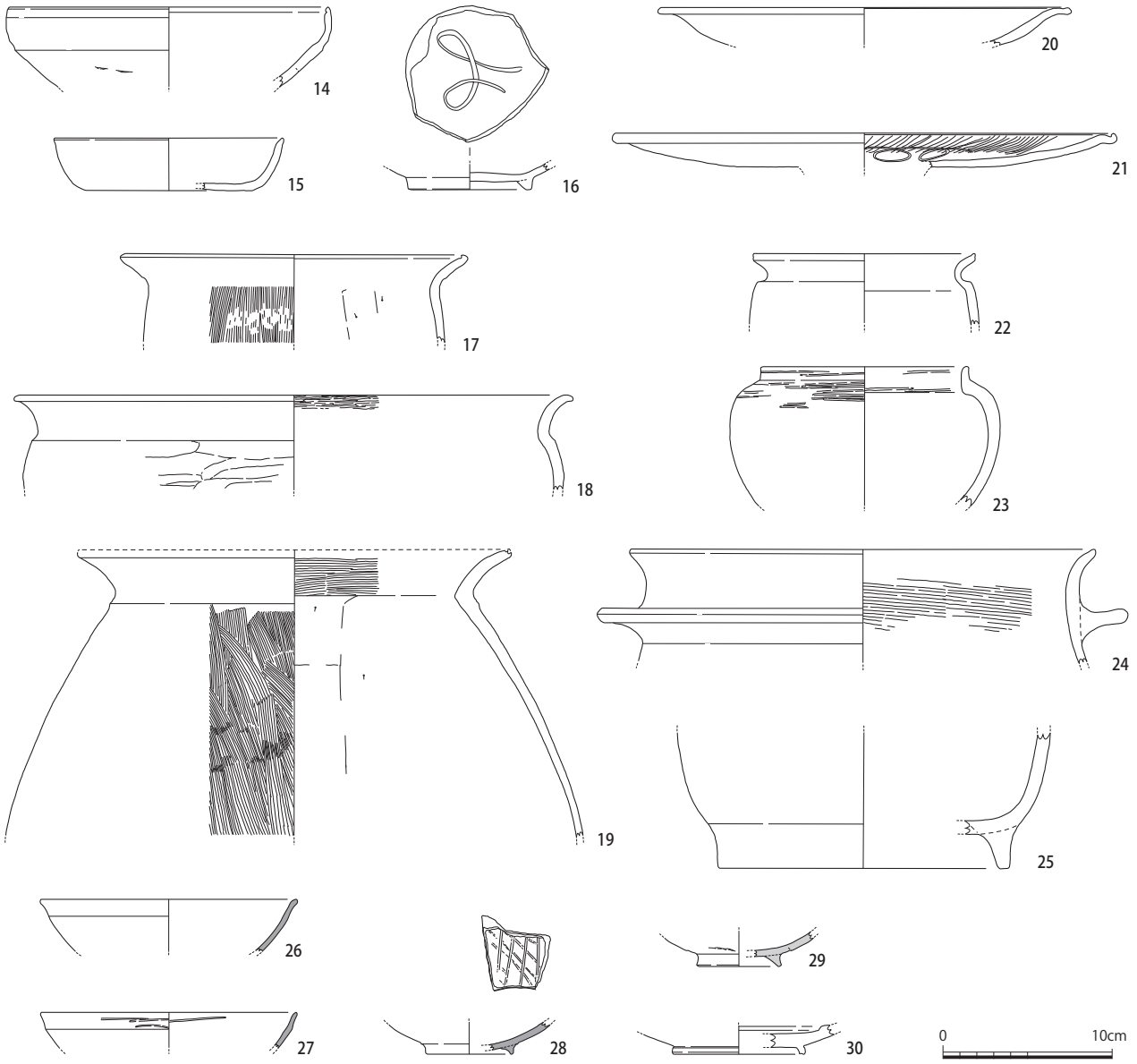


図16　Ⅱ区包含層出土土師器・黒色土器・陶器　1：4

を欠き周縁部が剥離する。蓮華文の外を圏線で囲うもので、黒山廃寺出土資料などに類例があり、８世紀前半の所産と考える。

Ⅱ区包含層（図16～19）　土師器、須恵器、黒色土器、陶器、製塩土器、土製品、埴輪、石器、石製品が出土している。Ⅱ区包含層からは瓦が一定量出土しており、建物の廃絶に伴ってまとめて廃棄された可能性が考えられる。

土師器は14が鉢で、内外面ともに口縁端部付近がヨコナデ調整で、それ以外はナデ調整を施す。復元口径18.8cm。15は杯Aで、内外面ともにナデ調整を施す。復元口径13.4cm、器高3.1cm。16は杯または椀の底部で見込みに螺旋暗文を施し、高台径は7.2cm。17～19は甕。17は口縁端部の巻込弱い。18は口縁内部にミガキを施し、体部外面に強いナデを施す。19はなで肩の体部で、体部外面がタテハケ調整で内面がヘラケズリ調整。口縁内部はヨコハケ調整を施す。20・21が高杯で皿形の杯部。20は摩滅が激しい。21は内面に一段放射暗文と螺旋暗文を施す。復元口径19.6cm。

22・23は壺。22は口縁部と体部の間に明瞭な段を持つ。23は丸い体部に短く直立する口縁部を持ち、口縁部内外面にミガキを密に施す。24は羽釜。顎部は端を丸くおさめるタイプで黒斑が付着。内面はハケメ調整を施し、復元口径27.6cm。

須恵器は、31～34が杯H。38は杯Gで、復元口径12.0cm、器高3.8cm。31・32は尖り底。35～37・39・40は杯Bで、高台を外周端に付す。35・37は底部と口縁部の境が丸みを持つ。39は自然釉がかかり窯胎が付着する。40は

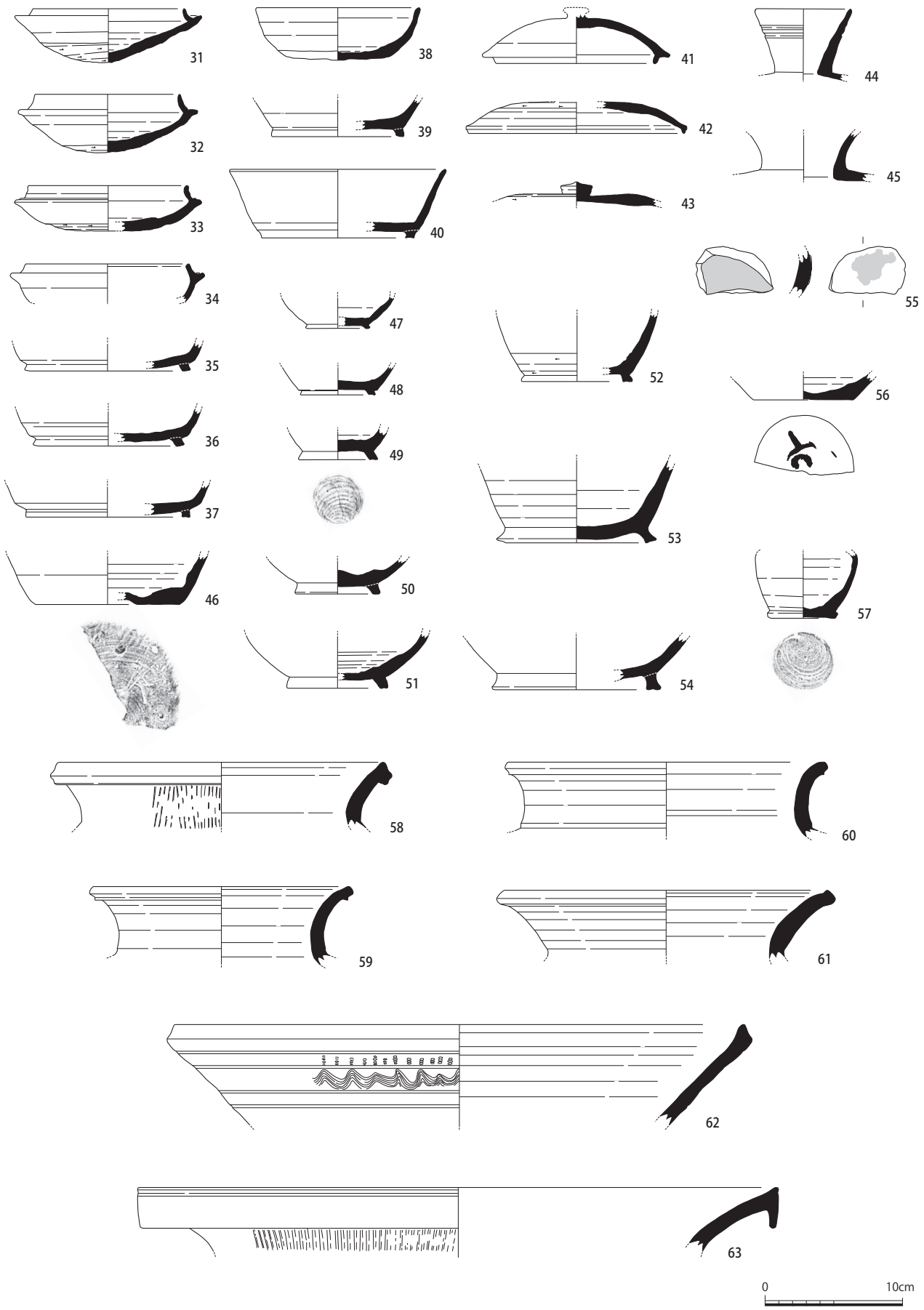


図17　Ⅱ区包含層出土須恵器　1：4

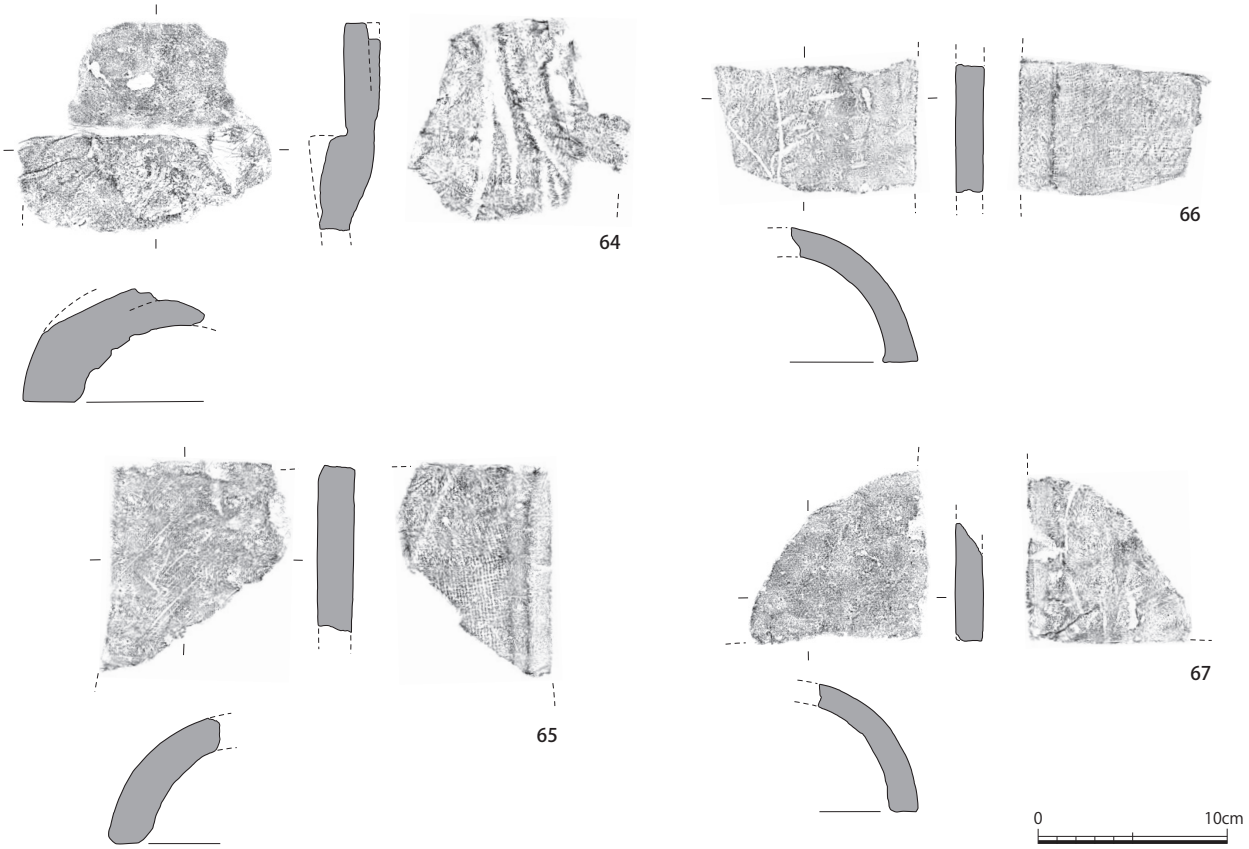


図18　Ⅱ区包含層出土丸瓦　1：4

高台と口縁の境がほぼなく、一直線に外方に伸びる。復元口径15.6cm、器高5.0cm。41は杯G蓋。つまみを欠き、天井部まで回転ナデ調整を施す。立ち上がりは受部より下に伸び、受部径12.0cm。42・43は杯B蓋。42はかえりをもたず、復元口径15.6cm、器高2.3cm。43は宝珠形つまみを付し、天井部は回転ヘラケズリ調整を施す。

44は平瓶の口縁部で沈線が２条巡る。45～54・56～59が壺。46・49・57は底部に糸切り痕が残る。56は平底の底面に判読不明の墨書がある。55は内外面に漆が付着した体部で器形不明。58は外側に肥厚した口縁端部を面取する。口縁部の外面はタタキ痕をナデ消す。

60～63は甕。62は外方に開く口縁部で端部を上方につまみ上げる。沈線を４条巡らし、間に列点文と波状文を施文す。63は口縁端部が下方に垂れる。

黒色土器（29）は内黒で内外面ともにミガキを施さない。瓦器椀は26・27が復元口径15.0cm。26は摩滅が激しく、27は内外面ともにミガキ調整を施す。28は見込み部に格子状暗文を施す。　陶器皿（30）は内面に施釉し、外面は底部と高台が露胎する。

瓦は丸瓦と平瓦が出土している（図18～19）。64～67は丸瓦。凹面は無調整で布圧痕（６～８条/cm）が残るが、67のみ側面付近を一部ナデですり消す。凸面はナデ調整を施しタタキ痕を消している。側面は面取りする。筒部の厚さ1.5～1.9cm。64は玉縁部の凹面が未調整で布袋のしわが残る。

68～74は平瓦。凹面は68・70・73がナデ調整仕上げで、73は布圧痕を消しきれていない。67・69・71～74が未調整で布圧痕（７～８条/cm）が残る。凸面は68のみが縦方向のナデ調整で叩き痕を消し、それ以外は未調整で縦縄タタキの痕跡が明瞭に残る。69・70でわずかに縄の撚りが観察できるが、基本的には強いタタキにより縄目がつぶれて線状に痕が残る。69は両面に粘土板の接合痕が残っている。側面と端部が残存する個体は面取りが確認できる。

Ⅱ区側溝（図20）　土師器、須恵器、緑釉陶器椀、土製品、石器が出土している。

土師器は、86・87が杯A。内外面ともにナデ調整を施す。86が口径11.0cm、87が口径15.4cmで、器高は両者とも3.0cm。88・89が皿A。88は口縁端部を巻込む。内面に一段放射暗文を施し、外面はナデ調整。復元口径15.2cm。89は口縁部に反りがなく、見込み部に暗文を施す。復元口径14.1cm。90・91は甕。外面にタテハケ調整、内面にナデ調整を施す。90は口縁端部がナデにより四角く成形されており、頸部付近のヨコナデは強く明瞭な痕跡

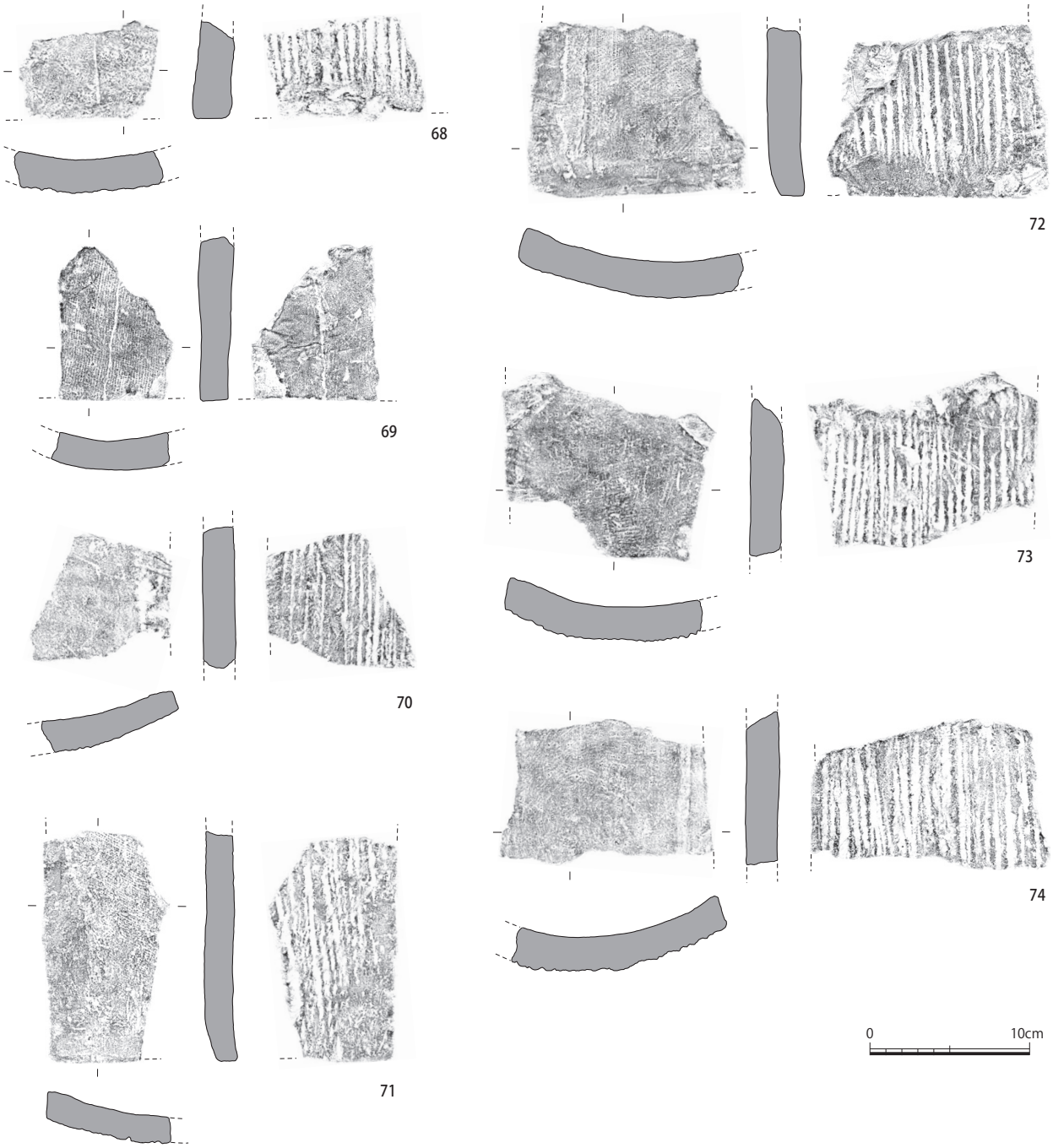


図19　Ⅱ区包含層出土平瓦　1：4

が残る。92・93は羽釜。内外面ともにナデ調整を施し、復元口径が92は24.0cmで93は34.0cmである。

須恵器は、75・76が杯A。76は平底で回転ヘラケズリ調整。復元口径15.0cm、器高3.7cm。77は杯Bで、断面方形の直立した高台を付し、復元高台径12.0cm。78は蓋で頂部を欠く。天井部は回転ヘラケズリ調整を施し、かえりを持たない。口径17.0cmに復元したが、残存率1／8以下のため正確さを欠く。79は鉄鉢形の鉢。80～83は壺で、81は短く直立する口縁部を持つ。

土製品は近世のミニチュア羽釜（84）で、緑釉陶器は椀の口縁部（85）である。

石器はサヌカイト製の素材剥片（94）で、短軸1面に原礫面が残る。残存長4.5cm、最大幅3.8cm、最大厚0.9cm。石材産地は二上山と思われる。

Ⅲ区包含層（図21）　土師器、須恵器、平瓦、剥片石器が出土している。

土師器は、95が皿。口縁部の巻込弱く、復元口径13.0cm、器高2.3cm。96～101が杯Aで、96～99は在地的な形態で、内外面ともにナデ調整を施す。96が復元口径12.0cm、器高3.3cm。99が復元口径15.8cm、器高3.7cm。100は外折りの口縁部で端部を巻込む。内外面ナデ調整を施し、復元口径17.4cm、器高3.5cm。101は口縁部を巻込、

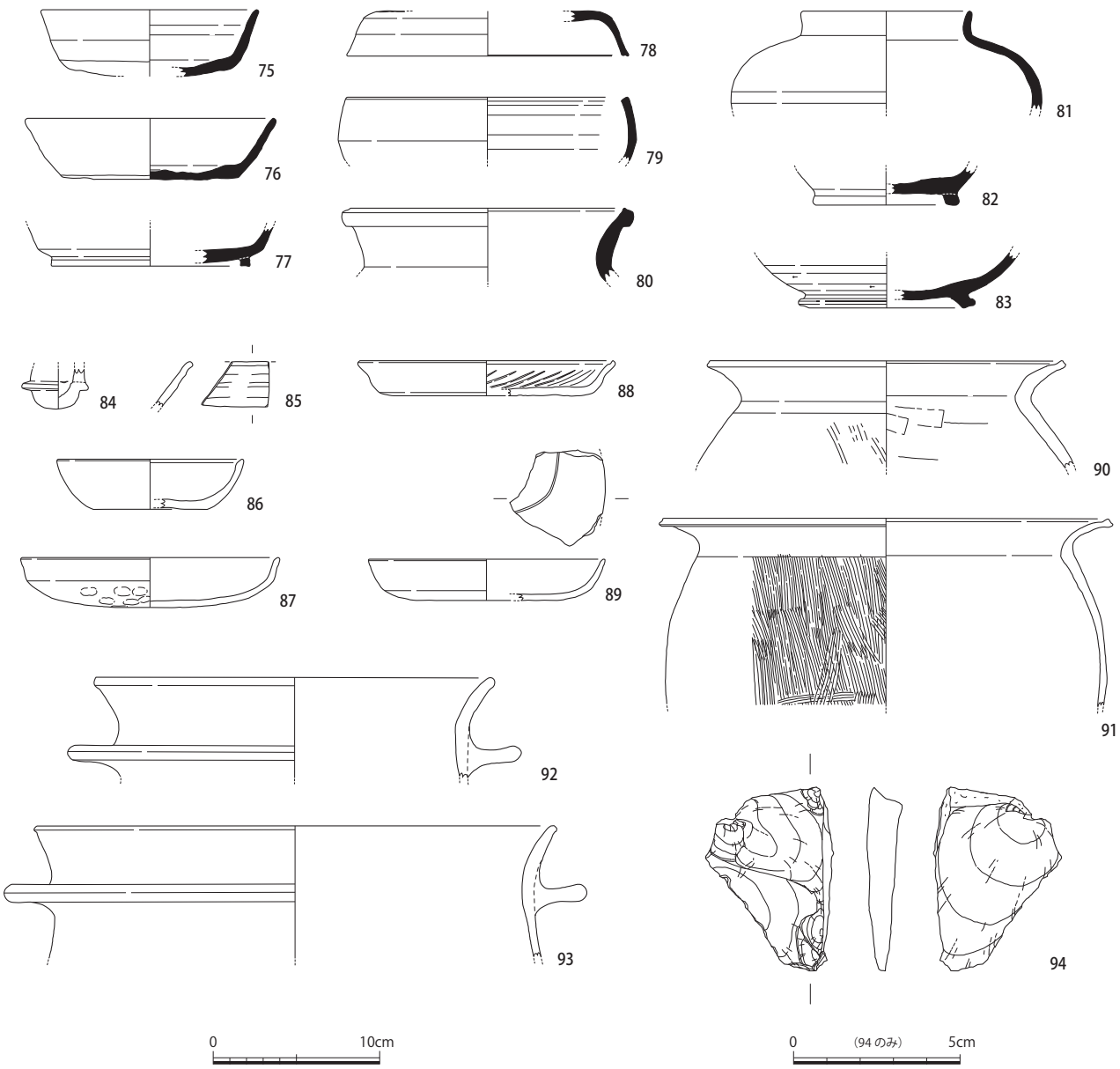


図20　Ⅱ区側溝出土土器・土製品・陶器・石器　１：４（94のみ１：２）

底部は中心に向かいわずかに窪む。見込み部に螺旋暗文を施し、体部外面にナデ調整を施す。復元口径17.4cm、器高3.0cm。102は鉢で、口縁端部の巻込は弱い。体部外面はヘラケズリの後にナデ調整を施す。

103は羽釜の顎部。104は把手付き甕の体部。把手は断面楕円形で中空のつくり。体部外面はタテハケ調整を施す。内面はヘラケズリ調整後、部分的にユビナデを施す。

須恵器は、105が杯H蓋。天井部はヘラケズリ調整を施し、ヘラ記号を刻む。復元口径11.8cm、器高3.0cm。106は杯Gで、復元口径12.0cm、器高3.1cm。107は杯Aで、平坦な底部にナデ調整を施す。復元口径16.0cm、器高3.6cm。108は甕で、口縁端部は肥厚しており、復元口径20.4cm。

瓦は平瓦（109）で、凹凸両面に斜め方向の板ナデ調整を施して成形時の痕跡を消している。厚さ1.7cm。

石器はサヌカイト製の剝片（110）で、原礫面が残る。片面のみに細部調整を部分的に施す。残存長3.9cm、最大幅3.0cm、最大厚0.6cmで、現存部の重量８ｇ。石材は二上山製と考える。

Ⅳ区包含層及び側溝（図22）　土師器、須恵器、陶器、製塩土器、石器が出土している。

土師器は、111が杯Aで口縁端部の巻込は弱い。内外面ともに口縁部はヨコナデ調整で、底部にはナデ調整を施す。112～114は甕。小型の112は復元口径14.0cmで外面は風化により摩滅している。113はヨコナデにより頚部の下に段があり、体部外面はナデ調整で仕上げているが、ユビオサエの痕跡が残る。体部を打ち欠く。本調査区より出土した甕の中でも新相を示す個体と考える。114は口縁部が外反し端部を面取する。体部は外面がタ

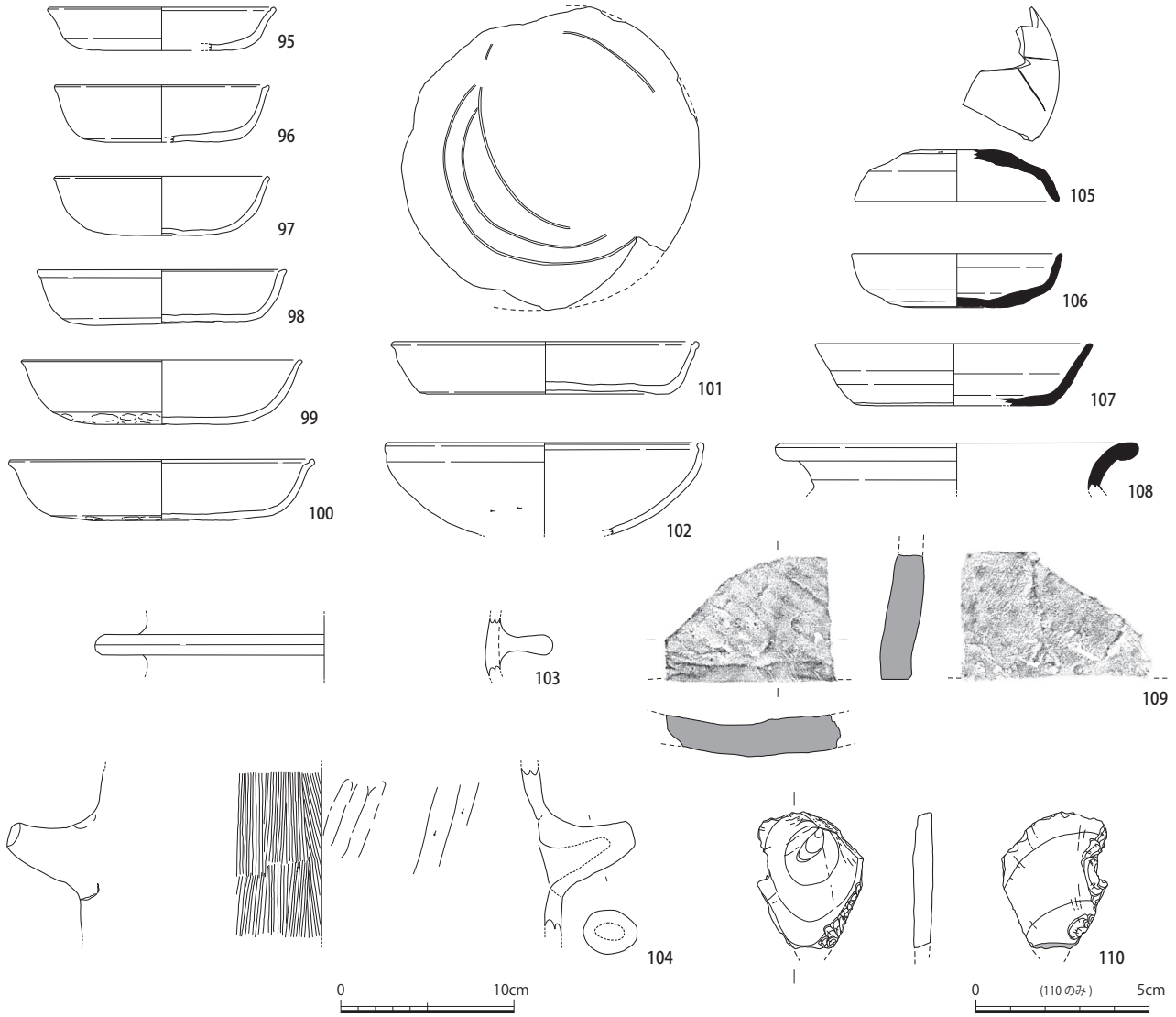


図21　Ⅲ区包含層出土土器・石器・瓦　１：４（110のみ１：２）

テハケ調整、内面がヘケズリ調整である。115は鉢で口縁端部を上方につまみ上げる。復元口径22.0cmで、煤が付着する。

須恵器のうち、117は杯Hで底部にヘラケズリ調整を施し形状はやや尖り気味である。受部径12.6cm、外端径13.6cm、器高4.0cmで、陶邑Ⅳ古段階と考える。当該期を遡る須恵器は、調査地内では出土数が限られている。119・120は杯Bで、底部外周端に高台を付す。120は高台から底部にかけて窯胎が溶着する。116は蛸壺で、118は小型壺の高台部。121は甕で、口縁部は外反し端部は下方に垂れる。外面はタタキ後にナデ調整を施すが、タタキ痕を消しきれていない。

灰釉陶器（123）は、他個体が溶着してたもので器種不明。製塩土器（122）は、内外面ともにナデ調整を施し口縁端部外面を面取りしている。色調は黄橙色（7.5YR7/8）で、３㎜以下の長石・チャート・クサリレキを含む。

石器はサヌカイト製の縦長剥片（124）で、原礫面が残る。長さ6.0cm、幅3.5cm、厚さ1.5cmで、重量24.20ｇ。石材は二上山製と考える。

Ⅰ～Ⅳ区３層上面（図23）　３層上面（遺構面）での人力精査実施時に出土したものである。上層で中近世に行われた耕作により古代以降の遺物が混じる。土師器皿、須恵器、緑釉陶器椀、瓦器椀、白磁皿、埴輪、瓦、石器、石製品が出土している。

土師器皿A（150）は内外面ともにナデ調整を施し、口縁端部を強くヨコナデし丸くおさめる。復元口径13.4cm、器高2.0cm。

須恵器のうち、125が杯Hで底部外面はヘラケズリ調整。126は平底の杯A。127～130は杯B。いずれも外方に踏ん張る高台を付す。130は底部の器壁が厚く他器種の可能性がある。131は杯B蓋で頂部を欠く。かえりを持たず、復元口径18.6cm。132とセットの可能性あり。132・133は大型の杯B。132は復元口径18.6cm、器高4.2

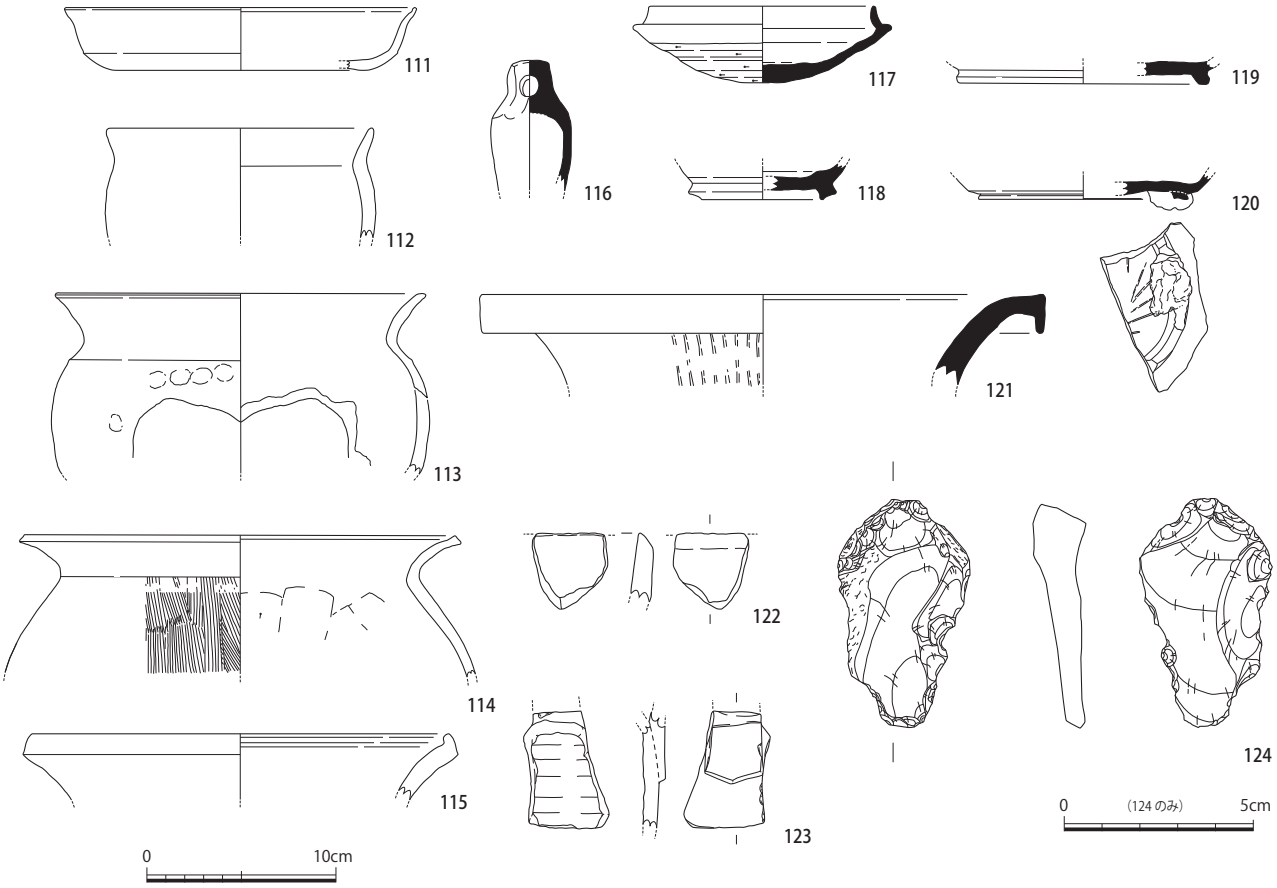


図22　Ⅳ区包含層及び側溝出土土器・土製品・陶器・石器　１：４（124のみ１：２）

cm。133は復元高台径15.0cm。134は稜椀形の杯で、口径13.9cm、器高3.9cm。稜より下は回転ヘラケズリ調整の後にナデ調整を施し、底部外面はヘラケズリ調整を施す。出土遺物中で最も新しい時期の須恵器である。

142は鉢で、平底の底部から口縁部が垂直に伸びる。復元口径13.6cm、器高6.7cm。137は壺蓋でつまみを欠き、天井部に自然釉がかかる。口径13.2cm、器高2.2cm。135は高台を付す小型壺。136・138～141・143・144は壺。136は口縁部がまっすぐ外方に伸びる。底部の破片資料は、141・143が平底。143は中心に向かって大きく窪む。その他は、高台を付し形状は多様である。体部は139・141・143が外面に回転ヘラケズリ調整を施し、その他は回転ナデ調整である。

145～149は甕。145はまっすぐ外反する口縁部で端部を面取する。146～148はいずれも口縁部が外反するが端部のおさめ方がことなる。148は外面に平行タタキ目、内面に同心円条当て具痕がそれぞれ残る。149は他の甕よりも大型の個体。直線的に外反する口縁部を持ち、ヨコハケ調整の後に波状文を巡らせてその下に沈線を２条巡らす。体部は外面がタテハケ調整の後にナデ調整を施し、内面には同心円条タタキ痕が残る。

緑釉陶器椀（152）は口縁端部と高台を欠き、内外面に施釉。瓦器椀（151）は、逆三角形の高台を付し見込み部に格子状暗文を施す。高台径4.8cm、高台高0.5cm。白磁皿（153）は、見込み部が釉ハギで高台部は露胎している。復元口径8.8cm、器高2.8cm。

円筒埴輪（154）は断面台形の突帯を付し、突帯高は0.8cm。資料上部に段を有する。内外面ともにナデ調整を施している。

平瓦（155）は凹面未調整で９条/cmの布圧痕が残り、凸面は縦縄タタキの痕が残る。厚さ2.1cm。

石器及び石製品は３点を図化している。156はサヌカイト製の有舌尖頭器で、先端部と舌部の一部を欠く。残存長6.0cm、最大幅2.9cm、最大厚1.1cmを測り、現存部の重量19.74ｇ。身部の調整剥離は両面ともに概ね右肩上がりの浅く長いもので、表面の方が規則的である。舌の中心部に有機物が付着している。諸特徴と風化度合いより縄文時代早期に属すると思われる。

157は凝灰岩製の砥石で、長軸４面と短軸１面を使用している。平面長方形で横断面は方形を呈する。長さ5.9cm、幅3.6cm、厚さ1.9cmを測り、重量44.92ｇ。158は泥質片岩製と思われる砥石の破片で、２面を使用している。残りの面は欠損のため不明。現存部の重量６ｇ。

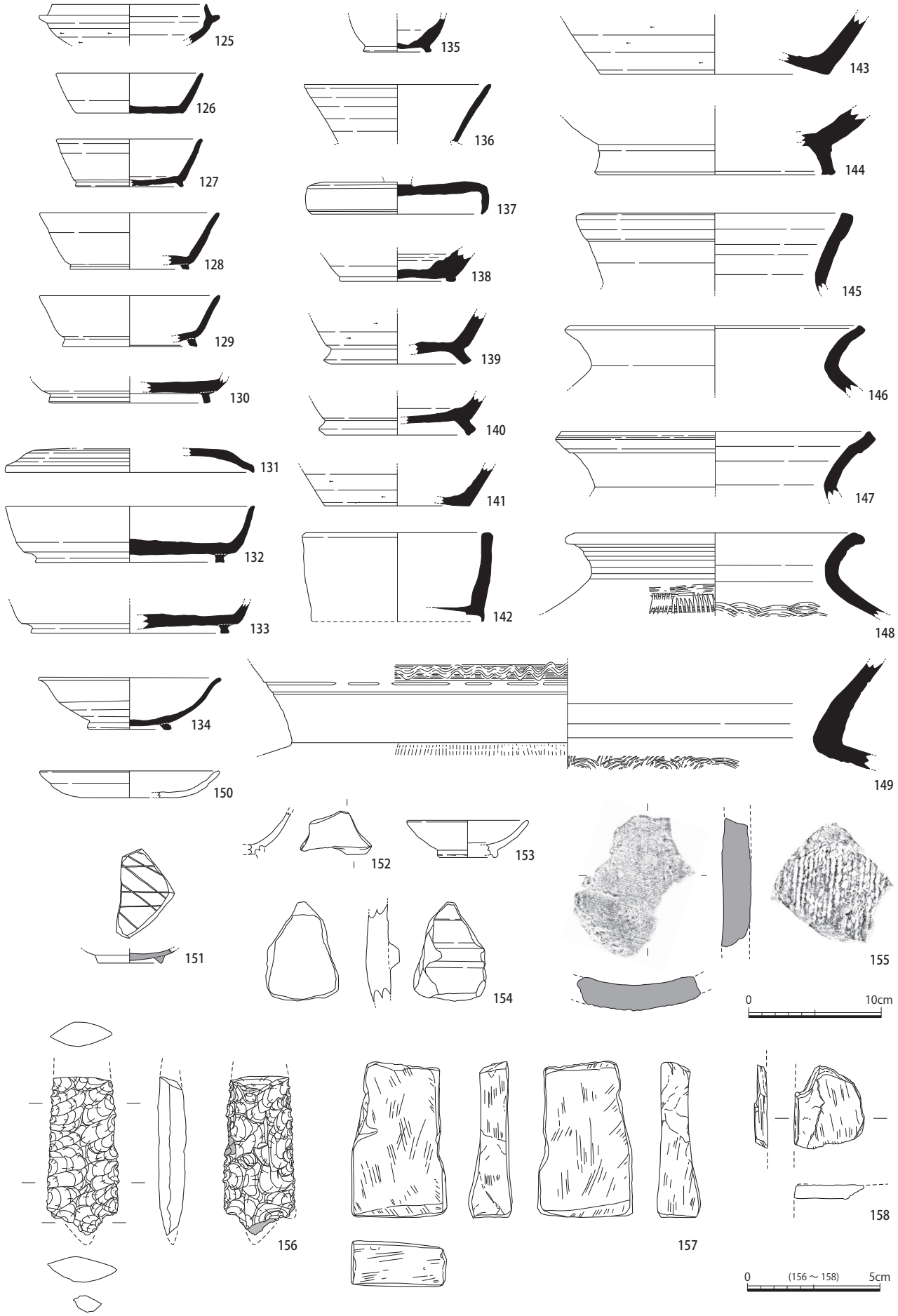


図23　３層上面遺構検出時出土遺物　１：４（156～158は１：２）

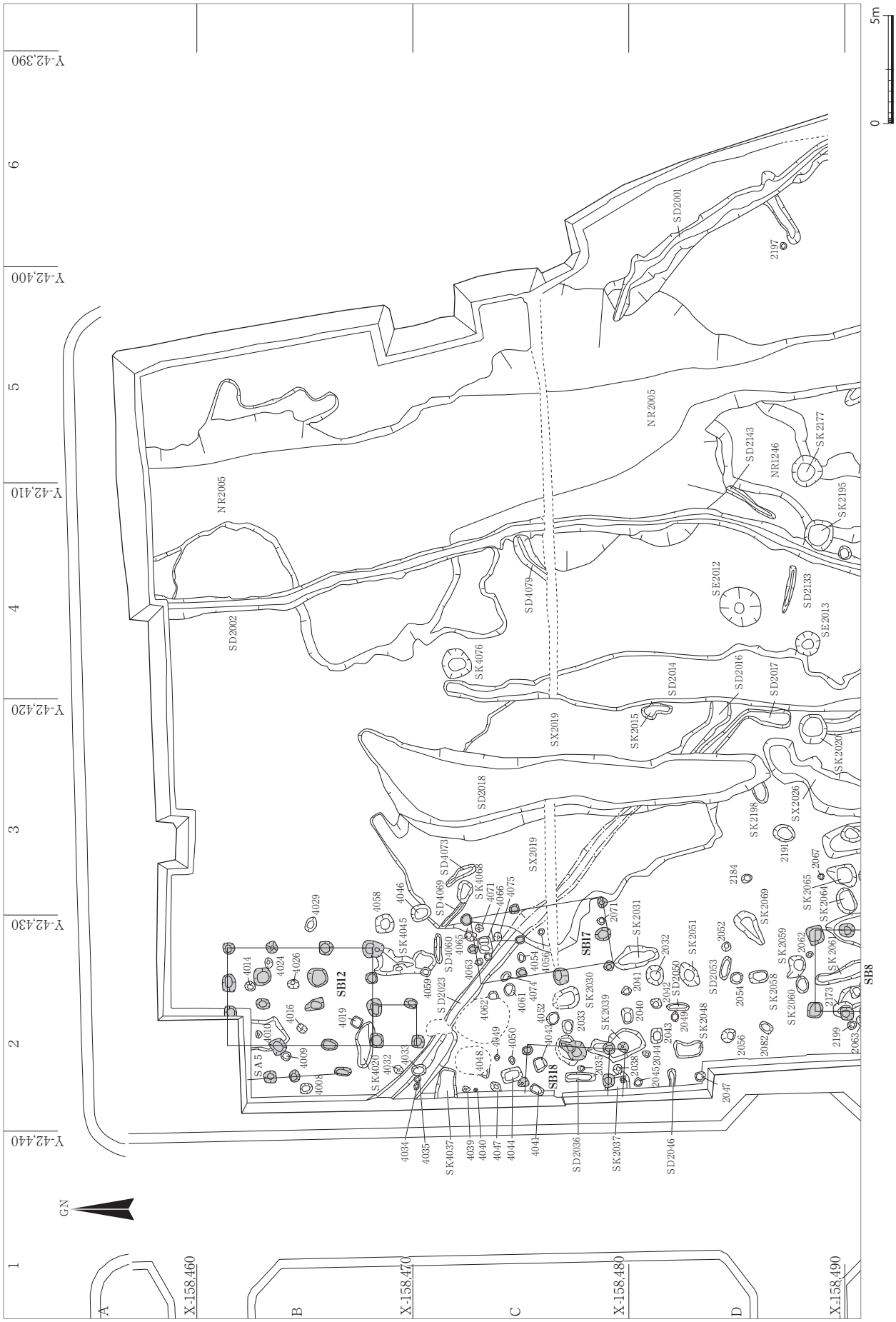


図24　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区（北区）遺構図（北半分）　1：250

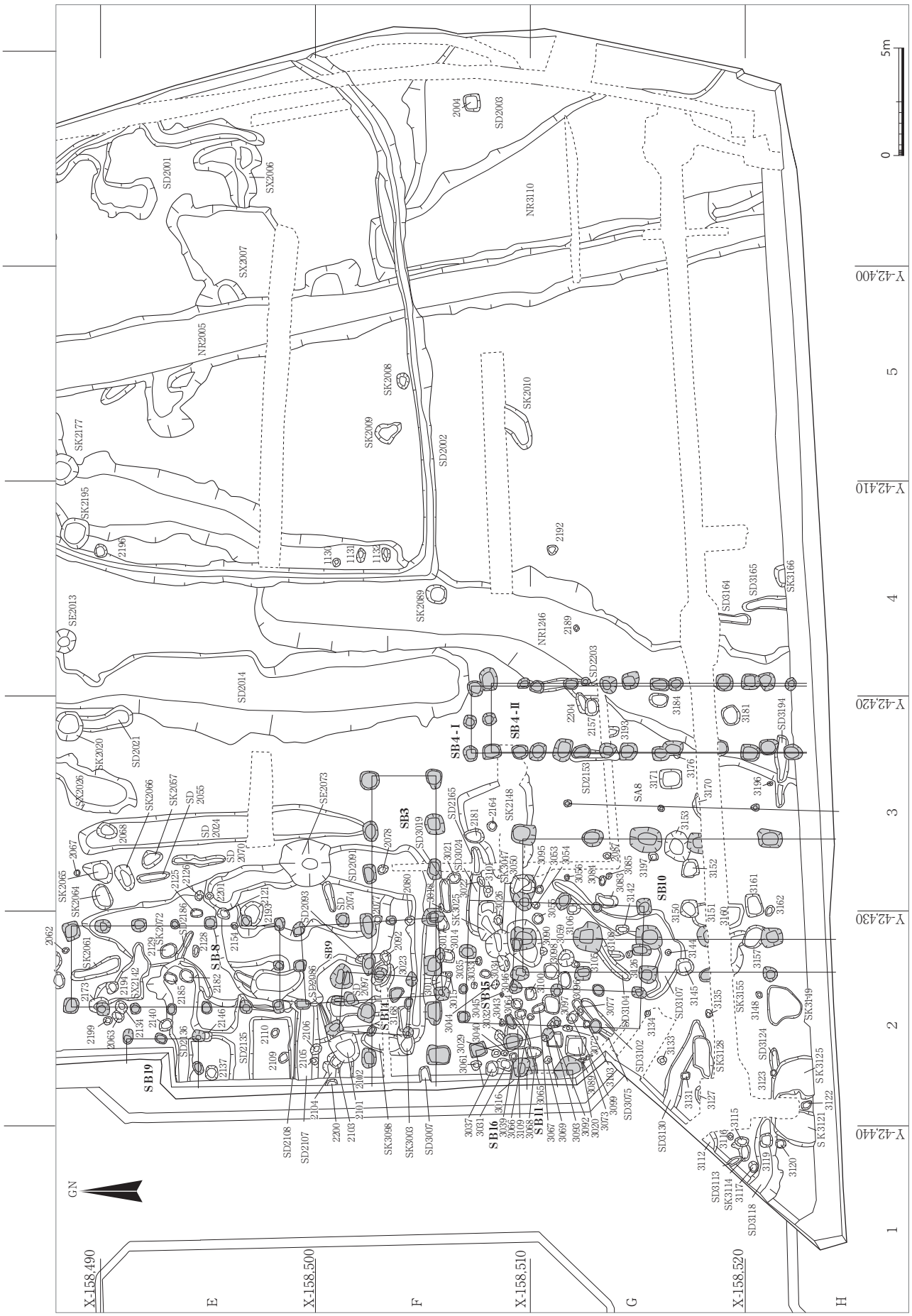


図25　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区（北区）遺構図（南半分）　1：250

図26　Ⅰ区（南区）遺構図　1：250

第３項　自然流路（NR）

NR1246［2011・3192］（図27、図版３）　４Ｅ～３Ｌにかけて検出した流路である。調査区の南側より流れ込み北に向かって流れている。３Ｉで西側から別の流路（NR1259）が合流し、４Ｅ～ＦでSD2002に、５ＤでNR2005に切られる。総延長は85m、幅は南側で10.15m、北側で4.2mである。断面形状は皿状を呈し、深さは南側で0.52m（底面TP＋19.2m）、北側で0.12m（底面TP＋19.0m）を測る。

流路堆積物は北側が粘質シルト主体、南側が粘土及び粗砂である。３L～４Gでは最上層に褐色粘土が堆積しており、当初は別の遺構（SD1243）として認識していたが、埋土の色調などから断面観察後は流路埋没後の人為的な整地土とした。おそらく、掘立柱建物群の建設時に施されたと考える。整地土の分布範囲は、北区では南端の長さ3.3m、幅1.1m、深さ0.04m程しか認められなかったが、南区では長さ25m、幅2.5m、深さ0.34mを確認した。整地土からは、土師器皿（161）、須恵器杯G（168）・杯H（167）・甕（170）・高杯（173）が出土している。

なお、近接するSD1244、1245も同様の埋土が観察されており、流路埋没後に整地されたと考えられる。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦が出土しており、飛鳥時代に帰属するものが主である（図28）。

土師器は、159が杯。須恵器杯Gを模倣したような形状で、口縁端部は外に折れ、底部に回転ヘラケズリ調整を施す。焼成があまく、色調は浅黄橙（7.5YR8/6）色である。復元口径9.6cm、器高3.7cm。160は杯Cで口縁部の面取弱い。内外面ナデ調整を施す。復元口径13.0cm、器高3.2cm、器高指数24.6cm。161は皿で、復元口径13.8cm。162は羽釜の鍔部。

須恵器は、163～165が杯H蓋。164は回転ヘラケズリを施されやや傾いた天井部で、ヘラ記号を刻む。天井部と口縁部の境は明瞭で、口径11.8cm、器高3.7cm。165は天井部をヘラケズリし平坦に仕上げる。復元口径14.2cm、器高3.6cm。166・167は杯H。166はやや内傾気味で高さのある立ち上がりを持ち、底部には回転ヘラケズリを施す。受部復元径は16.8cmとなるが残存径１/８のため検討を要す。167は尖り底で底面にヘラ記号を刻む。復元受部径10.6cm、器高3.5cm。168は杯Gで、平底の器形。復元口径10.2cm、器高2.9cm。169は杯Bで外側に踏ん張る短い高台を付す。高台復元径7.8cm。

170は甕で、胴部最大径に１条の沈線を巡らせる。173は高杯の高台裾部で、長方形の透かし孔をもつ。171・172・174～176は壺。172は円盤状の底部を持つ個体。177は壺または平瓶で、上半にカキメ、下半に回転ヘラケズリ調整を施す。178は甕の胴部で、外面が平行タタキのちカキメ調整で内面には同心円状当て具痕を残す。

瓦のうち、179は丸瓦。凹面はタタキ痕を消し、凸面は７状/cmの布圧痕が残る。厚さ1.7～2.0cm。180は丹比廃寺式の重弁蓮華文軒丸瓦。中房より下を欠く。花弁は薬研彫り状の単弁を二重の圏線で囲み重なりを表現している。間弁は圏線で表現された逆三角形である。瓦当厚は3.0～3.5cm。黒山遺跡、丹比廃寺、太井遺跡、真福寺遺跡で出土しており、７世紀後半の所産と考える。

NR2005［3111・4078］（図29・30、図版４）　５Ｂ～６Ｈで検出した南東から北西に向かって流れる流路で、SD2002に切られる。南側は幅2.9mでほぼ直線状を呈するが、北側は不定形になり幅10.5mと広くなる。検出長49m、深さ0.28～0.44mである。断面形状は皿字状を呈する。堆積は粘質シルトが主体であるが、一部ラミナが認められる砂層が存在し、流水があったことがわかる。南側のⅠ区北東隅で流路の延長が確認できなかったことから、Ⅲ区の東南より流れ込んできたと思われる。なお、Ⅱ区調査時に一体の遺構と認識していたものをⅢ区調査時にNR3110として分離できることを確認した。

出土遺物は土師器、須恵器、木製品が出土している（図31）。土師器は、181が杯。ミガキ・暗文を欠き、形状のみ杯Cを模倣した在地的な杯と思われる。復元口径12.8cm、器高4.7cm、径高指数36.7。182は台付杯で、見込み部はミガキを施さずナデ調整。185・186は高杯で、185は杯部を欠く。186は椀型の杯部で、摩滅が激しく内面は放射状暗文を施すと思われる。脚部は外面ミガキ調整を施す。183は長頸壺の口縁で、内外面ともに摩滅が激しい。184・187は甕で、体部外面はハケメ調整を施す。184は口縁部が直立する。

須恵器のうち、188・189は杯H蓋。188は丸い器形で、天井部にヘラ記号を刻む。口径11.2cm、器高4.0cm。189は天井部と口縁部の境が明瞭で、復元口径11.2cm。190・191は杯G蓋。190は天井部と口縁部の境が不明瞭で、天井部の回転ヘラケズリ調整は口縁部にまでおよぶ。頂部に宝珠つまみを付し、かえりと受部は同じ高さである。焼きひずみが激しい。受部径9.0cm、器高2.8cm。191は平坦で狭い天井部をもち、かえりは受部よりも下に出る。復元受部径9.8cm、器高2.5cm。

192は杯Gで、口径11.0cm、器高3.5cm。193～195は杯H。193は立ち上がりが内傾し、底部は回転ヘラケズリで平底気味である。受部径11.5cm、器高3.4cm。外面に煤が付着し、底部を穿つ。194は平底で復元受部径10.0cm、器高3.0cm。195は底部にヘラ記号を刻み、受部径9.8

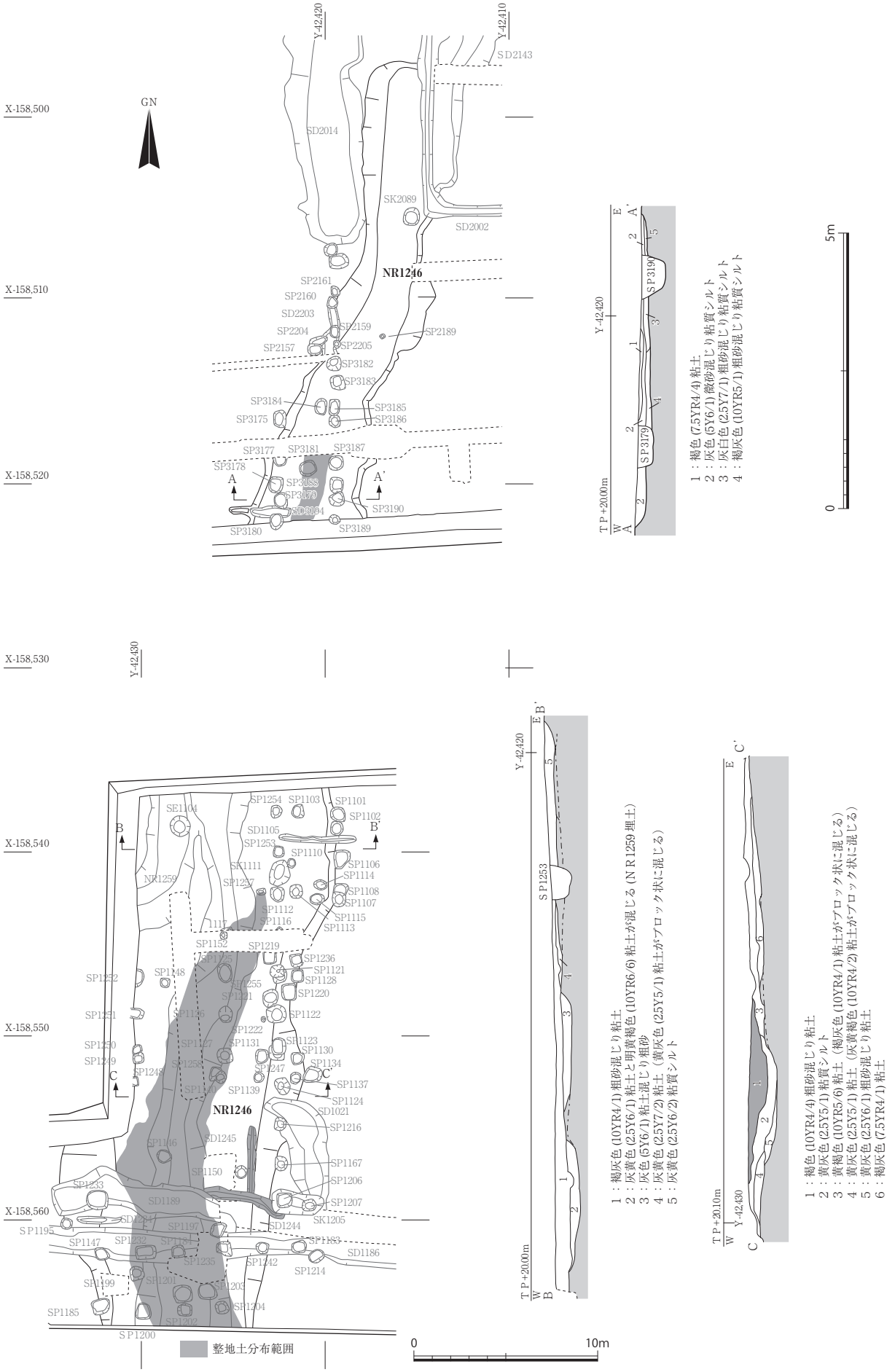


図27　NR1246遺構図・断面図　1：300（断面図は1：100）

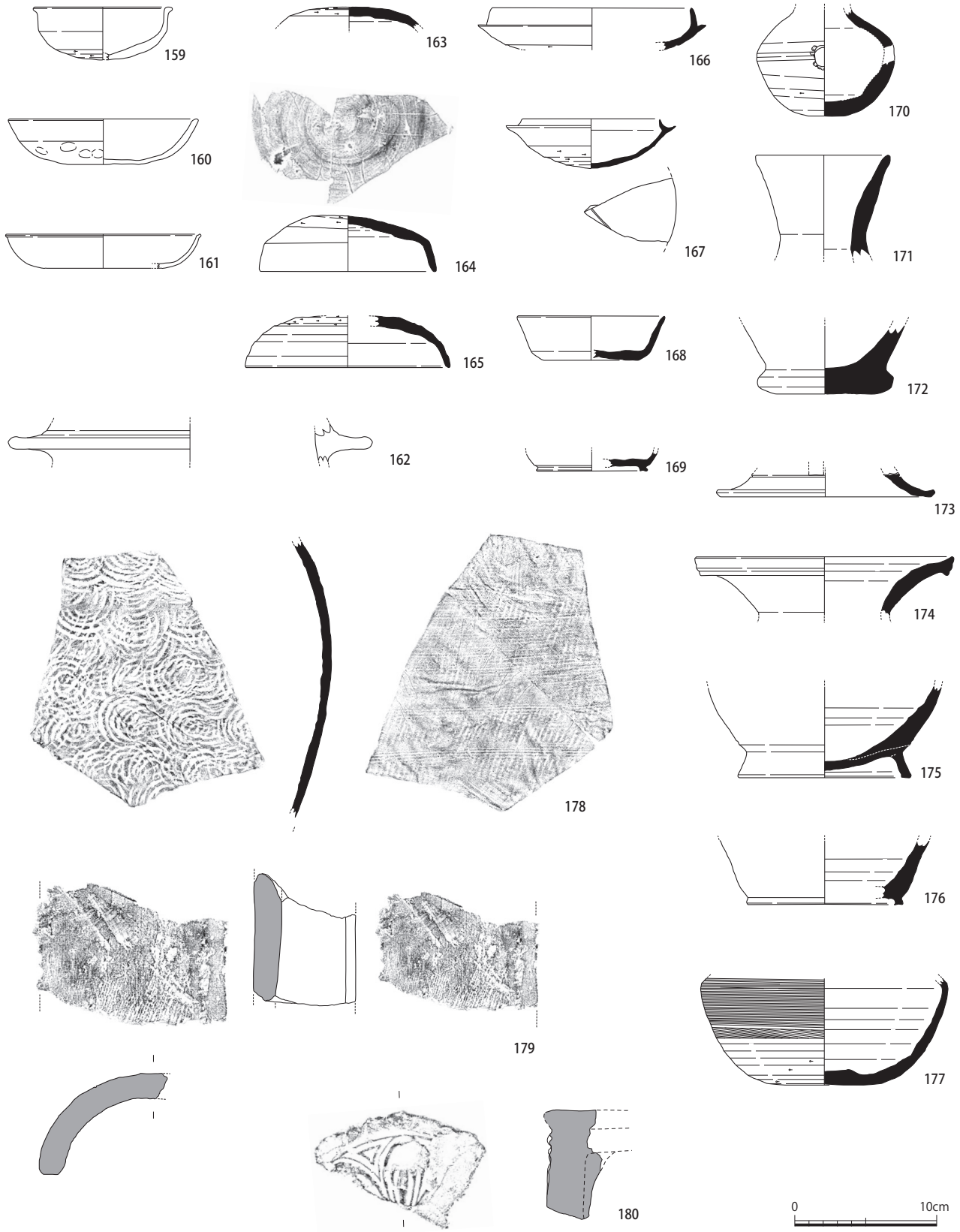


図28　NR1246出土土師器・須恵器・瓦　1：4

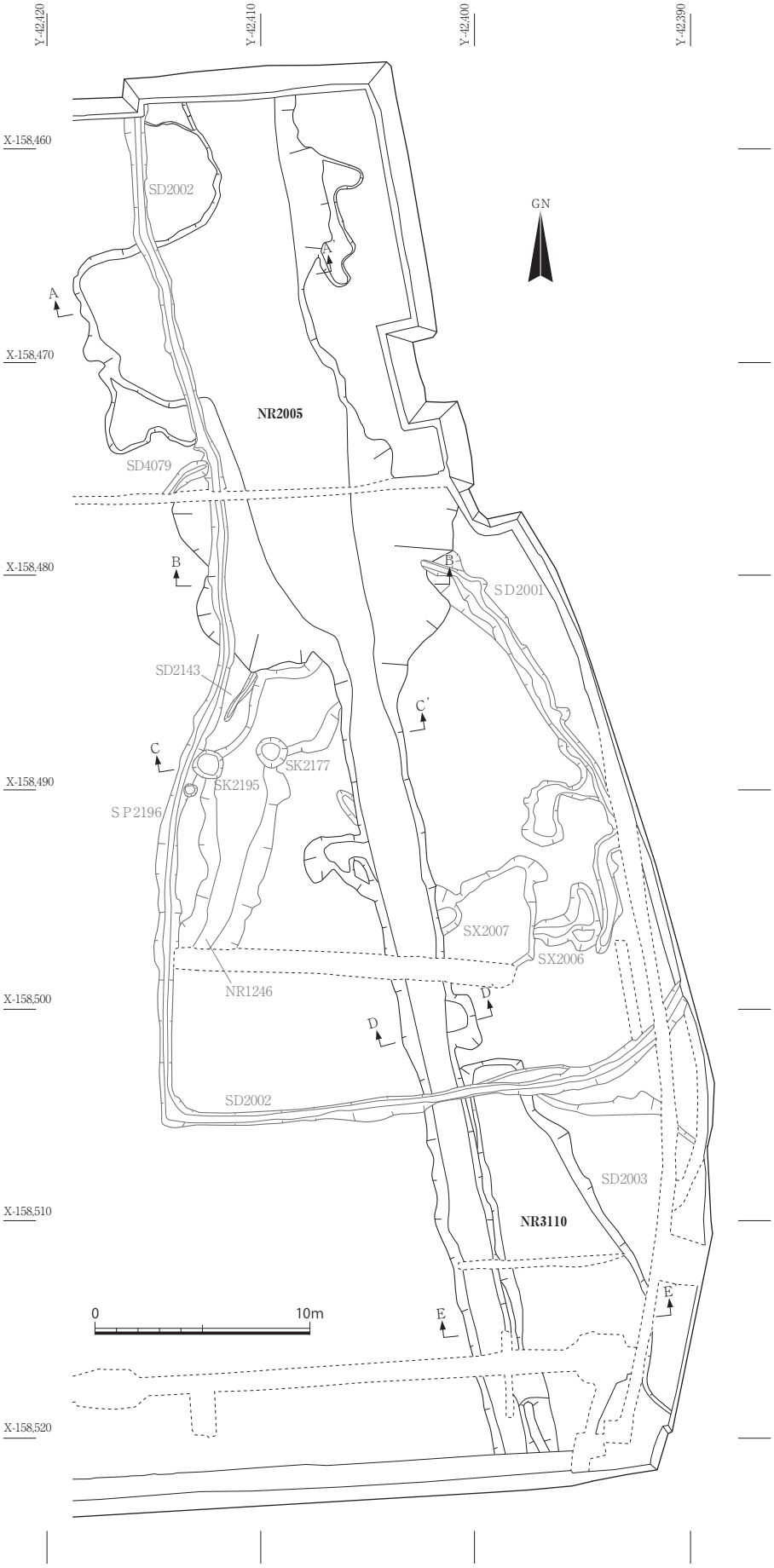
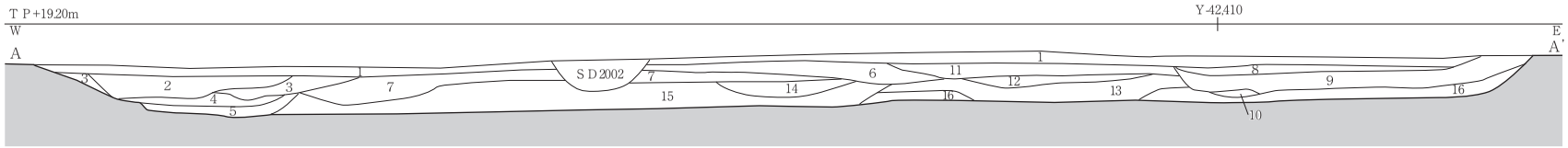
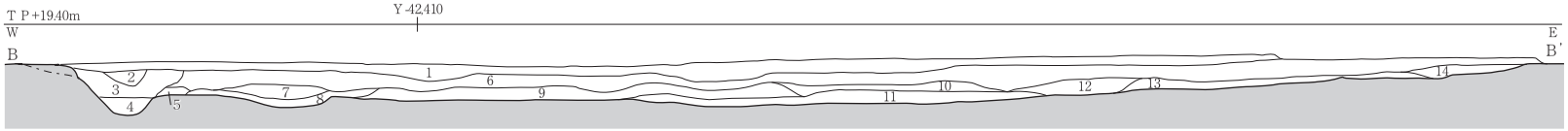


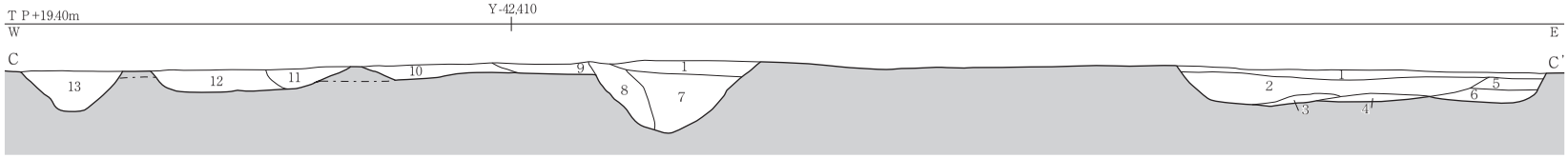
図29　NR2005・3110遺構図　1：300



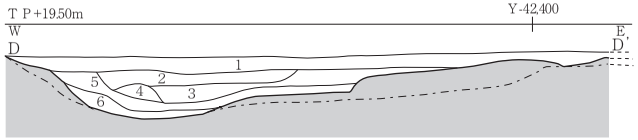
1：黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質シルト
2：褐灰色 (10YR4/1) 粘質シルト
3：黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質シルト
4：灰色 (5Y6/1) 粗砂
5：黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト
（明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘土ブロック混じる）
6：灰色 (5Y6/1) 微砂混じり粘質シルト
7：灰色 (7.5Y6/1) 粗砂混じり粘質シルト
8：灰色 (5Y5/1) 粗砂（ラミナあり）
9：灰色 (5Y4/1) 微砂混じり粘質シルト
10：灰オリーブ色 (5Y4/2) 粗砂
11：灰色 (7.5Y4/1) 微砂混じり粘質シルト
12：灰色 (5Y6/1) 微砂～粘質シルト
13：黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂
14：黄灰色 (2.5Y5/1) 微砂混じり粘質シルト
15：灰白色 (5Y7/1) 微砂～粗砂
16：灰色 (5Y5/1) 微砂～粗砂



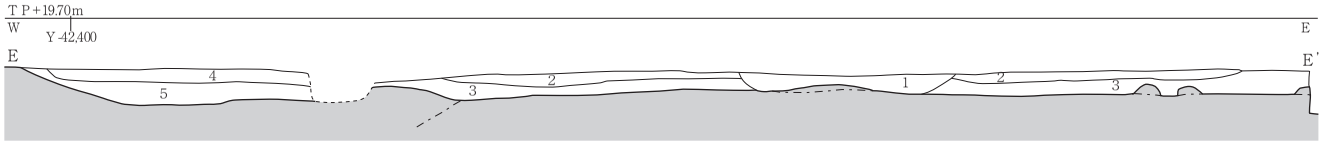
1：灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘質シルト
2：灰色 (7.5Y5/1) 粘質シルト (SD2002)
3：灰色 (5Y5/1) 粘質シルト (SD2002)
4：灰色 (5Y6/1) 粗砂混じり粘質シルト
(にぶい黄橙色 (10YR7/4) 粘土ブロックが混じる)(SD2002)
5：灰白色 (2.5Y7/1) 粘質シルト
6：暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質シルト
7：灰色 (5Y6/1) 粘質シルト
8：灰白色 (2.5Y8/1) 粗砂
9：灰色 (5Y6/1) 粗砂混じり粘質シルト
10：褐灰色 (10YR4/1) 粘質シルト
11：黄灰色 (2.5Y6/1) 微砂混じり粘質シルト
12：褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルト
13：灰白色 (2.5Y7/1) 粗砂
14：灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト



1：灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘質シルト
2：褐灰色 (10YR6/1) 粗砂混じり粘質シルト
3：灰白色 (5Y8/1) 粗砂
4：黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質シルト
5：黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質シルト
(明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂混じる)
6：黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト
7：黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト
(にぶい黄橙色 (10YR7/4) 粘土ブロックが混じる)(SK2177)
8：黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質シルト (SK2177)
9：灰色 (5Y6/1) 粘質シルト
10：灰白色 (5Y7/1) 粗砂
11：黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト
12：明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘土
(黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土)
13：灰色 (5Y5/1) 粘質シルト (SD2002)



1：灰色 (5Y5/1) 粗砂混じり粘質シルト
2：灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質シルト
3：褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルト
4：黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質シルト
5：褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質シルト
6：灰色 (5Y5/1) 粗砂混じり粘質シルト



1：灰色 (5Y6/1) 粗砂混じり粘土 (NR3110)
2：褐灰色 (10YR5/1) 粗砂混じり粘土 (NR3110)
3：黄灰色 (2.5Y6/1) 微砂混じり粘土 (NR3110)
4：褐灰色 (10YR5/1) 粗砂混じり粘土 (NR2005)
5：灰白色 (5Y7/1) 微砂～粗砂（ラミナあり）(NR2005)

0 2m

図30 NR2005・3110断面図 1：50

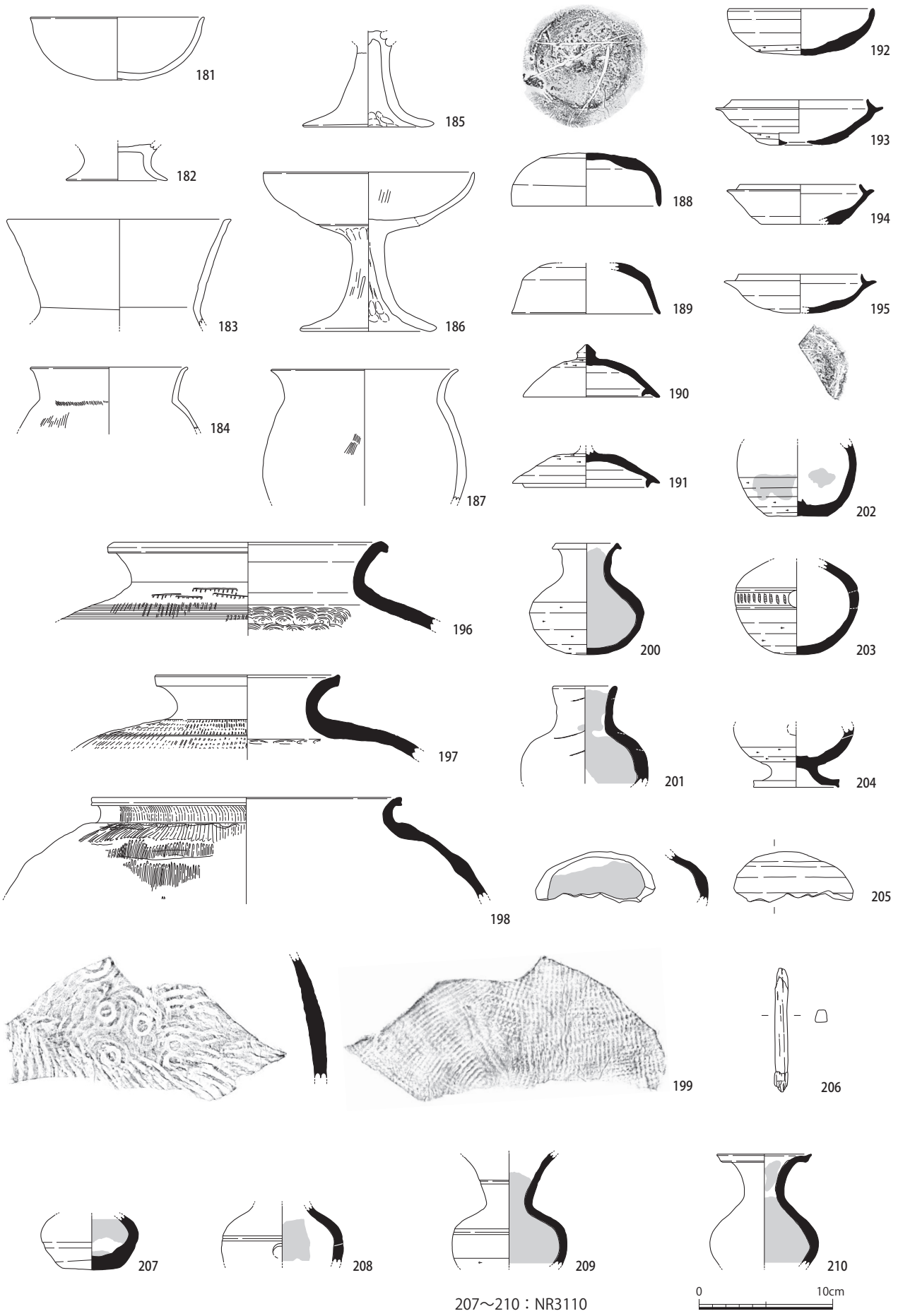


図31　NR2005・3110出土土師器・須恵器・木製品　1：4

cm、器高2.9cm。

196～199は甕。196は口縁部が外反し端部を外に折曲げる。体部外面は平行タタキ調整の後にカキメを施し、内面は同心円状当て具痕を残す。頚部に自然釉がかかる。復元口径41.0cm。197は口縁端部を面取する。復元口縁13.4cm。体部外面は平行タタキ痕が残り、頚部付近に沈線を１条巡らす。内面はナデ調整を施すが、一部ユビオサエ痕が残る。198は先の２個体に比べて頸が短い。外面は平行タタキを体部だけでなく頚部にまで施す。内面はナデ調整を施しており、無文当て具の可能性がある。復元口径22.4cm。

204は台付き甕。透かし孔より上を欠き、施文は不明。付着物は観察できなかった。

200～203・205の須恵器は、内外面に縮み皺のある茶褐～黒色の付着物があり漆容器と思われる。200～202は壺。200は口縁部を下方に拡張する。縦方向に半割りされており、破断面にも漆が付着している。201は粘土接合痕が残り、他個体と異なり回転ヘラケズリを施さず、焼成もあまい。横方向に半割りされている。外面の頚部付近にもわずかに漆が付着している。202は平底の底部で、横方向に半割されて頚部より上を欠く。内外面に漆が付着している。203は甕で、丸い体部。胴部中位に２条の沈線が巡りその間に列点文を施す。口縁部を打ち欠いており、内面に漆が付着している。205は打ち欠かれた体部の破片で、内部に漆が付着する。

木製品（206）は断面方形で、残存長9.1cm、幅0.9cm。先端が炭化しており、付け木と思われる。

NR3110（図29・30、図版４）　北区南東部（６Ｆ～Ｈ）で検出した南東－北西方向に延びる流路である。Ⅱ区部分はNR2005と一体の遺構として調査した。南側のⅠ区北東隅で流路の延長が確認できなかったことから、Ⅲ区の東南より流れ込んでいると思われる。検出長37m、幅12m、深さ0.2mで、堆積は粘土が主体である。

出土遺物は土師器と須恵器があり、そのうち飛鳥時代に帰属する須恵器の漆容器５点を図化した（図31）。207は小型の壺。平底気味の底部で、外面に回転ナデを施す。内面に漆が付着しており、口縁部を打ち欠く。208は甕で、胴部最大径付近に沈線を１条巡らす。口縁部と底部を打ち欠き漆を掻き出している。209・210は壺。209は頚部と胴部に１条ずつ沈線を巡らし、底部付近は回転ヘラケズリ調整を施す。210は口縁端部を上方につまみ上げる。復元口径7.２cm。横方向に半割りし、口縁部も一部打ち欠き漆を掻き出している。

第４項　柵・掘立柱塀（SA）

柵は北区で３基、南区で５基の合計８基を復元した。この内、SA２・７・８以外は、調査区端に位置しており、調査区外に展開し掘立柱建物を構成する可能性もある。今後隣接地を調査した際に再検討が必要である。

SA１（図32、図版５）　４～５Ｉで検出した東西方向の柱穴７基からなる柵又は塀である。北側は調査区外になるため、掘立柱建物となる可能性もある。柱間寸法は1.5～2.0m、深さ0.18～0.34mを測る。遺物はSP1084から土師器の破片が出土している。

SA２（図33）　６Ｋで検出した「Ｌ」字状を呈する柵である。東西方向は１間、南北方向は２間を検出した。柱間寸法は1.8mである。SD1011を切る。深さはSP1027のみ0.10mと浅いが、他は0.22～0.24mを測る。遺物は出土していない。

SA３（図34）　１Ｌで検出した南北方向の柱穴３基からなる柵である。西側は調査区外になるため、建物の一部となる可能性もある。柱間寸法は平均2.36m、深さはSP1166が0.46mを測る。SP1162は上面を撹乱されており、SP1237は壁面でのみ確認した遺構であり、本来の深さは不明である。遺物は出土していない。

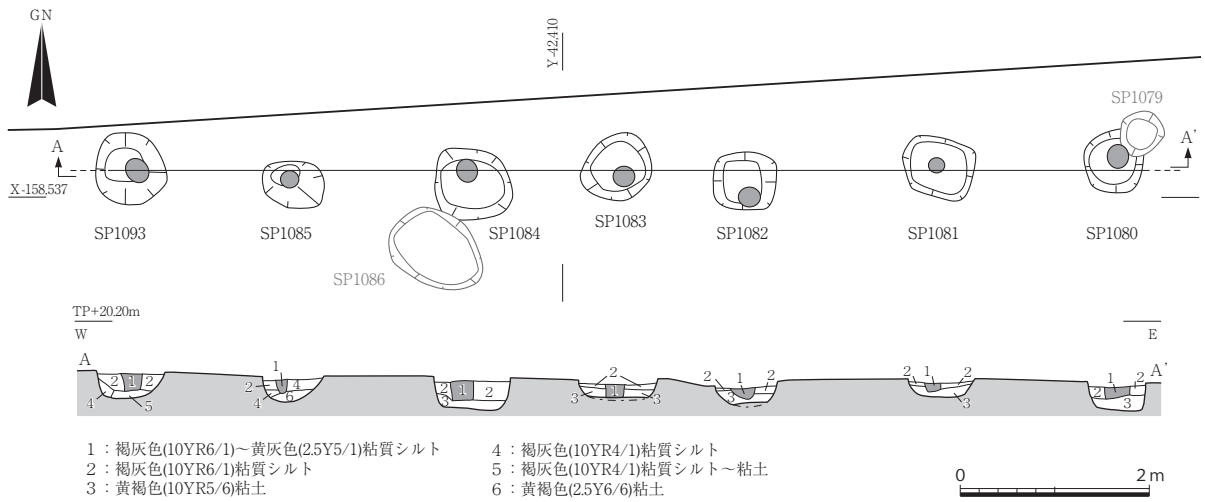
SA４（図35）　３J～Kで検出した南北方向の柱穴３基からなる柵である。柱間寸法は平均1.40m西側及び南側は調査区外になるため、建物の一部となる可能性もある。遺物はSP1252から須恵器の破片が出土している。

SA５（図36）　２Ｂで検出した南北方向の柱穴３基からなる柵である。北及び西側は調査区外になるため、建物の一部となる可能性もある。柱間寸法はSP4006・4007間が1.2m、SP4007・4011間が2.4mを測る。柱穴の深さは0.33～0.45mを測る。柱穴の平面形態はSP4011が楕円形、4006・4007は隅丸方形状を呈する。遺物はSP4011から土師器の破片が出土している。

SA６（図37）　１Ｋで検出した東西方向の柱穴２基からなる柵である。北側・西側が調査区外になるため、掘立柱建物の可能性もある。柱間寸法は2.7m、深さはSP1153が0.42m、SP1156が0.35mである。遺物は出土していない。

SA７（図38）　６Ｋで検出した南北方向の柱穴３基からなる柵である。柱間寸法は1.9mと2.6mである。柱穴規模は直径0.3～0.4mと共通する。深さはSP1225が0.17mと浅い。SB２の0.9～1.2m東に位置し、建物とは主軸が異なるため、別時期と考える。遺物は出土していない。

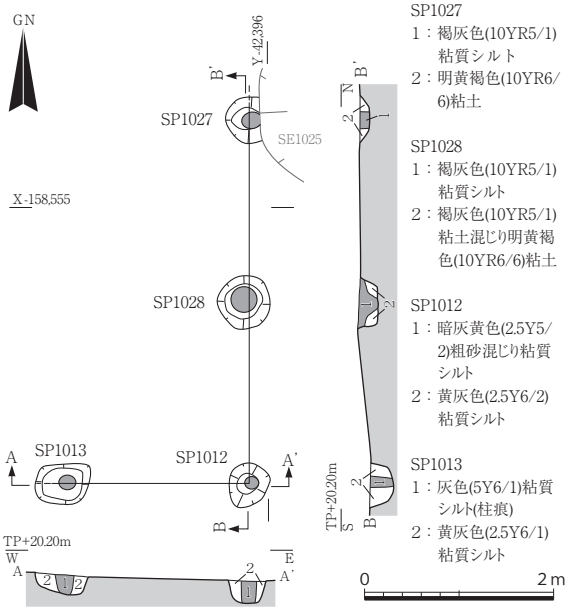
SA８（図39）　３Ｇ～Ｈで検出した南北方向の柱穴３基からなる柵である。柱間寸法が4.3～4.4mと著しく



1：褐灰色(10YR6/1)～黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
2：褐灰色(10YR6/1)粘質シルト
3：黄褐色(10YR5/6)粘土
4：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
5：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト～粘土
6：黄褐色(2.5Y6/6)粘土

0　2m

図32　SA１遺構図・断面図　１：80



SP1027
1：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
2：明黄褐色(10YR6/6)粘土

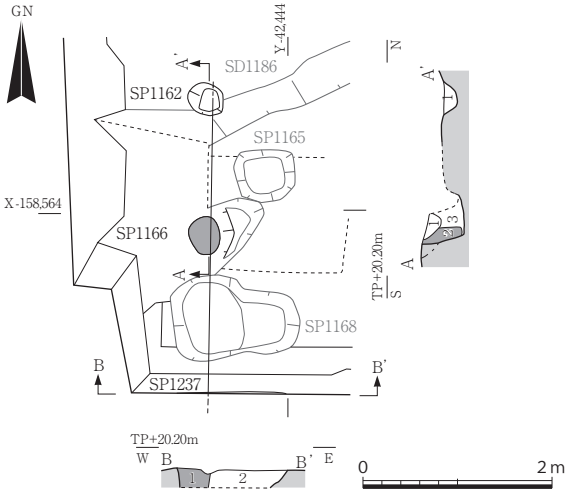
SP1028
1：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
2：褐灰色(10YR5/1)粘土混じり明黄褐色(10YR6/6)粘土

SP1012
1：暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂混じり粘質シルト
2：黄灰色(2.5Y6/2)粘質シルト

SP1013
1：灰色(5Y6/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルト

0　2m

図33　SA２遺構図・断面図　１：80



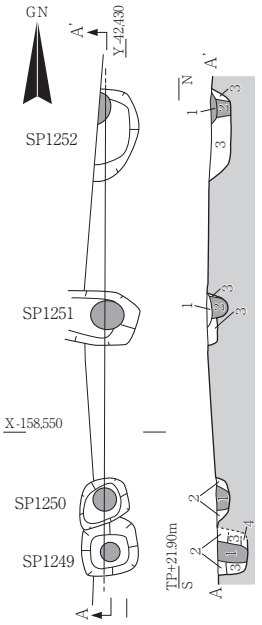
SP1162
1：灰色(5Y5/1)粘土

SP1237
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘土と明黄褐色(2.5Y7/6)粘土が混じる(柱痕)
2：灰黄褐色(10YR4/2)粘土と明黄褐色(2.5Y7/6)粘土が混じる(掘方)

SP1166
1：灰白色(N8/0)粘土
2：明黄褐色(10YR7/6)、黄灰色(2.5Y6/1)、暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土がブロック状に混じる。
3：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土ブロック混じり明黄褐色(10YR7/6)粘土

0　2m

図34　SA３遺構図・断面図　１：80



SP1252
1：明黄褐色(10YR7/6)粘土(柱痕)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土ブロック混じり褐灰色(7.5YR6/1)粘土(柱痕)
3：黒褐色(7.5YR3/1)粘土

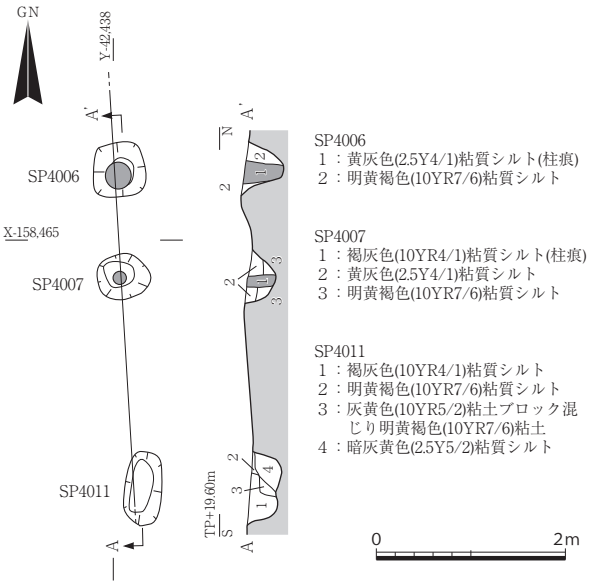
SP1251
1：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土
2：灰白色(2.5Y7/1)粘土(柱痕)
3：明黄褐色(10YR6/6)粘土

SP1250
1：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土ブロック混じり灰色(5Y6/1)粘土(柱痕)
2：灰白色(5Y7/1)粘土

SP1249
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘土混じり褐色(10YR4/4)粘土(柱痕)
2：灰黄褐色(10YR4/2)粘土
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘土混じり褐色(10YR4/4)粘土
4：灰色(5Y5/1)粘土

0　2m

図35　SA４遺構図・断面図　１：80



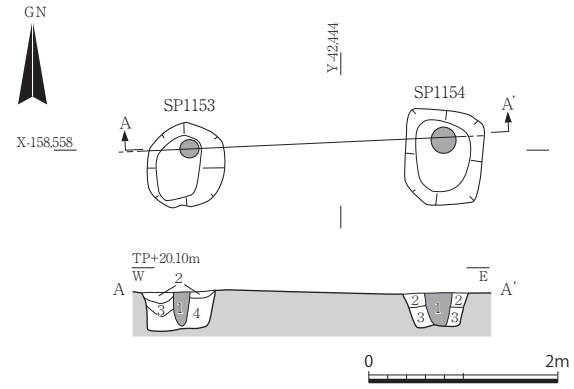
SP4006
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：明黄褐色(10YR7/6)粘質シルト

SP4007
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
3：明黄褐色(10YR7/6)粘質シルト

SP4011
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
2：明黄褐色(10YR7/6)粘質シルト
3：灰黄色(10YR5/2)粘土ブロック混じり明黄褐色(10YR7/6)粘土
4：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト

0　2m

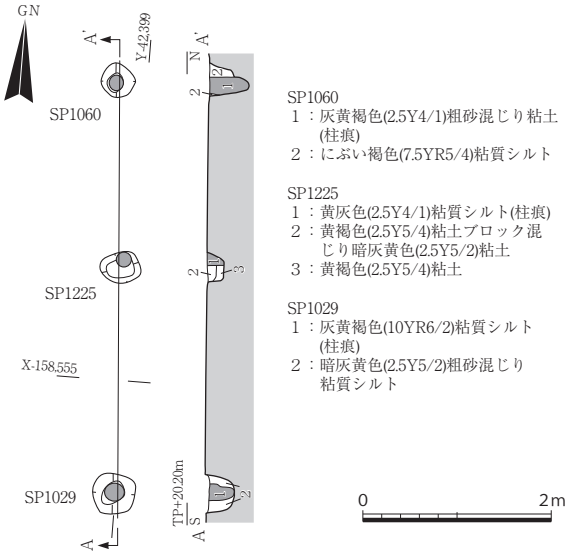
図36　SA５遺構図・断面図　１：80



SP1153
1：灰オリーブ色(5Y6/2)粘土(柱痕)
2：黄褐色(2.5Y3/4)粘土
3：オリーブ色(5Y6/6)粘土
4：黄褐色(2.5Y6/1)粘土ブロック混じり明黄褐色(10YR6/6)

SP1154
1：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルト(柱痕)
2：黄褐色(10YR5/6)粘土
3：灰白色(2.5Y7/1)粘土

図37　SA６遺構図・断面図　1：80

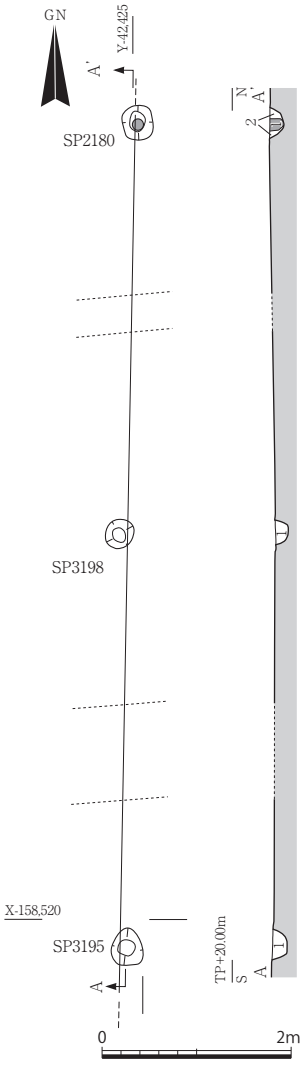


SP1060
1：灰黄褐色(2.5Y4/1)粗砂混じり粘土(柱痕)
2：にぶい褐色(7.5YR5/4)粘質シルト

SP1225
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄褐色(2.5Y5/4)粘土ブロック混じり暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土
3：黄褐色(2.5Y5/4)粘土

SP1029
1：灰黄褐色(10YR6/2)粘質シルト(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂混じり粘質シルト

図38　SA７遺構図・断面図　1：80



SP2180
1：灰色 (5Y6/1) 粘土 (柱痕)
2：暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土
SP3198
1：黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土
SP3195
1：灰色 (5Y5/1) 粘質シルト

図39　SA８遺構図・断面図　1：80

表２　柵・掘立柱塀一覧

遺構番号	間数	総長(m)	柱間寸法平均(m)	主軸(座標北)	柱穴形状	柱穴長径(m) 最小	柱穴長径(m) 最大	柱穴長径平均(m)	柱穴深度(m) 最小	柱穴深度(m) 最大	柱痕径最大(m)
SA1	6	10.35	1.72	E-0°00′-N	方形	0.60	0.80	0.71	0.18	0.34	0.27
SA2	2×1	5.80	1.93	N-0°00′-W	円形	0.45	0.55	0.50	0.10	0.24	0.18
SA3	(1)	(3.10)	1.40	N-0°00′-W	円形+方形	0.40	1.30	0.87	0.46	0.46	0.18
SA4	(2)	(4.70)	2.36	N-0°00′-W	方形	0.60	(0.90)	-	0.21	0.32	0.20
SA5	2	3.34	1.66	N-3°30′-W	方形	0.55	0.80	0.63	0.33	0.45	0.23
SA6	(1)	(2.68)	-	W-2°37′-N	方形	0.80	0.90	0.85	0.35	0.42	0.24
SA7	2	4.34	2.16	N-3°42′-E	円形	0.30	0.40	0.37	0.17	0.30	0.19
SA8	(2)	(8.71)	4.35	N-1°00′-E	円形	0.30	0.40	0.35	0.14	0.16	0.12

総長及び間数のうち（　）で囲われたものは検出長を示す。

広いが、直径0.3m程度で、深さ0.14～0.25ｃｍと類似する規模の柱穴が南北に並んでおり、柵として報告する。SB４とSB10の間に位置しており、柵の軸が平行ではないが、何らかの関連を有する可能性も考えられる。遺物は出土していない。

第５項　掘立柱建物（SB）

掘立柱建物は19棟を復元した（表３）。南区で６棟、北区で13棟である。柱穴の平面形状はいずれも円形～隅丸方形を呈し、断面形状は「U」字状を呈する。建物主軸はSB１～８・10～13・19が正方位で、真北からの振れも1°以内である。SB３～７・10は柱穴の規模が大きく、その他は比較的小ぶりである。これらは、長舎SB３～６を中心に官衙施設を構成したと考える。

なお、柱穴の間隔は、柱痕跡が確認できている場合は柱痕跡の芯々間距離を、確認できていない場合は柱穴の芯々間距離である。

SB１（図42、図版５）　５Ｊで検出した12基の柱穴から成る南北３間×東西２間、平面積26.4㎡の総柱建物である。建物の主軸が正方位で、桁行の柱間寸法2.27±0.17m。柱穴は辺長0.55m～1.10mの方形で、柱穴の深さは0.22～0.34mを測り、0.28m前後が多い。遺物はSP1049・1069から土師器の破片が出土している。

SB２（図43、図版５）　５Ｋで検出した南北４間×東西２間、平面積31.0㎡の総柱建物である。SB１の南側にほぼ柱筋を揃えて建てられる。SB１との間は芯々距離で2.3～2.5mである。桁行の柱間寸法1.98±0.16m。柱穴の深さは0.22～0.48mを測り、0.35m前後が多い。南端のSP1010がSD1011を切ることから、SD1011の埋没以後に建築されたことがわかる。遺物はSP1033・1039・1042・1043から土師器の破片が出土している。211はSP1033より出土した土師器壺。口縁端部を面取し、ハケメ調整をナデ消す。復元口径17.8㎝。

SB１・２はともに総柱建物で倉庫と考える。SB２が東に0.9m程ずれるが、並んで建つ。建物の西側はSD1022までの間に顕著な遺構を検出しておらず、広場の可能性がある。なお、SB１とSB５の距離は15mでおよそ50尺となる。

SB３（図44、巻頭図版３、図版８）　２～３Ｆで検出した東西６間以上×南北１間の東西方向の掘立柱建物で長舎と考える。西端は調査区外に続くと考えられる。梁行総長3.03m、桁行の柱間寸法2.15±0.05m、柱穴の深さは0.2～0.6mを測る。2076・2084は浅いが、その他は0.4～0.6mと深めである。SP2202［3087］から土師器高杯（図49－212）が出土している。柱穴半裁部分では抜き取り痕が観察できなかったため、掘方の掘削時期を示す可能性が高い。よって、８世紀後半にこの建物が建築されたと考える。

遺物はSP2076・2168・2202から土師器・須恵器、SP2171から須恵器の破片がそれぞれ出土している。SP2002［3087］出土の土師器高杯（212）は、脚柱部外面に12面の面取りを施している。内面にはシボリ目とユビオサエ痕が残る。杯部の見込みへのヘラミガキ・暗文については摩滅が激しく不明である。難波Ｖ中段階に比定できる。213はSP2171出土の須恵器杯H蓋で、回転ヘラケズリを施す平坦な天井部を持ち、口縁部との境に凹線が巡る。復元口径12.7㎝、器高3.5㎝。

SB４－Ⅰ（図45、巻頭図版３、図版８）　３Ｆ～Ｇで検出した南北７間以上×東西２間の掘立柱建物で長舎と考える。南端は調査区外に続く。梁行総長3.04m、桁行の柱間寸法2.11±0.18m、柱穴の深さは0.23～0.55mを測る。柱穴の重複が認められ、建替え（SB４－Ⅱ）が１回おこなわれている。SB５とつながり一棟となるかは不明である。

遺物はSP2155・2167から土師器・須恵器、SP2179・3174から須恵器、SP3178から土師器の破片が出土している。

SB４－Ⅱ（図46、巻頭図版３、図版８）　３Ｆ～Ｇで検出した南北７間以上×東西２間の掘立柱建物で長舎と考える。南端は調査区外に続く。梁行総長3.27m、桁行の柱間寸法2.15±0.13m、柱穴の深さは0.21～0.50mを測る。他の長舎と比べると柱穴深度が幾分浅い。SB４－Ⅰを南に１m程ずらして建替えている。南区のSB５と同一建物として復元した場合、建て替え前のⅠよりも柱の通りが良い。SB３・５・６と同一時期に建てられた長舎とすると８世紀後半の帰属となる。

遺物はSP3177・3186から土師器、SP3175から土師器と須恵器、SP2162から須恵器の破片がそれぞれ出土している。SP2162から出土した甕（214）の胴部は外面に格子目タタキ痕、内面に同心円状当て具痕が残る。

SB５（図47、巻頭図版２、図版６）　３Ⅰ～Ｋで検出した南北11間（21.32m）以上×東西２間（3.02m）の掘立柱建物で長舎と考える。北側は調査区外に続く。梁行総長3.02mを測り、桁行の柱間寸法2.13±0.21mである。柱穴の深さは0.19～0.65mで、概ね0.47m前後が多い。南端のSP1209とSB６北端のSP1211との距離は2.5～2.55mである。遺物は出土していないが、NR1246を切るため７世紀後半以降に建てられたことは確実である。また、後述するSK1205出土の土師器高杯（365）より８世紀末～９世紀初頭には廃絶したと考える。

表３　掘立柱建物一覧

遺構番号	平面形式	平面積(m2)	桁行間数	桁行総長(m)	柱間寸法平均(m)	偏差	レンジ	梁行間数	梁行総長(m)	柱間寸法平均(m)	レンジ	主軸(座標北)	柱穴総数	柱穴形状	柱穴長径(m)		柱穴長径平均(m)	柱穴長径偏差	柱穴短径(m)		柱穴深度(m)		柱痕最大径(m)
															最小	最大			最小	最大	最小	最大	
SB1	総柱建物	26.4	3	6.77	2.27	0.17	0.57	2	3.90	1.93	0.71	N-0°00′-W	12	方形	0.60	1.10	0.81	0.12	0.55	0.85	0.22	0.34	0.28
SB2	総柱建物	31.0	4	8.37	1.98	0.16	0.58	2	3.70	1.82	0.12	N-0°54′-W	15	方形+円形	0.55	0.90	0.78	0.09	0.45	0.75	0.22	0.48	0.29
SB3	側柱建物/無廂	(38.9)	(6)	(12.83)	2.15	0.05	0.15	1	3.03	-	-	E-0°18′-N	14	方形	0.90	1.20	0.98	0.09	0.55	0.95	0.20	0.60	0.35
SB4-Ⅰ	側柱建物/無廂	(45.4)	(7)	(14.92)	2.11	0.18	0.59	2	3.04	1.52	0.10	N-0°18′-W	15	方形	0.60	1.00	0.78	0.10	0.50	0.80	0.23	0.55	0.35
SB4-Ⅱ	側柱建物/無廂	(42.3)	(6)	(12.95)	2.15	0.13	0.41	2	3.27	1.64	0.07	N-0°18′-W	15	方形	0.40	1.00	0.78	0.14	0.40	0.80	0.21	0.55	0.37
SB5	側柱建物/無廂	(64.4)	(10)	(21.32)	2.13	0.21	0.92	2	3.02	1.51	0.42	N-0°18′-W	23	方形	0.60	1.20	0.87	0.16	0.50	1.00	0.19	0.65	0.35
SB6	側柱建物/無廂	(83.8)	(12)	(25.23)	2.12	0.17	0.83	2	3.32	1.66	0.20	E-0°18′-N	26	方形	0.60	1.30	0.87	0.18	0.50	1.05	0.28	0.72	0.26
SB7	総柱建物	(16.4)	3	7.72	2.59	0.09	0.30	(2)	(2.13)	-	-	N-0°00′-W	12	方形	0.70	1.20	0.94	0.13	0.50	1.00	0.29	0.73	0.23
SB8	側柱建物/無廂	36.6	6	9.71	1.62	0.10	0.34	2	3.77	1.89	0.09	N-0°00′-W	15	方形+円形	0.45	0.80	0.60	0.09	0.40	0.80	0.05	0.59	0.22
SB9	側柱建物/無廂	24.6	3	6.72	2.19	0.11	0.32	2	3.58	1.76	0.41	N-3°42′-W	10	方形	0.45	0.80	0.62	0.11	0.45	0.65	0.22	0.53	0.28
SB10	側柱建物/片廂	54.9	4	11.63	2.89	0.32	0.43	2	4.72	2.36	0.00	N-0°24′-E	16	方形	0.60	1.50	1.12	0.24	0.60	1.40	0.52	0.96	0.37
SB11	側柱建物/不明	-	-	-	-	-	-	1	2.21	-	-	N-0°00′-W	2	不定形	1.20	1.40	-	-	1.05	1.10	0.60	0.64	0.38
SB12	床束建物/無廂	29.9	3	6.65	2.19	0.30	0.98	2	4.50	1.50	0.37	N-0°30′-W	17	方形+円形	0.50	1.00	0.67	0.12	0.50	0.80	0.18	0.56	0.38
SB13	側柱建物/片廂	(21.2)	(3)	(6.41)	1.60	0.43	0.42	2	3.30	1.66	0.34	N-0°00′-W	11	円形	0.70	1.05	0.80	0.12	0.65	0.80	0.26	0.55	0.24
SB14	側柱建物/無廂	4.0	2	3.42	1.68	0.15	0.43	2	2.42	1.18	0.27	N-4°06′-E	8	円形	0.55	1.00	0.70	0.16	0.35	0.90	0.15	0.68	0.23
SB15	側柱建物/二面廂	23.4	3	5.85	1.92	0.20	0.66	2	4.00	1.98	0.05	N-1°18′-E	16	方形+円形	0.40	0.90	0.69	0.05	0.40	0.80	0.12	0.52	0.32
SB16	床束建物/無廂	-	-	-	-	-	-	2	3.18	1.59	0.00	E-12°42′-N	4	方形	0.70	0.90	0.81	0.07	0.50	0.90	0.17	0.65	0.38
SB17	床束建物/無廂	18.7	3	6.36	2.09	0.19	0.48	2	2.94	1.41	0.48	N-6°18′-W	9	円形	0.45	0.70	0.50	0.08	0.45	0.60	0.08	0.48	0.17
SB18	側柱建物/片廂	(5.8)	(1)	(1.52)	1.49	-	-	2	3.80	1.90	0.18	N-2°36′-E	7	円形	0.50	0.60	0.55	0.05	0.40	0.60	0.14	0.36	-
SB19	側柱建物/無廂	(4.8)	(1)	(1.49)	-	-	-	2	3.25	1.63	0.21	N-0°00′-W	4	円形	0.60	0.70	0.62	0.04	0.45	0.60	0.11	0.20	-

総長及び間数は身舎のみの数値である。また、（　）で囲われたものは検出長を示す。梁行寸法平均は建物角のみを対象としたため母数は２または４となるる。

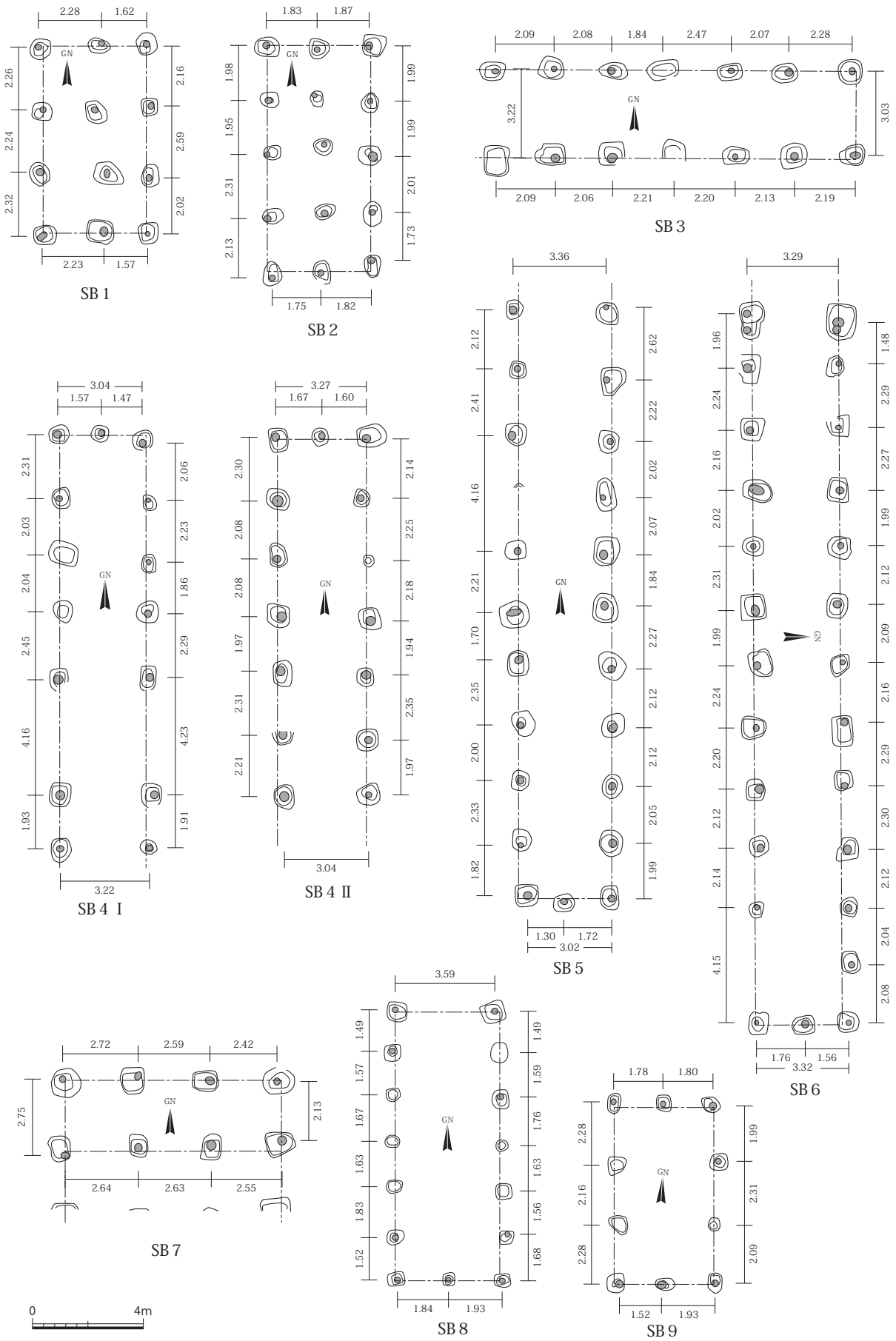
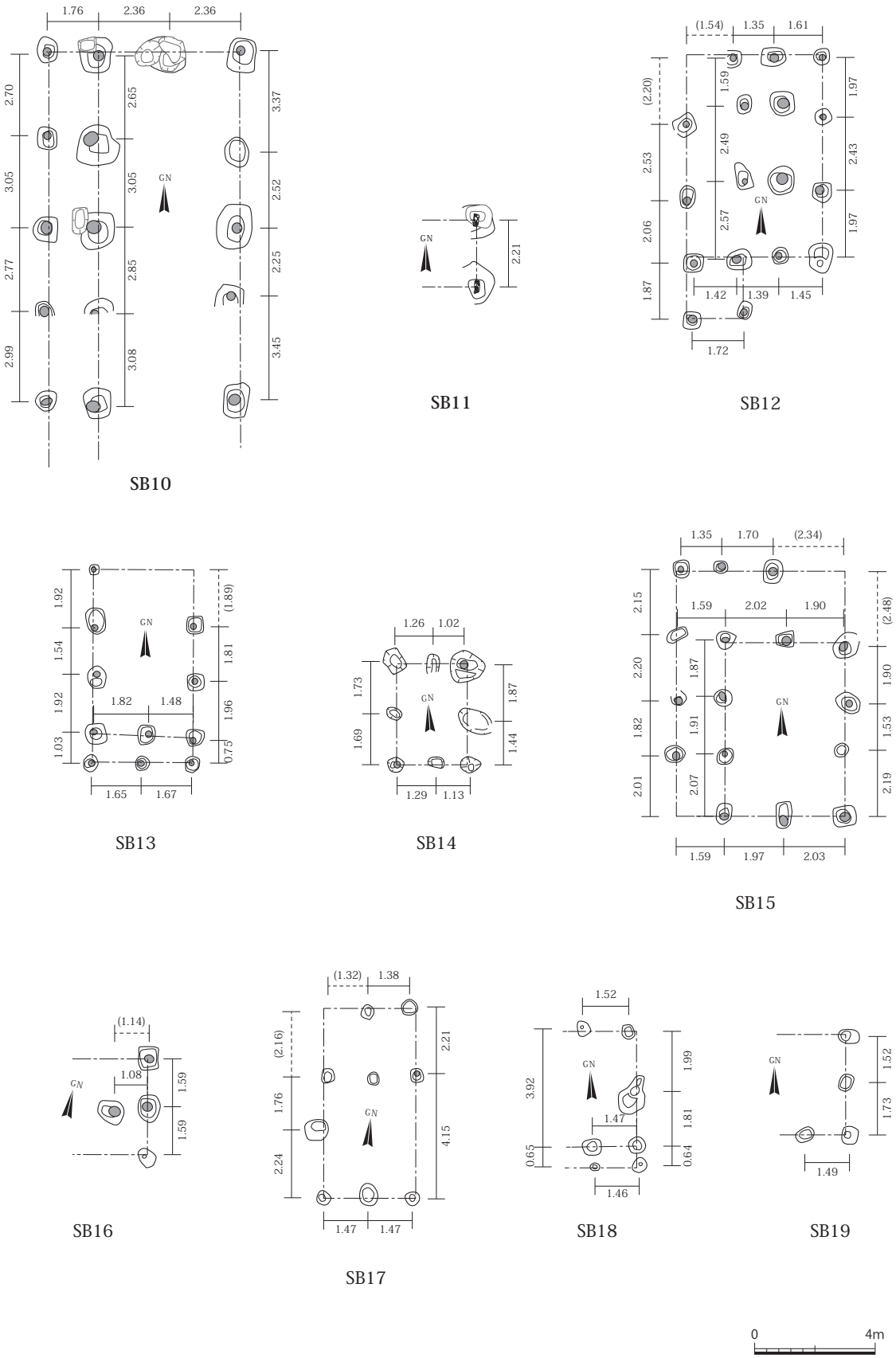
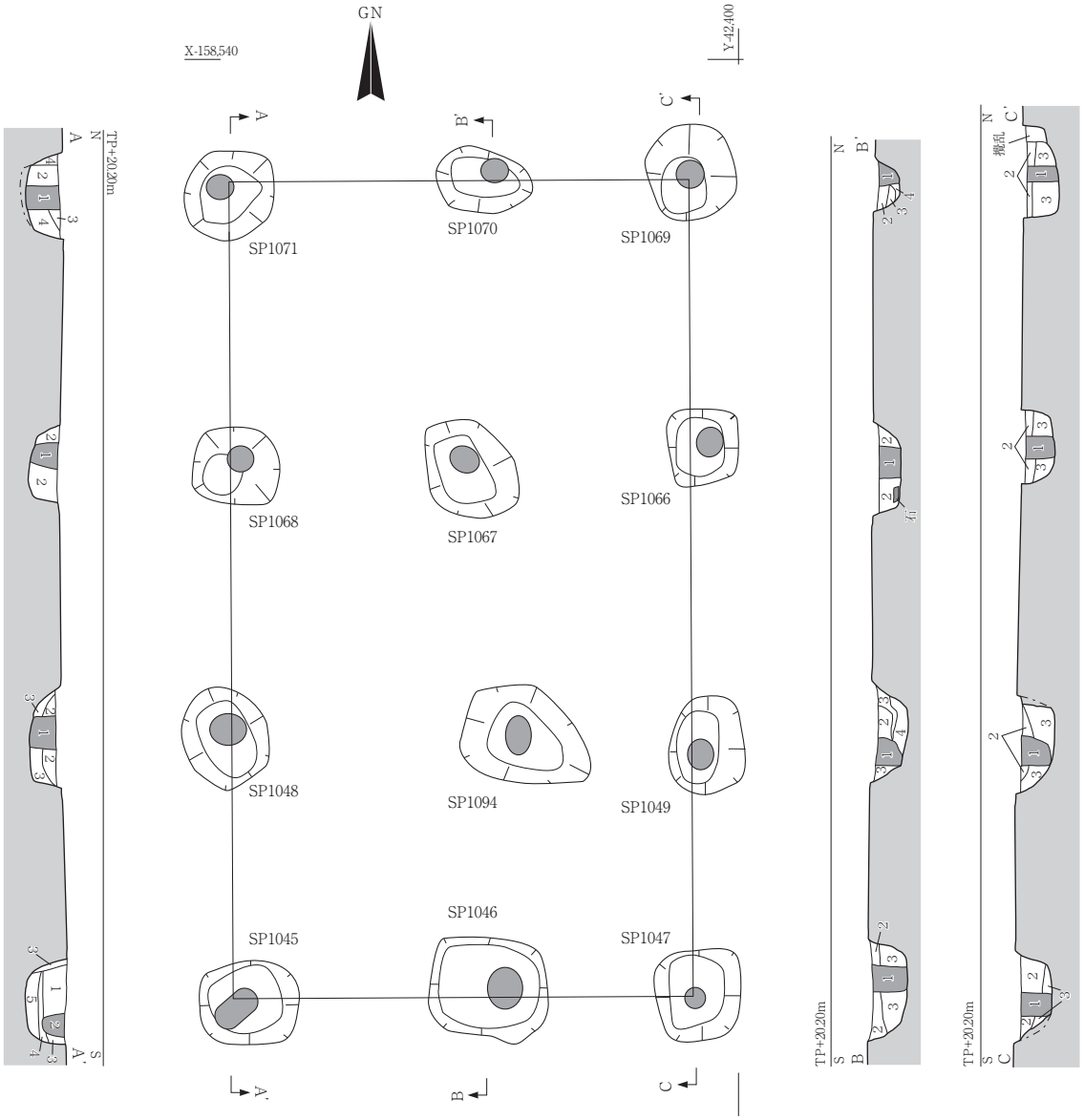


図40　掘立柱建物集成（1）　1：200



（注）
単位は全てｍで表記。
柱痕の芯々距離を図上で計測。柱痕が確認されていない場合は柱穴の芯から計測。
柱穴が確認できなかった箇所については、隣接する柱穴を利用して計測。（　）で表記。

図41　掘立柱建物集成（２）　１：200



SP1071
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
3：黒褐色(10YR3/1)粘質シルト
4：褐灰色(7.5YR4/1)粗砂混じり粘質シルト

SP1068
1：黒褐色(10YR3/2)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
(1・2ともに明黄褐色(10YR6/6)粘土がブロック状に混じる)

SP1048
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト(柱痕)
2：灰色(5Y5/1)粘質シルト
3：灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト
(1～3ともに明黄褐色(10YR6/6)粘土がブロック状に混じる)

SP1045
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト
2：灰オリーブ色(5Y4/2)粘質シルト(柱痕)
3：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
4：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
(明黄褐色(10YR6/6)粘土混じる)
5：褐灰色(10YR6/1)粘土

SP1070
1：明黄褐色(10YR6/6)粘土(柱痕)
2：褐灰色(10YR6/1)粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂
4：明黄褐色(10YR6/6)粘土

SP1067
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルト(柱痕)
(明黄褐色(10YR6/6)粘土がブロック状に混じる)
2：灰黄色(2.5Y6/2)粗砂混じり粘質シルト
(明黄褐色(10YR6/6)粘土がブロック状に混じる)

SP1094
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト
3：明黄褐色(10YR6/6)粘質シルト
4：褐灰色(10YR5/1)粘土

SP1046
1：灰黄色(2.5Y6/2)粗砂混じり粘土(柱痕)
2：にぶい黄色(2.5Y6/3)粗砂混じり粘土
3：灰白色(10YR7/1)粘土

SP1069
1：にぶい黄色(10YR4/3)粘質シルト(柱痕)
黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルトが混じる
2：にぶい黄色(10YR4/3)粘質シルト
3：灰色(5Y4/1)粘質シルト

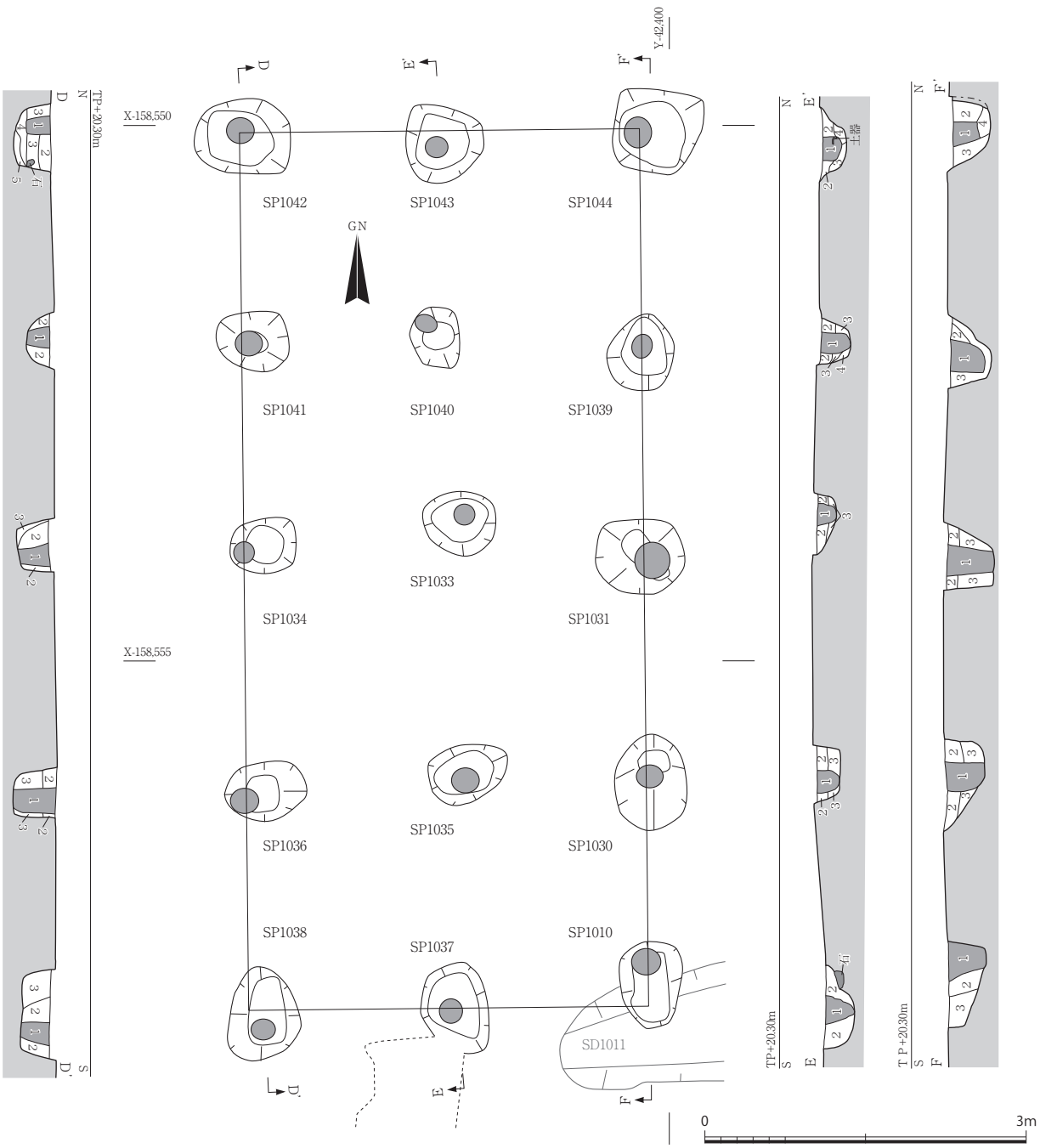
SP1066
1：にぶい黄色(10YR4/3)粘質シルト(柱痕)
黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルトが混じる
2：にぶい黄色(10YR4/3)粘質シルト
3：灰色(5Y4/1)粘質シルト

SP1049
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：にぶい黄色(2.5Y6/4)粗砂混じり粘質シルト
3：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト

SP1047
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト

0　3m

図42　SB１遺構図・断面図　１：60



SP1042
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト(柱痕)
2：灰オリーブ色(5Y4/2)粘質シルト
3：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
4：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土
5：黒褐色(10YR3/2)粘質シルト

SP1041
1：黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混じり粘土(柱痕)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土

SP1034
1：黄褐色(2.5Y5/4)粗砂混じり粘土(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混じり粘質シルト
3：にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土

SP1036
1：黄褐色(2.5Y5/3)粘土(柱痕)
2：灰色(5Y6/1)粗砂混じり粘土
3：黄灰色(2.5Y6/1)粗砂混じり粘土

SP1038
1：灰白色(2.5Y7/1)粗砂混じり粘質シルト(柱痕)
2：灰色(5Y5/1)粗砂混じり粘土
3：灰色(N6/0)粗砂混じり粘土

SP1043
1：灰色(5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
3：灰色(7.5Y5/1)粘質シルト
4：明黄褐色(10YR5/6)粘質シルト

SP1040
1：灰黄色(2.5Y6/2)粘土(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y6/1)粘土
3：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土
4：灰色(5Y5/1)粗砂混じり粘土

SP1033
1：灰黄色(2.5Y6/2)粗砂混じり粘土(柱痕)
2：黄褐色(2.5Y5/6)粗砂混じり粘土
3：灰色(5Y5/1)粗砂混じり粘土

SP1035
1：明黄褐色(2.5Y6/6)粘質シルト(柱痕)
2：にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土
3：にぶい黄色(2.5Y6/3)粗砂混じり粘土

SP1037
1：灰白色(2.5Y7/1)粘土と明黄褐色(10YR6/6)粘土がブロック状に混じる(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y6/1)粘土

SP1044
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰色(5Y4/1)粘質シルト
3：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
4：黄褐色(10YR5/6)粘土

SP1039
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト
3：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト

SP1031
1：黄灰色(2.5Y6/1)微砂混じり粘質シルト(柱痕)
2：灰黄褐色(10YR4/2)粗砂混じり粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(明黄褐色(10YR6/6)粘土がブロック状に混じる)

SP1030
1：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト
3：灰色(5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト

SP1010
1：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト
3：褐灰色(10YR4/1)微砂混じり粘質シルト

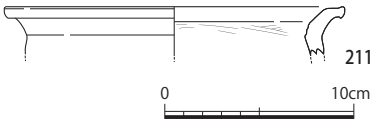
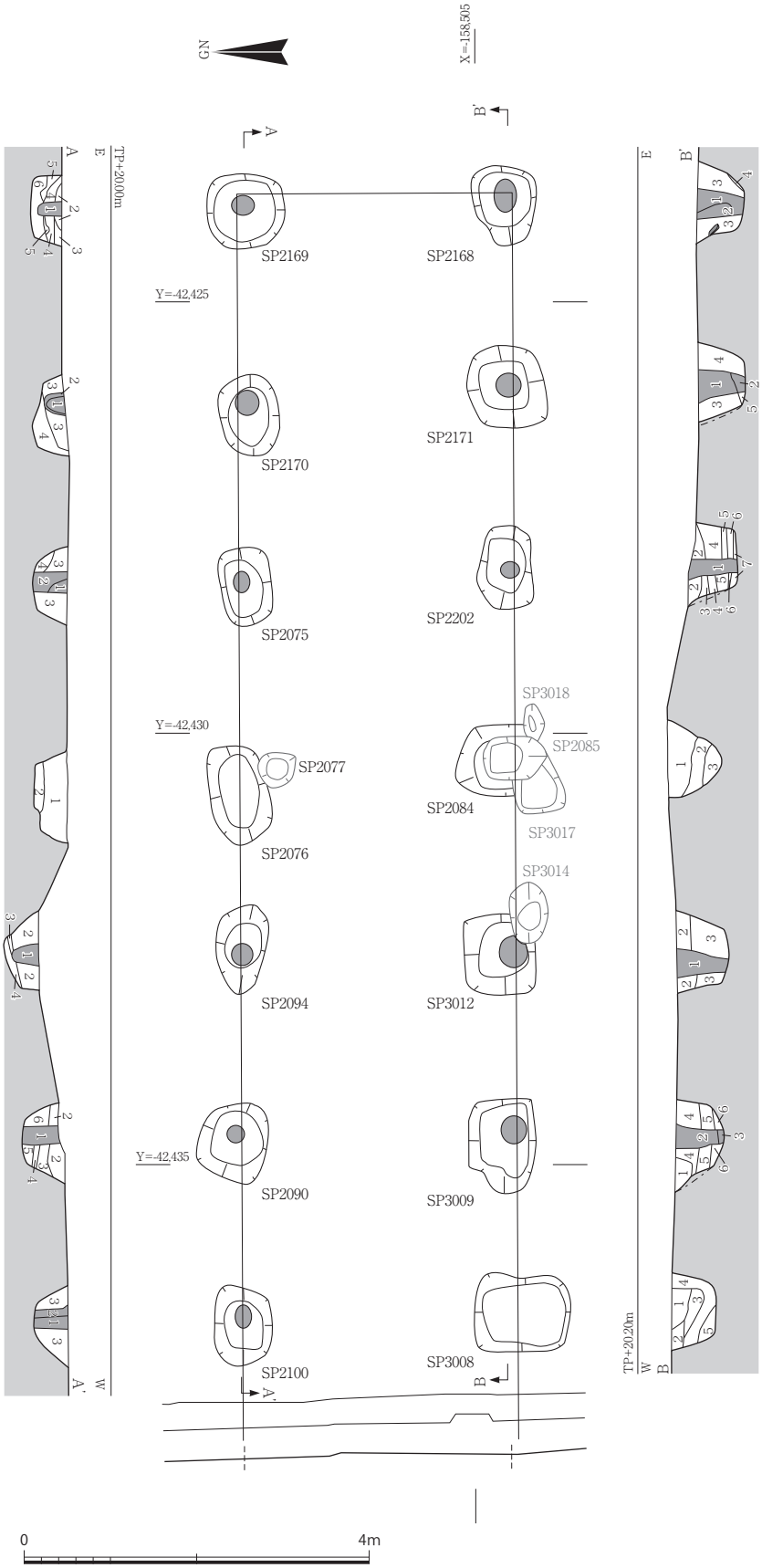


図43　SB２遺構図・断面図・出土土師器　１：60（出土土師器は１：４）



SP2169
1：灰色(5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：にぶい黄色(2.5Y6/3)粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルト
4：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
5：灰オリーブ色(5Y6/2)粘質シルト
6：灰色(5Y4/1)粘質シルト

SP2170
1：灰白色(2.5Y7/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰黄色(10YR4/2)粘質シルト(柱痕)
3：明黄褐色(10YR6/6)粘質シルト
4：灰色(5Y4/1)粗砂混じり粘質シルト

SP2075
1：暗褐黄色(2.5Y5/2)粘質シルト(柱痕)
2：灰白色(5Y8/1)粘質シルト(柱痕)
3：灰色(5Y4/1)粗砂混じり粘質シルト
4：灰オリーブ色(5Y4/2)粘質シルト

SP2076
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
2：にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土

SP2094
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト(柱痕)
(明黄褐色(10YR6/6)粘土のブロック混じる)
2：明黄褐色(10YR6/6)粘土
3：黒色(10YR2/1)粘土
4：黄褐色(2.5Y5/3)粘土

SP2090
1：灰黄色(2.5Y6/2)粘質シルト(柱痕)
2：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質シルト
(黄褐色(10YR5/6)粘土のブロック混じる)
3：明黄褐色(10YR6/6)粘土
4：褐色(10YR4/4)粘土
5：にぶい黄色(5Y6/4)粘土
6：黒褐色(10YR3/1)粘土

SP2100
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト(柱痕)
(褐色(10YR4/6)粘土のブロック混じる)
3：褐色(10YR4/4)粘土

SP2168
1：黒褐色(7.5YR3/1)粘質シルト(柱痕)
2：黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルト(柱痕)
(灰色(10Y6/1)粘土がブロック状に混じる)
3：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
4：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト

SP2171
1：黒褐色(10YR3/1)粘質シルト(柱痕)
2：明黄褐色(10YR6/6)粗砂混じり粘質シルト(柱痕)
3：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
(明黄褐色(2.5Y6/6)粘土のブロック混じる)
4：灰色(5Y5/1)粘質シルト
(灰オリーブ色(5Y5/2)粗砂混じる)
5：黄灰色(2.5Y4/1)粘土

SP2202
1：灰色(5Y6/1)粘土(柱痕)
2：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
(浅黄色(2.5Y7/4)粘質シルトのブロック混じる)
4：浅黄色(2.5Y7/4)粗砂混じり粘質シルト
5：黒褐色(10YR3/1)粘質シルト
6：明黄褐色(2.5Y7/6)粗砂混じり粘質シルト
7：黒色(5Y2/1)粘土

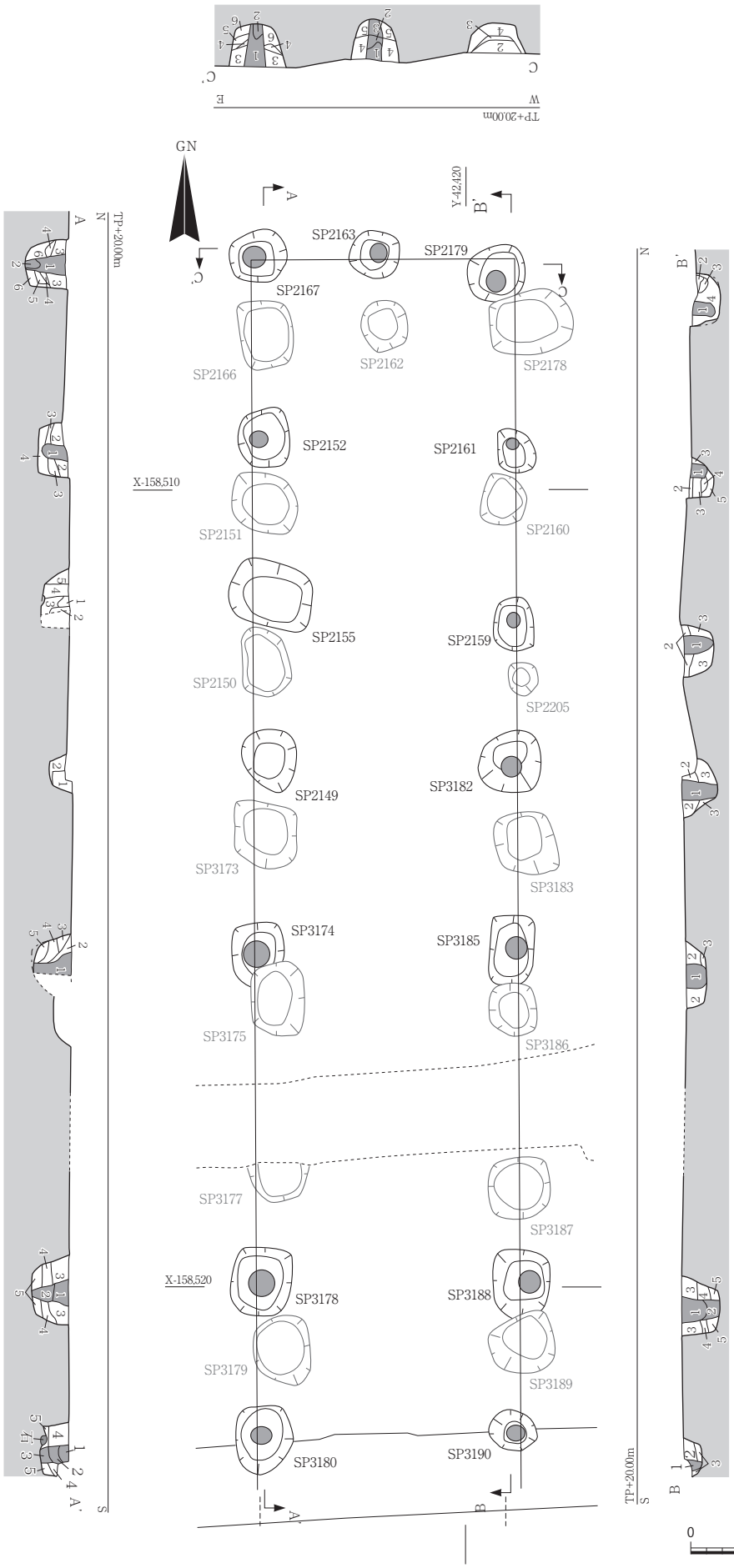
SP2084
1：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト
2：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
(明黄褐色(10YR7/6)粘土のブロック混じる)
3：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土

SP3012
1：黒褐色(10YR3/1)粘質シルト(柱痕)
(明黄褐色(10YR6/6)粘土と
灰白色(5Y8/1)粘土がブロック状に混じる)
2：褐灰色(7.5YR5/1)粘質シルト
3：明黄褐色(10YR6/6)粘土
(褐灰色(10YR4/1)粘土がブロック状に混じる)

SP3009
1：灰褐色(10YR4/1)粘質シルト
2：灰白色(2.5Y7/1)粘土(柱痕)
3：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土(柱痕)
4：明黄褐色(10YR6/6)粘土と
褐灰色(10YR4/1)粘質シルトが
ブロック状に混じる
5：黒褐色(10YR3/2)粘質シルト
6：明黄褐色(10YR6/6)粘土

SP3008
1：灰黄色(10YR5/2)粘質シルト
2：灰オリーブ色(5Y4/2)粘質シルト
3：明黄褐色(10YR6/6)粘土と
暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土がブロック状に混じる
4：灰褐色(10YR5/1)粘土と
明黄褐色(10YR7/6)粘土がブロック状に混じる
5：黒褐色(10YR3/2)粘土

図44　SB３遺構図・断面図　1：80



SP2167
1：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y6/1)粗砂混じり粘質シルト(柱痕)
3：灰色(5Y5/1)粘質シルト
4：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト
5：黄褐色(2.5Y5/4)粘質シルト
6：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト

SP2152
1：黄灰色(2.5Y6/2)粘質シルト(柱痕)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト
3：黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルト
4：明黄褐色(10YR6/6)粘土

SP2155
1：浅黄色(2.5Y7/3)粘土
2：明褐灰色(7.5YR7/1)粘質シルト
3：灰褐色(7.5YR3/2)粘質シルト
4：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
5：灰黄色(2.5Y7/2)粘土

SP2149
1：黒褐色(2.5Y3/1)粘質シルト
2：灰白色(2.5Y7/1)粘土

SP3174
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘土(柱痕)
2：灰色(5Y4/1)粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
4：灰白色(2.5Y7/1)粘土
5：褐灰色(7.5YR7/1)粘土

SP3178
1：灰白色(7.5Y7/1粘質シルト(柱痕)
2：灰色(5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
3：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
4：褐灰色(10YR6/1)粘質シルト
5：灰白色(2.5Y7/1)粗砂

SP3180
1：灰白色(2.5Y7/1)粘土(柱痕)
2：灰色(N7/0)粗砂混じり粘土(柱痕)
3：褐灰色(10YR6/1)粘土(柱痕)
4：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
5：明黄褐色(10YR7/6)粘土

SP2163
1：灰白色(5Y7/1)粗砂混じり粘質シルト(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト(柱痕)
3：灰色(N5/0)粘質シルト(柱痕)
4：灰色(5Y5/1)粘質シルト
5：黒褐色(2.5Y3/1)粘質シルト

SP2179
1：暗オリーブ色(7.5Y6/2)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y6/1)粗砂混じり粘質シルト
4：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質シルト
に明黄褐色(2.5Y6/6)粘土が
ブロック状に混じる

SP2161
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルト(柱痕)
2：褐灰色(10YR6/1)粘質シルト
3：明黄褐色(2.5Y6/6)粘質シルト
4：灰オリーブ色(5Y5/1)粘土
5：灰黄色(2.5Y6/2)粘土

SP2159
1：灰色(5Y6/1)微砂～粘質シルト(柱痕)
(にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルトと
明黄褐色(10YR6/6)粘土が
ブロック状に混じる)
2：暗褐色(10YR3/3)粘質シルト
3：灰白色(2.5Y7/1)粘土

SP3182
1：灰色(5Y5/1)粘土(柱痕)
2：灰色(5Y4/1)粘土
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘土

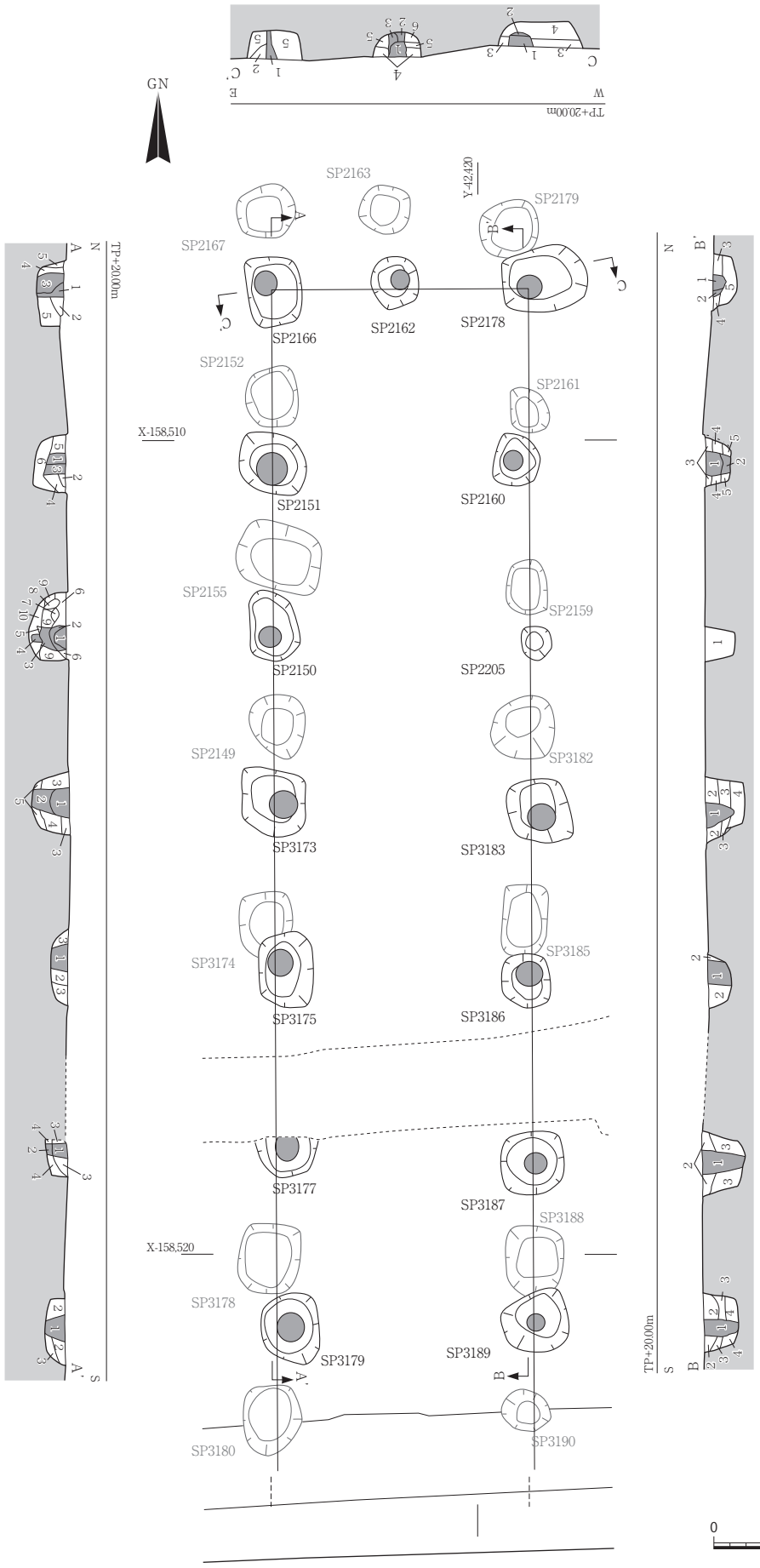
SP3185
1：暗オリーブ褐色(2.5Y3/2)粘土(柱痕)
2：灰色(5Y4/1)粘土
3：オリーブ色(5Y6/6)粘土

SP3188
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルトと
灰色(5Y6/1)粘質シルトが混じる(柱痕)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト(柱痕)
3：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルト
4：黄灰色(2.5Y6/1)粘土
5：灰色(5Y5/1)粘土

SP3190
1：灰色(5Y6/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y6/1)粗砂混じり粘質シルト
3：褐灰色(10YR6/1)粗砂混じり粘質シルト

0　4m

図45　SB４－Ⅰ遺構図・断面図　１：80



SP2166
1：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト
3：黒褐色(10YR3/2)粘質シルト(柱痕)
4：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
5：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト

SP2151
1：灰褐色(10YR6/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰褐色(7.5YR4/2)粘質シルト
3：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト(柱痕)
(灰褐色(7.5YR4/2)粘質シルトが
ブロック状に混じる)
4：灰白色(2.5Y7/1)粘土
5：灰色(5Y5/1)粘質シルト
(灰黄褐色(10YR4/2)粘土が
ブロック状に混じる)
6：灰白色(2.5Y7/1)粘土

SP2150
1：灰白色(5Y7/1)粘質シルト(柱痕)
2：黒褐色(10YR3/1)粘質シルト(柱痕)
3：灰色(5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
4：褐灰色(10YR5/1)粘土(柱痕)
5：黄灰色(2.5Y4/1)粘土
6：黒褐色(7.5YR3/1)粘質シルト
7：灰白色(N8/0)粘土
8：灰黄褐色(10YR4/2)粘土
9：灰色(5Y7/1)粘土
10：灰色(N6/0)粘土

SP3173
1：灰色(10Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰色(10Y5/1)粘土(柱痕)
3：灰色(7.5Y5/1)粘質シルト
4：灰オリーブ色(5Y5/2)粘質シルト
5：灰色(5Y4/1)粘土

SP3175
1：灰色(5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰オリーブ色(5Y4/2)粘質シルト
3：灰色(5Y6/1)粘土

SP3177
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰色(10Y4/1)粘質シルト(柱痕)
3：灰オリーブ色(5Y4/2)粗砂混じり粘質シルト
4：灰色(7.5Y4/1)粘土

SP3179
1：褐灰色(10YR6/1)粗砂混じり粘土(柱痕)
2：灰色(5Y5/1)粘土
3：灰白色(2.5Y7/1)粗砂混じり粘土

SP2162
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト(柱痕)
2：黒褐色(10YR3/2)粘質シルト(柱痕)
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
4：灰色(5Y5/1)粘質シルト
5：明黄褐色(2.5Y7/6)粘土
6：灰色(5Y4/1)粘質シルト

SP2178
1：明黄褐色(2.5Y7/6)粘質シルト(柱痕)
2：褐灰色(10YR5/3)粘質シルト(柱痕)
3：黄灰色(2.5Y6/1)粘土
4：明黄褐色(10YR6/6)粘土
5：灰白色(7.5Y7/1)粗砂混じり粘土

SP2160
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルト(柱痕)
2：にぶい黄色(2.5Y6/4)粘質シルト(柱痕)
3：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
4：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
5：にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト

SP2205
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘土

SP3183
1：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂混じり粘土(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
3：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
4：灰色(5Y4/1)粘土

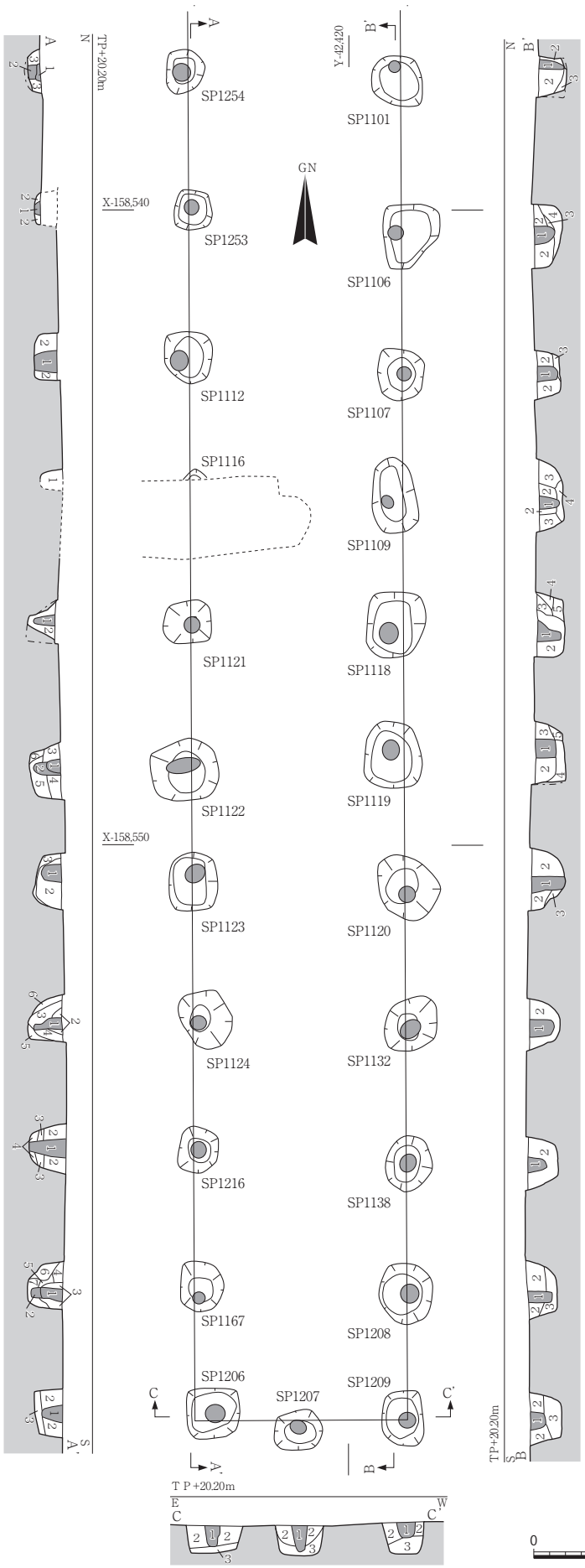
SP3186
1：灰色(5Y4/1)粘土(柱痕)
2：黄褐色(2.5Y5/4)粘土と
黄灰色(2.5Y5/1)粘土が混じる

SP3187
1：黄褐色(2.5Y5/6)粗砂混じり粘土(柱痕)
2：褐灰色(10YR5/1)粗砂混じり粘土
3：灰色(5Y6/1)粗砂混じり粘土

SP3189
1：明黄褐色(10YR6/6)粗砂混じり粘質シルトと
褐灰色(10YR6/1)粘質シルトが混じる(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y6/1)粗砂混じり粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト
4：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト

0　4m

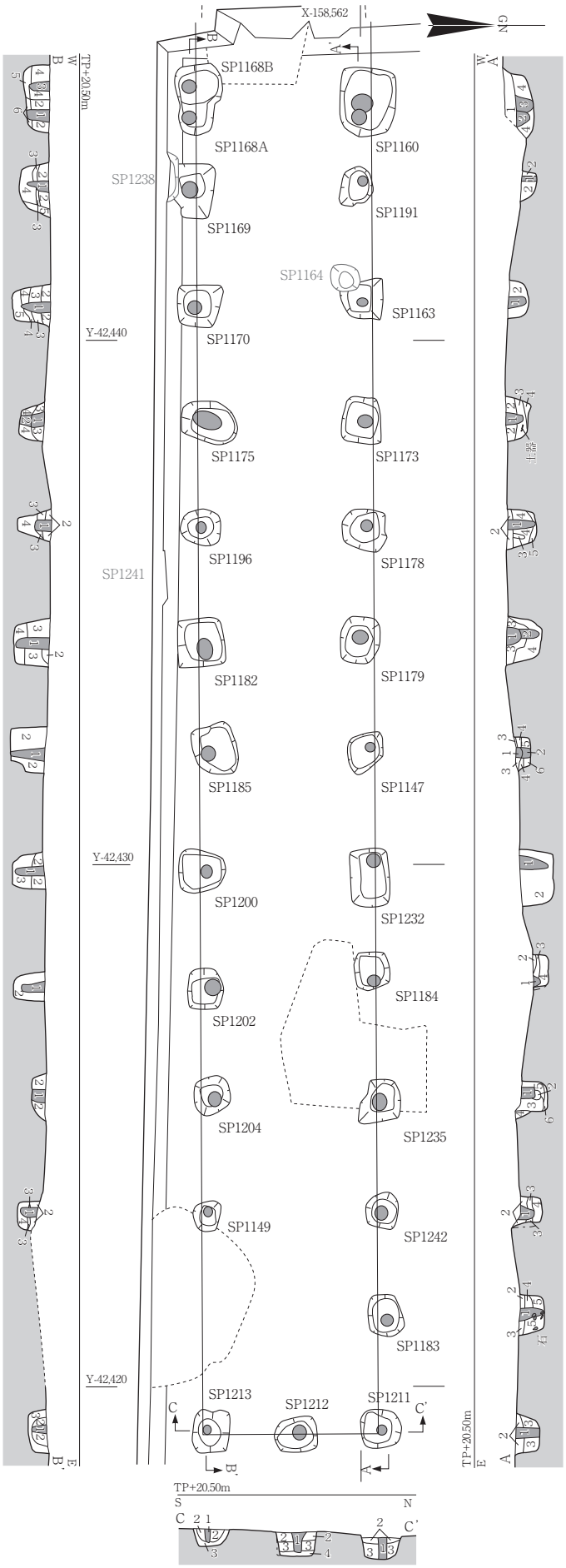
図46　SB４－Ⅱ遺構図・断面図　１：80



SP1254
1：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土(柱痕)
2：灰白色(7.5Y7/1)微砂混じり粘土
(明黄褐色(2.5Y6/6粘土が
ブロック状に混じる)
3：灰白色(7.5Y7/1)微砂混じり粘土
4：灰白色(5Y7/1)粗砂混じり粘土
SP1253
1：黄灰色(2.5Y5/1)微砂混じり
粘土(柱痕)
(黄褐色(10YR5/6)粘土が
ブロック状に混じる)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘土
SP1112
1：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト
(柱痕)
2：褐灰色(10YR6/1)粘質シルト
SP1116
1：褐色(10YR4/4)粘土と
灰白色(10YR7/1)粘土が
ブロック状に混じる
SP1121
1：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土(柱痕)
(黄灰色(2.5Y5/1)粘土が混じる)
2：黄褐色(2.5Y5/3)粗砂混じり粘土
(黄褐色(2.5Y5/3)粘土が混じる)
SP1122
1：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘土(柱痕)
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土
4：明黄褐色(2.5Y6/6)粘質シルト
5：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
6：褐灰色(10YR5/1)粘土
SP1123
1：灰黄褐色(10YR4/2)粗砂混じり粘土
(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂混じり粘土
3：灰色(5Y6/1)粘土(谷の埋土)
SP1124
1：褐色(10YR4/4)粘土(柱痕)
(黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルトが混
じる)
2：褐色(10YR4/4)粘土
3：灰色(5Y5/1)粘土
4：黄灰色(2.5Y6/1)粗砂混じり粘土
5：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土
6：灰色(5Y6/1)粘土(谷埋土)
SP1216
1：黄褐色(2.5Y5/6)粘土と
灰色(5Y5/1)粘土が
ブロック状に混じる(柱痕)
2：黄褐色(2.5Y5/6)粘土と
灰色(5Y4/1)粘土が
ブロック状に混じる(柱痕)
3：褐色(10YR4/4)粘土
4：灰色(2.5Y5/1)粘土
SP1167
1：灰白色(7.5Y7/1)粘土(柱痕)
2：明黄褐色(10YR6/6)粘土(柱痕)
3：黄褐色(10YR5/6)粘土
4：灰白色(2.5Y7/1)粘土
5：灰色(5Y6/1)粘土
6：灰色(7.5Y6/1)粘土
(暗灰色(N3/0)粘土が混じる)
7：明黄褐色(10YR6/6) 粘土
SP1206
1：黄褐色(2.5Y5/6)粘土(柱痕)
2：灰色(5Y6/1)粘土と
オリーブ色(5Y6/6)粘土が混じる
3：黄灰色(2.5Y6/1)粘土
(黒色(10YR2/1)粘土が混じる)
SP1207
1：黄褐色(10YR5/6)粘土(柱痕)
2：灰白色(5Y7/1)粘土
3：黒色(5Y2/1)粘土と
灰色(5Y5/1)粘土が混じる
SP1101
1：灰白色(2.5Y7/1)粘土(柱痕)
(明黄褐色(10YR6/6)粘土が混じる)
2：灰黄褐色(10YR4/2)粘土
3：褐灰色(10YR4/1)粘土
SP1106
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘土(柱痕)
2：明黄褐色(10YR6/6)粘土
(黄灰色(2.5Y6/1)粘土が混じる)
3：黄灰色(2.5Y6/1)粘土
(灰白色(5Y7/1)粗砂が混じる)
4：にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土
(灰白色(5Y7/1)粗砂が混じる)
SP1107
1：にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土(柱痕)
2：明黄褐色(10YR6/6)粘土
3：灰白色(5Y7/1)粗砂
SP1109
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘土(柱痕)
2：灰色(5Y6/1)粗砂混じり粘土
3：灰黄色(2.5Y6/2)粗砂混じり粘土
4：灰白色(5Y7/1)粗砂
SP1118
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘土(柱痕)
2：灰黄色(2.5Y6/2)粘土
(明褐色(7.5YR5/6)粘土が
ブロック状に混じる)
3：褐灰色(7.5YR6/1)粘土
4：黄褐色(10YR5/6)粘土
SP1119
1：明黄褐色(10YR6/6)粘土(柱痕)
2：明黄褐色(10YR6/6)粘土
3：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土
4：黄灰色(2.5Y5/1)粘土
5：灰色(5Y4/1)粘土
SP1120
1：灰色(5Y6/1)粘土と
にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土が
混じる(柱痕)
2：褐灰色(10YR4/1)粘土
(明黄褐色(2.5Y6/6)粘土が混じる)
3：褐灰色(10YR4/1)粘土
SP1132
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘土(柱痕)
2：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土
(黄灰色(2.5Y6/1)粘土が混じる)
SP1138
1：灰色(7.5Y6/1)粘土(柱痕)
2：橙色(7.5YR6/6)粘土
(灰色(7.5Y6/1)粘土が混じる)
SP1208
1：黄褐色(2.5Y5/3)粘土(柱痕)
2：褐灰色(10YR6/1)粘土
3：黄灰色(2.5Y6/1)粘土
SP1209
1：褐灰色(10YR5/1)粘土(柱痕)
2：黄褐色(10YR5/6)粘土
3：黄褐色(2.5Y5/3)粘土

0　4m

図47　SB５遺構図・断面図　１：100



SP1168
1：黄灰色(2.5Y5/1)(柱痕)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土と黄褐色(10YR5/6)粘土がブロック状に混じる
3：灰黄褐色(10YR4/2)粘土と灰黄褐色(10YR6/2)粘土と黄褐色(10YR5/6)粘土がブロック状に混じる(柱痕)
4：2よりにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土ブロックが多い
5：黒色(10YR2/1)粘土
6：黄灰色(2.5Y5/1)粘土

SP1169
1：灰褐色(7.5YR4/2)粘土(柱痕)
2：黄褐色(10YR5/6)粘土と灰黄褐色(10YR5/2)粘土がブロック状に混じる
3：灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土
4：黄褐色(10YR5/6)粘土(灰黄褐色(10YR5/2)粘土を含む)
5：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土

SP1170
1：灰赤色(10R4/2)粘土(柱痕)
2：暗赤褐色(10R3/3)粗砂混じり粘土
3：灰赤色粘土(10R5/2)粘土と赤橙色(10R6/6)粘土がブロック状に混じる
4：暗赤灰色(10R4/1)粘土
5：褐灰色(7.5YR5/1)粘土

SP1175
1：褐色(10YR4/4)粘土(柱痕)
2：明黄褐色(10YR7/6)粘土と黄灰色(2.5Y5/1)粘土がブロック状に混じる(柱痕)
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘土と明黄褐色(10YR7/6)粘土が混じる
4：明黄褐色(10YR7/6)粘土と灰色(5Y6/1)粘土がブロック状に混じる

SP1196
1：褐色(10YR4/4)粘土(柱痕)
2：灰黄褐色(10YR5/2)粘土
3：灰色(7.5Y5/1)粘土
4：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルトと明黄褐色(2.5Y6/6)粘土が混じる

SP1182
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘土(柱痕)
2：黄褐色(2.5Y5/6)粘質シルト
3：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト
4：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土と黄灰色(2.5Y6/1)粘土が混じる

SP1185
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘土(柱痕)
2：灰色(5Y4/1)粘土と黄灰色(2.5Y5/1)粘土と明褐色(7.5YR5/6)粘土がブロック状に混じる

SP1200
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘土(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土
3：黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト

SP1202
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘土(柱痕)
2：黒褐色(2.5Y3/2)～黄灰色(2.5Y5/1)粘土

SP1204
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘土(柱痕)
2：灰色(5Y5/1)粘土

SP1149
1：黄褐色(10YR5/6)粘土と灰色(5Y6/1)粘土がブロック状に混じる(柱痕)
2：灰色(5Y5/1)粘土
3：橙色(2.5YR7/6)粘土
4：灰色(5Y4/1)粘土

SP1213
1：灰色(5Y5/1)粘土(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y6/1)粘土
3：灰褐色(7.5YR4/2)粘土(褐灰色(7.5YR4/1)粘土が混じる)

SP1212
1：灰色(5Y5/1)粘土(柱痕)(浅黄色(2.5Y7/3)粘土がブロック状に混じる)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘土
3：黄灰色(2.5Y4/1)粘土
4：灰白色(2.5Y8/1)粘土
5：灰黄色(2.5Y7/2)粘土

SP1160
1：明黄褐色(10YR7/6)粘土
2：褐灰色(10YR5/1)粘土(柱痕)
3：灰色(5Y6/1)粘土(柱痕)
4：灰色(7.5Y5/1)粘土(2～4は明黄褐色(10YR6/6)粘土がブロック状に混じる)

SP1191
1：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土(柱痕)
2：明黄褐色(2.5Y7/6)粘土

SP1163
1：灰褐色(7.5YR4/2)粘質シルト(柱痕)
2：明褐灰色(7.5YR7/2)粘土と橙色(7.5YR6/6)粘土がブロック状に混じる

SP1173
1：褐色(7.5YR4/3)粘土(柱痕)
2：灰褐色(7.5YR4/2)粘土と明褐色(7.5YR5/6)粘土がブロック状に混じる
3：灰白色(10YR7/1)粘土
4：褐灰色(10YR5/1)粘土

SP1178
1：にぶい褐色(7.5YR5/4)粘土(柱痕)
2：明褐色(7.5YR5/6)粘土
3：黄灰色(2.5Y4/1)粘土
4：黄灰色(2.5Y5/1)粘土と浅黄色(2.5Y7/4)粘土が混じる
5：黄灰色(2.5Y5/1)粘土

SP1179
1：灰褐色(7.5YR5/2)粘土(柱痕)
2：褐灰色(10YR5/1)粘土(柱痕)
3：黄灰色(2.5Y6/1)粘土
4：灰白色(10YR7/1)粘土

SP1147
1：灰白色(2.5Y7/1)粘土(柱痕)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土(柱痕)
3：褐色(7.5YR4/3)粘土
4：灰色(N6/0)粘土と褐色(7.5YR4/4)粘土が混じる
5：黄褐色(10YR5/6)粘土
6：灰色(N5/0)粘土

SP1232
1：灰オリーブ色(5Y6/2)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘土と黄褐色(2.5Y5/6)粘土がブロック状に混じる

SP1184
1：暗褐色(10YR3/3)粘土(柱痕)(褐灰色(7.5YR5/1)粘土が混じる)
2：灰色(5Y4/1)粘土
3：黄褐色(10YR5/6)粗砂
4：褐灰色(10YR5/1)粘土(灰白色(2.5Y7/1)粗砂が混じる)

SP1235
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘土(柱痕)
2：明黄褐色(10YR6/6)粗砂
3：灰赤色(2.5YR5/2)粘土
4：黄灰色(2.5Y4/1)粘土(NR1246埋土)
5：褐灰色(10YR5/1)粘土
6：灰色(5Y4/1)粘土

SP1242
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘土(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y6/1)粘土
3：灰色(5Y5/1)粘土
4：灰色(7.5Y6/1)粘土(オリーブ黒色(5Y3/1)粘土が混じる)

SP1183
1：灰色(N5/0)粘土(柱痕)(灰白色(N7/0)粘土と明黄褐色(10YR6/6)粘土がブロック状に混じる)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘土
3：黄褐色(10YR5/6)粘土と黄灰色(2.5Y5/1)粘土が混じる
4：黄褐色(10YR5/6)粘土と黄灰色(2.5Y5/1)粘土が混じる
5：灰白色(N7/0)粘土と暗灰色(N3/0)粘土がブロック状に混じる

SP1211
1：灰色(5Y6/1)粘土(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y6/1)粘土(黄褐色(10YR5/6)粘土が混じる)
3：灰白色(2.5Y7/1)粘土(黒褐色(10YR3/1)粘土が混じる)

0　4m

図48　SB６遺構図・断面図　１：120

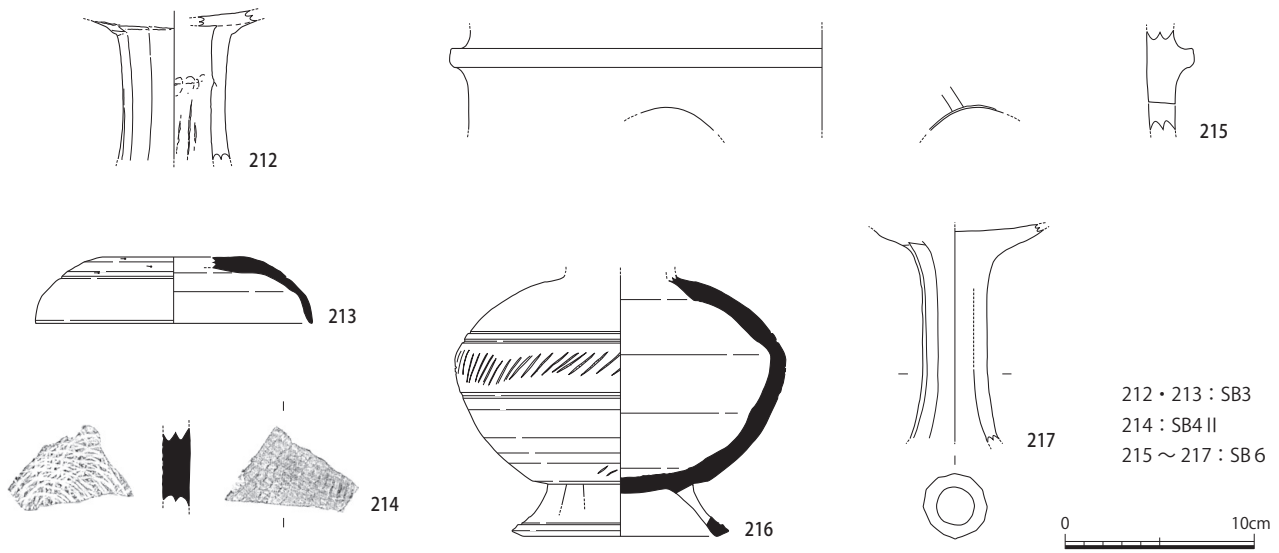


図49　SB３～６出土土師器・須恵器・埴輪　１：４

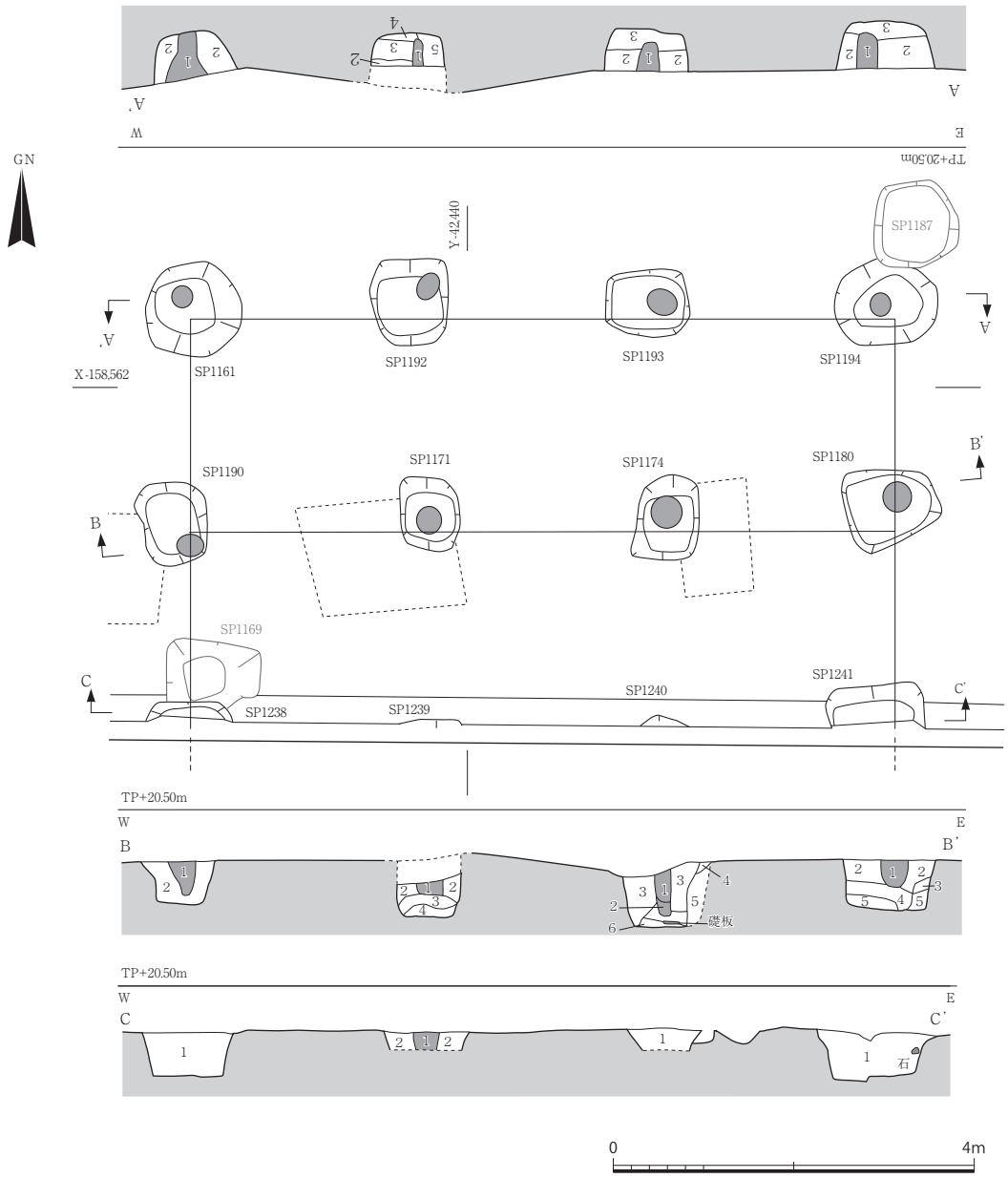
SB６（図48、巻頭図版２、図版７）　１～３Ｌで検出した南北２間×東西12間以上の掘立柱建物で長舎と考える。梁行総長3.32mを測り、桁行の柱間寸法は2.12±0.17mで、概ね2.0mを測る。西端のSP1160とSP1191、SP1168とSP1169の間隔は1.5mと狭く、双方に建替えの痕跡が認められるので、別の建物の一部となる可能性がある。位置的にも官衙の中心付近に相当するため、SB６と連続して門が存在した可能性が考えられる。柱穴の深さは0.28～0.72mを測る。北側の柱列はSD1186に切られる。遺物はSP1170から土師器、SP1175・1213・1235から須恵器が出土している。SP1185からは、段下げ後TP＋19.8mで柱痕部分より須恵器台付壺（216）が正位置で出土しており（図版７）、建物廃絶後に据え置かれた可能性がある。216は頸部より上を欠き、胴部最大径の稜は弱く楕円形を呈する。沈線２条の間に列点文を巡らせ、台部に長方形の透かし孔を３箇所穿つ。陶邑Ⅳ中～新段階に比定できる。215と217もSP1185出土。土師器高杯（217）は12面の面取を施し内面にナデ調整を施す。８世紀末～９世紀初頭に比定できる。216と217は100年近い時期差があり、建物の帰属時期は検討を要する。円筒埴輪（215）は高さ1.0cmで断面方形の突帯を付し、円形透かし孔を穿つ。外面は摩滅が激しい。混入品と考える。

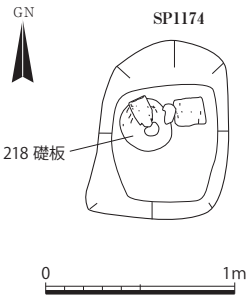
SB７（図50、写真９、図版７）　１～２Ｌで検出した南北２間以上×東西３間の総柱建物である。南端は調査区外に続くと考える。桁行の柱間寸法2.59±0.09m、柱穴の深さは0.4～0.72mを測る。SP1239・1240は柱芯より北寄りでしか断面観察ができなかったため、柱穴深度は未確定である。SP1238がSB６を構成するSP1169を切ることから、SB６の廃絶後に建てられたと分かる。遺物はSP1192から須恵器片が出土した。SP1174は底面に礎板が据え置かれており、複数の木材で構築されている。うち１点は直径24～26cmの輪切りのコウヤマキ（218）で、糖アルコールによる保存処理後にウィグルマッチング法による年代測定を実施している。最外年輪年代は403－436calＡＤ(78.5%)を示す結果となっており（第４章第２節参照）、古墳時代の古材を転用したと考えられる。あくまで推測に過ぎないが、SB３～６の長舎建物を建設する際に用いられた転用材を更に再利用したとも考えられる。

SB８（図52）　２Ｄ～Ｅ区で検出した東西２間（桁行は南が２間、北が１間である）×南北６間の掘立柱建物である。桁行の柱間寸法は1.62m±0.10m、柱穴の深さは0.14～0.59mとばらつきがあり、SP2122・2115が0.05m・0.07mと著しく浅い。

遺物は、SP2111から土師器、須恵器・製塩土器、SP2113から土師器・石、SP2115から土師器、SP2118・2124・2172・2174から土師器と須恵器、SP2120から土師器と平瓦、SP2190から須恵器がそれぞれ出土している（図53）。いずれも８世紀の所産と考える。

土師器は、219・220が在地的な形態の杯Ａで内外面にナデ調整を施す。220は口縁端部が外側に屈曲する。法量は219が復元口径11.1cm、器高1.8cm。220が復元口径13.7cm。221・222は口縁部内面に一段放射暗文を施し、外面に緻密な横方向のヘラミガキを施す。口縁端部の巻込が弱く、復元口径はいすれも15.4cm。224は皿Ｂで見込み部に螺旋暗文を施し、復元高台径14.7cm。225は甕で、口縁部と体部は直角に近く口縁端部を四角く面取す





SP1161
1：灰色(5Y6/1)粘土(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘土
(明黄褐色(2.5Y6/6)粘土がブロック状に混じる)
SP1192
1：灰色(5Y5/1)粘土(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
3：明黄褐色(10YR6/6)粘土と
灰白色(N8/0)粘土がブロック状に混じる
4：灰色(5Y4/1)粘土
5：灰黄褐色(10YR4/2)粘土

SP1193
1：暗褐色(10YR3/3)粘土(柱痕)
2：暗褐色(10YR3/3)粘土と
明黄褐色(10YR7/6)粘土がブロック状に混じる
3：２に黄灰色(2.5Y5/1)粘土が混じる
SP1194
1：灰白色(5Y7/1)粘土(柱痕)
2：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
3：褐色(7.5YR4/4)粘土

SP1190
1：灰白色(N7/0)粘土(柱痕)
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土
(黄褐色(10YR5/6)粘土がブロック状に混じる)
SP1171
1：灰白色(N7/0)粘土(柱痕)
2：灰色(N5/0)粘土と
にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土がブロック状に混じる
3：灰白色(N8/0)粘質シルトと
灰色(N5/0)粗砂が混じる
4：灰白色(N7/0)粗砂

SP1174
1：灰オリーブ色(5Y6/2)粘土(柱痕)
2：黄褐色(2.5Y5/3)粘土(ブロック状に混じる)(柱痕)
3：褐色(10YR4/4)～黒色(10YR2/1)粘土
4：明黄褐色(10YR6/6)粘土
5：黒褐色(10YR3/2)粘土
6：灰白色(5Y7/1)粗砂
SP1180
1：灰色(7.5Y5/1粘土(柱痕)
2：灰黄褐色(10YR4/2)粘土
3：褐灰色(7.5YR6/1)粘土
4：明褐色(7.5YR5/8)粘土
5：褐灰色(10YR4/1)粘土

SP1238
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘土
SP1239
1：灰白色(2.5Y7/6)粘土と
灰黄褐色(10YR4/2)粘土が
ブロック状に混じる(柱痕)
2：にぶい褐色(7.5YR5/4)粘質シルト
SP1240
1：にぶい褐色(7.5YR5/4)粘質シルト
SP1241
1：にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト
(黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルトがブロック状に混じる)

図50　SB７遺構図・断面図及び柱穴礎板出土状況図　１：80（出土状況図のみ１：40）

る。体部外面はタテハケ調整で、口縁部付近をナデ消す。体部内面はヨコハケ調整を施し、一部斜め方向のユビナデを施す。製塩土器（223）は筒型の器形。

須恵器は、228が杯A。底部はヘラ切り後未調整で復元底部径9.6㎝。226・227は杯Bで、外側に向かい踏ん張る高台が付く。226は高台貼り付け位置がやや中央よりである。229は杯B蓋で、頂部を欠く。天井部には回転ヘラケズリを施すが、口縁部との境目は不明瞭で、かえりを持たない。復元口径16.2㎝。230は甕の体部で、調整は外面が平行タタキの後にカキメを施す。内面は同心円状当て具痕を残す。

SB９（図54、図版９）　２Ｅ～Ｆ区のSB８南側に近接して建てられた東西２間×南北３間の掘立柱建物である。建物主軸は北で西に３°42′振る。SB３廃絶後に建てられている。桁行の柱間寸法は2.19±0.11m、柱穴の深さは0.22～0.53mを測る。SP2144は礎板石を据え置いている。SP2117は柱穴最上部より礫が出土しているが、礎石や根石であるかは判断できなかった。復元した建物群の中で平安時代の遺物が出土したのはこの建物のみである。

遺物はSP2079・2085・2116・2117・2144・2183・3010から土師器と須恵器の破片が出土している（図55）。231～234が土師器椀で河内地域特有の形状。底部を欠くため高台の有無は不明である。全個体ともに外面は口縁部にヨコナデを施し、それより下はユビオサエの痕跡を明瞭に残す。内面は234が螺旋暗文を施し、それ以外はナデ調整を施す。全て黒色土器椀（237）とともにSP2117より出土。235はSP2085出土の杯で、強いヨコナデにより口縁部外面に稜をもつ。内外面ともにナデ調整を施す。復元口径12.2㎝、器高2.9㎝。236は鉢で外面ハケメ調整。黒色土器椀A（237）は内面にミガキの上に螺旋暗文を施し、外面はミガキを施す。復元口径15.8㎝。いずれも９世紀前半の所産と考える。

SB10（図57、図版８）　２～３Ｇで検出した身舎が東西２間×南北４間以上の掘立柱建物で、片廂である。柱穴規模と建物位置から、コ字状の配置を取るSB３～６と関連する建物と考えられる。その場合、西側に廂をもつことから「脇殿」と考える。桁行の柱間寸法は2.89±0.32m、柱穴の深さは身舎が0.52～0.96m、庇部分が0.39～0.72mを測る。SP3049・3052・3141がSB15の柱穴に切られることから８世紀に帰属すると考える。

遺物はSP2147・3079・3138・3140から土師器と須恵器、SP3141から須恵器、SP3049・3062・3078・3146・3156・3167から土師器の破片がそれぞれ出土している。SP3049出土の238は杯または高杯の杯部。口縁部外面は

写真９　SB７（SP1174）礎板出土状況（西から）

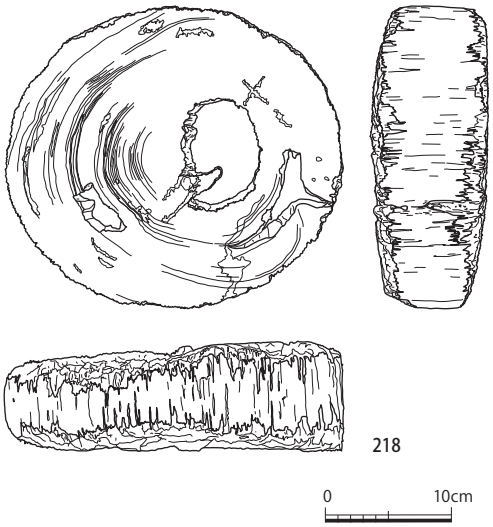
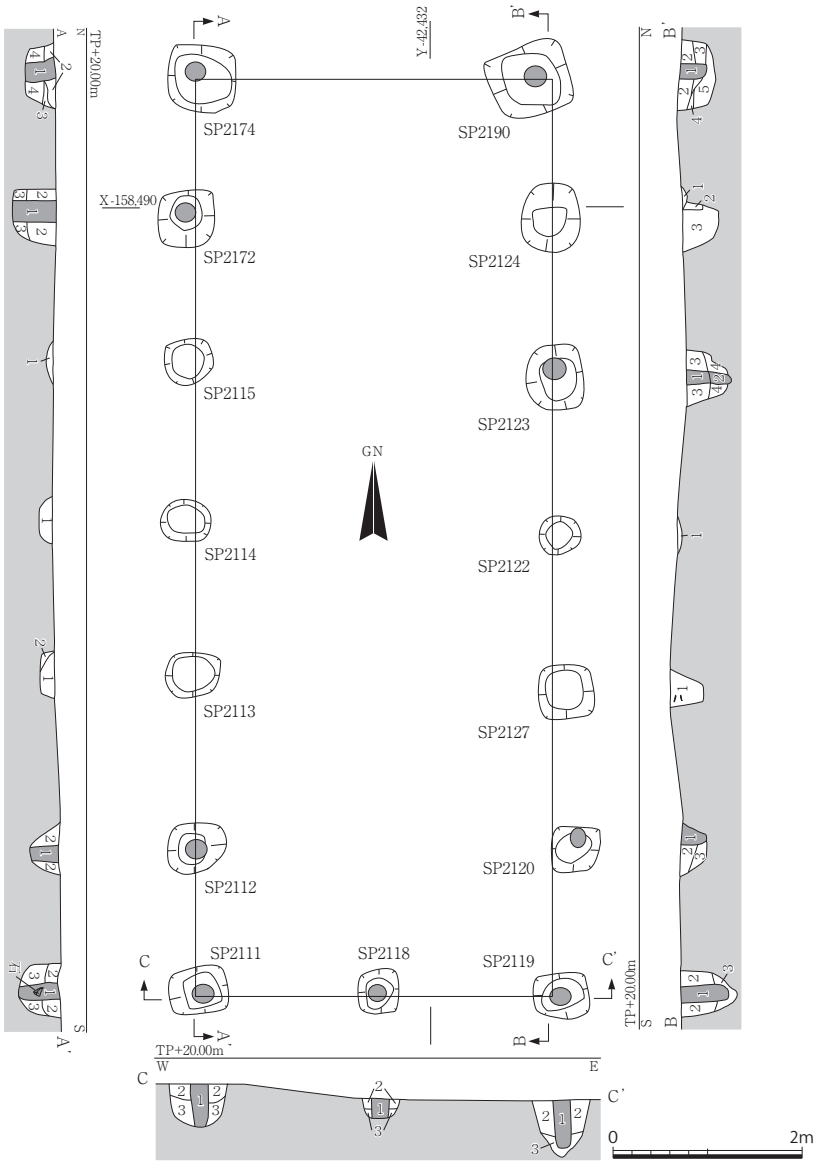


図51　SB７（SP1174）出土礎板　１：６

回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部に沈線を２条巡らせ、底部中央付近に直線２本のヘラ記号を刻む。復元口径10.2㎝、器高3.6㎝。

SB11（図58、図版８・９）　２Ｇで検出した南北１間の掘立柱建物である。西側は調査区外に続く。柱間寸法2.21m、柱穴の深さ0.6m～0.64mを測る。柱穴を２基検出したのみだが、柱穴の規模が大きく、底に礎板が据えられていたため建物とした。礎板はいずれも縦に半裁した材を切断面を上にして据え置く。他の建物及び柵の柱穴ではSP1174（SB７）を除いて礎板を検出していないため、２基並んで礎板をもつSB11は重量のある柱を用いた可能性がある。この柱穴から建物を復元すると極めて細長くなるため、官衙の正殿とは考え難い。長舎囲いに先行する可能性についても今後検討を要する。

遺物はSP3070から土師器片、SP3088から須恵器甕（241）が出土している。甕は外面に平行タタキ痕、内面に同心円状当て具痕を残す。礎板（図59）は２点とも復元径20㎝ほどのコウヤマキで（第４章第３節参照）、



SP2174
1：褐色(10YR4/4)粘質シルト(柱痕)
2：褐色(7.5YR4/4)粘質シルト
3：灰黄色(2.5Y6/8)粗砂混じり粘質シルト
4：灰色(5Y6/1)粘質シルト
SP2172
1：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
3：黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト
SP2115
1：灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト
SP2114
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト
SP2113
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト
SP2112
1：黒褐色(7.5YR3/1)粘質シルト(柱痕)
2：黒褐色(10YR3/1)粘質シルト
SP2111
1：黒褐色(7.5YR3/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄褐色(10YR5/6)粘質シルトと
灰オリーブ色(5Y4/2)がブロック状に混じる
3：オリーブ黒色(5Y3/1)粘質シルト

SP2118
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
3：明黄褐色(10YR6/6)粘質シルトと
黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルトがブロック状に混じる

SP2190
1：オリーブ黄色(5Y6/3)粗砂混じり粘質シルト
2：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト
3：黄褐色(2.5Y5/3)粘質シルト
4：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルト
5：灰オリーブ色(5Y5/2)粗砂
SP2124
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルト
2：黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト
3：オリーブ黒色(5Y3/1)粘質シルト
SP2123
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土(柱痕)
3：褐灰色(10YR4/1)粘土
4：暗褐色(10YR3/3)粘質シルト
SP2122
1：灰オリーブ色(5Y5/2)粘質シルト
SP2127
1：灰色(5Y4/1)粘質シルト(黄褐色(10YR5/6)粘質シルトがブロック状に混じる)
SP2120
1：オリーブ黒色(5Y3/2)粘質シルト
2：灰オリーブ色(5Y4/2)粘質シルト
3：明黄褐色(2.5Y6/6)粘質シルト
SP2119
1：黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト
3：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルトと浅黄色(2.5Y7/4)
粘質シルトがブロック状に混じる

図52　SB８遺構図・断面図　１：80

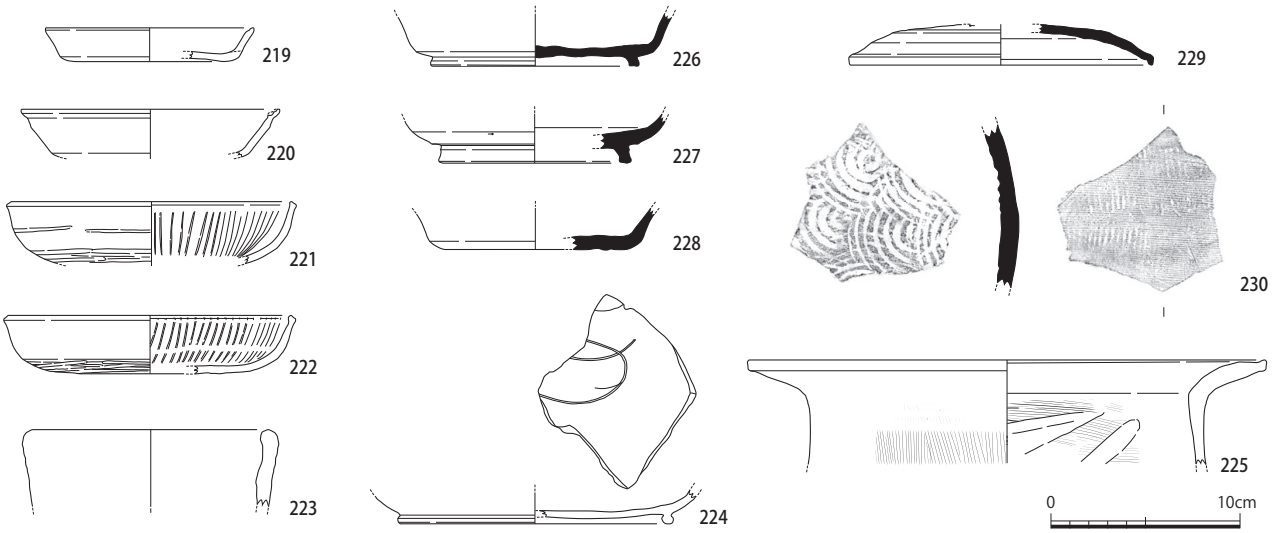
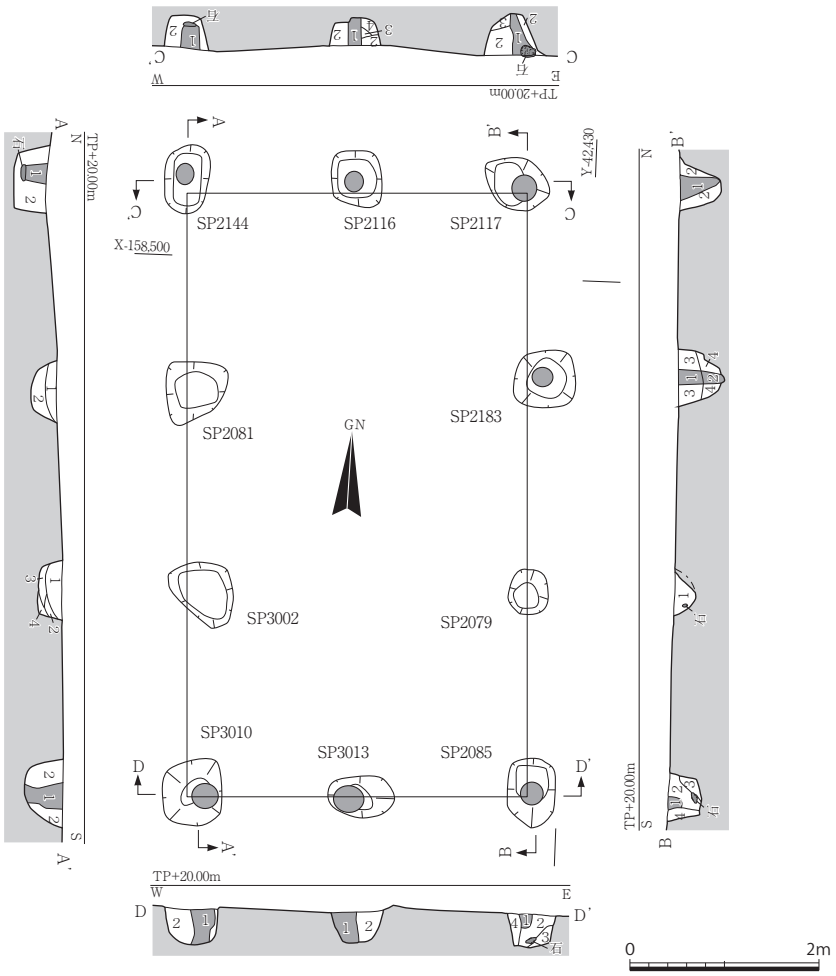


図53　SB８出土土師器・須恵器・製塩土器　１：４



SP2144
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
2：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
(明黄褐色(10YR6/6)粗砂混じり粘土混じる)
SP2081
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
2：黒褐色(10YR3/8)粘質シルト
(黄褐色(10YR5/6)粘土ブロックが混じる)
SP3002
1：灰色(5Y4/1)粘質シルト
2：黄褐色(2.5Y5/6)粗砂混じり粘土
3：灰色(5Y4/1)粘質シルトと
黄褐色(2.5Y5/6)粗砂混じり粘質シルトが混じる
4：灰色(10Y4/1)粗砂混じり粘土
SP3010
1：黒褐色(10YR3/1)粘質シルト(柱痕)
(黄褐色(10YR5/6)粘土がブロック状に混じる)
2：黒色(10YR2/1)粘土

SP2116
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
3：灰褐色(7.5YR4/2)粗砂混じり粘質シルト
4：灰色(5Y4/1)粗砂混じり粘質シルト
SP3013
1：灰色(5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：明黄褐色(10YR6/6)粘土と
褐灰色(10YR4/1)粘土がブロック状に混じる

SP2117
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(柱痕)
(黄褐色(10YR5/6)粘土ブロックが混じる)
2：黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト
3：黒褐色(10YR3/2)粘質シルト
(黄褐色(10YR5/6)粘土がブロック状に混じる)
SP2183
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土(柱痕)
3：褐灰色(10YR4/1)粘土
4：暗褐色(10YR3/3)粘質シルト
SP2079
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
SP2085
1：にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土と
灰色(5Y4/1)粘質シルトがブロック状に混じる
2：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
3：灰色(5Y4/1)粘質シルトと
にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土がブロック状に混じる
4：灰色(5Y4/1)粘質シルト

図54　SB９遺構図・断面図　１：80

樹皮はなく半裁面に工具痕がわずかに残る。柱材と思われる。放射性炭素年代測定の結果、SP3070出土礎板（239）は、2σ暦年代範囲で432－490calＡＤ(13.9%)および532－610calＡＤ(81.5%)で、SP3088出土礎板（240）は、2σ暦年代範囲で429－494calＡＤ(40.1%)、510－517calＡＤ(1.4%)、529－590calＡＤ(53.9%)であった（第４章第２節参照）。おそらくSB７と同様転用材と思われる。

SB12（図61、図版９）　２Ａ～Ｂで検出した南北３間×東西３間の掘立柱建物である。南西隅に１間の張り出し部をもつ。桁行の柱間寸法は2.19±0.30m、柱穴の深さは0.18～0.56mを測る。北西隅の柱穴は調査区外に位置する。また、建物内部に位置するSP4013・4018・4023・4027は、柱筋は揃わず四角形状に並ぶことから床束と考える。SP4057は柱掘方の南に抜き取り穴が掘られており、上層より須恵器甕（242）が出土している（図版９－５・６）。

遺物はSP4027が土師器片、SP4021・4030・

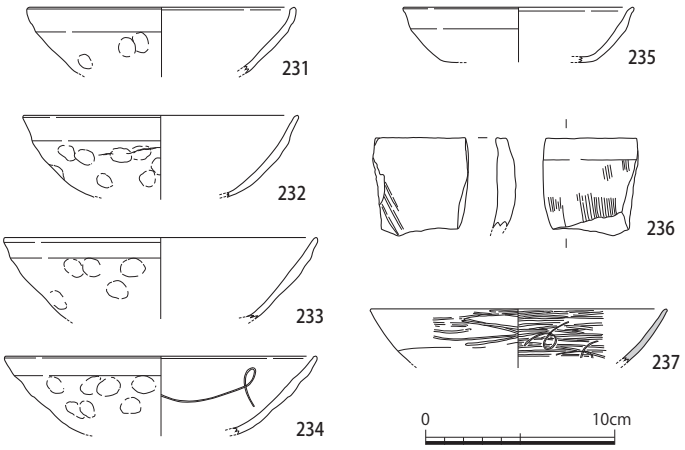


図55　SB９出土土師器・黒色土器　１：４

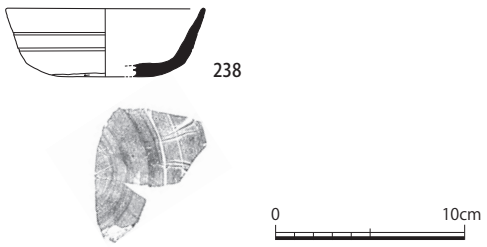
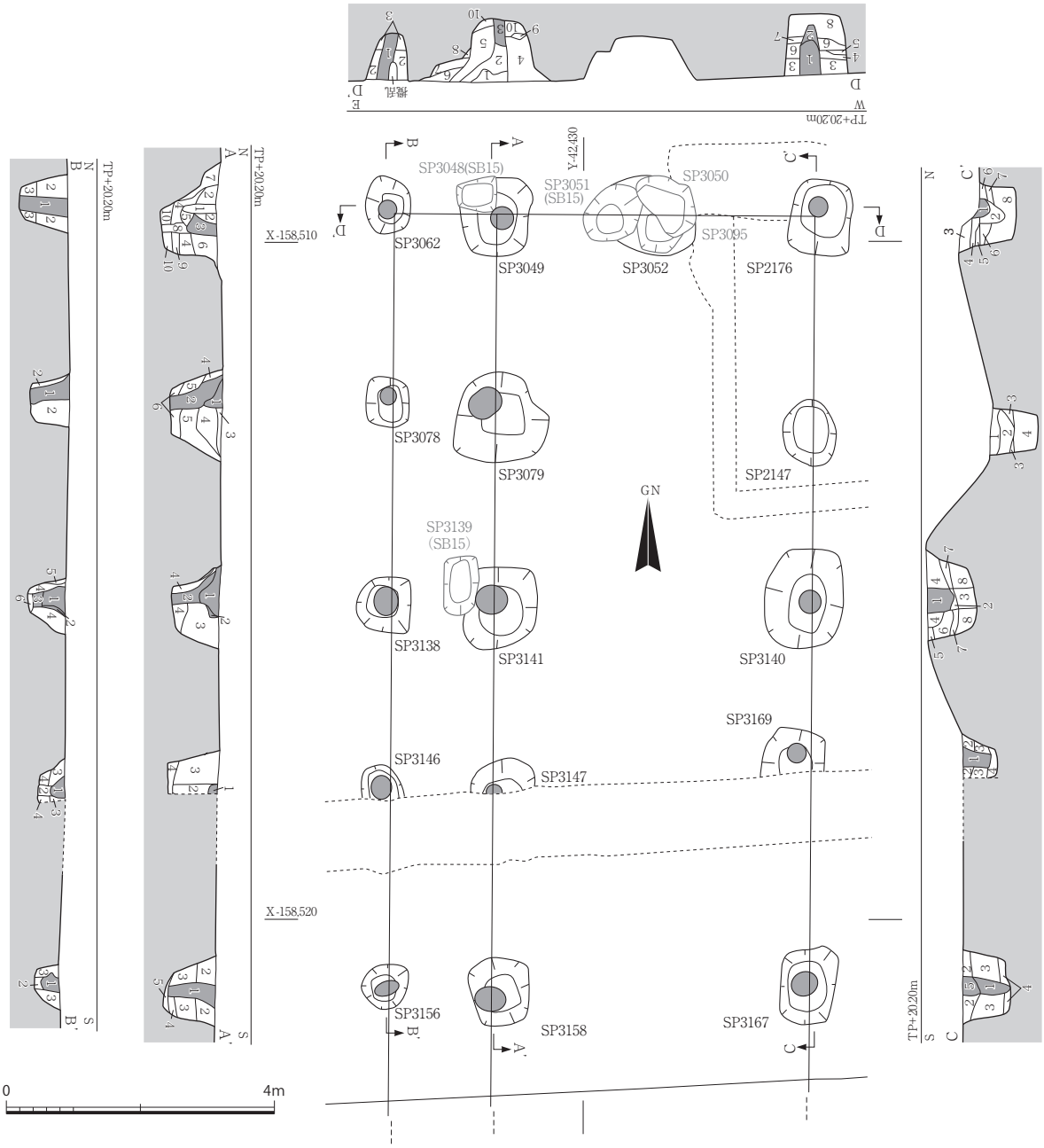


図56　SB10出土須恵器　１：４



SP3062
1：褐灰色(10YR4/1)粘土(柱痕)
(明黄褐色(2.5Y6/6)粘土ブロックが混じる)
2：黒褐色(10YR3/1)粘土
(明黄褐色(2.5Y6/6)粘土ブロックが混じる)
3：黒褐色(10YR3/1)粘土
SP3078
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(柱痕)
(明黄褐色(2.5Y6/6)粘土ブロックが混じる)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混じり粘質シルト
SP3138
1：褐灰色(7.5YR5/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰黄色(2.5Y7/2)粘土(柱痕)
3：灰白色(5Y7/1)粘質シルト(柱痕)
4：黒褐色(2.5Y3/1)粘質シルト
(焼土粒・炭化物含む)
5：にぶい黄色(2.5Y5/3)粘土
6：明黄褐色(10YR7/6)粘土
SP3146
1：灰白色(2.5Y8/1)粘土(柱痕)
2：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
3：黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルト
4：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
SP3156
1：灰白色(5Y7/1)粘土(柱痕)
2：灰色(5Y4/1)粗砂混じり粘質シルト
3：黒褐色(10YR7/1)粗砂混じり粘質シルト

SP3049
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
(炭化物・焼土混じる)(柱抜き取り痕？)
2：浅黄色(2.5Y7/4)粘土(柱抜き取り痕？)
3：灰白色(N7/)粘土(柱痕)
4：褐色(10YR4/4)粗砂混じり粘土(焼
土粒？混じる)
5：黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルト(明黄褐
色(2.5Y6/6)粘土ブロックが混じる)
6：明黄褐色(2.5Y7/6)粘土
7：灰黄色(2.5Y6/2)粘質シルト
8：灰黄色(2.5Y7/2)粘質シルト
9：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土
10：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土
SP3079
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(柱痕)
2：灰白色(5Y7/1)粘土(柱痕)
3：暗褐色(10YR3/3)粘土
4：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト
(明黄褐色(2.5Y6/6)粘土ブロックが
混じる)
5：黒褐色(10YR3/2)粘質シルト
6：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
SP3141
1：黒褐色(10YR3/2)粘質シルト(柱痕)
2：灰白色(N7/0)粘土(柱痕)
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(明黄褐
色(10YR6/6)粘土ブロックが混じる)
4：灰色(5Y4/1)粘土(明黄褐色(10YR6/6)粘
土ブロックが混じる)

SP3147
1：黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルト(柱痕)
2：灰白色(2.5Y7/1)粘土
(明黄褐色(10YR7/6)粘土ブロックが混
じる)
3：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
4：黒褐色(2.5Y3/1)粘質シルト
SP3158
1：灰白色(2.5Y7/1)粘質シルト(柱痕)
2：褐灰色(10YR5/1)粗砂混じり粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
4：灰色(5Y4/1)粘質シルト
5：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土

SP2176
1：灰色(5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト
(にぶい黄褐色粗砂混じる)
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘土
4：明黄褐色(2.5Y7/6)粘質シルト
5：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
6：にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂混じり粘土
7：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
8：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト

SP2147
1：灰白色(5Y7/1)粘土(粗砂混じる)
2：灰色(5Y5/1)粘質シルト
3：明黄褐色(2.5Y6/6)粗砂混じり粘土
(灰色(5Y5/1)粘質シルトが混じる)
4：灰色(5Y5/1)粘質シルトと
明黄褐色(2.5Y6/6)粗砂混じり粘土
が混じる
SP3140
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：浅黄色(2.5Y7/4)粘土
3：灰色(5Y4/1)粗砂混じり粘土
4：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
5：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
6：灰白色(5Y6/1)粘土
7：灰白色(10YR7/1)粘土
8：灰色(5Y4/1)粗砂混じり粘土
SP3169
1：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土(柱痕)
(黄灰色(2.5Y5/1)粘土が
ブロック状に混じる)
2：灰白色(5Y7/1)粘土
3：灰色(7.5Y5/1)粘土
4：灰白色(2.5Y7/1)粘土
SP3167
1：灰褐色(7.5YR4/2)粘土(柱痕)
2：にぶい黄橙色(10YR7/3)粘土
3：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
4：灰色(5Y4/1)粘土
5：灰白色(2.5Y7/1)粘土(柱痕)

図57　SB10遺構図・断面図　1：100

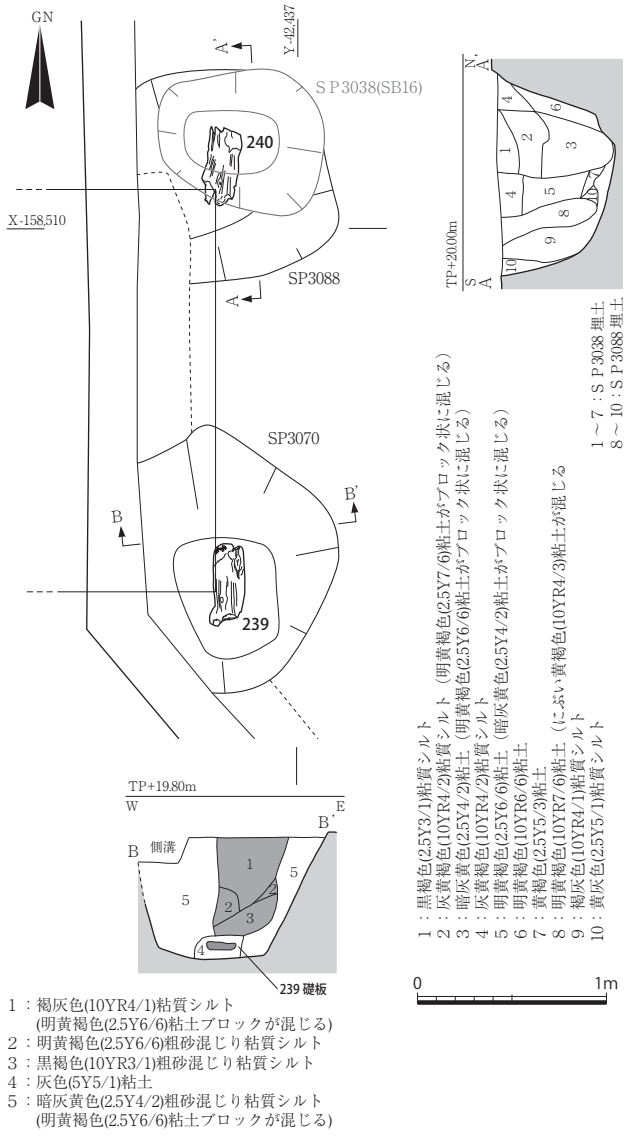
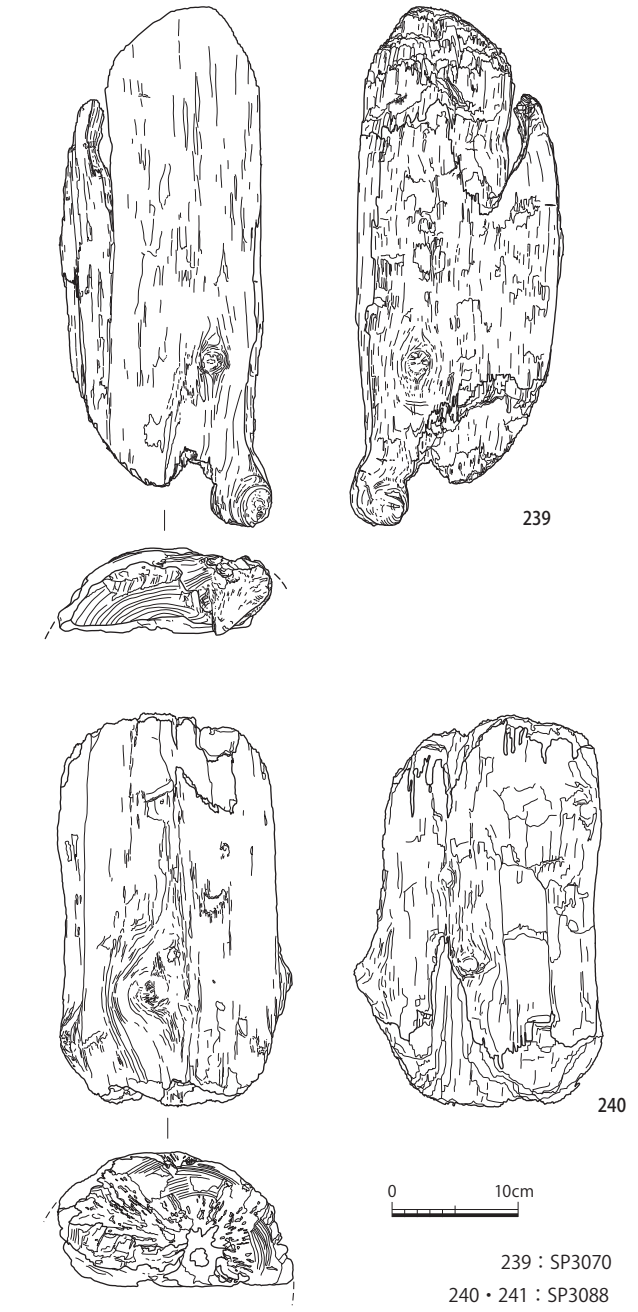


図58　SB11遺構図・断面図　1：40



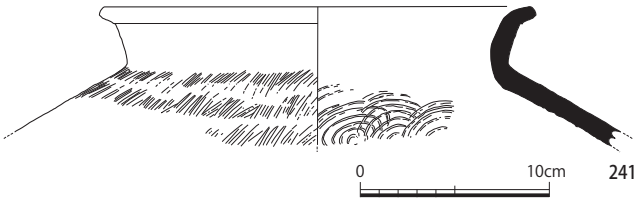


図59　SB11出土礎板・須恵器　1：6・1：4

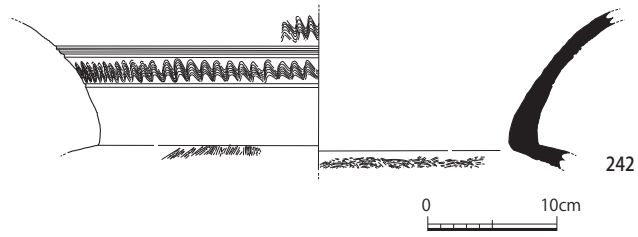
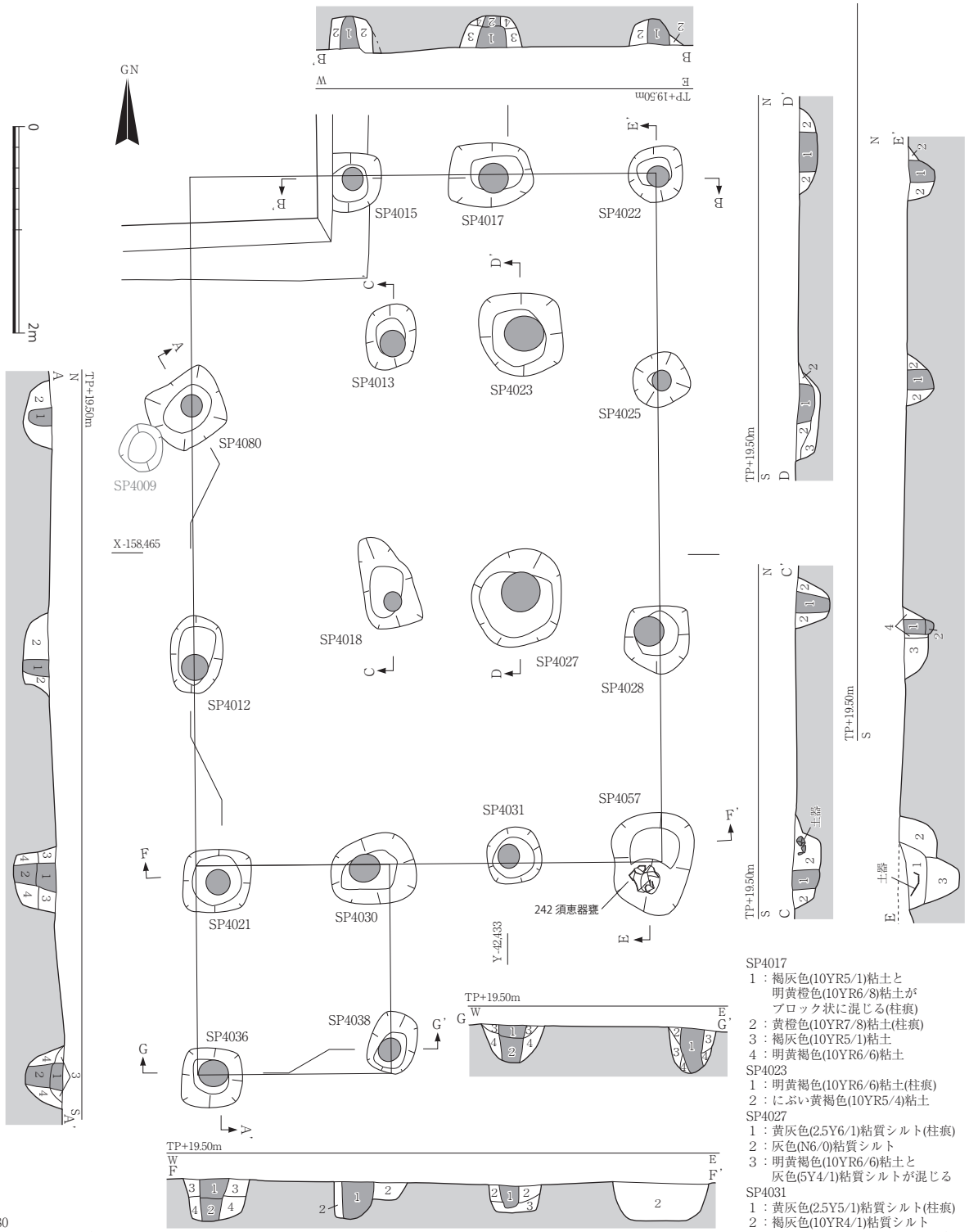


図60　SB12（SP4057）出土須恵器　1：6

4036が土師器・須恵器の破片、SP4017・4057から須恵器片が出土している。須恵器甕（242）は復元頸部径が34.0cmとなる大型品で、体部片は接合できなかったため図化していない。口縁部は強く外反し、外面に施文する。上から波状文・４条沈線・波状文・１条沈線の順で、施文前にカキメ調整を施した痕が観察できる。体部外面は平行タタキを施した後にナデ調整を施す。内面には同心円状タタキの当て具痕が残る。陶邑Ⅳ古～新段階に比定できる（図60）。

SB13（図62、図版６）　３Ｊ～Ｋで検出した身舎が南北３間×東西１間の掘立柱建物で、南面に廂をもつ。北端はトレンチで掘削されており、わずかに残存していたSP1152を含めて建物を復元した。身舎の柱間寸法は桁行1.60±0.43m、柱穴の深さは0.26～0.55mを測る。廂は桁方向の柱間寸法が0.75mと1.03m。遺物はSP1125から須恵器の破片が出土している。

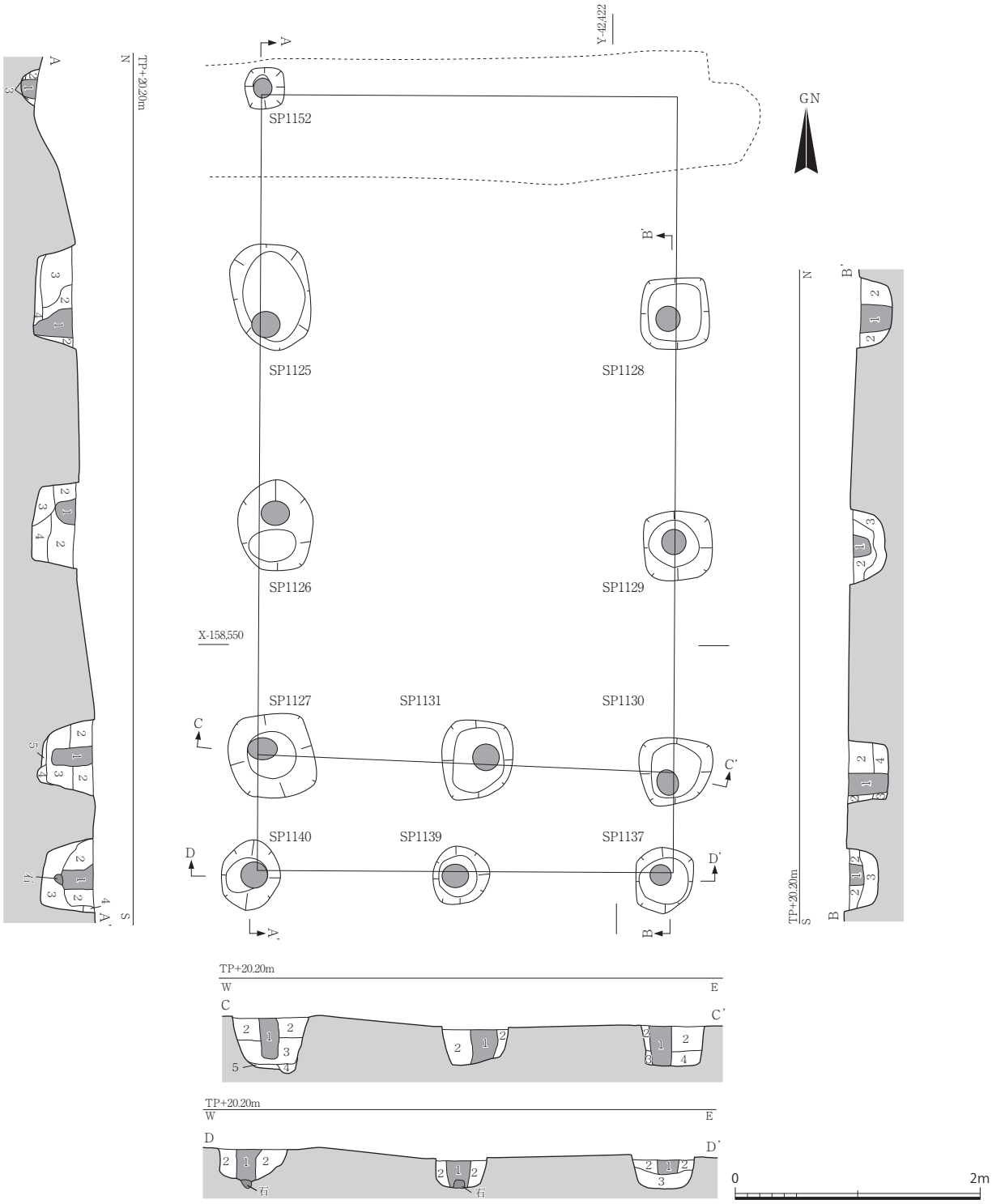


SP4080
1：灰色(7.5Y5/1)粘質シルトと
明黄褐色(10YR7/6)粘質シルトが混じる(柱痕)
2：明黄褐色(2.5Y7/6)粘土と
褐灰色(10YR5/1)粘土が混じる
SP4012
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(柱痕)
2：褐灰色(7.5YR5/1)粘質シルト
SP4021
1：灰色(5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄褐色(2.5Y5/4)粘質シルト(柱痕)
(灰色(5Y4/1)粘質シルトがブロック状に混じる)
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
4：黄褐色(2.5Y5/4)粘質シルト
(灰色(5Y4/1)粘質シルトがブロック状に混じる)
SP4036
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土(柱痕)
(黄褐色(2.5Y4/1)粘質シルトが混じる)
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
4：明黄褐色(2.5Y5/6)粘土

SP4015
1：黄橙色(10YR7/6)粘土と
黄灰色(2.5Y5/1)粘土がブロック状に混じる(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘土
SP4013
1：黄橙色(10YR7/6)粘土と
黄灰色(2.5Y5/1)粘土がブロック状に混じる(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘土
SP4018
1：黄橙色(10YR7/6)粘土と
灰黄褐色(10YR5/2)粘土がブロック状に混じる(柱痕)
2：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
SP4030
1：黒褐色(10YR3/1)粗砂混じる粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y6/1)粗砂混じる粘質シルト
SP4038
1：にぶい黄色(2.5Y6/4)粗砂混じり粘質シルト(柱痕)
2：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
3：明黄褐色(2.5Y6/6)粗砂混じり粘土
4：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂

SP4017
1：褐灰色(10YR5/1)粘土と
明黄橙色(10YR6/8)粘土が
ブロック状に混じる(柱痕)
2：黄橙色(10YR7/8)粘土(柱痕)
3：褐灰色(10YR5/1)粘土
4：明黄褐色(10YR6/6)粘土
SP4023
1：明黄褐色(10YR6/6)粘土(柱痕)
2：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土
SP4027
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰色(N6/0)粘質シルト
3：明黄褐色(10YR6/6)粘土と
灰色(5Y4/1)粘質シルトが混じる
SP4031
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
2：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
3：灰黄色(2.5Y6/2)粗砂混じり粘質シルト
SP4022
1：明黄褐色(10YR6/6)粗砂混じり粘質シルト
(柱痕)
2：灰色(7.5Y6/1)粘土
SP4025
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘土(柱痕)
2：褐灰色(10YR4/1)粘土と
明黄褐色(10YR5/6)粘土が混じる
SP4028
1：灰色(5Y4/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰白色(10Y7/1)粘土(柱痕)
3：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土と
黄灰色(2.5Y5/1)粘土がブロック状に混じる
4：灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト
SP4057
1：褐灰色(10YR6/1)粘質シルト
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルトと明黄褐色
(10YR6/6)粘土がブロック状に混じる
3：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト

図61　SB12遺構図・断面図　1：60



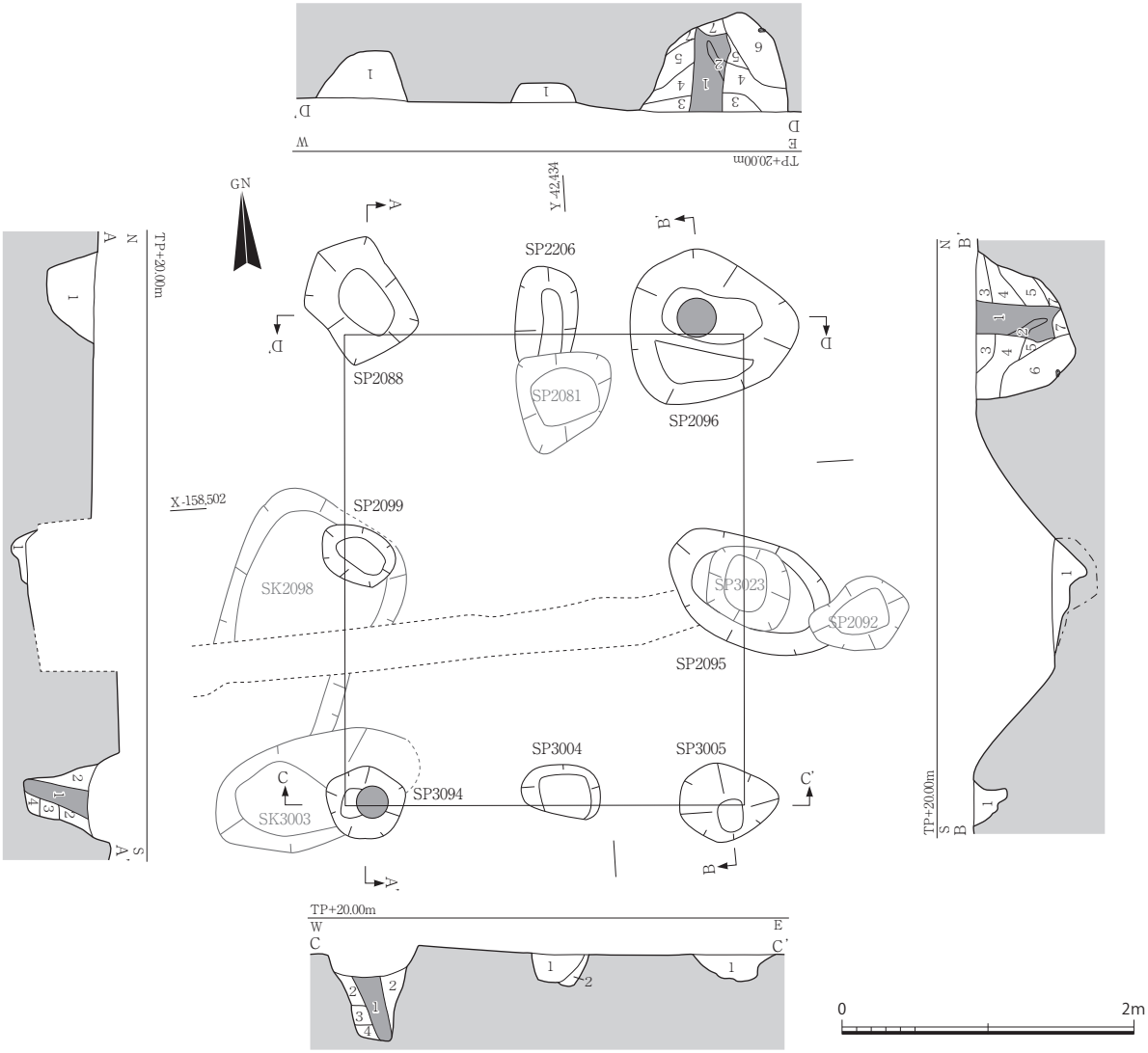
SP1152
1：褐灰色(10YR5/4)粘質シルト
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト
3：灰白色(N7/0)粘土
SP1125
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
2：褐色(7.5Y4/4)粘土
(褐灰色(10YR5/2)粘質シルトが混じる)
3：褐色(10YR4/4)粘質シルト
4：黄灰色(2.5Y5/1)粘土
SP1126
1：灰黄色(10YR4/2)粘土(柱痕)
2：褐色(10YR4/4)粘土
3：褐灰色(10YR6/1)粘土(NR1246)
4：灰黄色(2.5Y6/2)粘土
(明黄褐色(10YR6/6)粘土が
ブロック状に混じる)

SP1127
1：褐灰色(7.5YR5/3)粘土ブロック
明黄褐色(10YR6/6)粘土ブロック
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土ブロック
(黄灰色(2.5Y6/1)粘土が混じる)
3：灰色(5Y6/1)粘土
(褐灰黄色(2.5Y4/2)粘土ブロックが混じる)
4：黄灰色(2.5Y4/1)粘土
5：灰白色(7.5Y7/1)粘土
SP1140
1：黄褐色(2.5Y5/3)粘質シルト
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土
3：褐灰色(10YR5/1)粘土(NR1246)
4：褐色(10YR4/4)粘質粘土
SP1131
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土

SP1139
1：暗灰黄色(2.5Y5/3)粘土
2：褐灰黄色(2.5Y4/2)粘土に
明黄褐色(2.5Y6/6)粘土が
ブロック状に混じる
SP1128
1：灰白色(2.5Y7/1)微砂混じり
粘質シルト
2：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土
SP1129
1：褐色(10YR4/4)粘土
2：黒褐色(10YR3/2)粘土
3：灰白色(2.5Y7/1)粗砂混じり
粘土(NR1246)

SP1130
1：灰黄色(2.5Y6/2)粘土
2：明黄褐色(2.5Y5/6)粘土に
灰黄色(2.5Y6/2)粘土が
ブロック状に混じる
3：褐灰黄色(2.5Y4/2)粘土
4：灰色(5Y6/1)粘土に
明黄褐色(10YR6/6)粘土が
ブロック状に混じる
SP1137
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘土、
明黄褐色(2.5Y6/6)粘土が
ブロック状に混じる
2：明黄褐色(10YR6/8)粘土
3：灰白色(2.5Y7/1)粘土

図62　SB13遺構図・断面図　1：50



SP2088
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
SP2099
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
SP3094
1：黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混じり粘質シルト(柱痕)
2：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト
(明黄褐色(2.5Y6/6)粘質シルトがブロック状に混じる)
3：灰色(5Y4/1)粘質シルト
4：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土

SP2206
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
SP3004
1：灰色(5Y4/1)粘質シルト
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト

SP2096
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(柱痕)
2：黄褐色(10YR5/6)粘土
3：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
(黄褐色(10YR5/6)粘土ブロックが混じる)
4：黄褐色(10YR5/6)粘土
(灰黄褐色(10YR4/2)粘土が混じる)
5：黒褐色(2.5Y5/1)粘質シルト
6：黒褐色(10YR3/2)粘質シルト
7：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土
SP2095
1：灰色(5Y4/1)粘質シルト
SP3005
1：黄褐色(2.5Y5/3)粘土と
灰色(5Y4/1)粘土がブロック状に混じる

図63　SB14遺構図・断面図　1：50

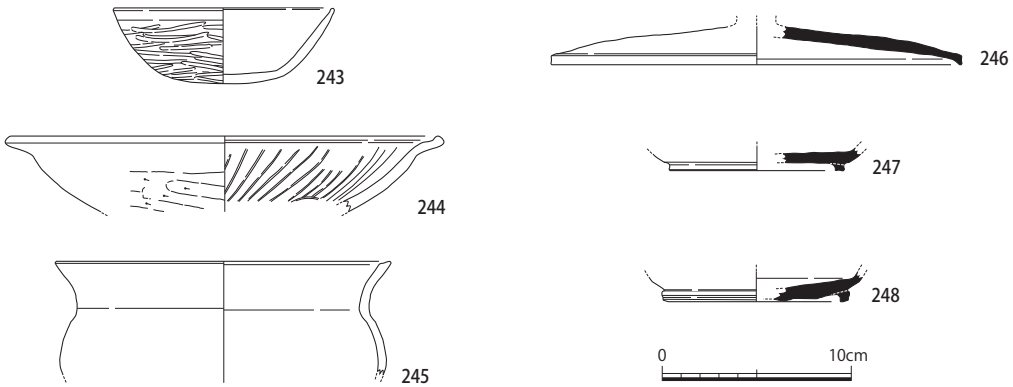
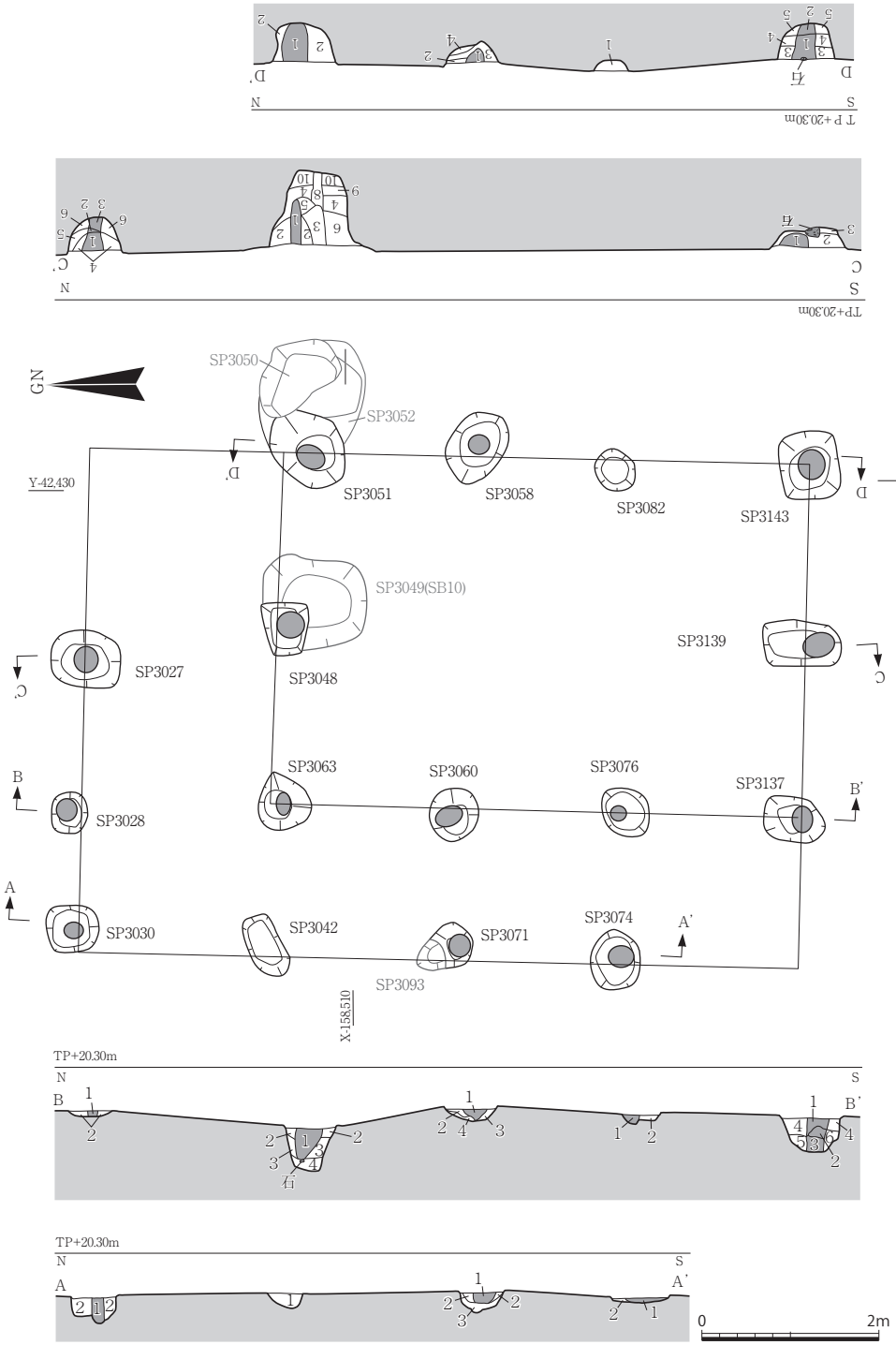


図64　SB14出土土師器・須恵器　1：4



SP3028
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(柱痕？)
2：浅黄色(5Y7/3)粘土
SP3063
1：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト
3：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
4：黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト
SP3060
1：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト(柱痕)
2：灰色(5Y6/1)粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
4：明黄褐色(10YR6/6)粘質シルト
SP3076
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
SP3137
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
2：明黄褐色(10YR6/6)粘土(柱痕)
3：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(柱痕) (明黄褐色(10YR6/6)粘土ブロックが混じる)
4：灰色(5Y5/1)粘質シルト
5：灰オリーブ色(5Y4/2)粘質シルト(明黄褐色(10YR6/6)粘土ブロックが混じる)
6：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土

SP3027
1：灰色(7.5Y5/1)粘質シルト(柱痕)(浅黄色(2.5Y7/4)粘質シルトブロック混じる)
2：灰色(5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
3：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
4：灰色(5Y4/1)粘質シルト(浅黄色(2.5Y7/4)粘質シルトブロックが混じる)
5：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
6：明黄褐色(10YR6/6)粘土(黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルトブロックが混じる)
SP3048・SP3049
1：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘土(柱痕)(SP3048)
2：灰色(5Y5/1)粘質シルト(SP3048)
3：浅黄色(2.5Y7/4)粘土(SP3049)
4：暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂混じり粘土(SP3049)
5：黒褐色(7.5YR3/1)粘質シルト(SP3049)
6：褐色(10YR4/4)焼土含む粗砂混じり粘土(SP3049)
7：明黄褐色(2.5Y7/6)粘土(SP3049)
8：灰色(5Y4/4)粘質シルト(SP3049)
9：明黄褐色(2.5Y6/6)粘土(SP3049)
10：オリーブ黒色(5Y3/1)粘土(SP3049)
SP3139
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
2：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y4/1)粘土

SP3051
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(柱痕)(明黄褐色(10YR6/6)粘土ブロックが混じる)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
SP3058
1：黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルト(柱痕)
2：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト
3：黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混じり粘質シルト
4：にぶい黄色(2.5Y6/4)粘質シルト
SP3082
1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
SP3143
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト(柱痕)
2：灰黄色(2.5Y6/2)粗砂混じり粘質シルト(柱痕)
3：褐灰色(7.5YR4/1)粘質シルト
4：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
5：黒褐色(10YR3/1)粘質シルト

SP3030
1：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
SP3042
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト

SP3071
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト(柱痕)
2：黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混じり粘土
3：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト

SP3074
1：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト(柱痕)
2：明黄褐色(10YR7/6)粘土

図65　SB15遺構図・断面図　1：80

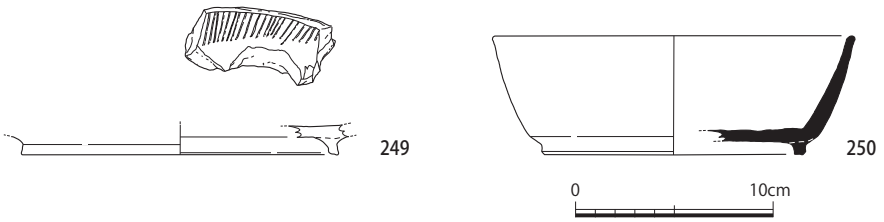


図66　SB15出土土師器・須恵器　1：4

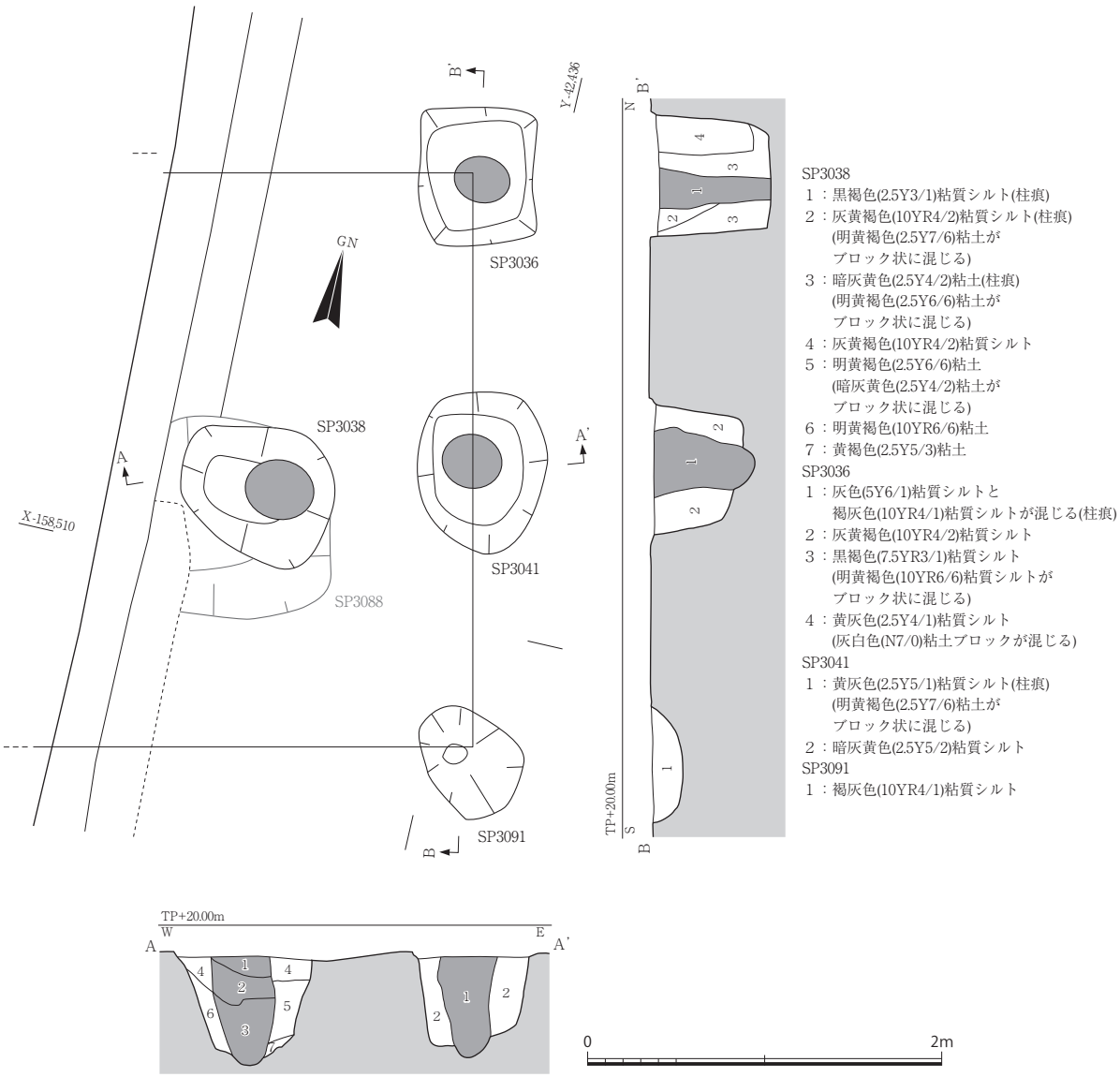


図67　SB16遺構図・断面図　1：40

SB14（図63、図版９）　２Ｆで検出した南北２間×東西２間の掘立柱建物で、総長は東西方向が短い。建物主軸は北で東に約4°6′振る。桁行の柱間寸法が1.68m±0.15m、柱穴の深さは0.15～0.68mを測り、南側のSP3004・3005が特に浅い。SP2095・2099・2206・3094が他の遺構に切られる。

遺物は、SP2088から土師器（244・245）・須恵器（248）・製塩土器、SP2095から須恵器、SP2096から土師器（243）・須恵器（246）・平瓦、SP2099から土師器・須恵器（247）、3004・3005から土師器・須恵器がそれぞれ出土している（図64）。土師器は、243が椀Aで口縁端部は外面に分割ヘラミガキを施し、内面にナデ調整を施す。口径11.7cm、器高4.0cm、径高指数29.6。SK3003出土の椀（413）と類似する。244は盤で、口縁端部を巻込む。外面にヘラケズリ調整を施し、口縁部内面に一段放射暗文を見込み部に螺旋暗文を施す。復元口径23.2cm。245は甕で口縁端部内側を面取する。内外面ともに摩滅激しい。復元口径17.6cm。いずれも８世紀後半の所産と考える。

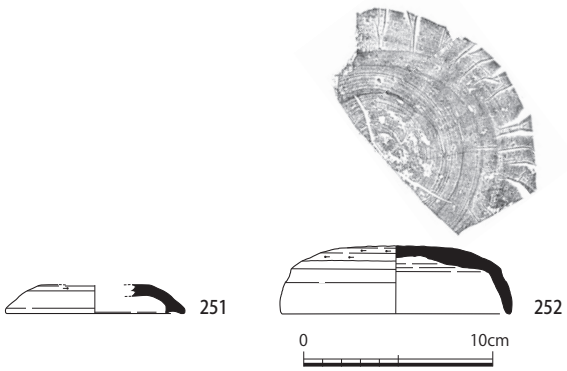


図68　SB16出土須恵器　1：4

須恵器のうち、246は蓋。天井部は不明瞭でかえりを持たず、復元口径21.8cm。247・248は杯B。247は底部外周端に直立する高台を付し、復元高台径9.2cm。248は底

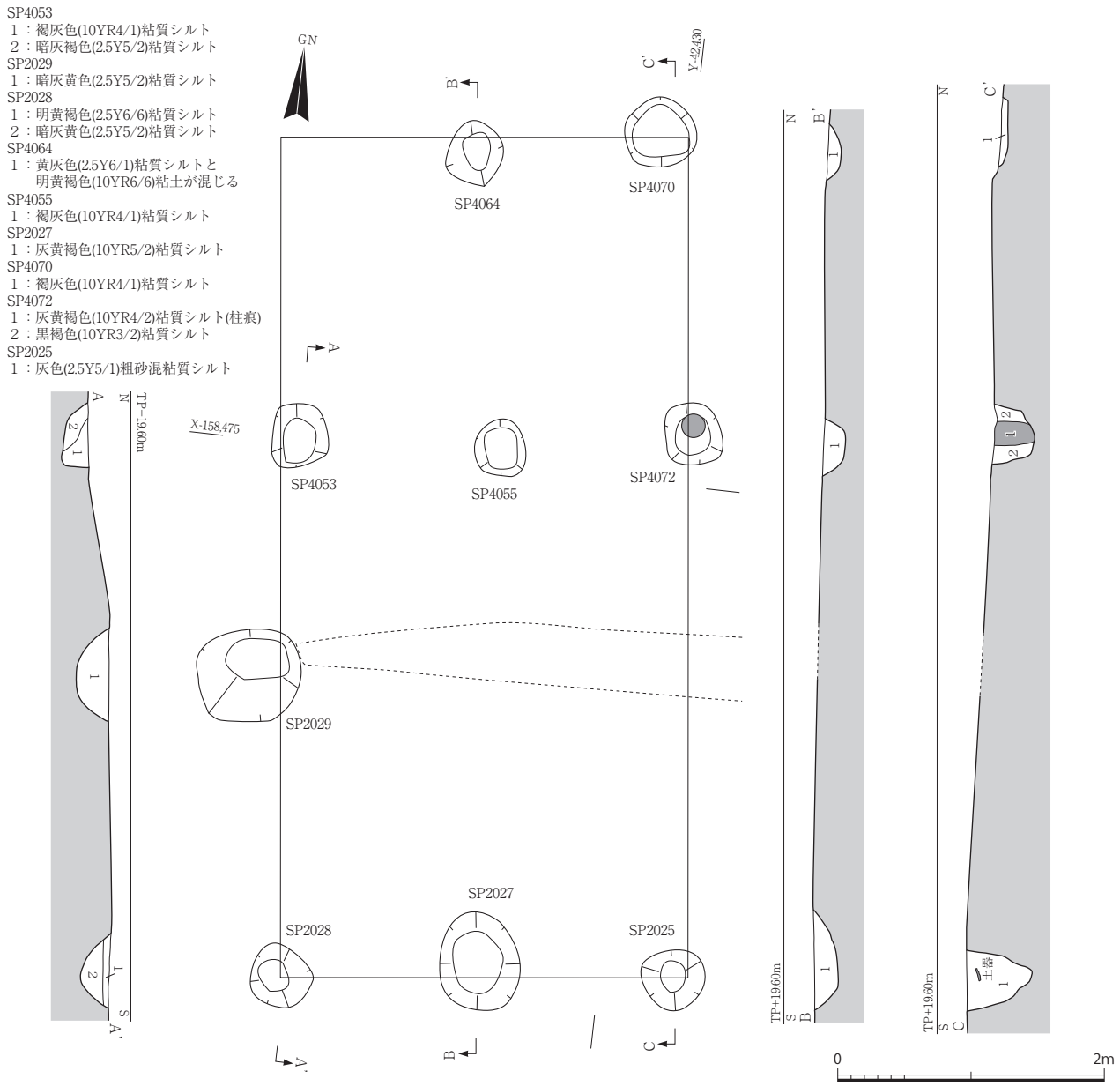


図69　SB17遺構図・断面図　1：50

部へラケズリ調整で底部と口縁部の境が不明瞭。

SB15（図65、図版８）　２～３Ｆ・２～３Ｇ区にまたがる身舎が南北３間×東西２間の掘立柱建物で、西と北の二面に廂がある。身舎は柱間寸法が梁行1.98±0.05m、桁行1.92±0.20mである。柱穴の深さは身舎四隅が0.41～0.52mで、他は0.12～0.17mと浅い。廂部分は0.06～0.40mと差が大きい。SP3048・3051・3139がいずれもSB10の柱穴を切り、SB10廃絶後に建てられたことが分かる。建物主軸は北東に約１°振る。８世紀中頃の建築または廃絶と考える。

遺物はSP3028・3048・3071・3137から土師器・須恵器、SP3030・3042・3058・3060・3063から土師器、SP3139から土師器・須恵器・平瓦の破片がそれぞれ出土している（図66）。８世紀中頃の所産と考える。SP3063出土の土師器杯B（249）は内面に一段放射暗文を施し、復元高台径15.4㎝。SP3139出土の須恵器杯B（250）は断面方形の高台を底部外周端に付す。復元口径18.0㎝、器高6.0㎝。底部に付着物があり、転用硯の可能性がある。陶邑Ⅴ新～Ⅵ古段階に比定できる。

SB16（図 67、図版８）　２Ｆ～Ｇで検出した南北２間×東西１間以上の掘立柱建物で、西側は調査区外に続く。梁行柱間寸法は平均 1.59m、柱穴の深さは南端の SP3091 のみ 0.17m、他は 0.6m ～ 0.65m である。身舎は南北１間で南面に廂をもつ。建物主軸は東で北に 12°42′振る。SP3038 が SB11 の柱穴を切っていることから、SB11 廃絶後に建てられたことが分かる。SB15 に近接するため建築時期は異なる可能性が高い。

遺物はSP3036・3038から土師器、SP3041・3091から

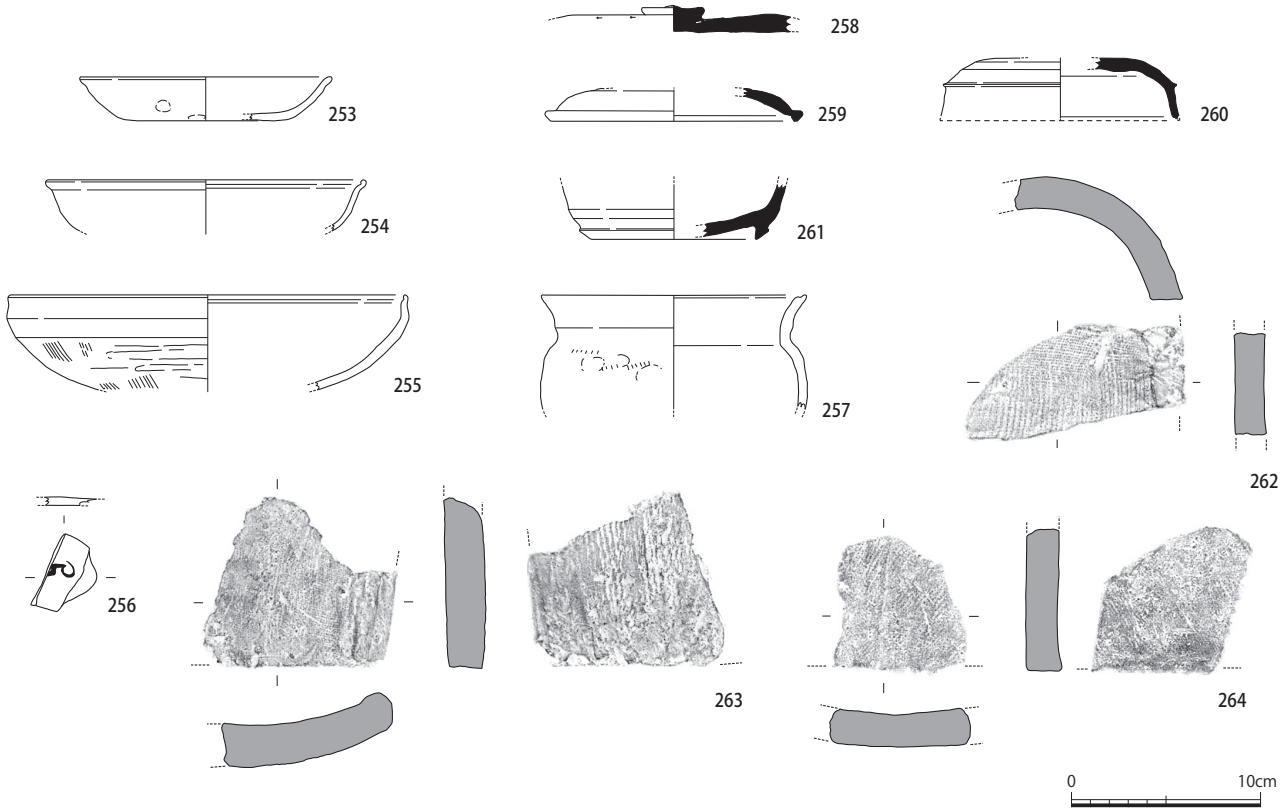


図70　SB17出土土師器・須恵器・瓦　1：4

須恵器が出土している。須恵器は251がSP3041から出土した須恵器杯G蓋。頂部を欠き、天井部は回転ヘラケズリ調整を施す。受部と同じ高さのかえりを持つ。252がSP3091から出土した杯H蓋で、底径11.8㎝、器高3.7㎝。外面天井部が回転ヘラケズリ調整でヘラ記号が刻まれており、それ以外は全て回転ナデを施す。

SB17（図69、図版９）　２～３Ｃで検出した南北３間×東西２間の掘立柱建物である。北西隅及び南から２列目の柱穴を欠くが、北西隅はSD2023の位置に、２列目はⅡ・Ⅳ区間に掘削した側溝にあたるため、削平された可能性がある。建物主軸は北で西に6°18′振る。柱間寸法は南北方向の南北端が2.3m、中央は1.8m、東西方向が1.5mを測る。柱穴の深さはSP2025が0.48m、SP4072が0.31mである以外は、0.20m前後である。SP4072以外は柱痕を確認できなかった。SP4070・4072はSX2019底部で検出したが、遺構検出写真を見ると柱穴らしきものがあり検討を要する。出土遺物より８世紀後半～９世紀初頭の建築または廃絶と考える。

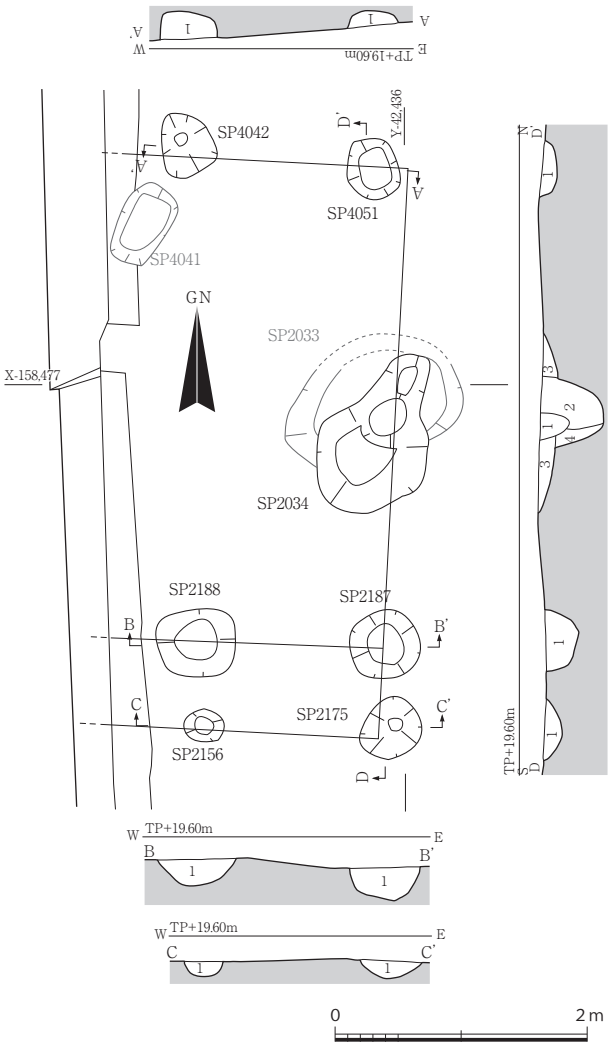
遺物はSP2025・2027から土師器、須恵器、平瓦、SP2029・4055・4064・4072から土師器・須恵器、SP2029から土師器が出土している（図70）。土師器は253が皿で口縁端部を丸くおさめる。内外面ナデ調整で、復元口径13.3㎝。254は杯Aで、口縁端部は巻込むがミガキを施さない在地的な個体で浅型。復元口径17.0㎝。255は鉢で、口縁部はヨコナデによる稜を持ち端部の巻込弱い。外面は稜より下が粗いミガキ調整を施す。内面調整は摩滅のため不明。復元口径21.2㎝。256は杯・皿類の底部で厚さ0.4㎝。判読不能の墨書がある。257は甕で口縁部の外反は弱く、端部内面を面取する。胴部外面はユビオサエの痕が残る。

須恵器は、258が杯B蓋で宝珠形つまみを持つ。259は杯蓋で復元口径13.0㎝。260は古墳時代の杯蓋で、稜をもつ。平坦な天井部に回転ヘラケズリを施す。復元口径12.6㎝、器高3.3㎝。261は杯Bで底部と口縁部の境が不明瞭。復元高台径8.7㎝。

瓦は、262が丸瓦で凹面に布圧痕を残し凸面はナデ調整を施す。263・264は平瓦で、263は凹面に布圧痕、凸面に縦縄タタキの痕を残す。厚さ2.1㎝。264は凹面の布圧痕の上からハケメ調整を施す。厚さ1.7㎝。

SB18（図71）　２Ｃで検出した身舎が南北２間×東西１間以上の掘立柱建物で、南面に廂をもつ。建物主軸は東で北に2°36′振る。Ⅱ区とⅣ区にまたがり検出され、西側は調査区外に続くと考えられる。身舎は梁行総長3.8m、桁行柱間寸法1.47・1.52m。廂と身舎の柱間寸法は0.64mである。柱穴の深さは身舎が0.14～0.49m、庇部分は0.12・0.16mである。主軸の振りが大きく８世紀後半以降に帰属し、長舎廃絶後の建築と考える。

遺物はSP2034から土師器・須恵器、SP4042・4051か



SP4042
1：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
SP4051
1：褐灰色(10YR5/1)粗砂混じり粘質シルト
SP2188
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
SP2187
1：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
SP2156
1：黒褐色(2.5Y3/1)粘土
SP2175
1：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト
SP2034
1：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト
2：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
3：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質シルト
4：黄褐色(10YR5/6)粘土

図71　SB18遺構図・断面図　1：60

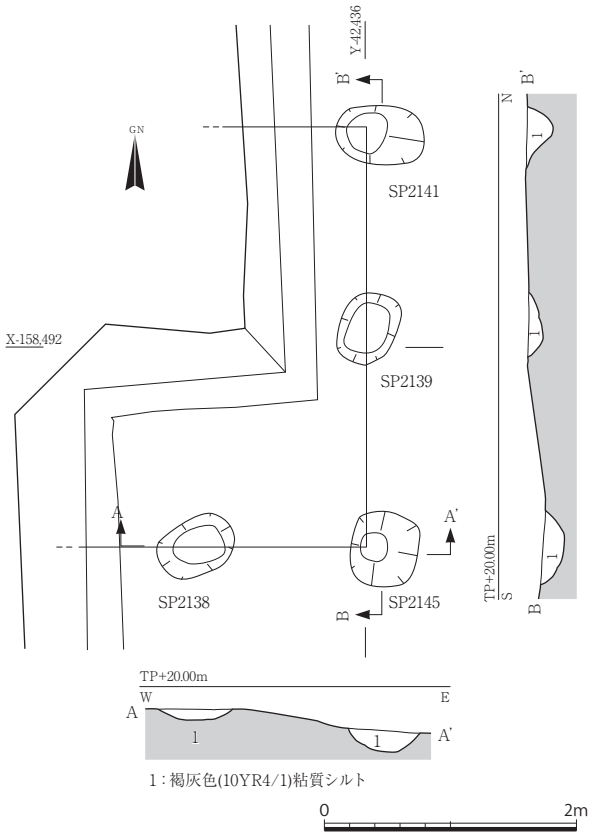


図72　SB19遺構図・断面図　1：60

から土師器の破片がそれぞれが出土している。土師器高杯（265）は脚柱部に８面または12面の面取を施す。杯部見込みに螺旋暗文を施す。８世紀の所産と考える（図73）。

SB19（図72）　２Ｅで検出した南北２間×東西１間以上の掘立柱建物である。西側は調査区外に続くと考え、建物主軸は判断し難い。柱間寸法は南北1.63m、東西1.49m以上である。柱穴の深さは0.2m前後と浅く、単層の堆積である。

遺物は、SP2138から土師器・須恵器・平瓦、SP2145から土師器・須恵器の破片がそれぞれ出土している。平瓦（266）は凹面に７条/cmの布圧痕を残し、凸面は５条/cmの縦縄タタキ痕を残す。厚さ0.23cm（図73）。

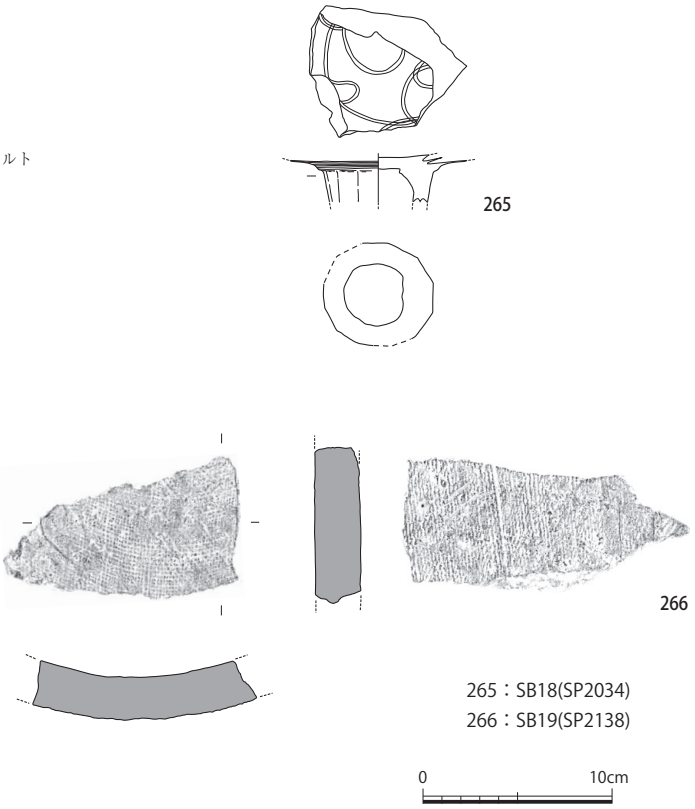


図73　SB18・19出土土師器・瓦　1：4

第６項　溝（SD）

SD1011（図74、図版10）　４Ｌ、５～６Ｋで検出した東西方向にやや蛇行して伸びる溝である。検出長17.3m、幅1.2m、深さ0.2mを測り、確認調査のトレンチ（Tr.１・５）と撹乱に切られる。断面形状は皿状を呈する。SB２を構成するSP1010と、SA２を構成するSP1012・1013に切られる。遺物は土師器と須恵器の破片が出土している。

SD1186（図74、図版10）　１～４Ｌで検出した東西方向の溝で、西側は調査区外に続く。検出長28m、幅1.6m、深さ0.27mを測る。断面形状は皿状を呈し、シルトの単層である。SB６・SB７を切るため、奈良時代中頃を上限とする。遺物は土師器・須恵器の細片が出土している。

SD1021[1065・1231]（図75、図版10）　４Ｋ～Ｌで検出した北西－南東方向の溝で、南端は調査区外に続く。検出長15m、幅0.2～9.0m、深さ0.25mを測る。断面形状は皿状を呈する。NR1246を切り、SD1011・1022・1151・1186に切られる。遺物は土師器・須恵器・製塩土器が出土しており（図76）、検出時に出土した甕（274）はSB６のSP1213出土破片と接合した。須恵器は、269が古墳時代の有蓋高杯の蓋。268は杯H蓋で天井部にヘラ記号を刻む。270・271は杯G蓋で、頂部を欠く。かえりは受部より内側にある。272は杯Gで、復元口径9.0cm。口縁が直立する。273は杯Aの底部。274が台付きの甕で列点文の上下に沈線が巡る。275は平底の甕。外面は平行タタキのちナデ調整で、内面はナデ調整を施す。製塩土器（267）は筒型のタイプで、口縁端部を内側に巻込み、内外面ナデ調整を施す。

SD1022（図77、図版10）　４Ｉ～Ｌで検出した南北方向の溝である。南北両端とも調査区外に伸びるが、北側はⅢ区で延長を確認できなかった。SD1021・1092、SK1091などを切る。検出長29.0m、幅1.5m、深さ0.21～0.32mを測る。断面形状は皿状。帰属時期は奈良時代以降である。

遺物は土師器と須恵器が出土している（図78）。土師器は鍋の把手（276）と思われる　須恵器は277が杯A。278が杯Bで、底部外周端に高台を付す。279は無文の甕で、底部はやや尖り気味である。281～283は壺。280は鉢の底部。284は鉢で、口縁端部は内傾する。復元口径22.8cm。体部に沈線を２条巡らし、下半はヘラケズリ調整を施す。285は甕で、体部外面は平行タタキのちカキメ調整を施し、内面は同心円状当て具痕が残る。

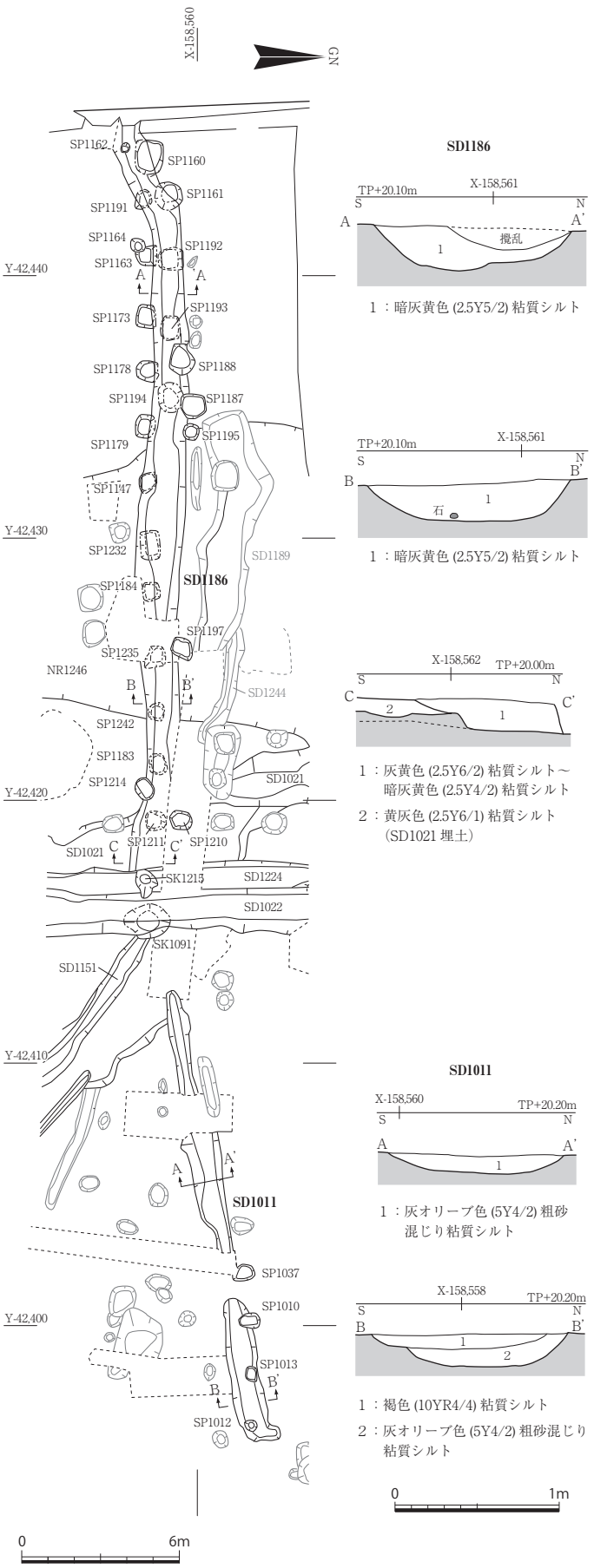


図74　SD1011・1186遺構図・断面図　１：250・１：40

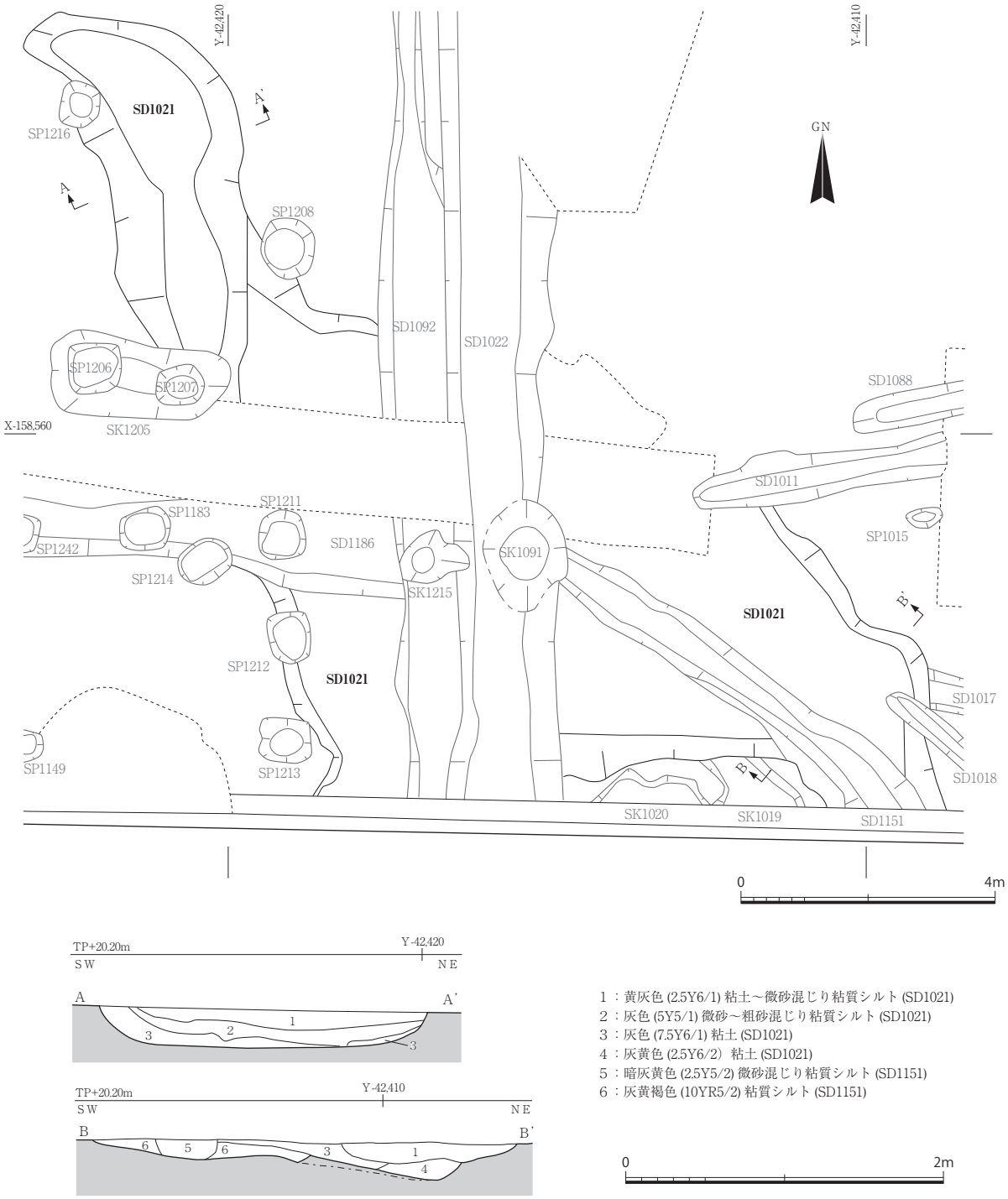


図75　SD1021遺構図・断面図　1：100・1：40

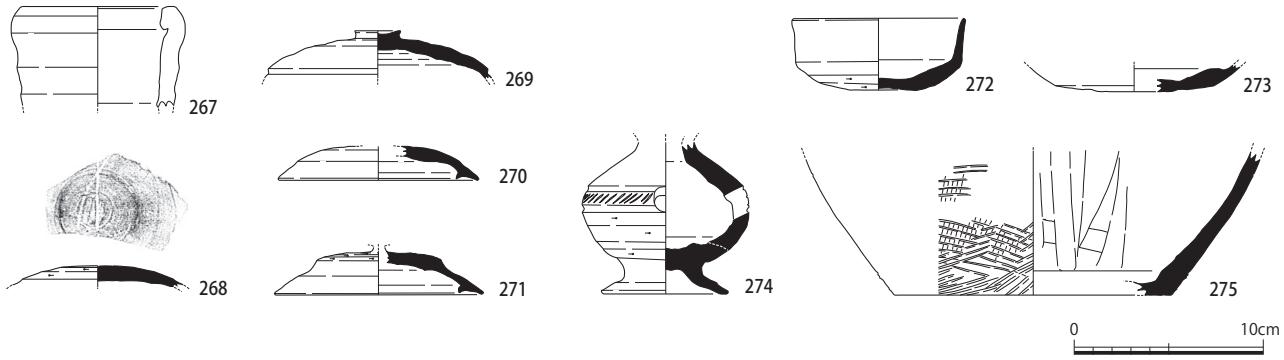
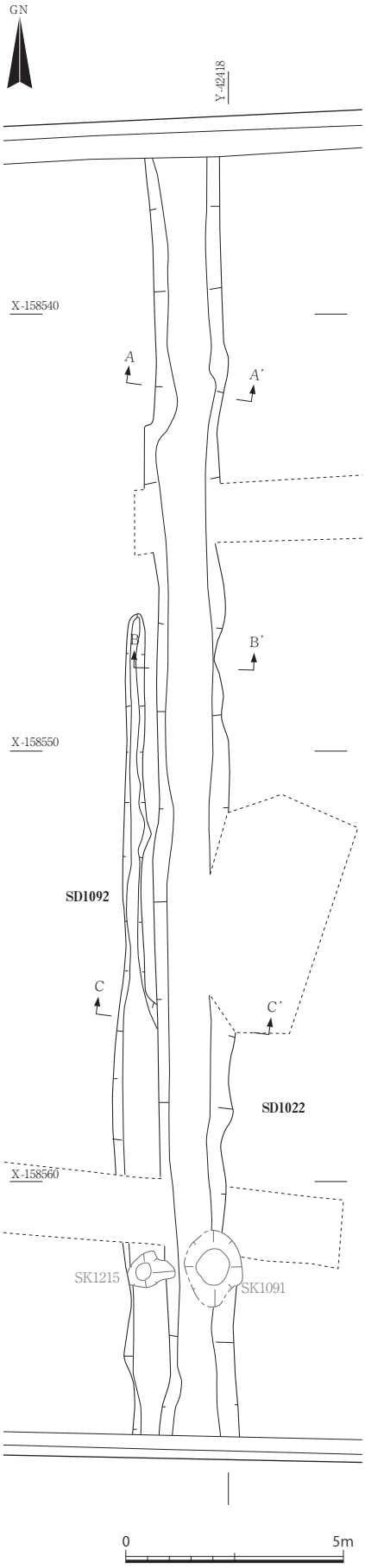
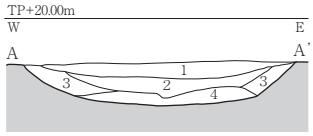
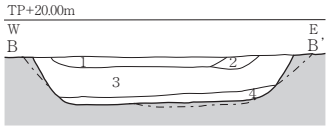


図76　SD1021出土製塩土器・須恵器　1：4

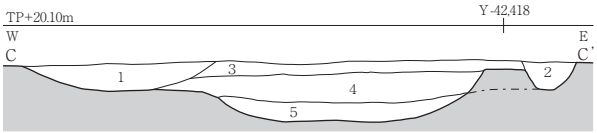




1：灰黄色 (2.5Y6/2) 微砂混じり粘質シルト
2：灰色 (5Y6/1) 微砂混じり粘質シルト
3：黄灰色 (2.5Y6/1) 微砂混じり粘質シルト
4：黄灰色 (2.5Y5/1) 微砂混じり粘質シルト



1：灰黄色 (2.5Y6/2) 微砂混じり粘質シルト
2：黄褐色 (2.5Y5/4) 粗砂混じり粘質シルト
3：灰色 (5Y6/1) 微砂混じり粘質シルト
4：灰色 (5Y5/1) 粗砂混じり粘質シルト



1：黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂混じり粘質シルト（ＳＤ1092）
2：灰色 (5Y5/1) 粗砂混じり粘質シルト (撹乱)
3：灰黄色 (2.5Y6/2) 微砂混じり粘質シルト
4：灰色 (5Y6/1) 微砂混じり粘質シルト
5：暗灰黄色 (2.5Y5/2) 微砂混じり粘質シルト

0　2m

SD1064（図79）　６Ｉで検出した「Ｌ」字状を呈する溝である。北は調査区外に続く。検出長は南北4.4m、東西3.4m、幅0.5～0.8m、深さ0.08mを測り、断面は皿状を呈する。須恵器甕（286）が出土している。

SD1092（図77）　４Ｊ～Ｌで検出した南北方向の溝で、SD1022に併行する。南側は調査区外に続く。検出長19m、幅1.05m、深さ0.14ｃｍを測る。断面形状は皿状を呈し、埋土は単層である。SD1022を切る。

SD1189（図81、図版10）　２～３Ｋで検出した東西方向の溝で、東端が確認調査のトレンチ（Tr.５）に削平される。検出長9.0m、幅2.2m、深さ0.16mを測り、断面は皿状を呈する。SD1244とNR1246を切る。埋土は黄灰色粘質シルトの単層である。８世紀の須恵器と軒丸瓦が出土している（図82）。287は須恵器杯Ａの底部。289は須恵器甕の口縁部で端部が下方に垂れる。軒丸瓦（288）は青谷式の複弁蓮華文軒丸瓦で８世紀中頃。

SD2002[4077]（図83、図版10）　４Ａ～Ｆにかけて南北方向に延び、直角に向きを変え４～６Ｆにかけては東西方向に延びる溝である。長さは南北方向47m、東西方向25m、深さは0.28～0.40mを測る。断面形状はV字、Ｕ字、逆台形と地点により異なる。NR1246、NR2005を

図77　SD1022・1092遺構図・断面図　１：150・１：40

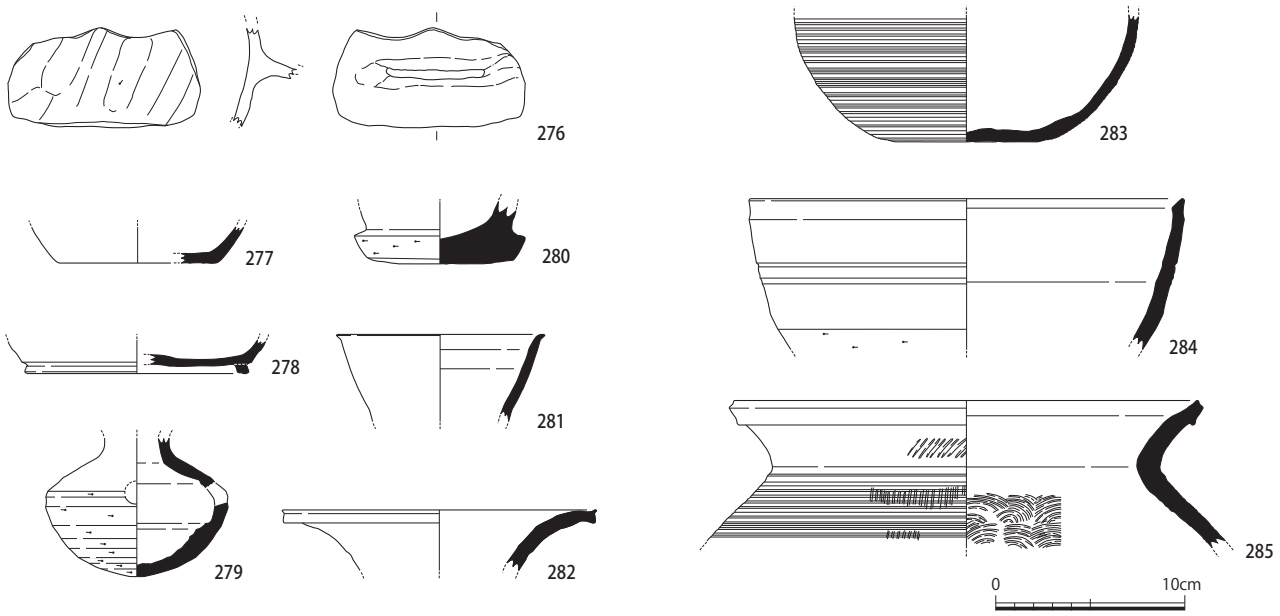


図78　SD1022出土土師器・須恵器　1：4

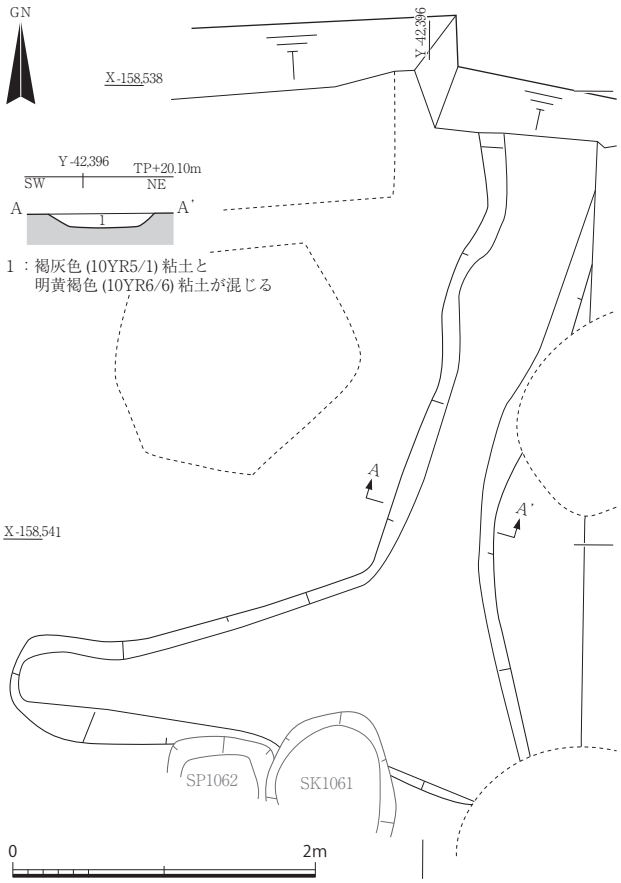


図79　SD1064平面図・断面図　1：50

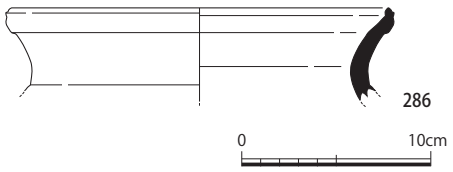


図80　SD1064出土須恵器　1：4

切る。コーナー部分はほぼ直角に曲がるが、東西・南北方向とも蛇行してのびる。

出土遺物は、290が土師器椀A。内外面ナデ調整を施し、底部外面はユビオサエ。口径11.4cm、器高4.2cm、傾向指数36.8。難波Ｖ新段階に比定できる。291は長脚二段透かしの須恵器高杯で６世紀後半の所産。

当遺構の埋土については花粉分析をおこなっており、その成果を第５章第３節に掲載している。

SD2003　６F～Gで検出した溝であるが、形状がやや不定形で落ち込みの可能性もある。７～８世紀の須恵器杯B（294）・杯G（293）・杯H（292）、小型壺（295）、漆容器（296）が出土している（図84）。

SD2014[4001]（図85、図版11）　４Ｃ～Ｆ・３Ｅ～Ｆで検出した南北方向の溝である。長さ35.2m、幅4.0m、深さ0.14mを測る。埋土は粘質シルト～粘土で、上層は粗砂が混じる。NR1246とSX2019を切る。

遺物は７～９世紀前半の土師器、須恵器、平瓦が出土している。土師器は杯C（297）で、内面に一段放射暗文を施す。復元口径12.4cm。須恵器は298・299が杯Bで、298は復元口径14.9cm。壺（300・301）は高台底部に糸切り痕が残る。平瓶（302）は体部が扁平球形。甕（303）は自然釉がかかり、他の個体が溶着している。

SD2018[4003]（図129、図版11・14）　３Ｃ～Ｄで検出した南北方向の溝である。長さ19.4m、幅2.4m、深さ0.25mを測る。埋土は褐灰～黒褐色粘土と粘質シルト混じり粗砂である。SX2019、SD2016・2017・2023、SK2198を切る。遺構図はSX2019と同頁に掲載した。

遺物は奈良～平安時代前半の土師器・須恵器・緑釉陶

器壺・平瓦が出土している（図86）。奈良時代の遺物は元来SX2019の埋土中にあったと思われる。

土師器は、305～307が杯B。305は口縁部がわずかに内彎し、端部を丸くおさめる。外面には太めのヘラミガキを施す。復元口径15.7㎝。306は底部より外方にまっすぐ開く口縁部で、外面はユビオサエをナデ消している。甕は体部外面をユビオサエ後にナデ調整する311とタテハケ調整する312がある。313は高杯の脚柱部で面取を９面施し、内面はナデ調整を施す。

須恵器は、308が杯Bで内彎する高台を付す。壺は、309が直立する口縁部で体部内面には当て具痕が残る。310は底部に糸切り痕が残る。甕（315・316・318）は、318が体部内面の当て具痕を丁寧にナデ消している。

緑釉陶器（314）は壺の頚部。平瓦（317）は凹面に布圧痕、凸面に縦縄タタキの痕跡を残す。厚さ2.1㎝。

また、SD2018・SX2019検出時に出土した資料についても掲載する（図87）。土師器は、323が皿A。口縁内面に横方向のミガキを施す。外面はナデを施すが、底部にユビオサエ痕が残る。復元口径21.6㎝、器高3.0㎝。324は杯B。口縁端部の巻込は弱く直立する高台を付す。内面はハケ調整をナデ消しており、外面はナデ調整。復元口径22.6㎝。325は甕。復元口径27.2㎝。

須恵器は、320が復元口径25.6㎝の杯蓋。321は皿Aで、復元口径19.8㎝。322は杯Bで復元口径12.6㎝。

SD2023[4005]（図88、図版11）　２Ｂ～３Ｃで検出した北西―南東方向に走る溝である。検出長17.7m、幅0.70m、深さ14ｃｍを測る。溝は調査区外の更に北西へと続いている。北西部は重複して溝が掘られ、幅が1.2mと広くなっている。断面「Ｕ」字状を呈する。SD2018、SX2019とSB17を構成するSP4055等に切られているが、ＳＸ2019底面で溝の残欠を確認できた。SD2018に切られているため、SD2016・2017が同一遺構か判断することができない。SD2016が延長上に位置するが、埋土はSD2017と類似する。調査担当者によると、調査地より北西200mの南新町遺跡Ｃ６－３－10で検出された道路側溝（図９）と繋がる可能性がある。

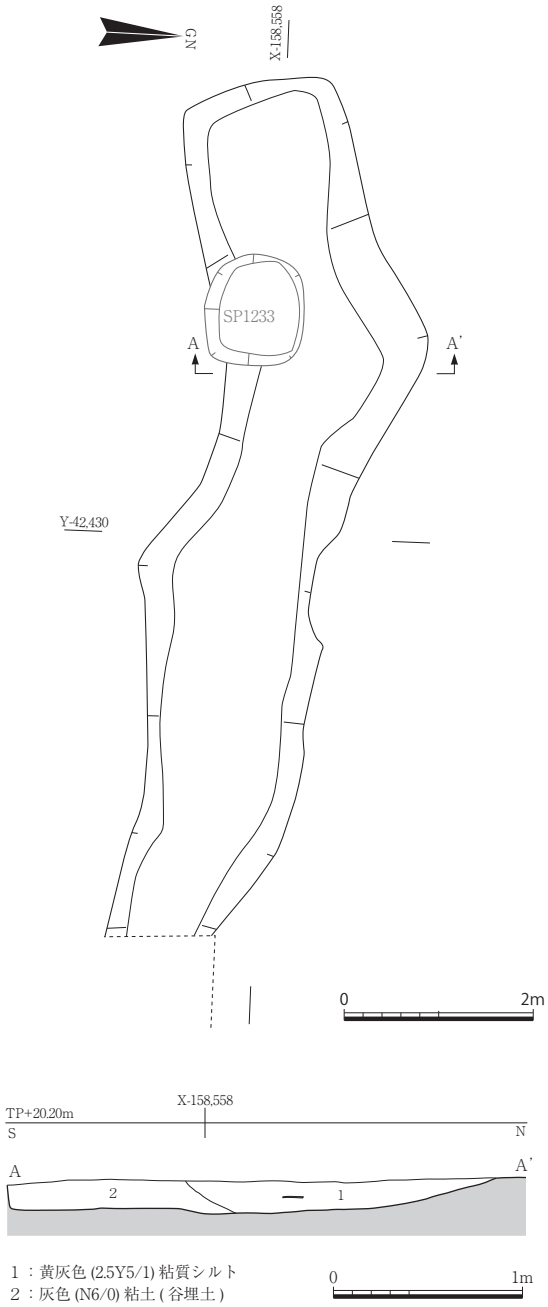


図81　SD1189遺構図・断面図　１：80・１：40

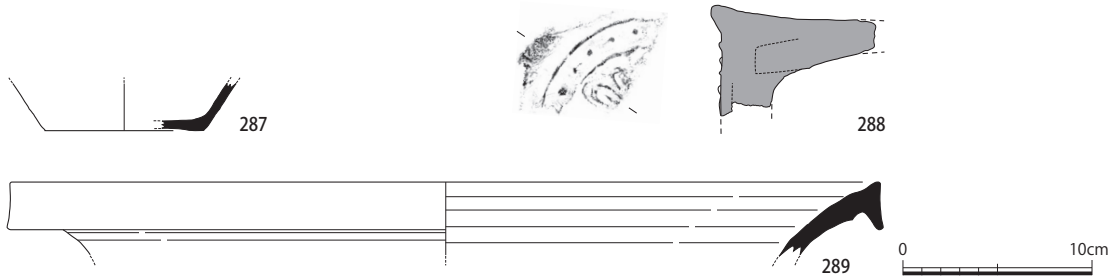


図82　SD1189出土須恵器・瓦　１：４

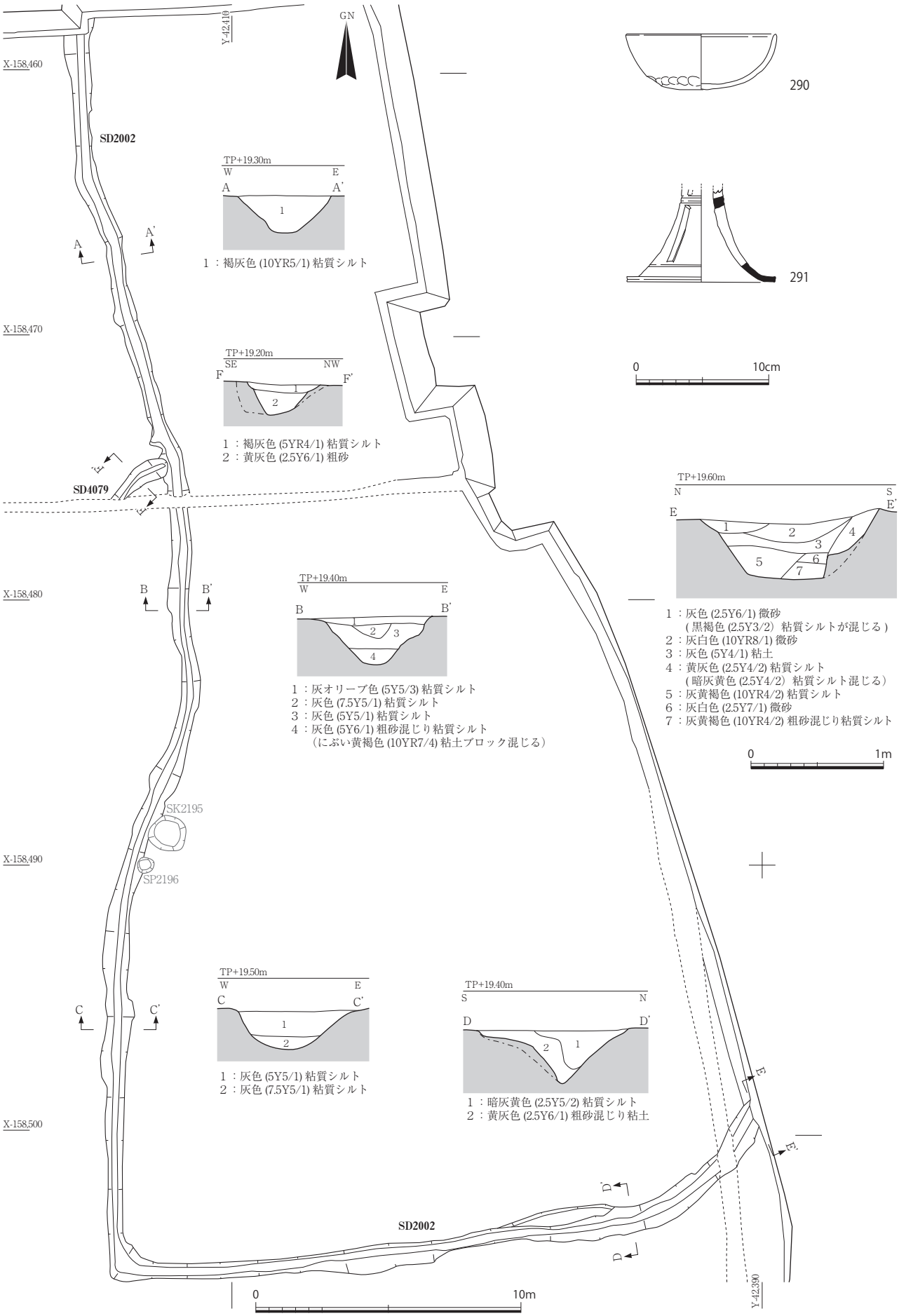


図83　SD2002・4079遺構図・断面図及び出土土師器・須恵器　1：200・1：40、1：4

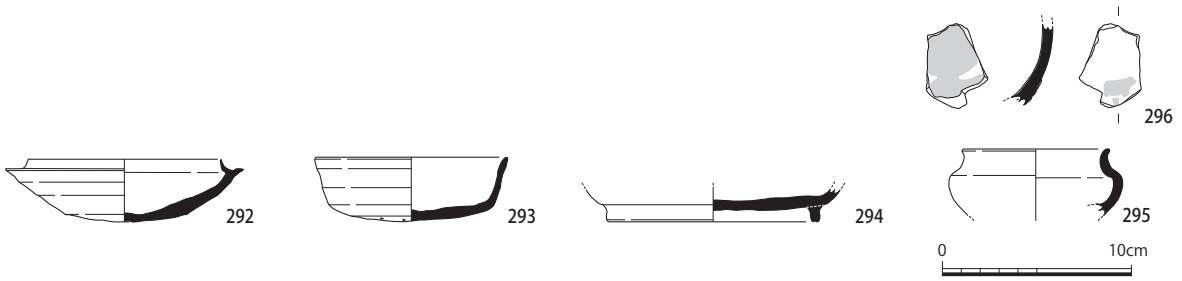


図84　SD2003出土須恵器　1：4

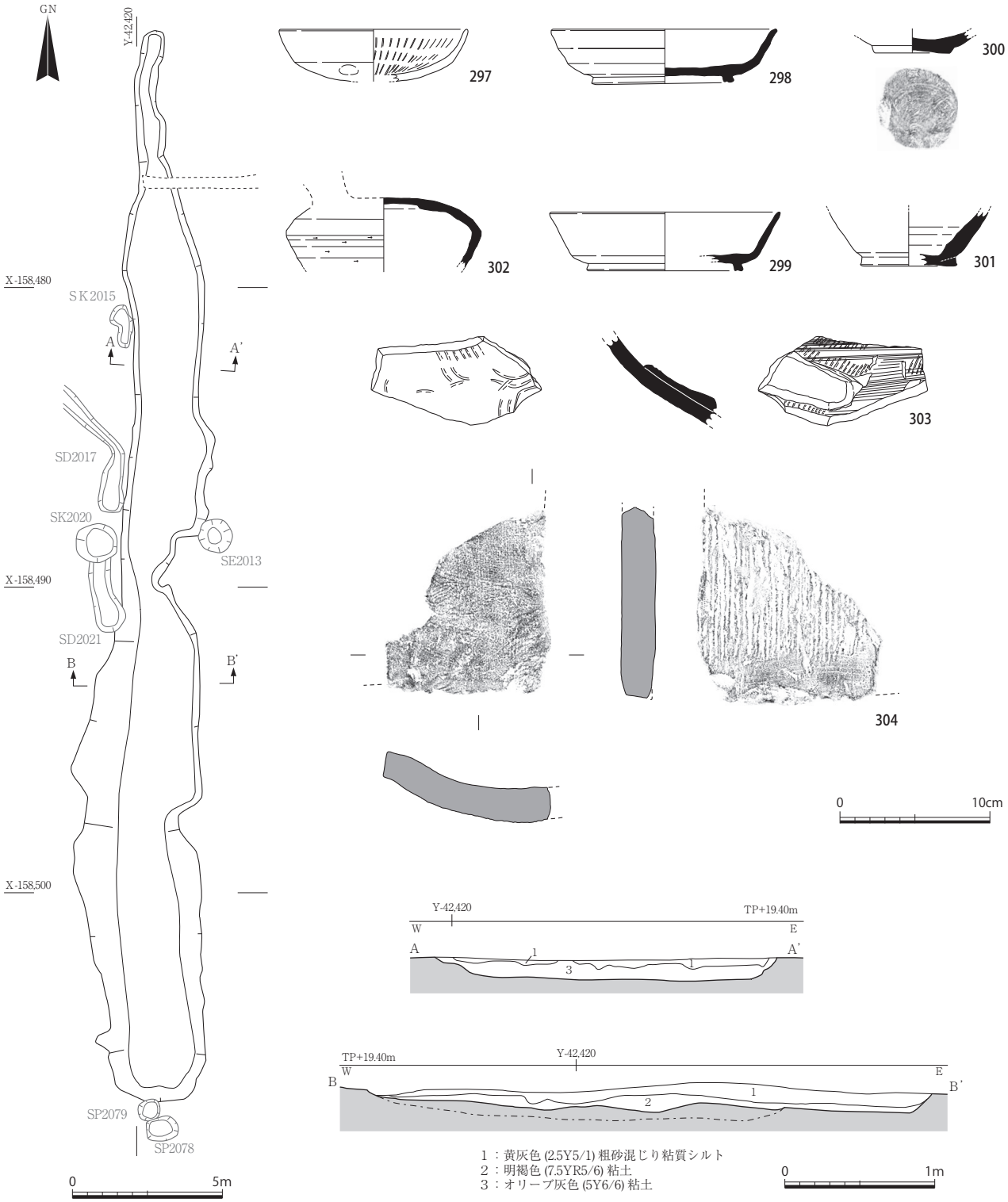


図85　SD2014遺構図・断面図及び出土土師器・須恵器・瓦　1：200・1：40、1：4

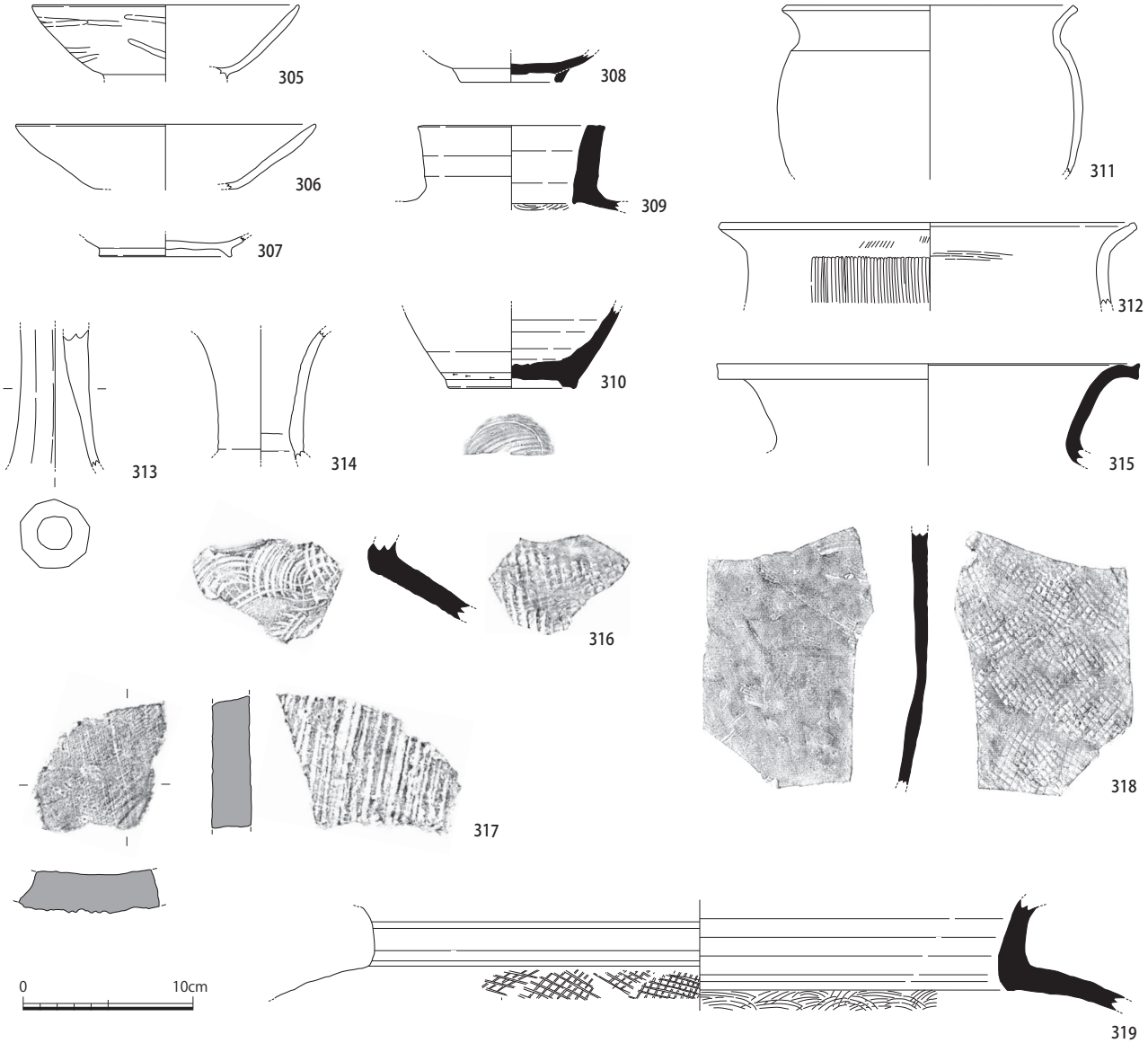


図86　SD2018出土土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦　1：4

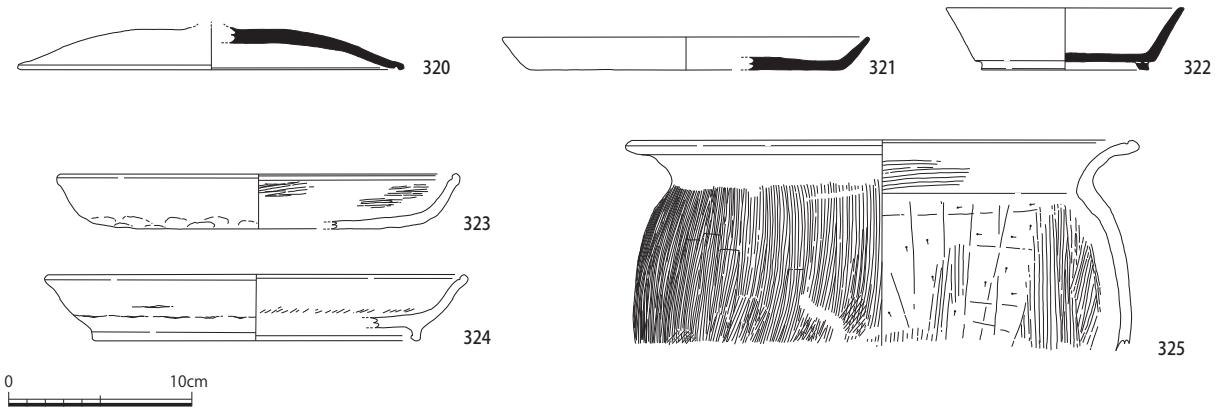


図87　SD2018・SX2019検出時出土土師器・須恵器　1：4

遺物は土師器・須恵器・平瓦が出土している（図89）。須恵器杯Hは他遺構に切られていないⅣ区西端で出土し、土師器甕（327）は調査区西壁より出土。平瓦は330が断面Aのアゼより出土しており、331は本来SD2018・SX2019に帰属する可能性がある。

土師器は、326が甑。把手部は成形時のユビオサエ痕を残す。327は長胴甕で、外面は摩滅が激しい。口縁部をヨコナデ調整により丸くおさめる。内面は胴部に縦方向のヘラケズリ調整を施す。復元口径21.2cm、胴部最大形23.0cm。

須恵器は杯Hで、立ち上がりは内傾し底部にヘラケズリを施す。328はやや尖り底で復元受部径11.8cm、復元外端径13.4cm、器高3.8cm。329は平底で復元受部径12.6cm、復元外端径14.0cm、器高3.7cm。

平瓦は凹面に布圧痕、凸面に縦縄タタキの痕跡を残す。330は凹面に残る布目が７条/cmで、凸面に残る縄目が４条/cm。厚さ1.6cm。331は凹面に残る布目は７～８条/cmで、全体に糸切り痕が残る。また、幅1.7～2.1cmの枠板痕が残っている。凸面に残る縄目は３本・1.5～２条/cmで、叩き板原体の残存最大幅は５cm。部分的にハケメ調整でタタキ痕を消し、離れ砂と思われる付着物が見られる。端面と側面にはケズリ調整を施す。厚さ2.0～2.3cm

SD2091［3006］（図90）　２Ｅ～Ｆで検出した平面「Ｌ」字状を呈する溝である。長さは南北方向10.5m、東西方向8.5m、幅は2.2m、深さ0.12～0.28mを測る。断面形状は皿状～逆台形状を呈する。SE2073、SB３（SP2202・2084・3009・3012）、SB14（SP3004・3005・3094）などに切られる。

遺物は８世紀後半の土師器・須恵器・瓦・不明銅製品が出土している（図91）。土師器は336が杯A。口縁部の巻込は弱い。風化が激く、内面に放射暗文がわずかに見える。底面はナデ調整が施される。復元口径17.0cm、器高4.9cm。難波Ｖ古段階に比定できる。335は竈。334は甕で、口縁部は外反し端部を四角く面取する。体部外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整を施す。外面に黒斑が見られる。

須恵器は、332が須恵器杯蓋。ボタン状で中央が窪むつまみを付す。333は小型壺で、高台径3.6cm。

平瓦（338）は、凹面に７条/cmの布圧痕が残り、凸面は４条/cmの縦縄タタキの痕が残る。端部を面取りする。厚さ1.6cm。不明銅製品（337）は幅1.5cm、厚さ0.2cmで、折り曲げ部分の長さは1.5cm。

SD2107（図92、図版11）　２Ｅで検出した東西方向の溝である。検出長３m、幅1.5m、深さ0.28mを測る。西側は調査区外に続き、東側をSK2072、北側をSD2108に切られている。断面形状は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質シルトの単層である。遺物は土師器・須恵器の破片が出土した。

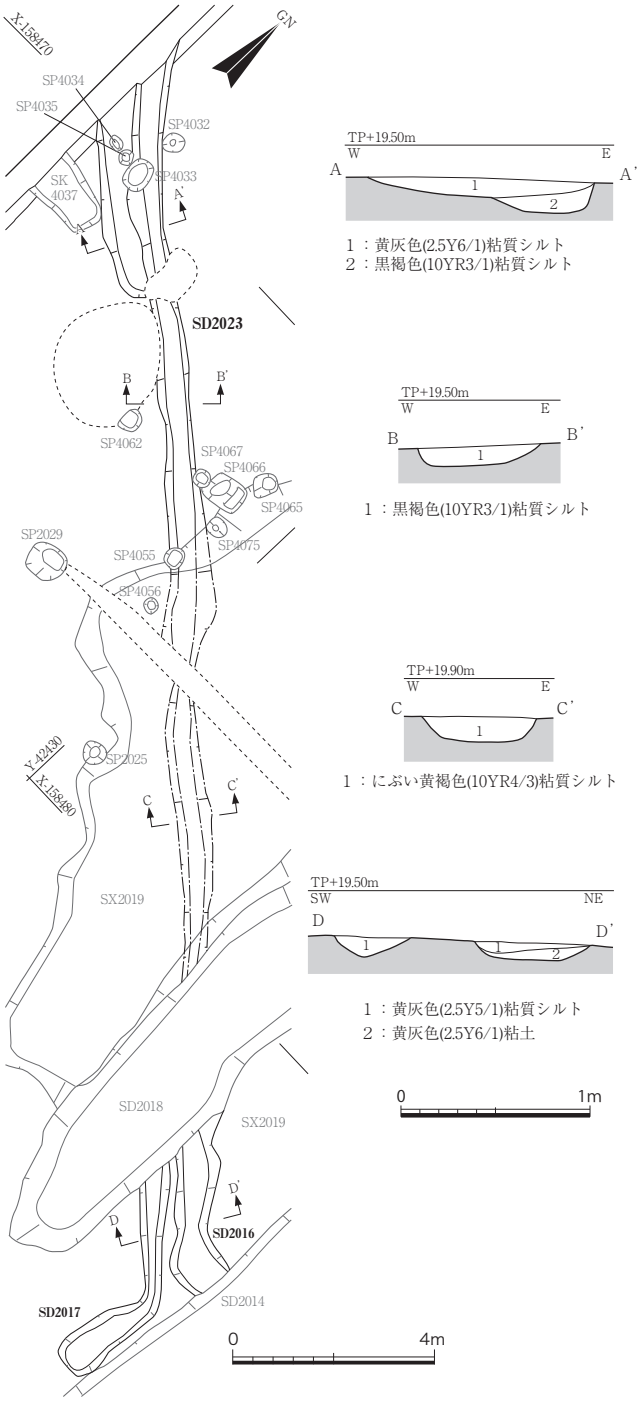


図88　SD2016・2017・2023遺構図・断面図　1：150・1：40

SD2108・2135・2136(図92・図版11)　２Ｅで検出した東西方向の溝で、間隔は1.6～1.7m。西側は調査区外に伸びる。東側をSK2072とSB09を構成するSP2144に切られる。それぞれ南北方向の溝でつながり、切り合い不明。同時に開口していた可能性もある。７世紀に帰属し、遅くとも８世紀に埋没したと考える。

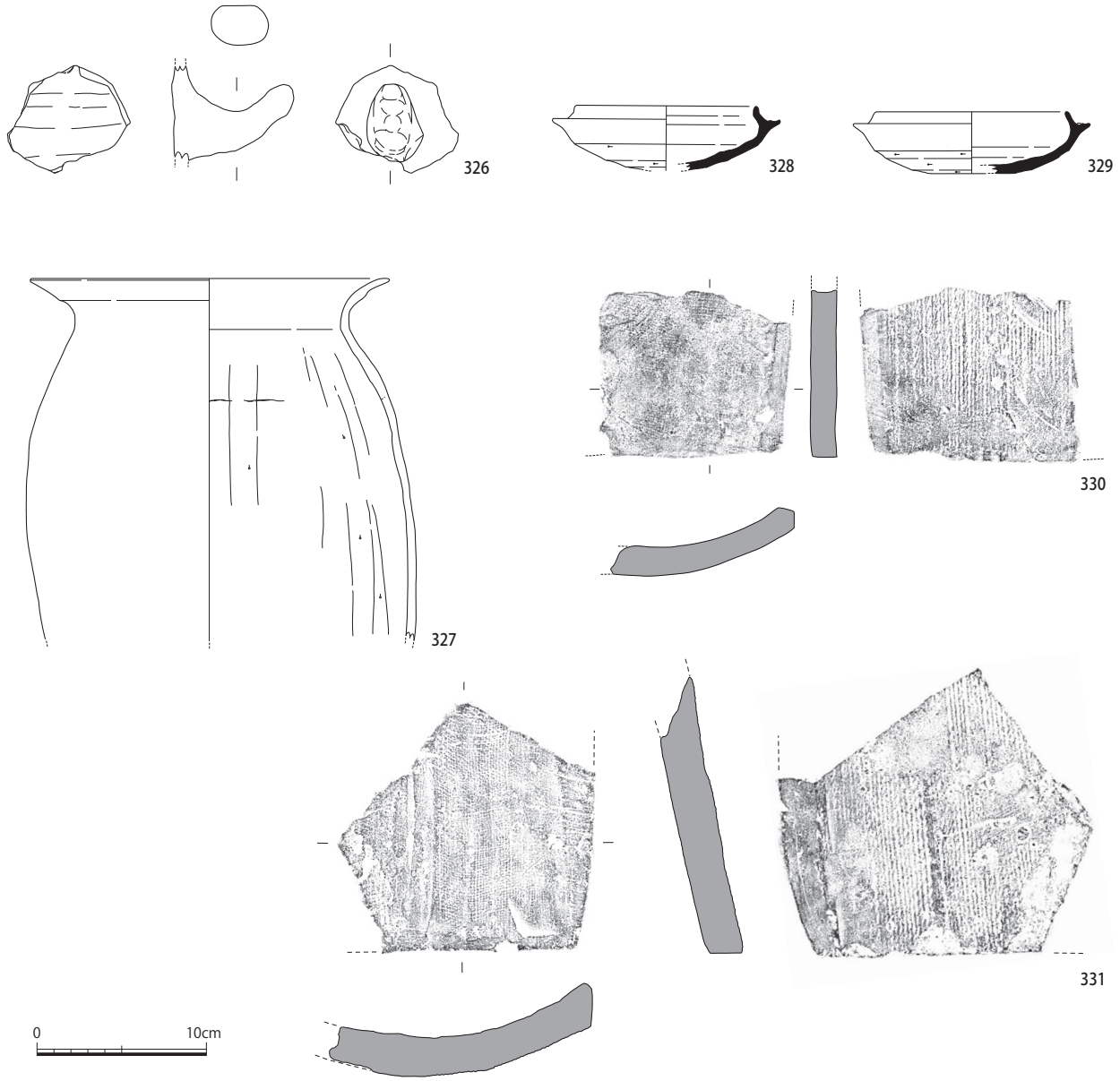


図89　SD2023出土土師器・須恵器・瓦　1：4

SD2108は検出長2.8m、幅0.35m、深さ0.09mを測る。断面は皿状を呈し、SD2107を切る。埋土は黄灰色粘質シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD2135は検出長4.0m、西端は幅1.0m、深さ0.16m。断面は逆台形状を呈する。

遺物は土師器と須恵器が出土している。土師器杯C（339）は丸底に近い半球形で、口縁端部を面取する。内面は一段放射暗文を施し、口縁端部付近をナデ消す。外面は粗いヘラミガキを底部付近まで施す。復元口径16.4㎝、器高6.2㎝、径口指数37.8㎝。難波Ⅲ古段階に比定できる（図93）。

SD2136は検出長5.9m、幅1.5m、深さ0.15mを測る。断面は皿状を呈し、埋土はSD2135と異なり褐灰色粘質シルトの単層である。東側のSP2114付近では幅1.4mに広がる。

遺物は土師器と須恵器が出土している（図93）。340は土師器竈の破片。341～343は須恵器で、341は杯H蓋。やや平らな天井部の丸い器形で復元口径12.2㎝、器高3.8㎝。342は杯Hで、立ち上がりは短く内傾し、底部はやや尖り気味。受部径11.2㎝、器高3.6㎝。底部はヘラケズリ調整で、「×」のヘラ記号が刻まれる。陶邑Ⅳ古段階に比定できる。343は甕。外面は平行タタキの後にカキメを施し、内面には同心円状当て具痕を残す。

SD4079（図83）　４Ｃで検出した北東－南西方向の溝である。検出長2.5m、幅0.7m、深さ0.23mを測る。断面形状は「Ｕ」字状を呈する。埋土は褐灰色粘質シルト、黄灰色粗砂である。Ⅱ区では検出しておらず、側溝部分で終息するようである。遺物は出土していないが、NR2005とSD2002を切ることから帰属時期は８世紀以降と考える。

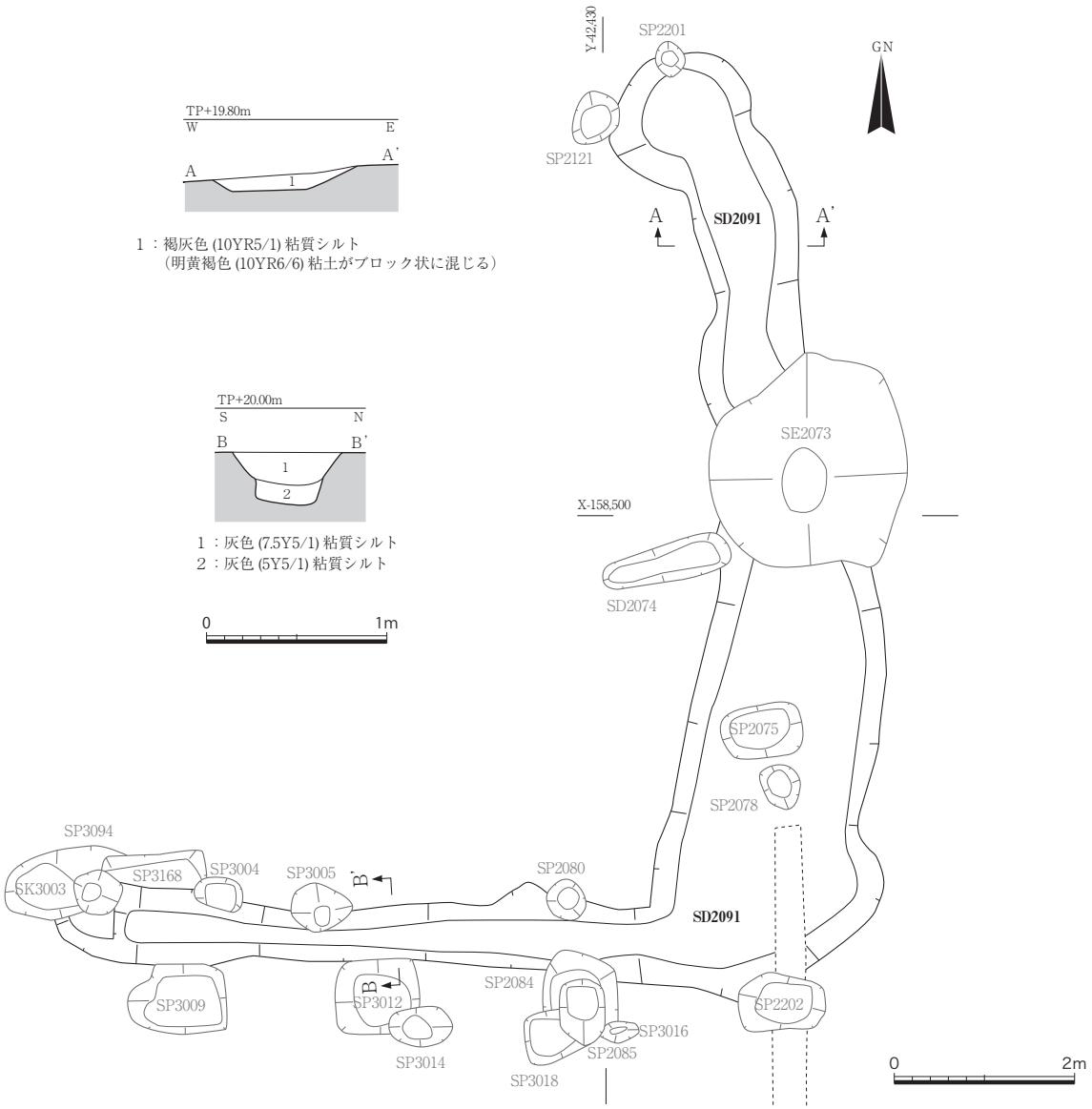


図90　SD2091遺構図・断面図　1：80・1：40

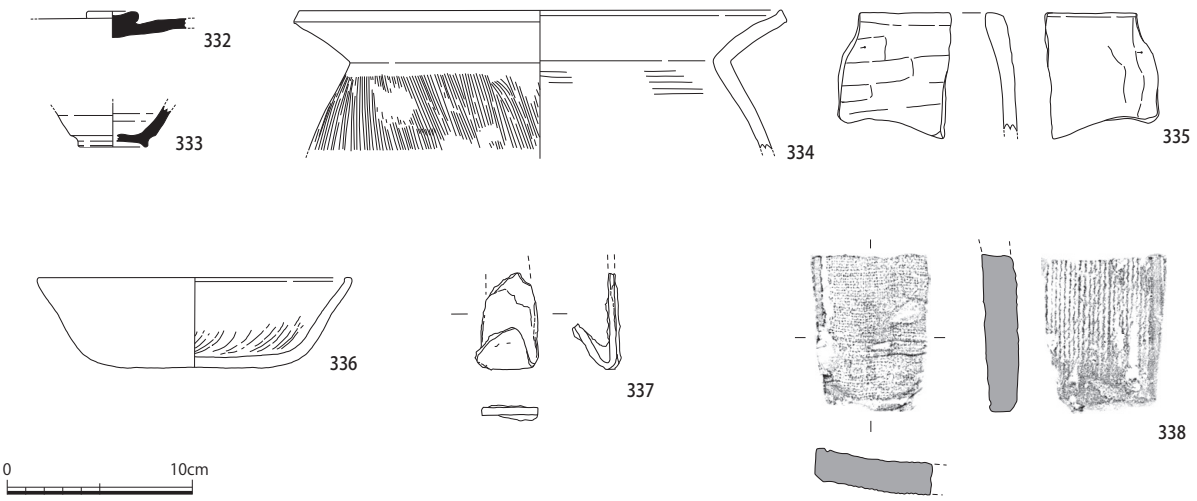


図91　SD2091出土土師器・須恵器・瓦・金属製品　1：4

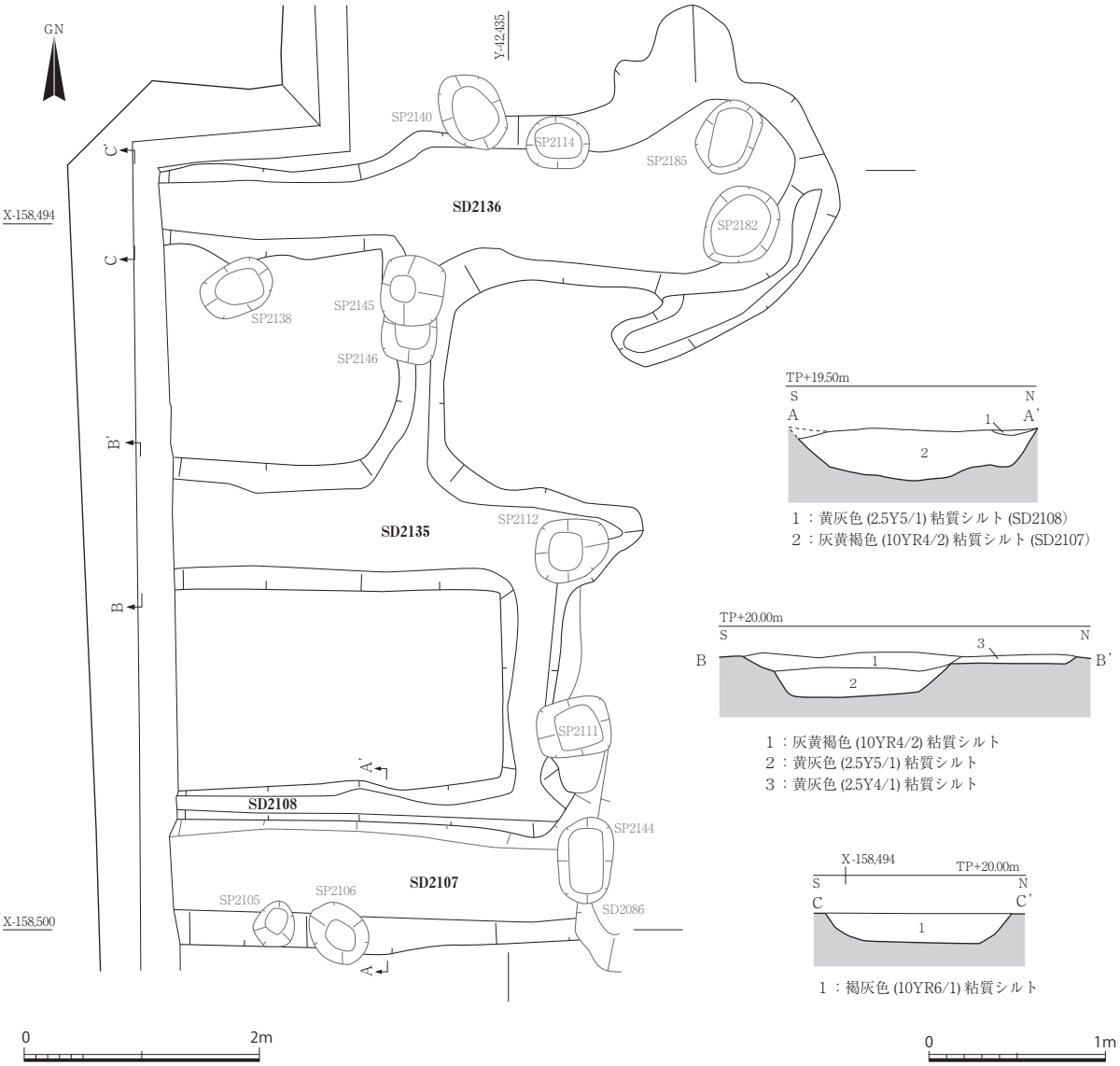


図92　SD2107・2108・2135・2136遺構図・断面図　1：60・1：40

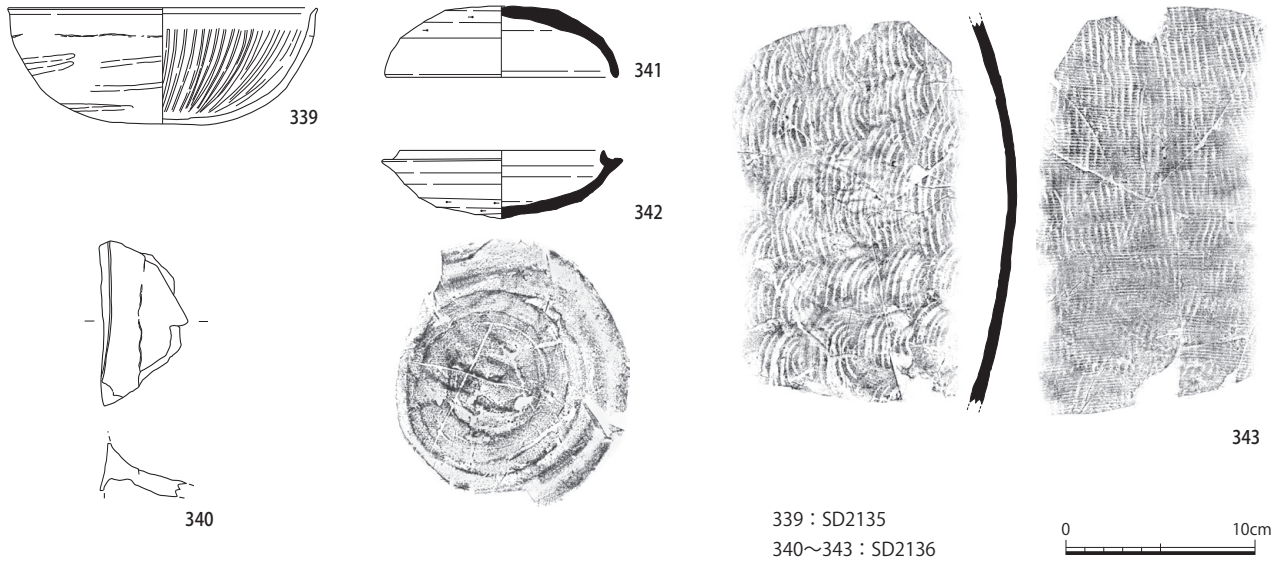


図93　SD2135・2136出土土師器・須恵器　1：4

第７項　井戸（SE）

SE1104（図94）　３Ｉで検出した円形を呈する井戸である。直径1.1m、深さ約2.3mを測る。上部掘削後に立ち割りを実施したが、崩落により図面を作成するには至らなかった。遺物は上部で製塩土器・須恵器の破片が出土した。製塩土器（344）は復元口径12.4㎝、5YR7/8橙色の胎土に３㎜以下の長石・石英・クサリ礫を含む。内外面ともにナデ調整で仕上げ、内面にユビオサエの痕跡が残る。奈良時代の遺物を含むが、長舎SB３～６に囲われた空間の内側に位置しており、官衙の中心に井戸を掘削するとは考え難いため、後世の遺構と考える。

SE2012（図95、図版12）　４Ｄで検出した円形を呈する井戸である。長径1.9m、短径1.7m、深さ1.0mを測る。断面形状は擂鉢状を呈する。井戸枠の痕跡は確認できず、素掘り井戸と考える。出土遺物がなく、他の遺構との切り合いもないため帰属時期は不明。

SE2013（図96、図版12）　４Ｄで検出した円形を呈する井戸である。直径1.1m、深さ0.6mを測る。SD2014を切り、断面形状はＵ字状を呈する。井戸枠の痕跡は確認できず、７世紀後半頃の素掘り井戸と考える。

遺物は土師器杯C（352）が出土した（図98）。口径11.5cm、器高4.3cm、径高指数37.3で、底部外面にユビオサエの痕が放射状に残る。内面は一段放射暗文が施されている。難波Ⅳ古段階の所産と考える。

SE2073（図97、図版12）　SB３より北へ1.6mの３Ｅ～Ｆで検出した円形を呈する井戸である。直径2.3m、深さ1.2mを測る。断面形状は上部が擂鉢状、下部が逆台形状を呈する。壁面より崩落した土砂が堆積しており、井戸枠の痕跡も確認でないため、素掘りの井戸と考える。

遺物は７～８世紀の土師器椀・甕・竈、須恵器杯・蓋・壺が出土した（図98）。土師器は348が椀Cで復元口径15.6cm、器高4.8cm、外面がユビオサエ、内面がナデ調整である。口縁部はヨコナデが施され面取されている。甕は349が短く直立する口縁部を有し、内外面ともにナデ調整である。350が外反する口縁部を有し、外面はタテハケ調整、内面は口縁部がヨコハケ調整で、体部がヨコハケ調整後にタテ方向のケズリ調整を施している。351は竈の釜孔口縁部で、復元口径36.0㎝。口縁部にむかって内傾する形状で、外面はタテハケのちナデ調整、内面は縦方向のヘラケズリの後にナデ調整を施しているが、粘土紐の接合痕を消しきれていない。

須恵器は、345が杯Gで口径9.4㎝。346は杯H蓋で、復元口径12.2㎝、器高3.8㎝。天井部は平坦でヘラケズリ調整で、窯胎が付着する。347は壺で、外方に開く口縁を有し外面に沈線が１条巡る。体部外面はカキメ調整で、内面には同心円状当て具痕が明瞭に残る。

当遺構はSB３やSB14とともにSD2091に後行する遺構で、遅くとも８世紀第４四半期には埋没したと考える。なお、埋土の花粉分析を実施しており（写真10）、周辺での畑作の可能性が示唆されている（第４章第３節参照）。

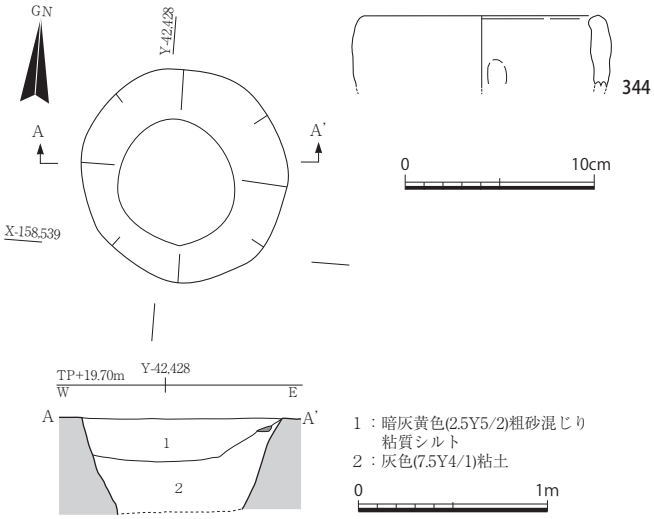


図94　SE1104遺構図・断面図、出土製塩土器　１：40、１：４

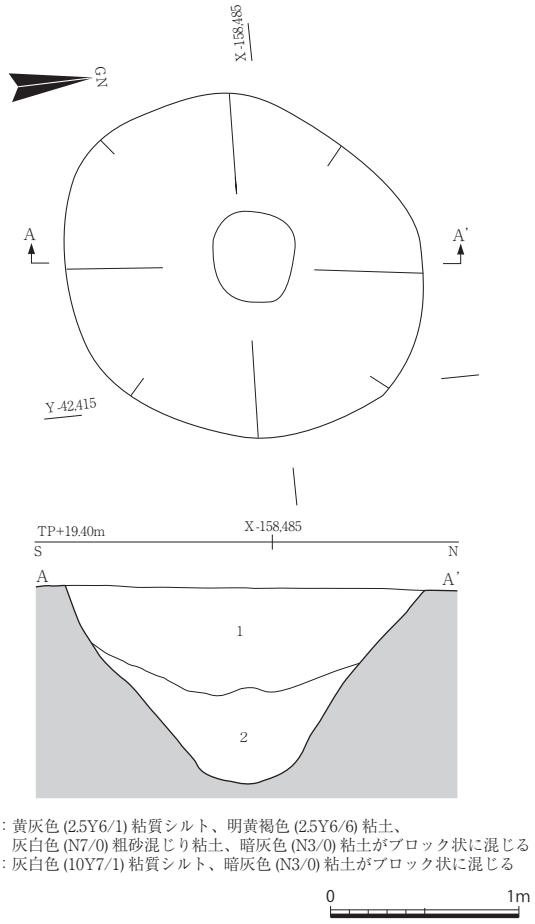
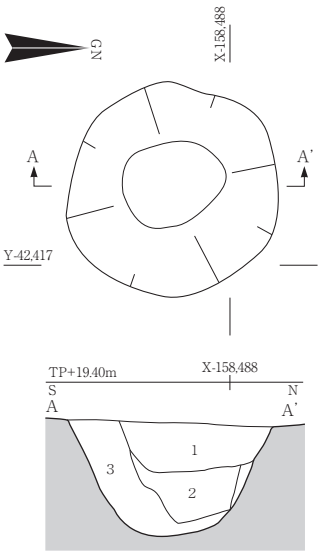


図95　SE2012遺構図・断面図　１：40

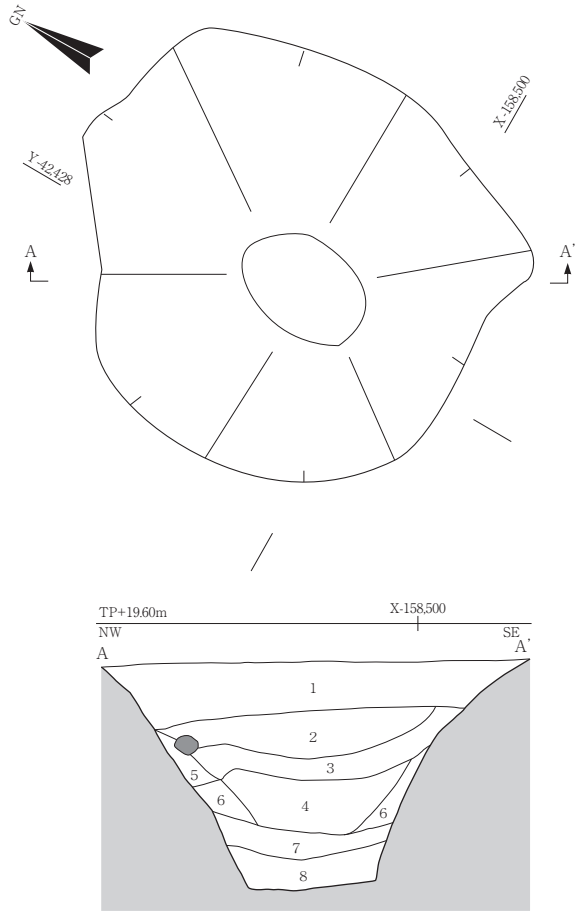


1：灰色 (5Y4/1) 粘質シルト
2：灰色 (5Y4/1) 粘質シルトと
明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘質シルトがブロック状に混じる
3：灰色 (5Y4/1) 粘質シルト、暗灰色 (N3/0) 粘質シルト、
灰黄色 (2.5Y7/2) 粘土がブロック状に混じる

0 1m

図96　SE2013遺構図・断面図　1：40

写真10　SE2073分析試料採取状況



1：黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質シルト
2：黄灰色 (2.5Y4/1) 粗砂混じり粘土
3：明黄褐色 (10YR6/6) 粘土
4：灰色 (5Y5/1) 粘土
5：黄褐色 (2.5Y5/6) 粘土
6：灰色 (5Y4/1) 粗砂混じり粘土
7：灰色 (7.5Y4/1) 粘土
8：暗灰色 (N3/) 粘土

0 1m

図97　SE2073遺構図・断面図　1：40

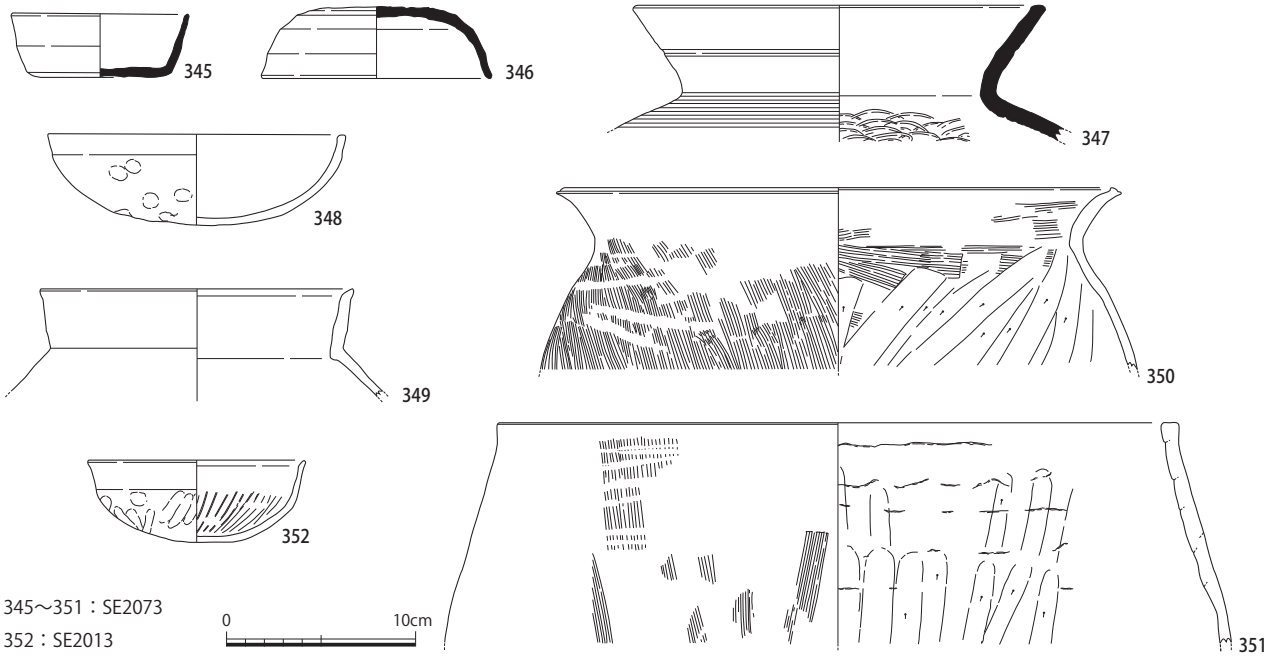


図98　SE2013・2073出土土師器・須恵器　1：4

図99　井戸検出位置図　1：500

第８項　土坑（SK）

SK1003（図100、図版12）　６Ｌで検出した楕円形を呈する８世紀後半の土坑で、SK1004を切る。一部を撹乱に破壊されているが、長径2.6m、短径1.7m、深さ0.21mを測る。断面形状は皿状を呈する。遺物は土師器と須恵器（図102）が出土している。須恵器杯B蓋は、天井部は平坦で口縁部は屈曲が大きくS字状を呈し、かえりを持たない。352は復元口径14.4cmで、SK1004より出土した破片と接合した。353が復元口径16.2cmで、つまみを欠く個体である。陶邑Ⅵ古段階に比定できる。

SK1004（図101）　５Ｌで検出した平面形が楕円形を呈する土坑である。長径1.2m、短径1.0m、深さ0.28mを測る。断面形状は逆台形状を呈する。SP1144を切り、北東部をSK1003に切られる。遺物は土師器と須恵器の破片が出土している。須恵器杯B蓋（354）は復元口径19.2cm。

SK1091（図103、図版12）　４Ｌで検出した平面形状が楕円形を呈する土坑である。南北1.75m、東西1.3m、深さ0.52mを測る。上面はSD1022（図77）に削平されており、本来の深さは0.8m程度と推測される。底面から土師器甕（356）が横倒しで押し潰された状態で出土している。遺物出土状況や、遺構深度から井戸の可能性がある。遺物は土師器甕と須恵器壺が出土した（図104）。356は土師器甕で復元口径23.0cm、器高24.4cm。焼成が悪く外面の摩滅が激しい。把手付きの可能性もある。口縁部よりも体部最大径の方が大きく底部は平底である。体部外面は下半部に縦方向のミガキ調整が施され、内面は全体に縦方向のヘラケズリが施されている。底部内面はユビオサエ調整である。355は須恵器壺で、胴部はタタキ形成したのちに外面はカキメ調整を施しているが、一部タタキ目が消えずに残っている。底部近くは回転ヘラケズリで仕上げている。内面はナデ調整を施すが粘土紐積み上げ痕が残る。

SK1111（図105、図版13）　３ＪのSB５長舎を構成するSP1112とSP1253の間で検出した楕円形を呈する土坑である。南北1.3m、東西1.2m、深さ0.27mを測る。断面形状は皿状を呈する。SB５とは切り合い関係がなく前後は不明である。土坑中央の埋土最上層より奈良時代に属する須恵器壺の底部（357）が逆位置で出土している。

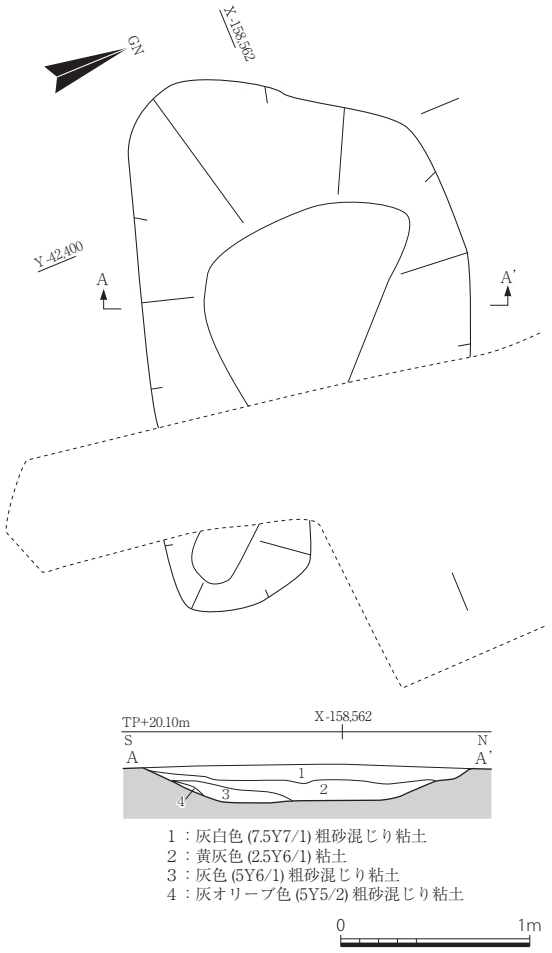


図100　SK1003遺構図・断面図　１：40

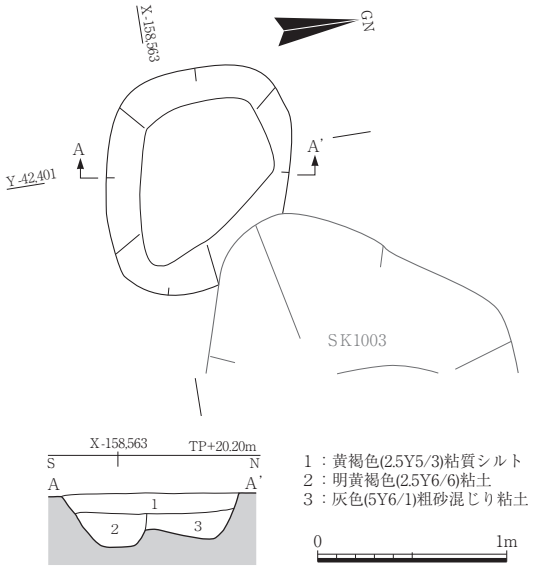


図101　SK1004遺構図・断面図　１：40

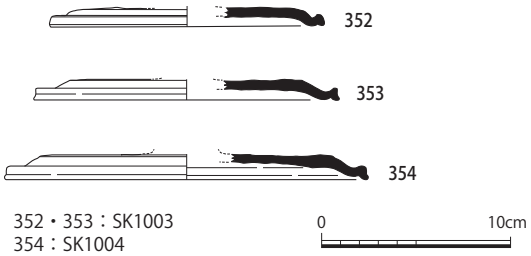


図102　SK1003・1004出土須恵器　１：４

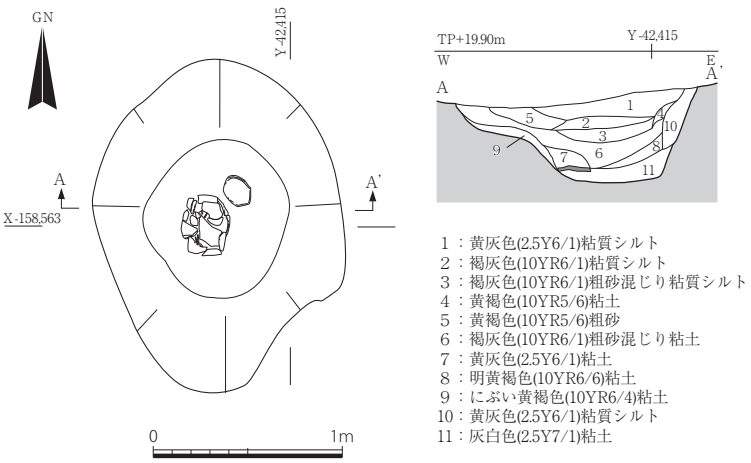


図103　SK1091遺構図・断面図　1：40

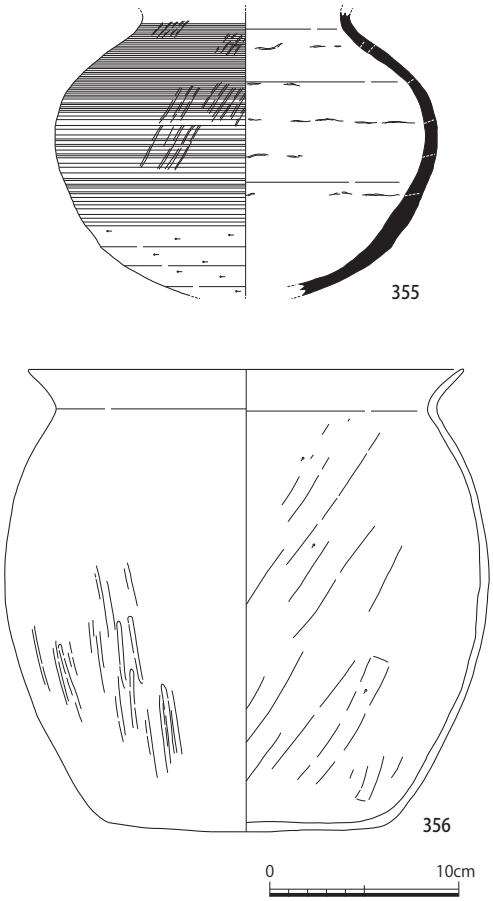


図104　SK1091出土土師器・須恵器　1：4

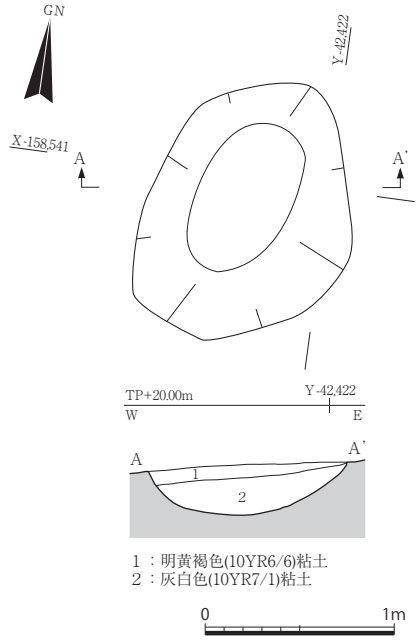


図105　SK1111遺構図・断面図　1：40

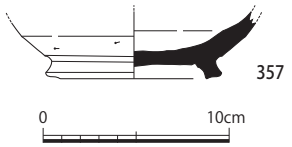


図106　SK1111出土須恵器　1：4

SK1158（図107、図版13）　１Ｋ～２Ｋで検出した平面形が長方形を呈する土坑である。東西6.7m、南北2.1m、深さ0.1～0.25mを測る。断面形状は皿状を呈し、東側に比して断面Bより西側が一段深くなっている。埋土最上層は炭化物を含み、西側の土層観察用畦付近に数cm～20cm礫が数個固まっている。SP1157、1227、1228に切られる。

遺物は８世紀後半の所産と考える土師器杯A・壺・羽釜・竈、須恵器杯B蓋・杯A、杯Cが出土した（図108）。土師器杯Aは358が復元口径13.4cm、器高3.0cm、径高指数23.0、359が復元口径13.0cm、器高3.5cm、径高指数26.1で、いずれも内外面ナデ調整。底部外面にユビオサエの痕がわずかに残る。杯C（360）はやや外反する口縁で、端部の巻込は弱い。底部外面のユビオサエ以外はいずれもナデ調整で、口径16.8cm。363は甕で、全体的に摩滅激しく体部内面に有機物が付着している。

須恵器杯B蓋はいずれもかえりを持たない個体で、大小に法量分化している。361は口径13.8cmで、やや扁平な擬宝珠形のつまみが付く。口縁部の屈曲が強く断面S字状を呈する。362は口径18.4cmでつまみ部が欠損している。361に比して口縁の屈曲が弱い個体である。

SK1205　３Ｋで検出した楕円形を呈する土坑である。東西2.8m、南北1.2m、深さ0.2mを測る。断面は皿状を呈する。土坑内にSB５を構成するSP1206・1207とが存在するが、切り合い関係は不明である。埋土より須恵器杯H蓋の細片と土師器高杯（図113）が出土している。高杯（365）は杯部をほぼ欠く資料で、中空の脚注部は外面に9面の面取りが施されている。杯部の見込み

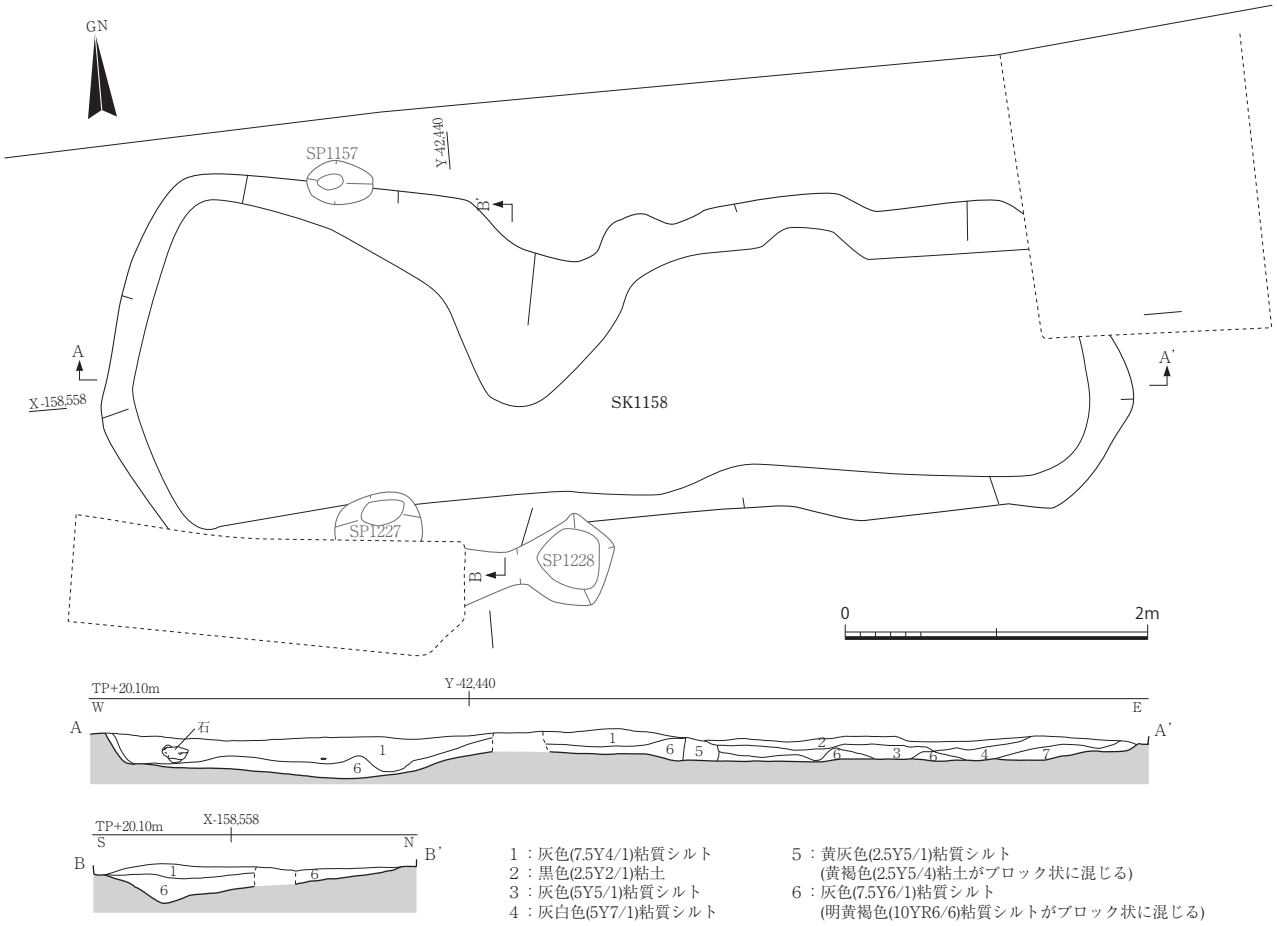


図107　SK1158遺構図・断面図　1：50

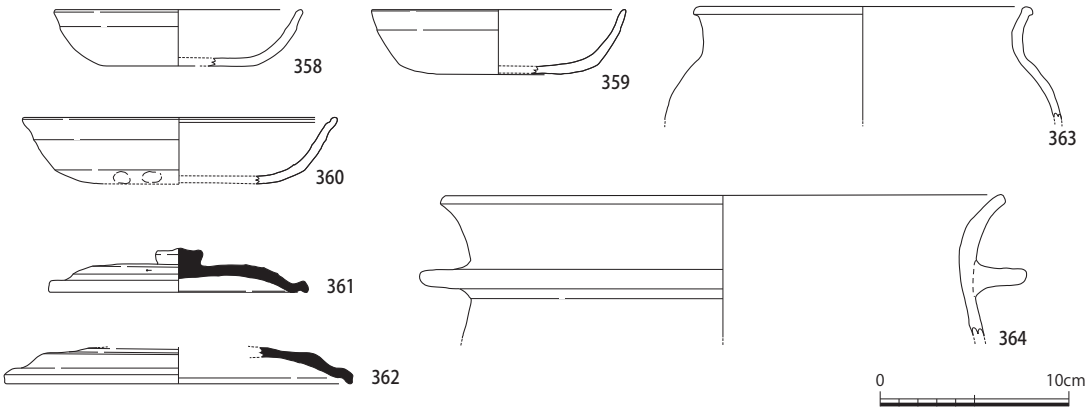


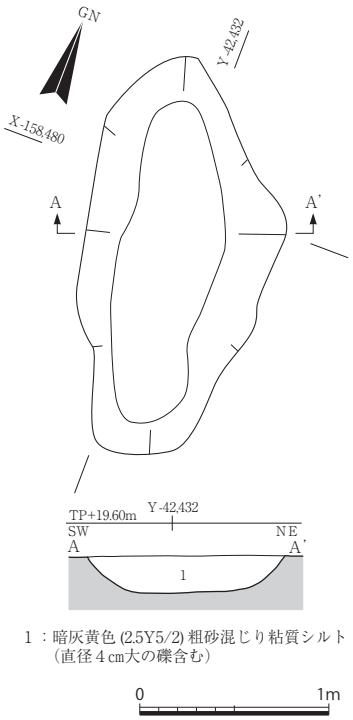
図108　SK1158出土土師器・須恵器　1：4

はナデ調整でミガキ・暗文は省略されている。難波Ｖ新段階に比定できる。長舎SB５の廃絶時期を検討する資料の一つである。

SK2031（図109）　２Ｃ～ＤでSB17を構成するSP2028にほぼ接する位置で検出した楕円形を呈する土坑である。東西1.0m、南北2.0m、深さ0.19mを測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は暗灰黄色粗砂混じり粘質シルトの単層である。遺物は土師器、須恵器、製塩土器の破片が出土しているが、図化できたのは１点のみである（図113）。須恵器杯G蓋（366）はやや扁平な擬宝珠状つまみを有し、頂部周辺にヘラケズリ調整を施す。８世紀前半の所産と考える。

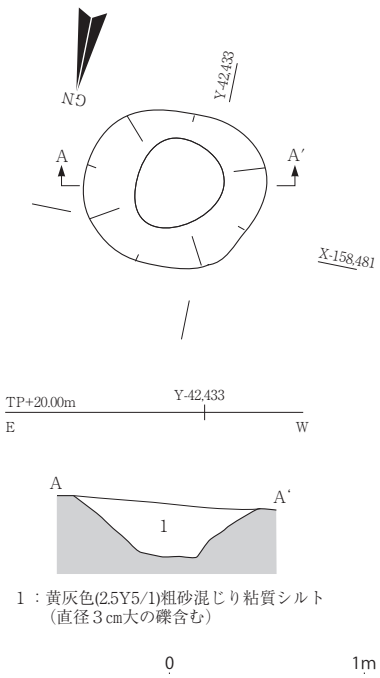
SK2032（図110）　２Ｄで検出した円形を呈する土坑で、径0.9m、深さ0.27mを測る。直径３㎝大の礫を含む単層の堆積である。遺物は須恵器杯B（367）が出土している。底部外周端に外側へ踏ん張る高台が付き、端部が浅い凹面を成す（図113）。８世紀後半の所産。

SK2039（図111）　２Ｃ～Ｄで検出した不定形を呈する土坑で、南北2.7m、東西1.6m、深さ0.2mを測る。SB18を構成するSP2175・2187を切る。出土した須恵器



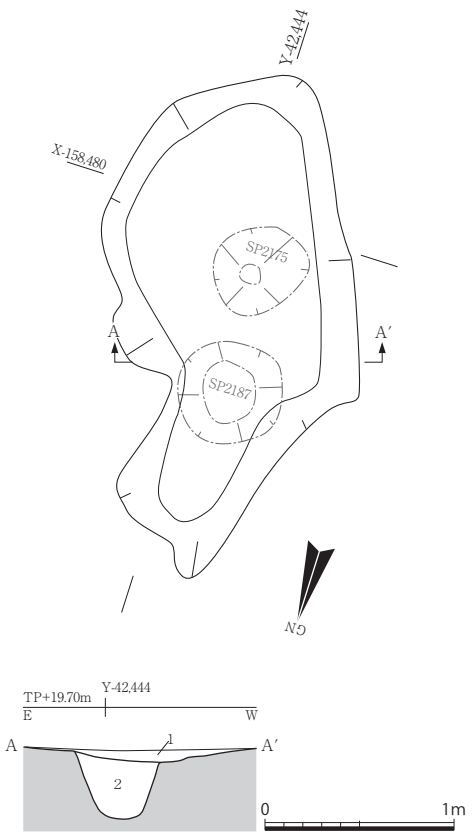
1：暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂混じり粘質シルト
（直径４㎝大の礫含む）

図109　SK2031遺構図・断面図　1：40



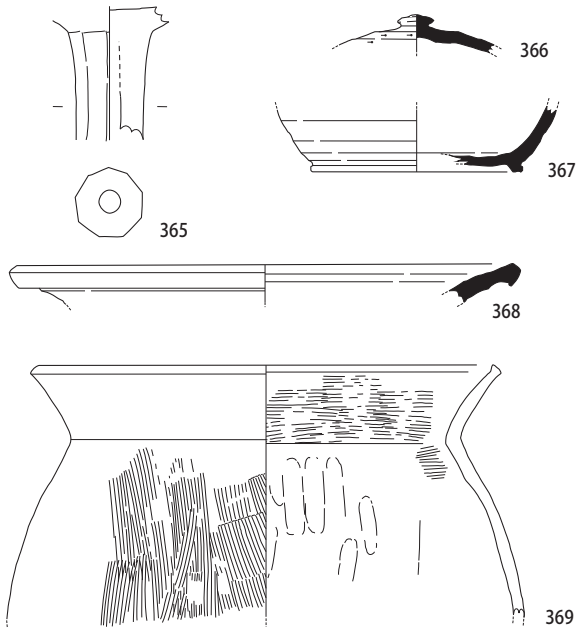
1：黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト
（直径３㎝大の礫含む）

図110　SK2032遺構図・断面図　1：40



1：黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト（黄褐色(10YR5/6)粘質シルトがブロック状に混じる）[SP2187]

図111　SK2039遺構図・断面図　1：40



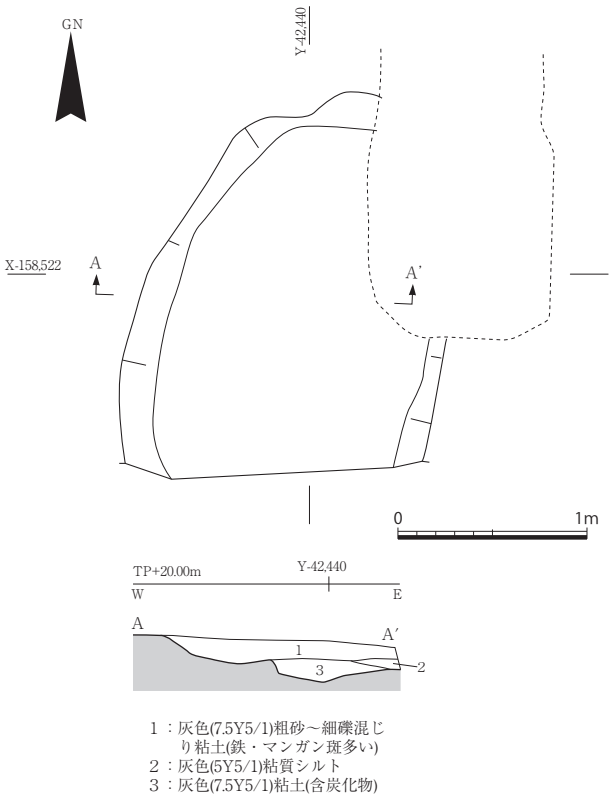
365：SK1205　368：SK2039
366：SK2031　369：SK3121
367：SK2032

0　10cm

図113　SK1205・2031・2032・2039・3121出土土師器・須恵器 1：4

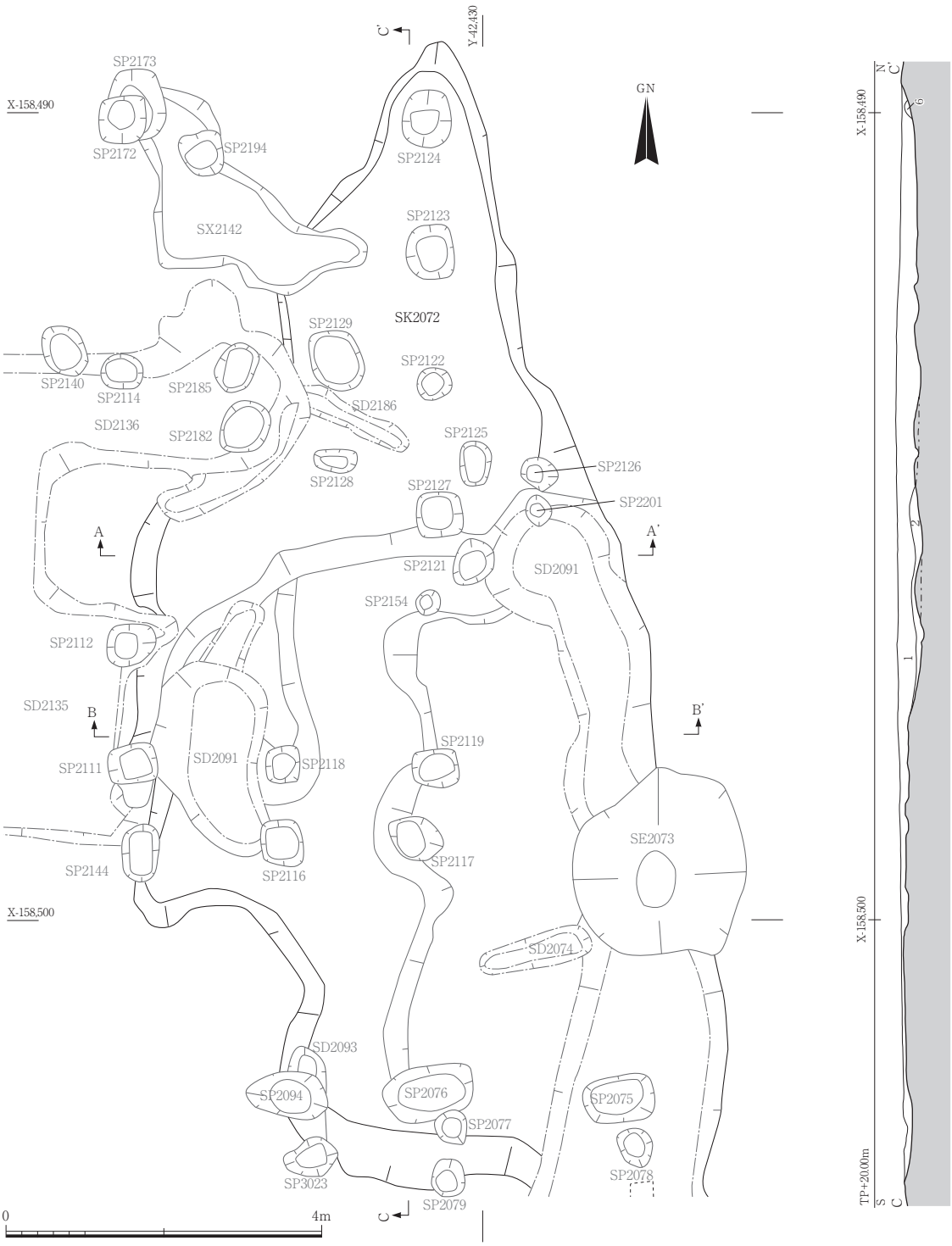
甕（368）は、口縁端部を下方に折り曲げる（図113）。

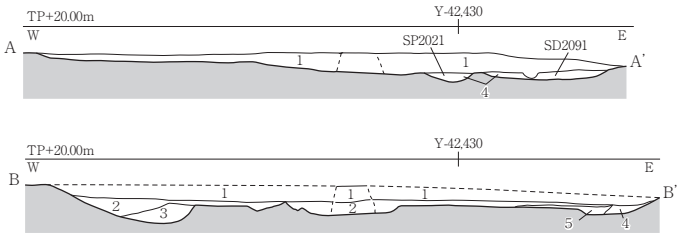
SK3121（図112、図版14）　１～２Hで検出した楕円形を呈する土坑で、南北検出長2.0m、東西1.7m、深さ0.22mを測る。出土遺物は８世紀の土師器甕（369）で、外反する口縁で端部をつまみ上げる。体部外面はタテハケ調整で、内面は口縁部がヨコハケ調整で体部がへ



1：灰色(7.5Y5/1)粗砂～細礫混じり粘土(鉄・マンガン斑多い)
2：灰色(5Y5/1)粘質シルト
3：灰色(7.5Y5/1)粘土(含炭化物)

図112　SK3121遺構図・断面図　1：40





1：黒褐色 (7.5YR3/1) 粗砂混じり粘質シルト
2：灰褐色 (7.5YR4/2) 粗砂混じり粘土と
にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗砂混じり粘土
が混じる
3：灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土
4：褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルト
（明黄褐色 (10YR6/6) 粘土が
ブロック状に混じる）
5：オリーブ褐色 (2.5Y4/5) 粘土

図114　SK2072遺構図・断面図　1：80

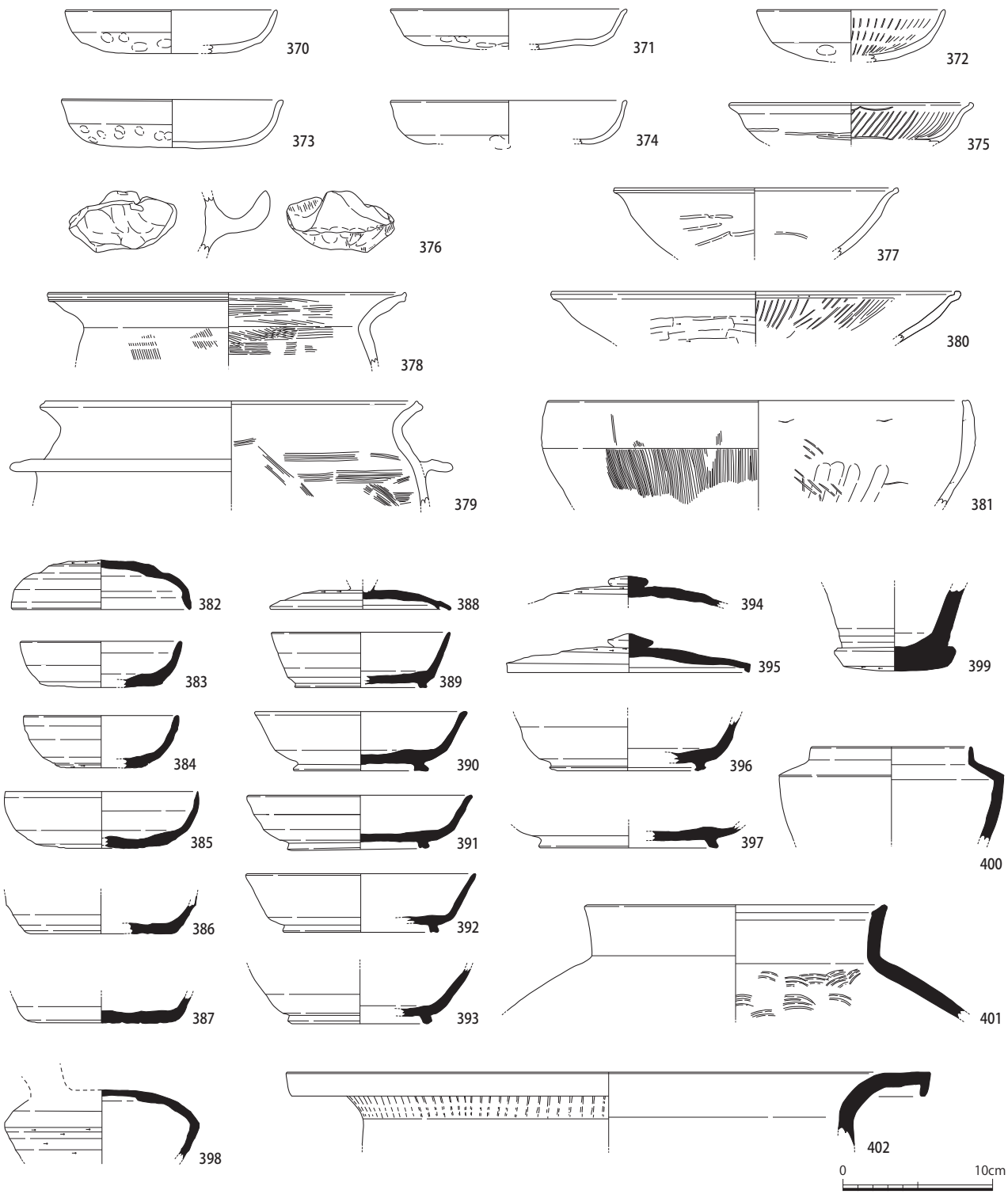


図115　SK2072出土土師器・須恵器　1：4

ラケズリの後に縦方向のユビナデを施す（図113）。

SK2072（図114、図版13）　２Ｄ～Ｆ、３Ｅ～Ｆで検出した平面が不定形の土坑である。東西6.7m、南北14.4m、深さ0.3mを測り、南側が一段深くなる。埋土は黒褐色粗砂混じり粘質シルト主体である。SB８・９やSD2091などに切られる。

遺物は土師器、須恵器、平瓦、埴輪が出土した（図115・116）。７世紀前半の須恵器杯G（385）から８世紀半ばの須恵器杯B（391）と時期幅がある。

土師器のうち、373～375が杯Aで、373・374はユビオサエとナデ調整を施し、373は復元口径14.8㎝、器高3.2㎝。375は口縁端部を巻込み、外面にミガキ調整を内面に連弧暗文と一段放射暗文を施す。370～372は杯Cで372のみ一段放射暗文で他は内面ナデ調整。高杯（377）は内外面ともにミガキを施す。盤（380）は復元口径27.4㎝で外面にヘラケズリ、内面に一段放射暗文を施

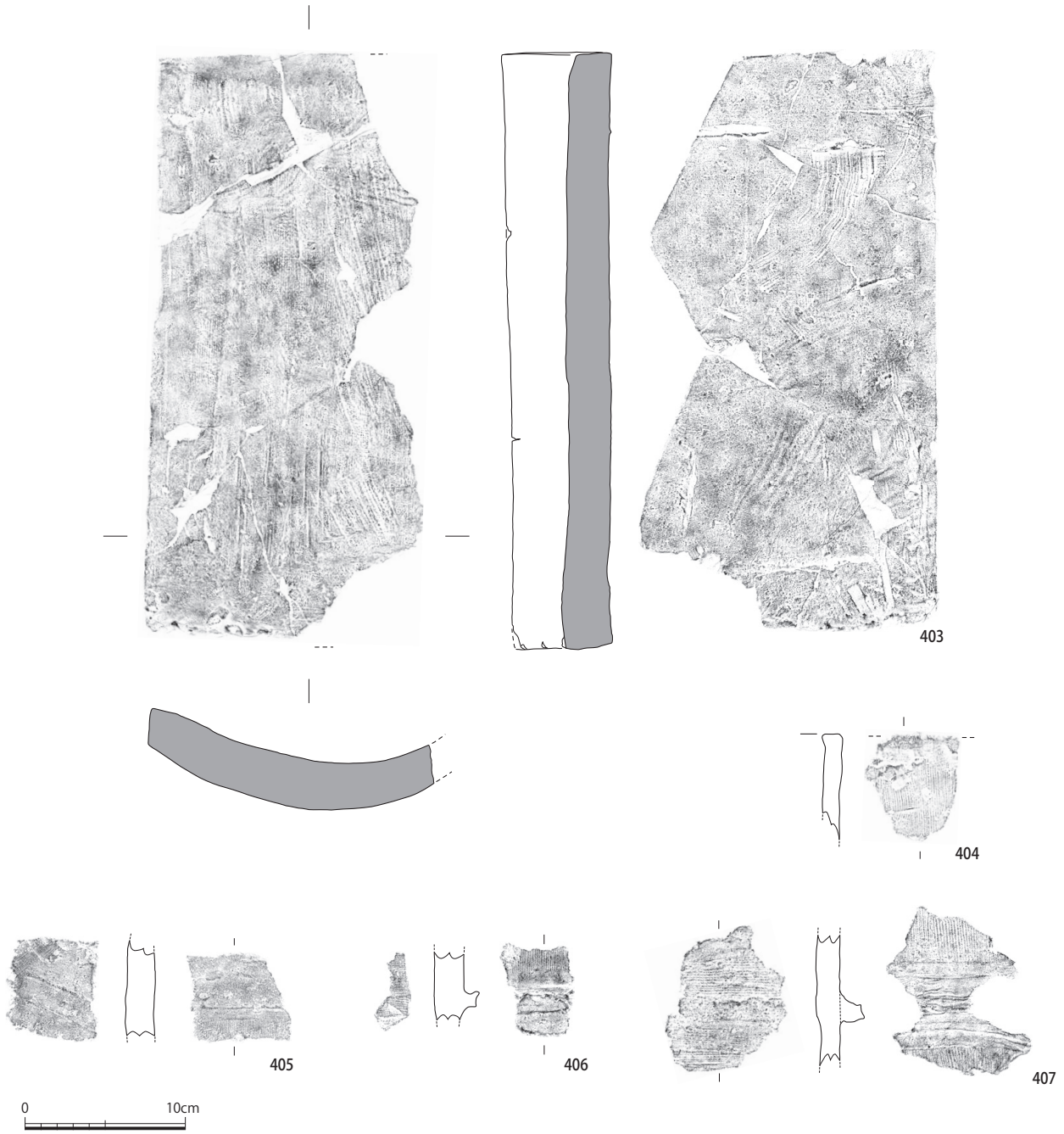


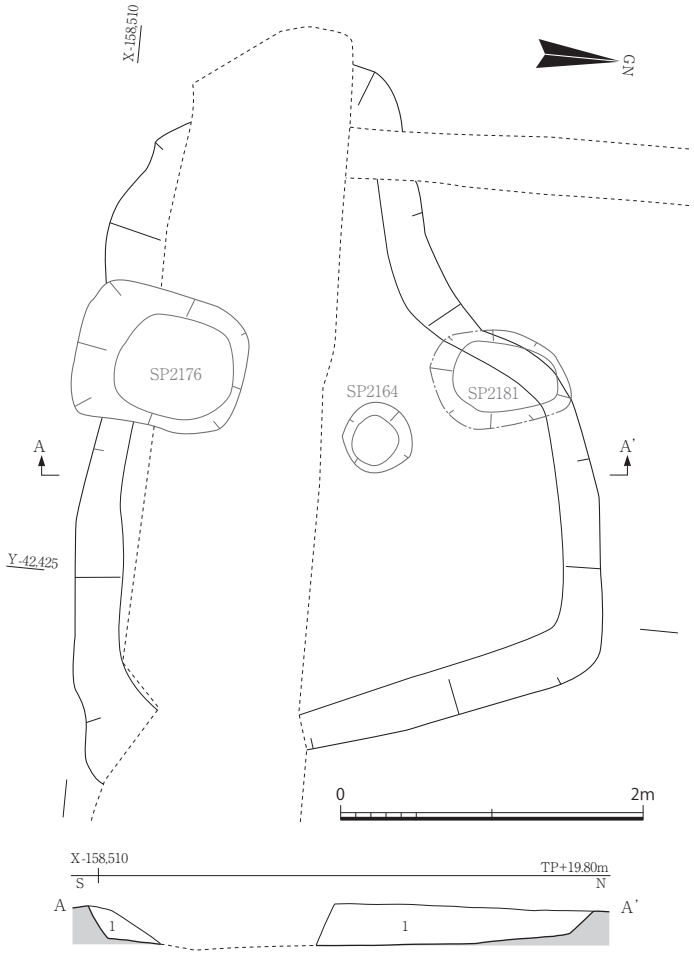
図116　SK2072出土瓦・埴輪　1：4

す。376は鍋または甕の把手。378は甕、379は羽釜、381は鉢。

須恵器のうち386・387が杯Aで底部は平底でヘラ切り後未調整。389～393・396・397が杯Bで、389が復元口径11.8cm、390～392が口径14～15cmとなる。383～385が杯Gで、383と384が口径10cm、385は復元口径12.8cm・器高3.5cm。杯蓋は394・395が杯B蓋。395は宝珠形つまみが付いた扁平な器形でかえりを持たない。口径16.3cm、器高1.6cm。388が杯G蓋で、受部と同じ高さのかえりを持ち、復元受部径10.2cm。自然釉がかかり焼けひずみが激しい。382は杯H蓋で、天井部は平坦で口縁部との間に段を有する。口径11.8cm、器高3.3cm。平瓶（398）は体部の張りが強い。399・400は壺。400は短く口縁部が直立し、肩部が屈曲する。甕A（402）は口縁端部が大きく下方に垂れる。外面は板状工具痕をナデ消している。甕C（401）は口縁部が直立し、端部内面を面取する。

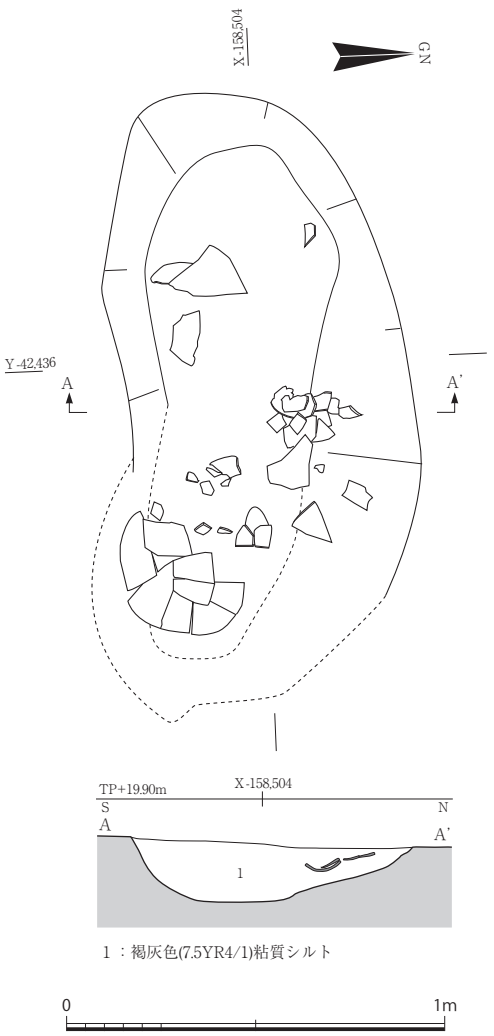
平瓦（403）は出土資料で唯一全長が分かるもので、全長37cm、厚さ2.6～3.0cm。凸面はタテないしはナナメのナデ調整で仕上げ叩き痕を残さない。凹面は広端部側がタテのケズリを施す以外は８本/cmの布目痕が残る。広端部は未調整。

円筒埴輪は４点図化し、404は口縁部で外面には12本/1.6cmのタテハケを施す。405・406は外面にタテハケ、



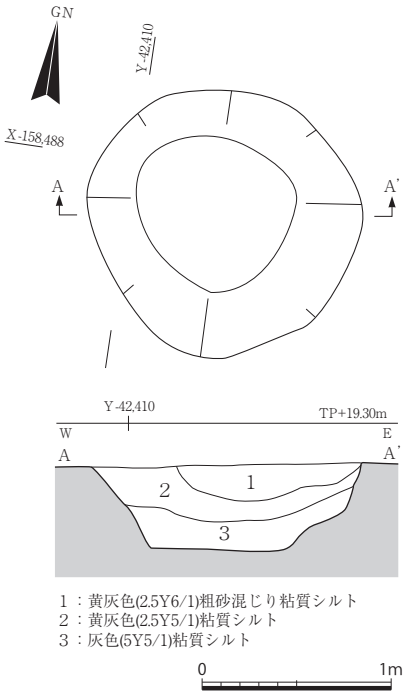
1：褐灰色 (10YR6/1) 粘質シルト（黄褐色 (2.5Y5/6) 粘土がブロック状に混じる）

図117　SK2148遺構図・断面図　1：50



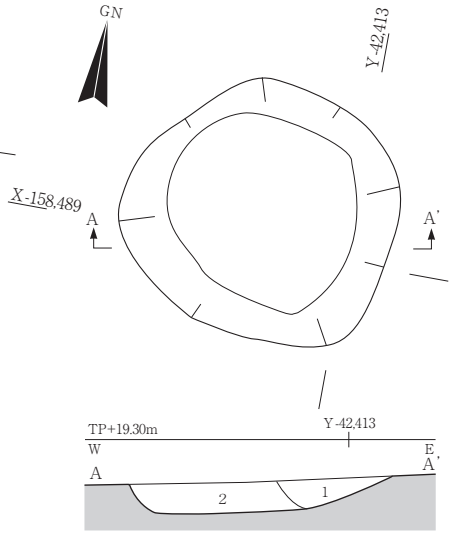
1：褐灰色(7.5YR4/1)粘質シルト

図118　SK3003遺構図・断面図　1：20



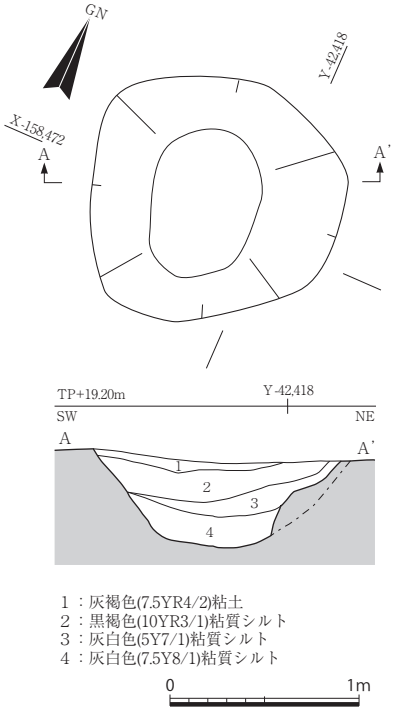
1：黄灰色(2.5Y6/1)粗砂混じり粘質シルト
2：黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト
3：灰色(5Y5/1)粘質シルト

図119　SK2177遺構図・断面図　1：40



1：黄灰色(2.5Y6/1)微砂混じり粘質シルト
2：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト

図120　SK2195遺構図・断面図　1：40



1：灰褐色(7.5YR4/2)粘土
2：黒褐色(10YR3/1)粘質シルト
3：灰白色(5Y7/1)粘質シルト
4：灰白色(7.5Y8/1)粘質シルト

図121　SK4076遺構図・断面図　1：40

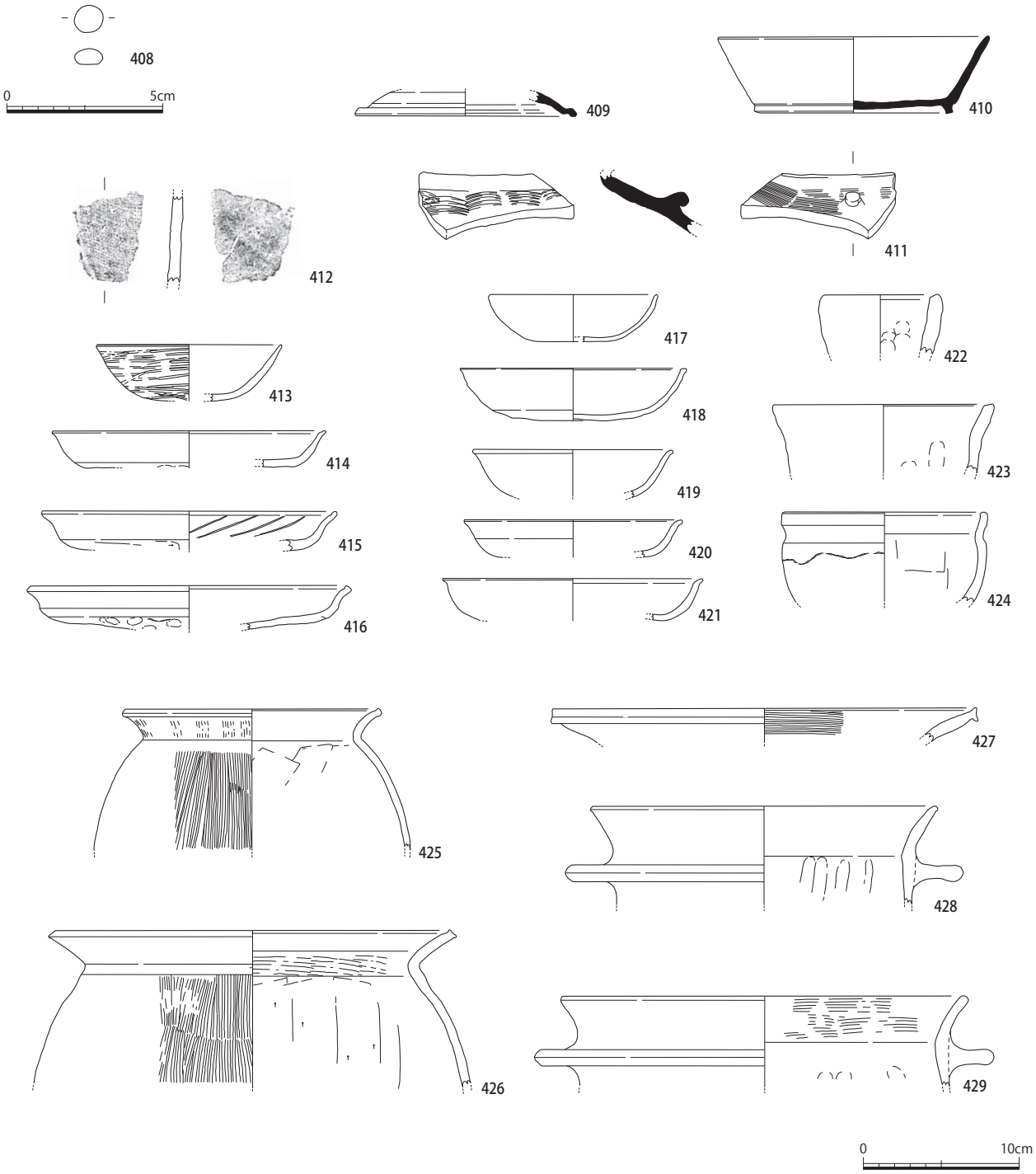


図122　SK3003出土土師器・須恵器・製塩土器・石製品　１：４（408のみ１：２）

内面にヨコハケをそれぞれ施す。突帯の形状が異なり、突帯高は406が0.9㎝、407が1.5㎝である。

SK2148（図117、図版13）　３Ｆで検出した台形状を呈する土坑である。長径4.0m、短径3.4m、深さ0.29mを測る。中央部は確認調査時（Ｃ６－３－２区：Tr.１）に削平されている。断面形状は逆台形状を呈し、埋土は偽礫混じり褐灰色粘質シルトの単層である。遺物は土師器と須恵器の破片が出土した。SB10（SP2176）に切られていることから、帰属時期は奈良時代以前と考える。

SK2177（図119、図版14）　５Ｄで検出した平面形が円形を呈する直径1.3mの土坑である。断面形状は逆台形状を呈し、深さ0.25mを測る。底面からの湧水が著しく井戸の可能性がある。須恵器の破片が出土し、SD2143を切ることから奈良時代が上限と考える。

SK2195（図120）　４Ｄで検出した円形を呈する土坑である。長径1.4m、短径1.3m、深さ0.2mを測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は褐灰色粘質シルトである。底面からの湧水が著しく、井戸の可能性がある。遺物は出土していないが、SD2002・2143を切ることから奈良時代を上限と考える。

SK3003（図118、巻頭図版３、図版14）　２Ｆで検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.3m、短径0.8m、深さ0.16mを測る。断面形状は皿状を呈し、埋土は褐灰色粘質シルトの単層である。８世紀後半以降に帰属する。写真と図面によると出土遺物取り上げ後にSP3094を検出しており、巻頭図版３－３右端に写る須恵器甕体部片を土坑に伴うと考え、SB14を構成するSP3094を切ると判断した。土器等が押しつぶされた状態で出土した。内容は、土師器杯C・皿A・椀A・甕、須恵器杯B及び蓋・把手付き甕・羽釜、製塩土器、弥

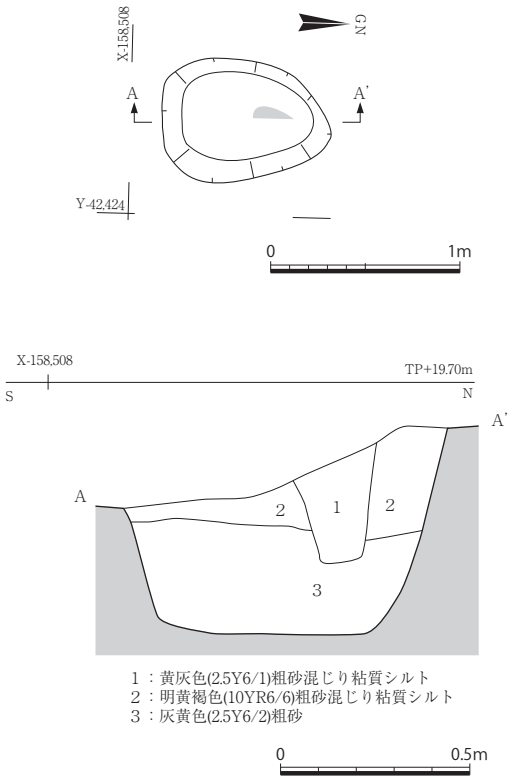


図123　SP2181遺構図・断面図　1：40・1：20

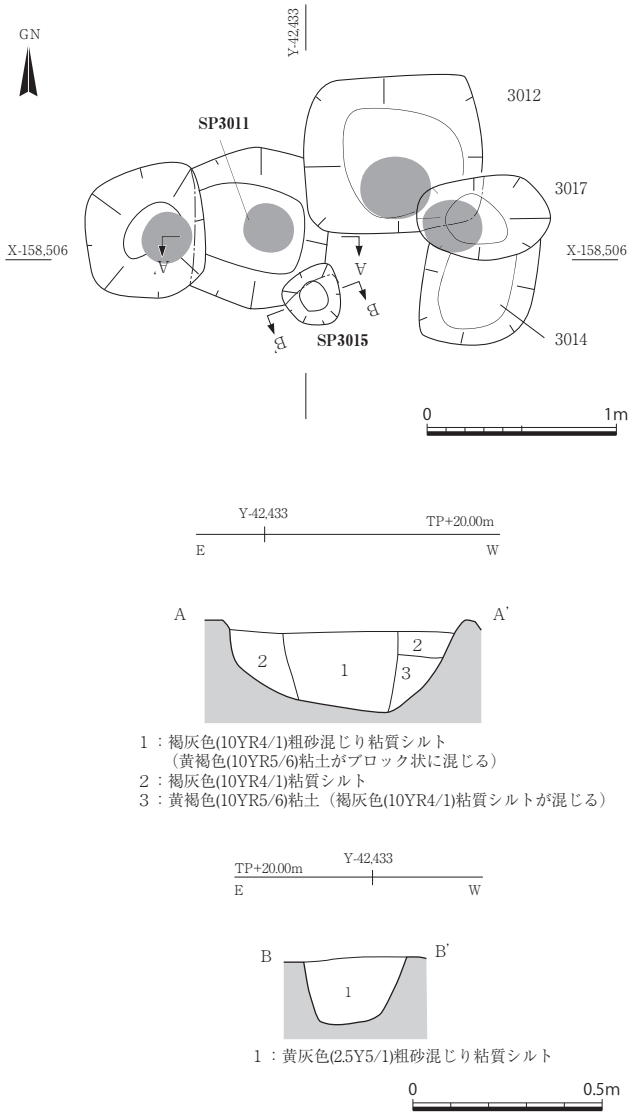


図125　SP3011・3015遺構図・断面図　1：40・1：20

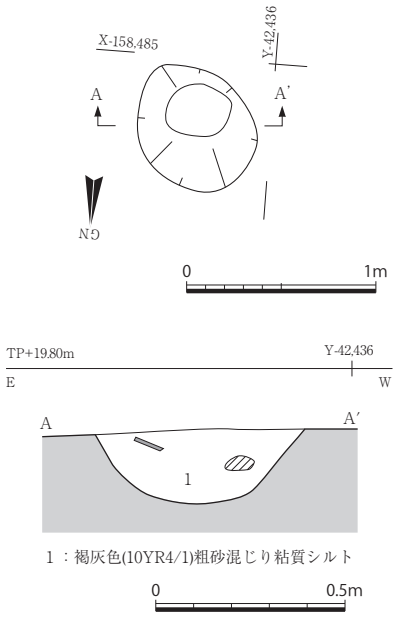


図124　SP2056遺構図・断面図　1：40・1：20

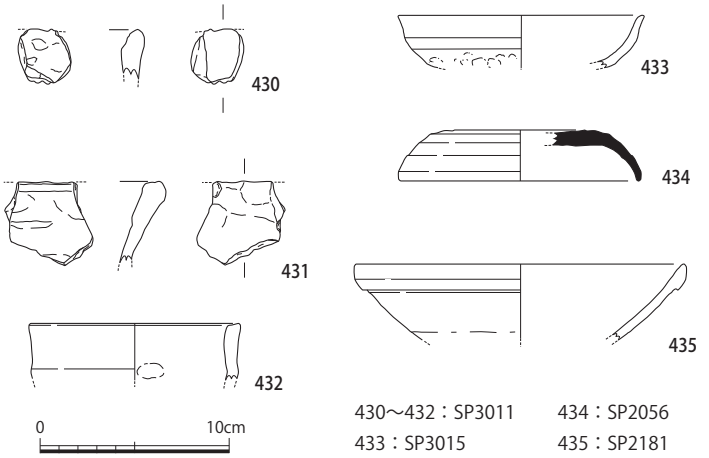


図126　SP2056・2181・3011・3015出土須恵器・製塩土器・磁器　1：4

生土器甕、碁石と思われる円礫である（図122）。土器は難波Ｖ中～新段階に比定できる。土師器のうち、杯C（417～419）は内外面ともにナデ調整を施す。椀A（413）は口径11.8㎝、器高3.5㎝で、調整は外面にミガキ、内面にナデを施す。皿Aは414・416が内面がナデ調整。415が底部外面にヘラケズリ調整、内面に一段放射暗文を施す。壺B（424）は口径と体部最大径がほぼ同じで、外面にナデ調整、体部内面に板ナデ調整を施す。425・426は甕で、428・429は羽釜。

須恵器のうち、杯B蓋（409）は口縁部が屈曲し、かえりを持たない。杯B（410）は底部外周端に高台が付き、口縁は底部より外方にまっすぐ伸びる。口縁部径17.2㎝、器高5.0㎝。411は把手付きの甕で外面にカキメ調整を施し、内面に同心円状当て具痕が残る。

製塩土器（412）は内面に布目圧痕が残り、外面はナデ仕上げ。器壁0.7㎝と薄く、厚手の422・423とは異なる。弥生土器甕（427）は口縁端部をつまみ、内面はヨコハケ調整を施す。円礫（408）は白色で扁平な形状で碁石と思われる。直径0.9㎝、厚さ0.5㎝、重量0.6ｇ。

SK4076（図121、図版14）　４Ｃで検出した円形を呈する土坑である。直径1.4m、深さ0.45mを測る。断面形状は逆台形状を呈する。湧水が著しく井戸の可能性がある。遺物は土師器と須恵器の破片が出土している。

図127　SX2006出土須恵器　１：４

写真11　SX2006完掘状況（南西から）

第９項　柱穴・小穴（SP）

柵や建物に復元することができなかった柱穴や小穴のうち遺物が出土したものについて掲載した。

SP2056（図124）は、0.7m×0.6mの楕円形を呈し、深さ0.18mを測る。回転ヘラケズリが施された平坦な天井部の復元口径12.8㎝の杯H蓋（434）が出土しており、飛鳥時代が上限と考える。

SP2181（図123）は、SK2148（図117）に切られる楕円形を呈する柱穴である。長径0.9m、短径0.7m、深さ0.55mを測る。玉縁状の口縁部を持ち底部近くが露胎する中世の白磁碗（435）が出土している。SK2148が奈良時代に帰属するため、上部からの混じりこみと考える。

SP3011（図125）は平面方形で長径0.7m。掘方埋土からは、製塩土器（430～432）が出土している。いずれも成形時のユビオサエ痕が残るが、部分的にナデ調整を施している。

SP3011を切るSP3015は、直径0.3mで深さ0.18mを測る。出土遺物は土師器杯C（433）で、内外面にナデ調整を施し底部はユビオサエの痕が残る。

第10項　落ち込み（SX）

SX2006（写真11）　６Ｅで検出した不定形を呈する落ち込みである。南北長・東西長ともに３ｍで、深さ0.2mを測る。堆積は西隣りのSX2007と同じく灰色

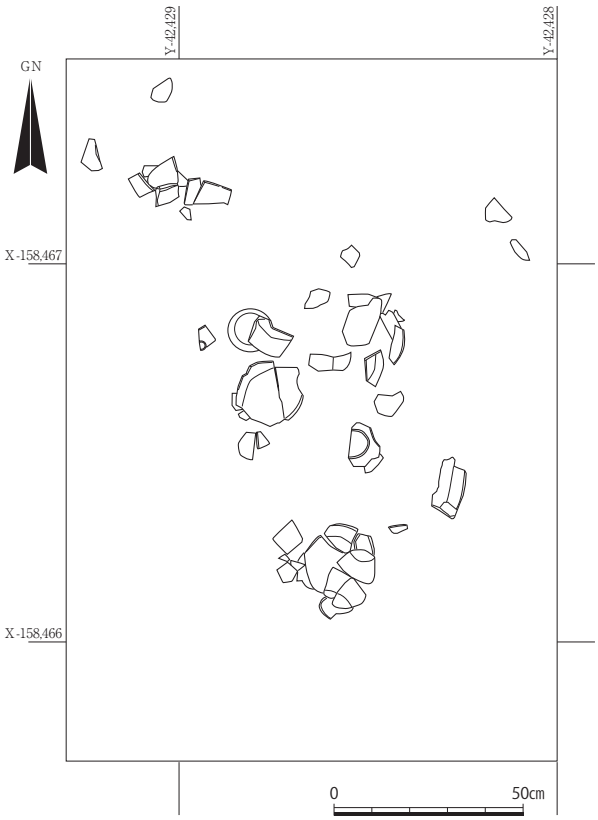
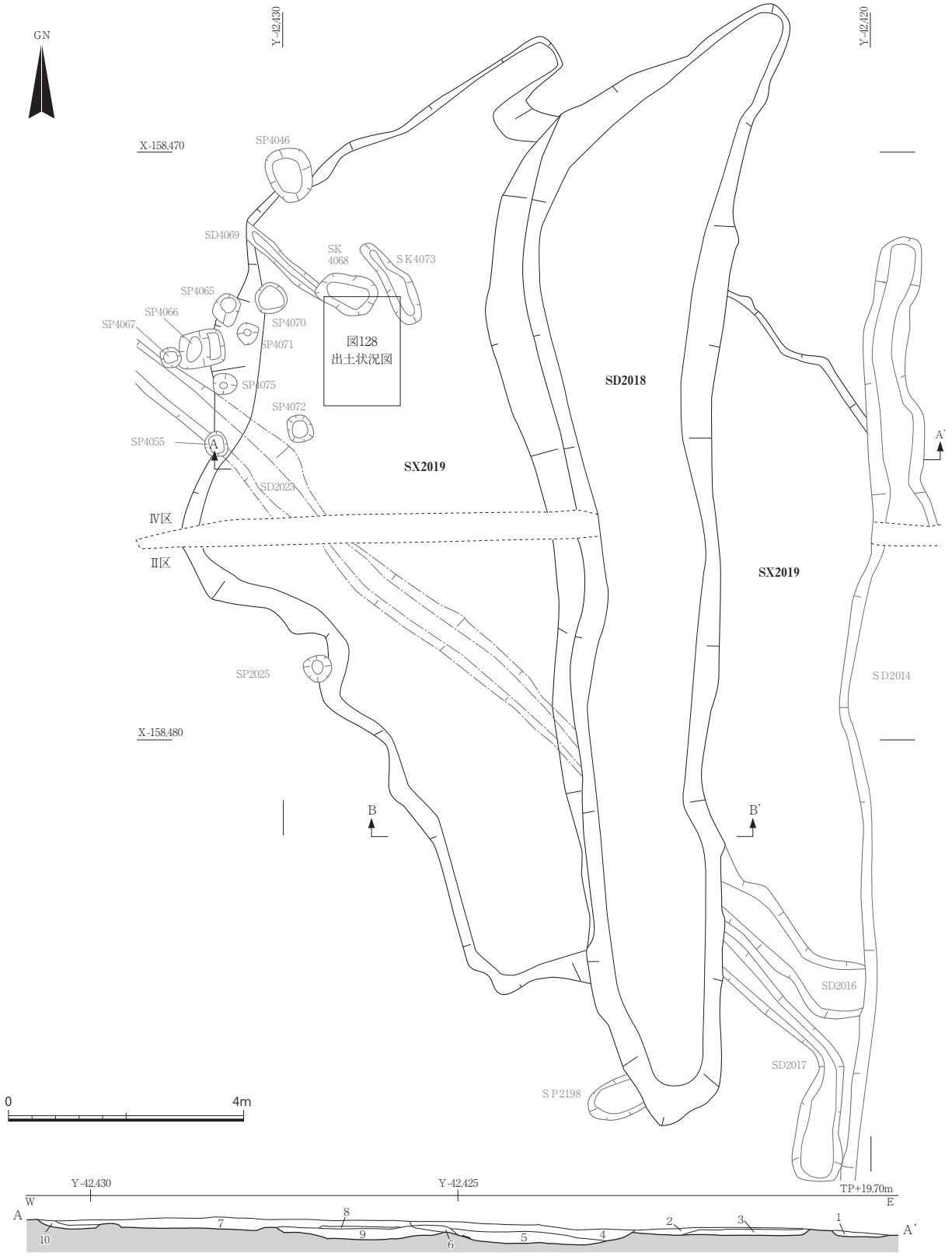
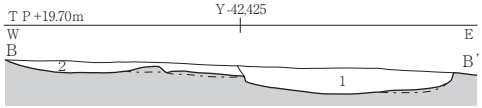


図128　SX2019遺物出土状況図　１：20



1：黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂
2：灰色 (5Y6/1) 粗砂混じり粘土
3：灰黄色 (2.5Y6/2) 微砂混じり粘土
4：暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土混じり褐灰色 (10YR5/1) 粘土
5：黒褐色 (2.5Y3/2) 粘土
6：灰色 (5Y4/1) 粘質シルト混じり粗砂
7：黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト
8：灰色 (5Y6/1) 粗砂混じり粘質シルト
9：暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質シルト
10：灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト



1：黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質シルト　(SD2018)
2：灰色 (5Y3/1) 粗砂混じり粘質シルト　(SX2019)

1：SD2014
2・3・7～9：SX2019
4～6：SD2018
10：SD2023

0　2m

図129　SD2018・SX2019遺構図・断面図　1：100・1：80

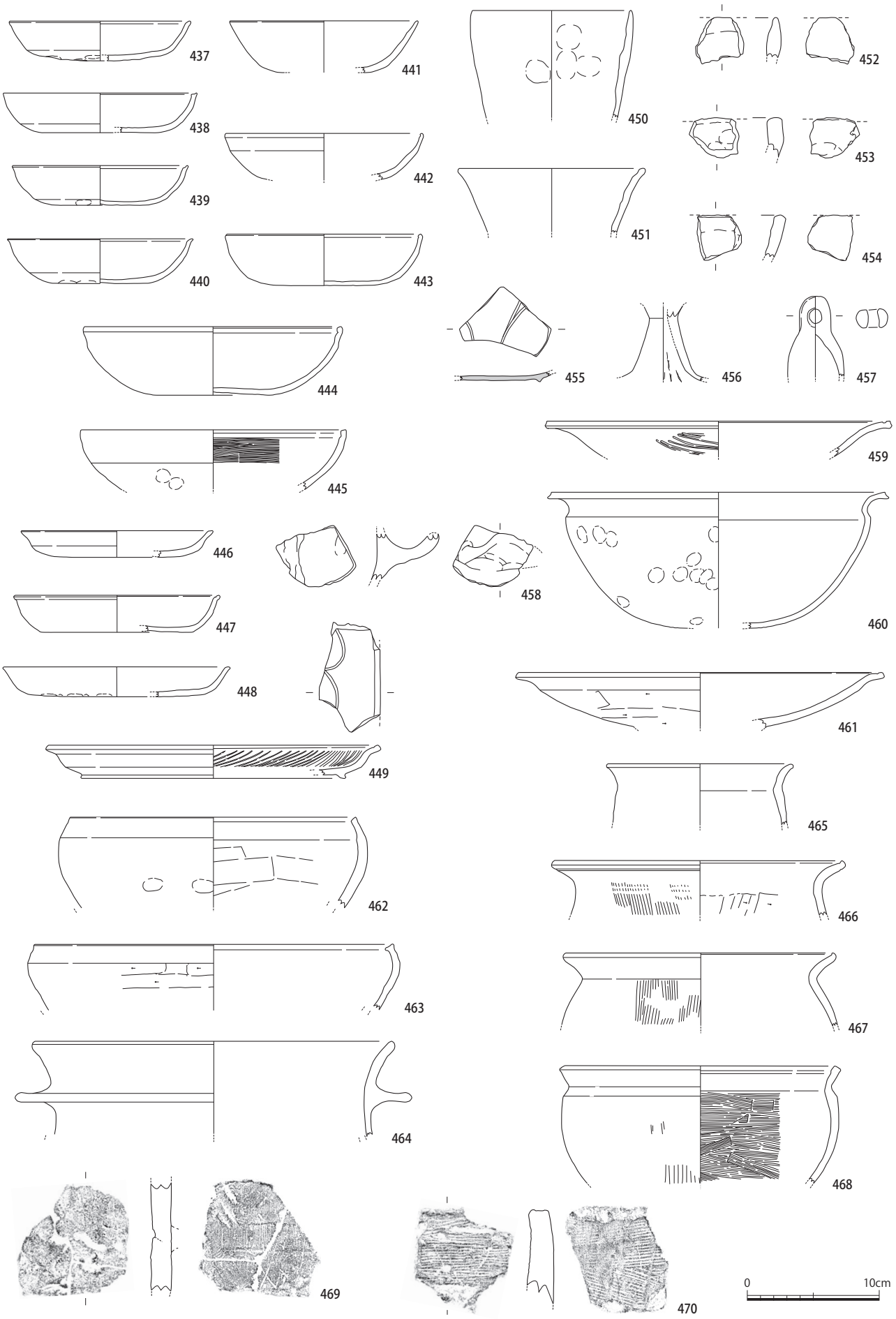


図130　SX2019出土土師器・黒色土器・製塩土器・埴輪　1：4

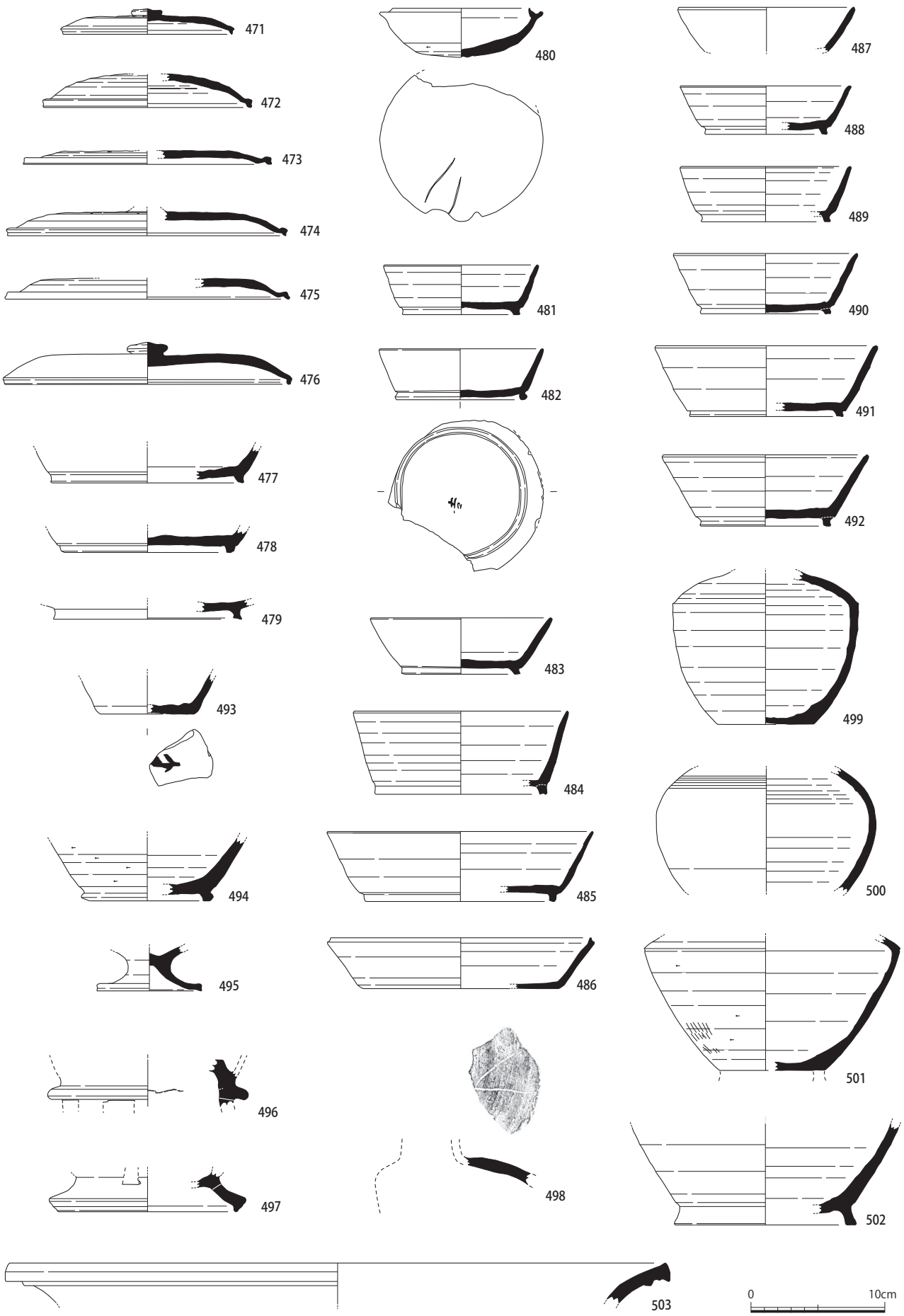


図131　SX2019出土須恵器　1：4

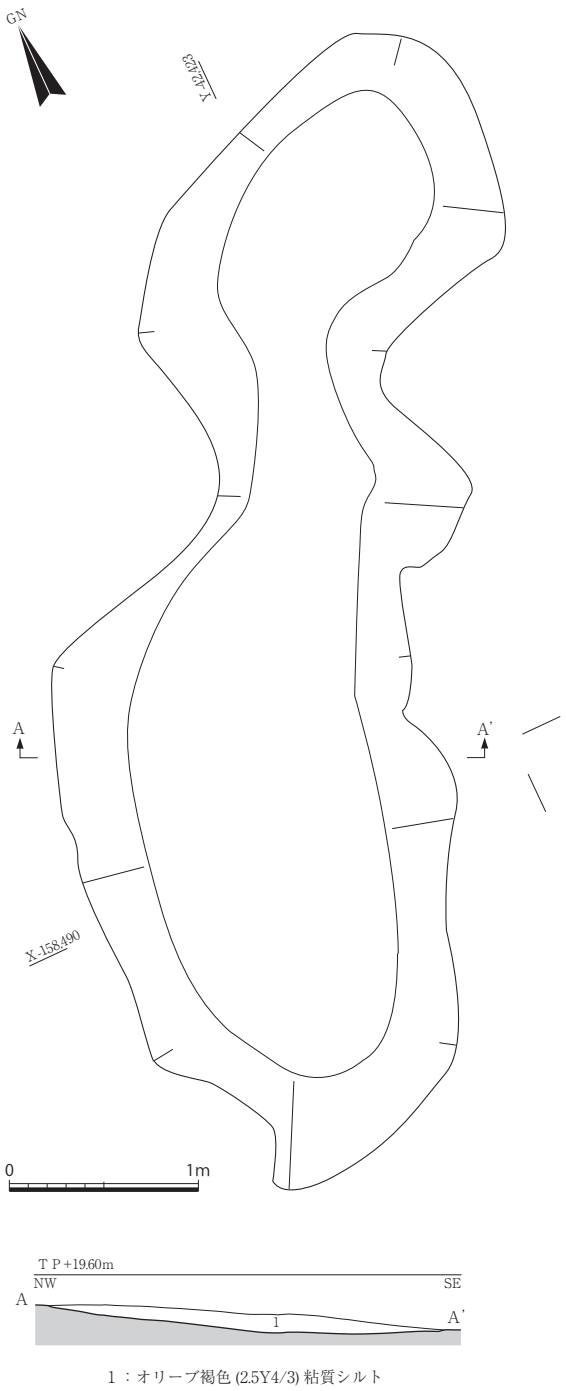


図132　SX2026遺構図・断面図　1：40

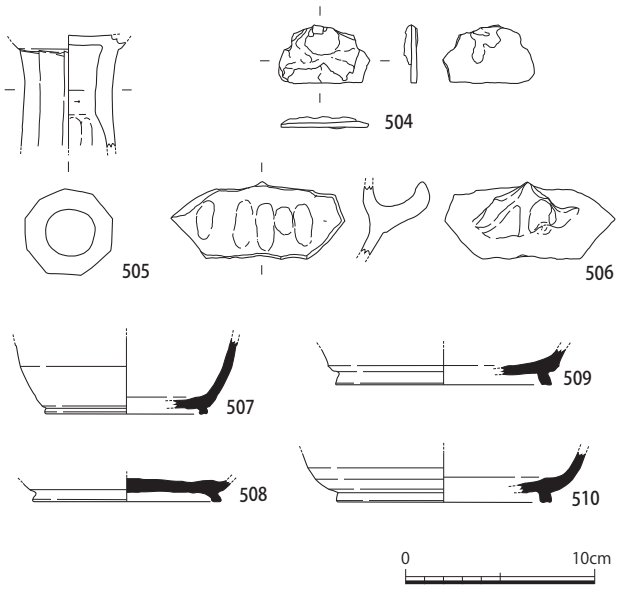


図133　SX2026出土土師器・須恵器・金属製品　1：4

（5Y5/1）粗砂混じり粘質シルトで、NR2005の氾濫により侵食された後に堆積した土砂の可能性がある。

出土遺物は須恵器杯H蓋（436）のみである。天井部と口縁部の境界が不明瞭な全体に丸い形状で、焼成があまく摩滅している。色調はN8/0灰白色で、他の個体より明るい。口径11.4㎝、器高3.9㎝で、内外面ともに全て回転ナデ調整を施している。内面に「新三」の墨書が見られる（図版21）。７世紀前半の所産と考える。

SX2019［4002・4004］（写真12、図128～131、図版14）　３Ｃ～Ｄで検出した規模の大きい落ち込みで、塵芥処理坑の可能性が高い。長舎SB３～６を中心とする官衙遺構が廃絶し再編される時期の遺構となる可能性がある。Ⅳ区調査時点では、SD2018を挟み別の遺構番号を付したが、現地調査後に同一遺構と判断した。

南北長16.2m、東西長12.0m、深さ0.10～0.28mを測る。断面形状は皿状を呈し、埋土は粗砂混じり粘土を主体とする。中央部をSD2018、東側をSD2014、西側をSP2025・4046・4055・4065・4066に切られる。SD2023、SK4068・4073、SP4070～4072・4075を切る。

東西1.3m×南北1.5mの範囲に遺物が集中して出土した（巻頭図版３）。出土遺物は、土師器、黒色土器、製塩土器、埴輪、須恵器で、８世紀後半に帰属するものが主体となる（図130・131）。

土師器には杯Ａ、皿Ａ・Ｂ、高杯、盤、鉢、甕、把手、鍋、羽釜、蛸壺がある。

437～443は杯Ａ。すべて内外面ともにナデ調整を施すもので、一部の資料は底部付近にユビオサエの痕跡を残す。復元口径13.2～15.0㎝、器高3.0～3.9㎝。口縁端部の処理は438が面取で、439・440は内傾して面を持つ。441は丸く収め、442・443は内側に巻込む。

444と445は復元口径20㎝の杯。444は口縁端部を内側に巻込み、内外面ともにナデ調整を施す。445は口縁端部を面取し、内面に凹線を巡らす。内面は上半にヨコハケを施し、それより下はナデ調整を施す。外面はナデ調整を施すが、底部付近はユビオサエの痕が残る。

446～448は皿Ａ。446・448は口縁端部を丸く収め、447は内側に巻込む。内外面ともにナデ調整を施す。復元口径14.6㎝～16.6㎝。449は皿Ｂで、底部を欠く。口縁部は短く外方に開き、端部の内側への巻込は弱い。内面

は口縁部に一段放射暗文を施し、見込み部に螺旋暗文を施す。外面にはミガキ・暗文を施さない。復元口径25.3cm、器高2.5cm。

高杯は、456が脚柱部で、外面調整は不明であるが内面にはシボリメが見られる。459は外反する杯部で、口縁端部を内側に巻込む。外面にミガキ調整を施すが、内面はナデ調整しか観察できなかった。461は盤で復元口径27.9cm。外面はヘラケズリ調整で口縁部のみナデ調整を施す。内面は摩滅のため調整不明である。

457は蛸壺。462・463は鉢で、口縁端部が異なる。464は羽釜。465～468は甕で、465が小型品。466・467は外反する口縁部で端部を弱く内側に巻込み、468は直立する口縁部で端部を面取りする。体部外面は全てタテハケ調整で、内面は466がヘラケズリのちナデ調整で、468が丁寧なヨコハケ調整を施す。

458は甑または鍋の把手。460は鍋で、半球形の体部に強く外反する口縁部が付く。ヨコナデにより口縁部と胴部の境は明瞭。外面はユビオサエを部分的にナデ消すが痕が残り、内面はナデ調整を施す。

黒色土器椀A（455）は断面逆三角形の低い高台で、見込み部に螺旋暗文を施す。

製塩土器（450～454）は、器壁が薄い浅黄橙色の個体と器壁が厚い灰白色または橙色の個体がある。450・451は筒型のタイプで内外面ともにナデ調整を施すが、部分的に成形時のユビオサエ痕が残る。厚手の450～452は体部の残りが悪く形態は不明で、451のみ口縁端部をわずかに内側へ折り曲げる。

円筒埴輪は、469が突帯の剥離した体部で外面はタテハケ調整、内面はナデ調整である。470は口縁部で、やや内傾気味に直立する。内外面ともにヨコハケ調整を施し、口縁端部のみナデ調整で仕上げている。

須恵器には杯蓋、杯A・B・H、椀B、壺、平瓶、円面硯、甕がある。471～476は杯蓋で、全てかえりを持たないタイプである。471と476は宝珠形つまみを持ち、それ以外は頂部を欠く。474～476が復元口径20.8～21.2cmと大きく、473が18.6cm、472が15.4cm、471が12.6cmである。473と475が特に口縁部の屈曲が大きく、器高が低い。

480は杯Hで、受部径11.0cm。底部にヘラ記号がある。他の杯に比べて時期が古い。477～479・481～485・487～492は杯Bで、いずれも底部外端に高台を付すもので、法量分化が見られる。477～479は口縁部を欠く資料で、479は底部から高台部かけて墨と思われる付着物があり転用硯の可能性がある。481・482・487～490は復元口径11.4～13.8cm。482は底部に「吉」の墨書があり（図版21）、復元口径12.3cm、高台径10.0cm、器高3.8cm。483・491・492は復元口径15.2～16.4cmで、492は他の資料に比べて直立する高台が付く。484は他の資料と違い底部より直立気味に口縁部がのびる深い器形で、復元口径16.1cm、器高6.2cm。485は復元口径19.8cmの大型品。486は杯Aで、口縁端部を上方につまみ上げる。復元口径19.4cm、器高3.8cm。

椀B（485）は、復元口径19.8cm、器高6.2cmで口縁がほぼ直立する。底部外周端に直立する高台が付く。

493～495・499～502は壺で、493は平底の底部に判読不能の墨書がある。494は外側に踏ん張る短い高台が付く。495は小型壺の脚台部分。499はやや肩が張り稜のある体部で、肩には自然釉薬がかかる。平底の底部はヘラ切り後未調整で、底径7.4cm。500は体部が卵形で頚部近くにカキメ調整を施す。501は肩部に明瞭な稜角を持ち、高台を欠く。502は底部に外側に向かい踏ん張る高台が付く。

497は台付椀あるいは壺類の脚部で、透かし孔がある。498は平瓶の破片で、ヘラ記号を刻む。

503は大型の甕で、口縁が大きく外反し端部は下方に折れる。復元口径49cmとなるが、残存率1/10以下であるため正確さを欠く。

496は円面硯の破片で、方形の透かし孔のある圏足が付く。陸部の復元径11.2cmとなる小型品。今回の調査では確認できた硯はこの１点のみで、他には転用硯の可能性がある杯の破片が出土している。

SX2026（図132、図版14）　３Ｄ～Ｅで検出した不定形の落ち込みである。長さ6.1m、幅2.3m、深さ0.1mを測り、堆積はオリーブ褐色粘質シルトの単層である。本遺構の周辺では遺物を含む灰色粗砂混じり粘質土が遺構検出面の黄褐色粘土に食い込んで検出されており、軟弱な地盤に廃棄された土器片が踏み込まれた可能性がある。調査担当者の所見によると本遺構も堆積状況等からこれら踏み込みと同様のものと考えられる。

出土遺物は８世紀の土師器、須恵器、製塩土器、不明鉄製品である（図133）。505は土師器高杯で、杯部は大半が失われ摩滅で調整不明である。脚柱部外面は縦位のヘラケズリで９面に面取りされており、内面は杯部付近が横方向のケズリ調整でそれより下は縦方向のユビオサエである。506は土師器甕または鍋の把手である。

須恵器杯Bはいずれも底部外周端あたりに高台を付し、507・510は直立した高台で508・509が外側に踏ん張る高台である。

504は厚さ0.2～0.3cmの鉄製品で、用途は不明である。

第４章　自然科学分析

第１節　分析の目的及び概要

河合遺跡の発掘調査に際し、３種類の分析を実施した。１つ目は、掘立柱建物より出土した礎板の放射性炭素年代測定である。礎板は転用材の場合は建築年より古い年代が示されるが、年代決定のための良好な出土遺物を欠くため分析を実施した。分析試料が出土した遺構はSB７（図50・51）およびSB11（図58・59）である。

２つ目は、花粉分析及び植物珪酸体分析である。第２章で記したように、西除川左岸段丘は早いところでは古墳時代後期に開発が開始される。大溝などの存在から、飛鳥時代に本格的な開発が始まったとされ、今回の調査で検出された飛鳥～奈良時代の遺構に残る花粉化石等から段丘開発開始後の植生復元を目的とした。試料はⅣ区北壁で時期変遷、溝（SD2002）で飛鳥～奈良時代の周辺景観を明らかにすべく試料を採取した。また、調査地の局地的な様相を明らかにすべく井戸（SE2073）からも試料を採取した。

３つ目は、掘立柱建物の柱穴より出土した礎板の樹種同定である。保存処理に付随したもので、今回報告した以外のSP1174（SB７）出土礎板についても高級アルコール法での処理前に樹種を同定している。結果は、同じくコウヤマキであった。

第２節　放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ

第１項　資料と方法

試料は、奈良時代以降の遺構と考えられているSP1174から出土した礎板（遺物No.Ⅰ−115）（図51:218）と、時期不明のSP3070から出土した礎板（遺物No.Ⅲ−16）（図59：239）、時期不明のSP3088から出土した礎板（遺物No.Ⅲ−116）（図59：240）の３点である。SP1174の礎板（遺物No.Ⅰ−115）については複数の測定試料を測定するウィグルマッチング法を用いた年代測定を行い、他の２試料については単体の測定試料による年代測定を行った。

ウィグルマッチング法を行ったSP1174の礎板（遺物No.115）は、樹種はコウヤマキで、辺材部が確認でき、年輪数は75年輪以上がみられた。測定試料として、外側から１～５年輪目（PLD－34062）、外側から36～40年輪目（PLD－34063）、外側から71～75年輪目（PLD－34064）の３箇所を採取した。

単体の測定試料による年代測定を行ったSP3070の礎板（遺物No.Ⅲ－16）は、樹種はコウヤマキで、辺材部を測定試料とした（PLD－34065）。また、SP3088の礎板（遺物No.Ⅲ－116）は、樹種はコウヤマキで、辺材部

表４　ウィグルマッチング測定試料および処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理
PLD−34062	遺物No.Ⅰ−115 遺構：SP1174 種類：生材（コウヤマキ） 器種：礎板 試料の性状：辺材部 年輪数：75年輪以上 状態：dry 備考：糖アルコール処理済	採取位置：外側から1～5年輪目（辺材部）	超音波洗浄 有機溶剤処理：ヘキサン,2−プロパノール,アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD−34063		採取位置：外側から36～40年輪目	
PLD−34064		採取位置：外側から71～75年輪目	

表５　単体測定試料および処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理
PLD−34065	遺物No.Ⅲ−16 遺構：SP3070	種類：生試材（コウヤマキ） 試料の性状：辺材部 器種：礎板 状態：dry 備考：糖アルコール処理済	超音波洗浄 有機溶剤処理：ヘキサン,2−プロパノール,アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD−34066	遺物No.Ⅲ−116 遺構：SP3088	種類：生試材（コウヤマキ） 試料の性状：辺材部 器種：礎板 状態：dry 備考：糖アルコール処理済	超音波洗浄 有機溶剤処理：ヘキサン,2−プロパノール,アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

を測定試料とした（PLD－34066）。

測定試料の情報、調製データは表４、５のとおりである。なお、今回の測定試料はいずれも糖アルコール含浸法による保存処理が施されていた。そのため、ＡＡＡ処理を行う前に、坂本ほか（2016）にしたがい、有機溶剤処理による糖アルコールの除去を行った。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトＡMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

第２項　結果

表６、７に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代を、表６にはさらにウィグルマッチング結果を、図134にウィグルマッチング結果を、図135に単体測定試料の暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際に、この年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はＡD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代（yrBP）の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第３項　考察

SP1174から出土した礎板（遺物No.115：PLD－34062～PLD－34064）の最外試料年代は、2σ暦年代範囲（確率95.4％）で401－434calＡD(78.5%)、455－476calＡD(11.8%)、486－499calＡD(5.1%)であった。これに、最外試料の中心よりも外側にある年輪数２年（2.5年：小数以下切り捨て）を加えて最外年輪年代を求めると、403－436calＡD(78.5%)、457－478calＡD(11.8%)、488－501calＡD(5.1%)で、５世紀初頭～６世紀初頭の暦年代を示した。これは、古墳時代中期～後期初頭に相当する。発掘調査所見によれば、SP1174ほか11基の柱穴より構成されるSB７は奈良時代の遺構と考えられており、礎板（遺物No.Ⅰ－115）は古墳時代中期～後期初頭の材の転用材であった可能性が考えられる。なお、36～40年輪目（PLD－34063）の試料は、2σ暦年代範囲で165－19calBC(92.3%)および12－1calBC(3.1%)で、他の試料（PLD－34062、34064）よりも古い暦年代を示した。これは、糖アルコールの影響を除去しきれなかったためである可能性がある。

SP3070から出土した礎板（遺物No.Ⅲ－16：PLD－34065）は、2σ暦年代範囲で432－490calＡD(13.9%)および532－610calＡD(81.5%)で、５世紀前半～７世紀初頭の暦年代を示した。これは、古墳時代中期～飛鳥時代に相当する。

SP3088から出土した礎板（遺物No.Ⅲ－116：PLD－34066）は、2σ暦年代範囲で429－494calＡD(40.1%)、510－517calＡD(1.4%)、529－590calＡD(53.9%)で、５世紀前半～６世紀後半の暦年代を示した。これは、古墳時代中期～後期に相当する。

調査所見によると、SP3070とSP3088で構成されるSB11は飛鳥時代以降の建物と考えられており、礎板（遺物No.Ⅲ－16：PLD－34065）と礎板（遺物No.Ⅲ－116：PLD－34066）はともに転用材であった可能性が考えられる。（パレオ・ラボAMS年代測定グループ　伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・ZaurLomtatidze・小林克也）

引用・参考文献

BronkRamsey,C.,vanderPlicht,J.,andWeninger,B.(2001)'Wigglematching'radiocarbondates.Radiocarbon,43(2A),381-389.

BronkRamsey,C.(2009)BayesianAnalysisofRadiocarbondates.Radiocarbon,51(1),337-360.

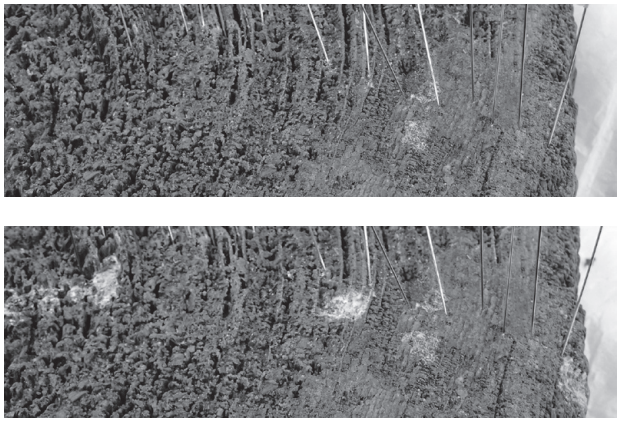
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」:3-20, 日本第四紀学会.

Reimer,P.J.,Bard,E.,Bayliss,A.,Beck,J.W.,Blackwell,P.G.,BronkRamsey,C.,Buck,C.E.,Cheng,H.,Edwards,R.L.,Friedrich,M.,Grootes,P.M.,Guilderson,T.P.,Haflidason,H.,Hajdas,I.,Hatte,C.,Heaton,T.J.,Hoffmann,D.L.,Hogg,A.G.,Hughen,K.A.,Kaiser,K.F.,Kromer,B.,Manning,S.W.,Niu,M.,Reimer,R.W.,Richards,D.A.,Scott,E.M.,Southon,J.R.,Staff,R.A.,Turney,C.S.M.,andvanderPlicht,J.(2013)IntCal13andMarine13RadiocarbonAgeCalibrationCurves0–50,000YearscalBP.Radiocarbon,55(4),1869–1887.

坂本　稔・伊藤幸司・今津節生（2016）含浸処理された糖を除いた木材の炭素14年代測定.日本文化財科学会第31回大会実行委員会編「日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集」:148-149, 日本文化財科学会.

表６　放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	δ 13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD－34062 遺物No.Ⅰ－115 1～5年輪目	－22.10±0.17	1635±19	1635±20	395－423cal A D(68.2%)	350－367cal A D(2.5%) 380－432cal A D(83.9%) 491－530cal A D(9.0%)
PLD－34063 遺物No.Ⅰ－115 36～40年輪目	－27.41±0.12	2061±21	2060±20	111－41calBC(68.2%)	165－19calBC(92.3%) 12－1calBC(3.1%)
PLD－34064 遺物No.Ⅰ－115 71～75年輪目	－23.60±0.20	1649±20	1650±20	385－420cal A D(68.2%)	342－427cal A D(95.4%)
		最外試料年代 （PLD－34063無し）		408－428cal A D(68.2%)	401－434cal A D(78.5%) 455－476cal A D(11.8%) 486－499cal A D(5.1%)
		最外年輪年代 （PLD－34063無し）		410－430cal A D(68.2%)	403－436cal A D(78.5%) 457－478cal A D(11.8%) 488－501cal A D(5.1%)



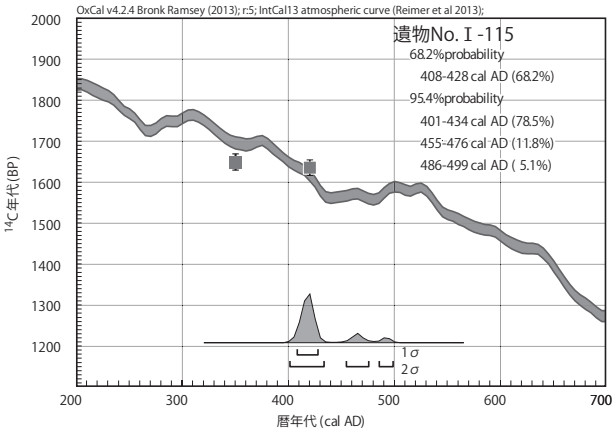
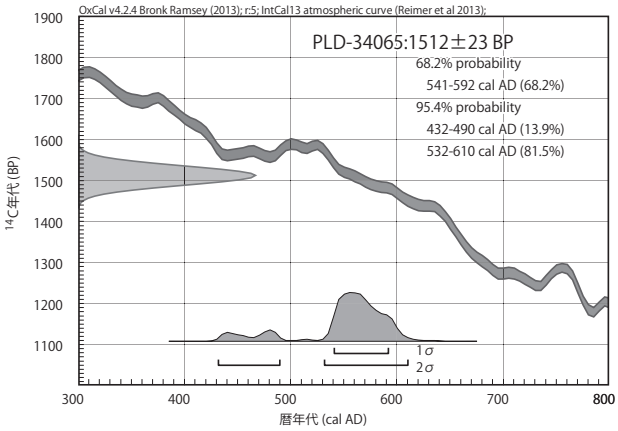


図134　測定試料(PLD－34062～PLD－34064)写真及び暦年較正、ウィグルマッチングの結果（写真上：採取前、写真下：採取後）

表７　単体試料の放射性炭素年代測定、暦年較正の結果

測定番号	δ 13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD－34065 遺物No.Ⅲ－16	－23.16±0.23	1512±23	1510±25	541－592cal A D(68.2%)	432－490cal A D(13.9%) 532－610cal A D(81.5%)
PLD－34066 遺物No.Ⅲ－116	－25.06±0.15	1532±19	1530±20	435－449cal A D(10.3%) 471－487cal A D(13.2%) 534－568cal A D(44.6%)	429－494cal A D(40.1%) 510－517cal A D(1.4%) 529－590cal A D(53.9%)



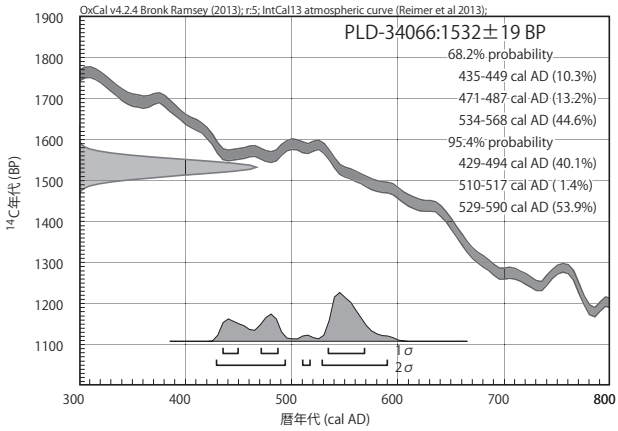


図135　単体試料の暦年較正結果（左：PLD－34065、右：PLD－34066）

第３節　花粉分析・植物珪酸体分析

文化財調査コンサルタント株式会社

第１項　はじめに

河合遺跡は大阪府中央部、松原市の西部（河合5丁目238－1の一部，238－3，238－4，238－6）に位置する。本報は、河合遺跡における過去の水稲耕作等農耕の実体及び調査地周辺における古環境の変遷を明らかにする目的で、文化財調査コンサルタント株式会社が松原市からの委託を受け、実施・報告した分析調査報告書を再編したものである。

第２項　分析試料について

調査グリッド平面図（図136）中に試料採取地点を、断面図（図137～139）中に試料採取位置を示した。分析試料のうちSE2073（井戸）は、松原市教育委員会が試料の採取を行った。Ⅳ区北壁及びSD002は、文化財調査コンサルタント株式会社が試料の採取を行った。本稿の図面は松原市教育委員会より提供を受けた原図をもとに作成し、地層の説明も松原市教育委員会の観察に従った。ただしSD2002のみは、受託者の観察による地層の説明を示した。

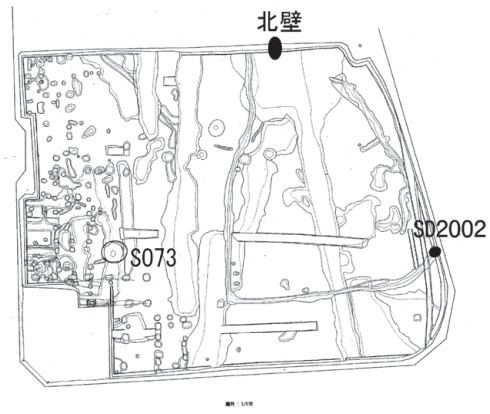
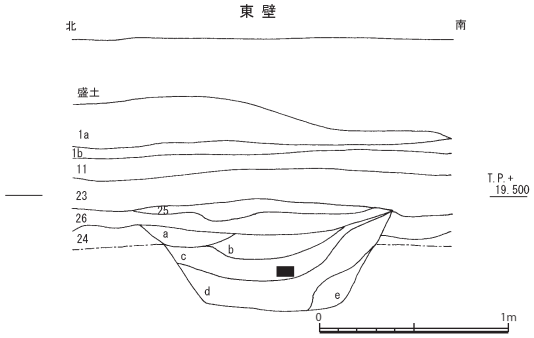


図136　調査グリッド平面図（試料採取地点）



25:灰ｵﾘｰﾌﾞ粘土 26:灰白色粗砂 a:細砂 b:細砂（粘土のﾌﾞﾛｯｸ含む）
c:やや腐植質の粘土 d:細砂（24層のﾌﾞﾛｯｸ含む）

図138　SD2002断面図（試料採取位置）

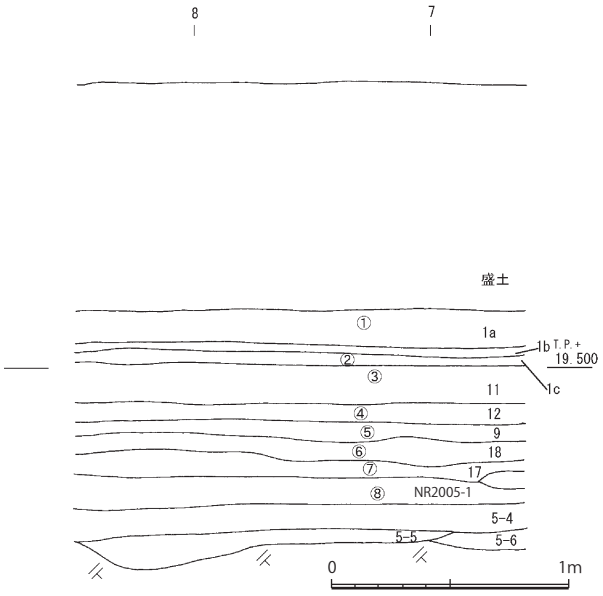
第３項　分析方法

(1) 微化石概査方法

花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を観察し、花粉（胞子）、植物片、炭片、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を概観し、５段階で示した。

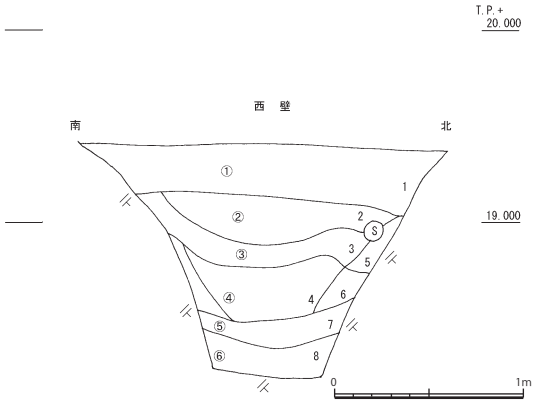
(2) 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従って、イネ科花粉をイネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ﾐｸﾛﾝ未満）に細分した。



1a:細礫混粘土（腐植質） 1b:細礫混細砂質シルト 1c:細礫混シルト質細砂
11:細礫混シルト 12:細礫混シルト 9:細砂混粘土 18:細砂混粘土
17:礫質粘土 NR2005-1:粘土（腐植質） NR2005-4:灰色中～細砂

図137　Ⅳ区北壁断面図（試料採取位置）



1:黄灰色粗砂混粘土 2:褐灰色粘土 3:明黄褐色粘土 4:灰色粘土
5:黄褐色粘土 6:灰色粗砂混粘土 7:灰色粘土 8:暗灰色粘土

図139　SE2073断面図（試料採取位置）

表８　植物珪酸体同定レベル

同定レベル	コード	分類群	対応する栽培植物
3	1	イネ	イネ
	3	イネ籾殻（穎の表皮細胞）	イネ
	21	ムギ類（穎の表皮細胞）	コムギ・オオムギ
	41	オヒシバ属（シコクビエ型）	シコクビエ
栽培植物との対応が明らかな分類群	61	キビ族型	ヒエ・アワ・キビ
	62	キビ属型	キビ
	64	ヒエ属型	ヒエ
	66	エノコログサ属型	アワ
	84	ウシクサ族B	サトウキビ
	91	モロコシ属型	モロコシ
	93	ジュズダマ属型	ハトムギ
4	11	サヤヌカグサ属	サヤヌカグサ・アシカキ
	13	マコモ属	マコモ
	31	ヨシ属	ヨシ
	33	ダンチク属	ダンチク
	35	ヌマガヤ属型	ヌマガヤ
	51	シバ属	シバ属
	71	トダシバ属	トダシバ属
	81	ススキ属型	ススキ属
	83	ウシクサ族A	チガヤ属など
	201	メダケ節型	メダケ節
	203	ネザサ節型	ネザサ節
母植物との対応が明らかな分類群	205	チマキザサ節型	チマキザサ節・チシマザサ節
	207	ミヤコザサ節型	ミヤコザサ節
	209	マダケ属型	マダケ属
	350	カヤツリグサ科(スゲ属など)	スゲ属
	390	シダ類	シダ類
	501	ブナ科(シイ属)	シイ類
	503	ブナ科(アカガシ亜属)	カシ類
	510	クスノキ科	バリバリノキなど(クスノキ以外)
	520	マンサク科(イスノキ属)	イスノキ属
	530	アワブキ科	アワブキ科
	540	モクレン属型	モクレン属
	570	マツ科型	マツ科
	580	マツ属型	マツ属

(3) 植物珪酸体分析方法

藤原（1976）のグラスビーズ法に従って実施した。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。同定に際して、母植物との対応が明らかな、イネ亜科の機動細胞を中心とした分類群（表８）を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスビーズの個数が300を超えるまで計数を行った。

第４項　分析結果

(1) 微化石概査結果

微化石概査結果を表９に示す。花粉化石の含有量は北壁では多かったが、SD2002では少なかった。植物珪酸体化石の含有量は全ての試料で多かった。一方、微粒炭、珪藻化石の含有量はほとんどの試料で少なかった。火山ガラスの含有量も多いものの、堆積物の時期から考えて、ほとんどは２次堆積と考えられる。

(2) 花粉分析結果

花粉分析結果を表10、図140～142に示す。花粉ダイアグラムでは、木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、スペクトルで示した。また、総合グラフムとして区分ごとの累積百分率を示したほか、１g当たりの花粉と胞子の含有量を含有量グラフとして、対数目盛りで示した。スペクトルグラフ中では、木本(針葉樹・広葉樹）、草本・藤本花粉、胞子の区分でスペクトルの色を変えて示している。

10試料の花粉分析を行った結果、すべての試料から花粉・胞子（化石）が検出された。しかし前述のように、いくつかの試料では花粉・胞子の含有量が少ないために、統計処理上十分な量の花粉が検出できなかった。

(3) 植物珪酸体分析結果

分析結果を表11、図143～145に示す。植物珪酸体ダイアグラムでは、検出量を１gあたりの含有数に換算した数を、検出した分類群ごとにスペクトルで示した。

北壁の７試料では表８に示したレベル３の11分類群を対象に同定を行った。この結果、すべての試料で葉身に由来する「イネ」が検出できたが、そのほかの分類群は検出できなかった。SD2002、SE2073の２試料ではレベル４の24分類群を対象に同定を行った。この結果、８分類群が検出され、そのほかの分類群は検出できなかった。

第５項　花粉分帯

花粉群集の特徴と各地位で明らかに成っている分析層準の堆積時期から、以下のように局地花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花

表９　微化石概査結果

試料No.		花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ｶﾞﾗｽ	ﾌﾟﾗﾝﾄ･ｵﾊﾟｰﾙ
Ⅳ区北壁	1	◎	△×	○	○	○	◎
	2	○	△×	○	△	◎	◎
	3	◎	△×	○	△	◎	◎
	4	◎	△×	○	△	○	◎
	5	◎	△×	○	△	◎	◎
	6	◎	△×	○	△	◎	◎
	7	◎	△×	○	△	○	◎
	8	◎	△×	○	△	○	◎
SD2002(溝)		△	△	△×	△×	◎	◎
SE2073(井戸)		○	△	△	○	◎	◎

凡例 ◎ ：十分な数量が検出できる
△ ：非常に少ない
× ：検出できない
○ ：少ないが検出できる
△×：極めてまれに検出できる

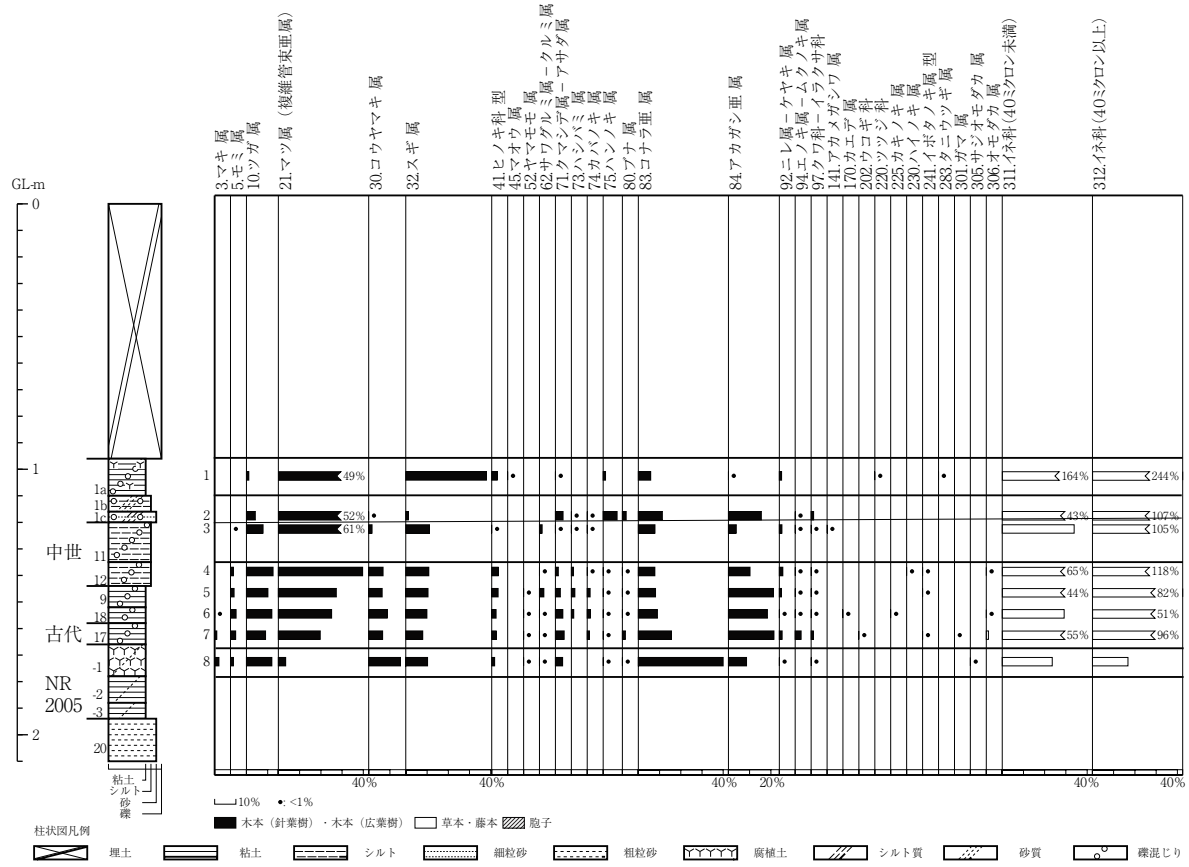


図140　花粉ダイ

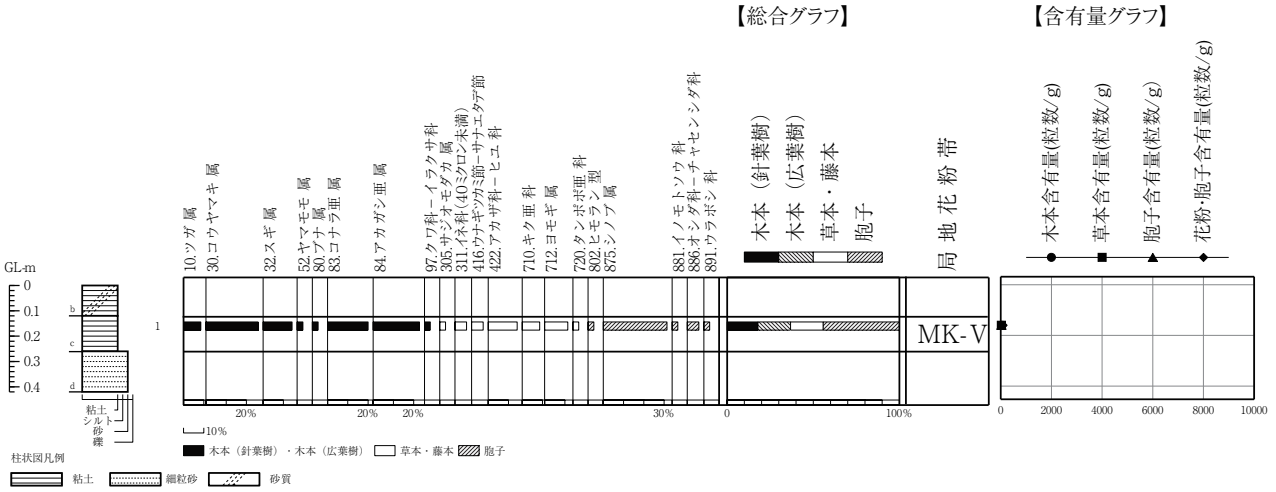


図141　花粉ダイアグラム（SD2002：溝）

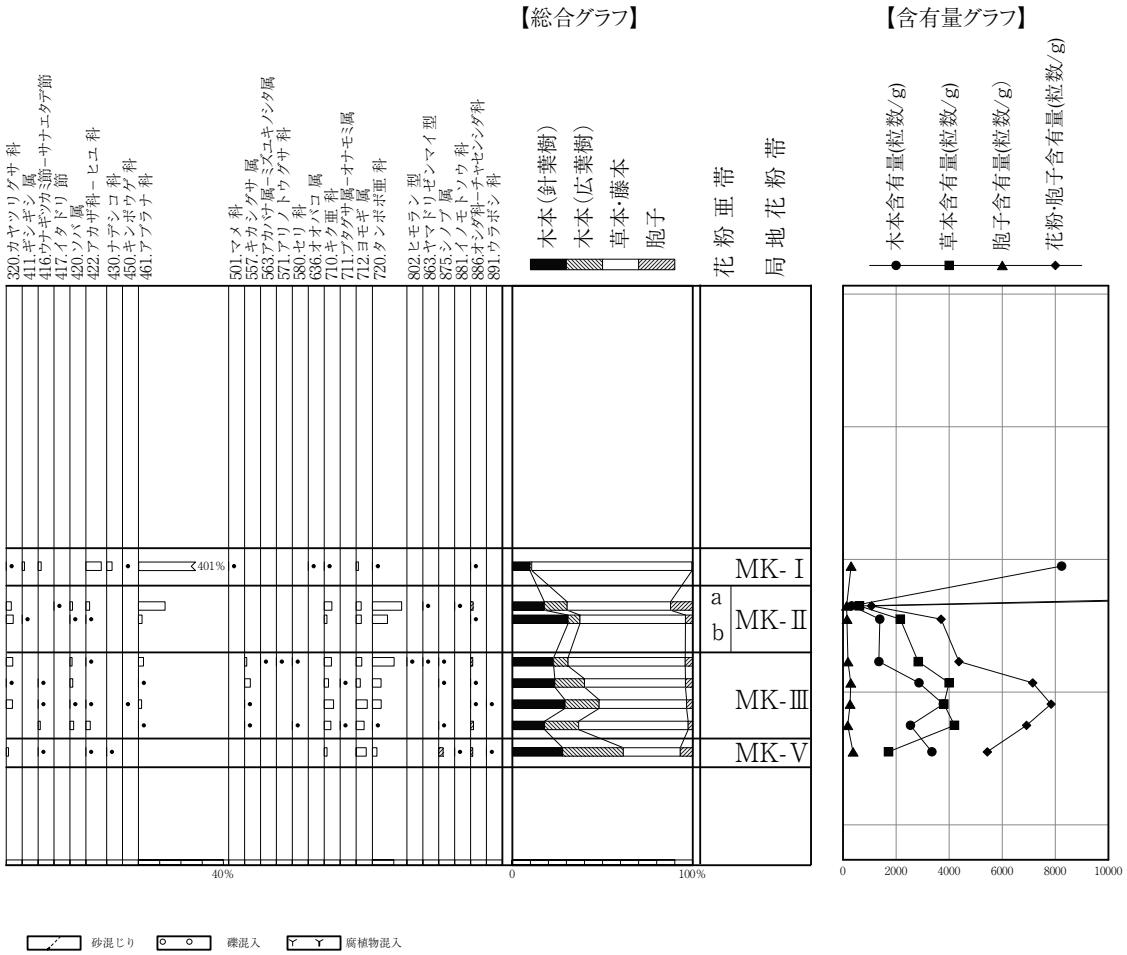
粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料No.も下位から上位に向かって記した。

(1) MK－Ⅴ帯（調査地北壁土層試料No.８、SD2002試料No.１）

コナラ亜属が卓越し、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、アカガシ亜属を伴う。SD2002では花粉の含有量が少ない事もあるが、マツ属（複維管束亜属）が全く検出されない。一方、コウヤマキ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属の検出量が多い。更に、SD2002はNR2005（調査地北壁土層No.８）を切って、17層（No.７）に覆われることから、MK－Ⅴ帯に対応すると考えた。

(2) MK－Ⅳ帯（SE2073試料No.６）

スギ属が卓越し、マツ属（複維管束亜属）を伴うほ



アグラム（北壁）

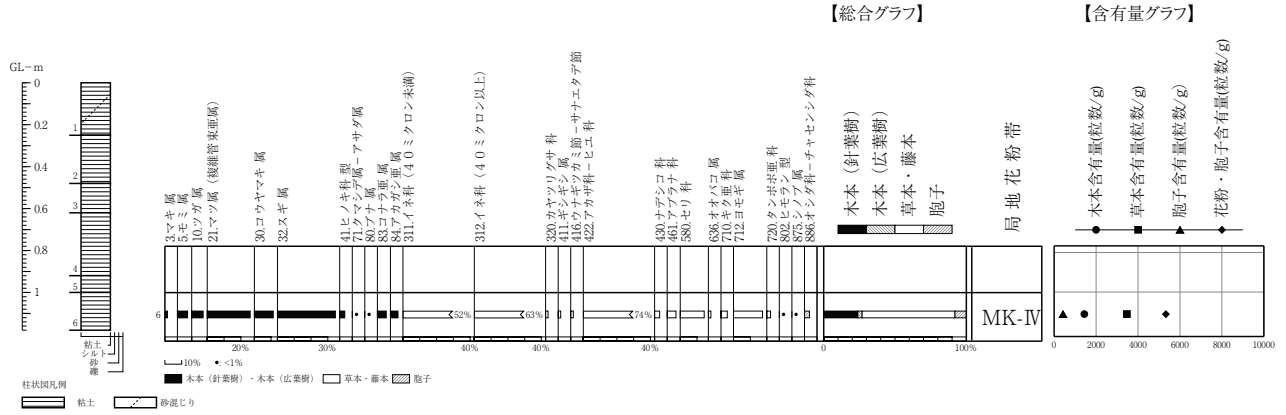


図142　花粉ダイアグラム（SE2073：井戸）

か、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属も特徴的に検出される。コナラ亜属やアカガシ亜属の出現率は低い。

(3) MK－Ⅲ帯（調査地北壁土層試料No.７～４）

Ⅳ帯から花粉群集が大きく変化する。マツ属（複維管束亜属）が急激な増加傾向を示す一方で、コナラ亜属、アカガシ亜属は緩やかな減少傾向を示す。このほかツガ属、コウヤマキ属、スギ属が安定した出現傾向を示す。

SE2073では、スギ属、マツ属（複維管束亜属）が高率を示す。更に、SD2002は17層に覆われることから、MK－Ⅲ層最下部に相当すると考えた。

(4) MK－Ⅱ帯（調査地北壁土層試料No.３、２）

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、ツガ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属を伴う。随伴種であるツガ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属の出現傾向か

試料番号		1			2			3			4 (北)		
3 *Podocarpus*	マキ 属												
5 *Abies*	モミ 属							1	0%	6	4	1%	18
10 *Tsuga*	ツガ 属	3	1%	90	7	4%	14	19	8%	109	37	13%	169
21 *Pinus(Diploxylon)*	マツ 属: 複維管束亜属	133	49%	3999	88	52%	171	147	61%	841	117	40%	535
30 *Sciadopitys*	コウヤマキ 属				1	1%	2	4	2%	23	20	7%	92
32 *Cryptomeria*	スギ 属	104	38%	3127	2	1%	4	27	11%	154	32	11%	146
41 Cupressaceae type	ヒノキ 科型	7	3%	210				1	0%	6	9	3%	41
45 *Ephedra*	マオウ 属	1	0%	30									
52 *Myrica*	ヤマモモ 属												
62 *Pterocarya-Juglans*	サワグルミ 属－クルミ 属							3	1%	17	2	1%	9
71 *Carpinus-Ostrya*	クマシデ 属－アサダ 属	1	0%	30	6	4%	12	2	1%	11	4	1%	18
73 *Corylus*	ハシバミ 属				1	1%	2	1	0%	6	3	1%	14
74 *Betula*	カバノキ 属				1	1%	2	2	1%	11	2	1%	9
75 *Alnus*	ハンノキ 属	3	1%	90	11	7%	21				1	0%	5
80 *Fagus*	ブナ 属				3	2%	6				1	0%	5
83 *Querucus*	コナラ 亜属	16	6%	481	19	11%	37	19	8%	109	23	8%	105
84 *Cyclobalanopsis*	アカガシ 亜属	1	0%	30	26	15%	51	9	4%	51	30	10%	137
92 *Ulmus-Zelkova*	ニレ 属－ケヤキ 属	3	1%	90				3	1%	17	5	2%	23
94 *Aphananthe-Celtis*	ムクノキ 属－エノキ 属				1	1%	2	2	1%	11	2	1%	9
97 Moraceae-Urticaceae	クワ 科－イラクサ 科				2	1%	4	1	0%	6	1	0%	5
141 *Mallotus*	アカメガシワ 属							1	0%	6			
170 *Acer*	カエデ 属												
202 Araliaceae	ウコギ 科												
220 Ericaceae	ツツジ 科	1	0%	30									
225 *Diospyros*	カキノキ 属												
230 *Symplocos*	ハイノキ 属										1	0%	5
241 *Ligustrum*type	イボタノキ 属型										1	0%	5
283 *Weigela*	タニウツギ 属	1	0%	30									
301 *Typha*	ガマ 属												
305 *Alisma*	サジオモダカ 属												
306 *Sagittaria*	オモダカ 属										2	1%	9
311 Gramineae(<40)	イネ 科(40 ミクロン 未満)	449	164%	13501	73	43%	142	82	34%	469	193	65%	883
312 Gramineae(>40)	イネ 科(40 ミクロン 以上)	668	244%	20086	179	107%	348	253	105%	1448	349	118%	1597
320 Cyperaceae	カヤツリグサ 科	1	0%	30	4	2%	8	8	3%	46	9	3%	41
411 *Rumex*	ギシギシ 属	3	1%	90				1	0%	6			
416 *Echinocaulon-Persicaria*	ウナギツカミ 節－サナエタデ 節	4	1%	120									
417 *Reynoutria*	イタドリ 節				1	1%	2						
420 *Fagopyrum*	ソバ 属				2	1%	4	1	0%	6	3	1%	14
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ 科－ヒユ 科	20	7%	601	3	2%	6	2	1%	11	1	0%	5
430 Caryophyllaceae	ナデシコ 科	7	3%	210									
450 Ranunculaceae	キンポウゲ 科	2	1%	60									
461 Cruciferae	アブラナ 科	1099	401%	33046	21	13%	41	4	2%	23	7	2%	32
501 Leguminosae	マメ 科	2	1%	60									
557 *Rotala*	キカシグサ 属										3	1%	14
563 *Epilobium-Ludwigia*	アカバナ 属－ミズユキノシタ 属										1	0%	5
571 Haloragaceae	アリノトウグサ 科										2	1%	9
580 Umbelliferae	セリ 科										1	0%	5
636 *Plantago*	オオバコ 属	1	0%	30									
710 Carduoidae	キク 亜科	2	1%	60	6	4%	12	3	1%	17	10	3%	46
711 *Ambrosia-Xanthium*	ブタグサ 属－オナモミ 属												
712 *Artemisia*	ヨモギ 属	3	1%	90	4	2%	8	6	2%	34	8	3%	37
720 Cichorioideae	タンポポ 亜科	2	1%	60	23	14%	45	17	7%	97	30	10%	137
802 *Urostachys sieboldii*type	ヒモラン 型										1	0%	5
863 *Osmunda cinnamomea* . type	ヤマドリゼンマイ 型				1	1%	2				1	0%	5
875 *Davallia*	シノブ 属										2	1%	9
881 Pteridaceae	イノモトソウ 科				1	1%	2						
886 Aspid.-Asple.	オシダ 科－チャセンシダ 科	1	0%	30	2	1%	4	1	0%	6	3	1%	14
891 Polypodiaceae	ウラボシ 科												
898 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	2	1%	60	16	10%	31	5	2%	29	4	1%	18
899 TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	7	3%	210	48	29%	93	20	8%	114	29	10%	133
木本花粉総数		274		8237	168		328	242		1384	295		1350
草本花粉総数		2263		68044	316		616	377		2157	619		2834
胞子総数		10		300	68		132	26		149	40		184
総数		2547		76581	552		1076	645		3690	954		4368

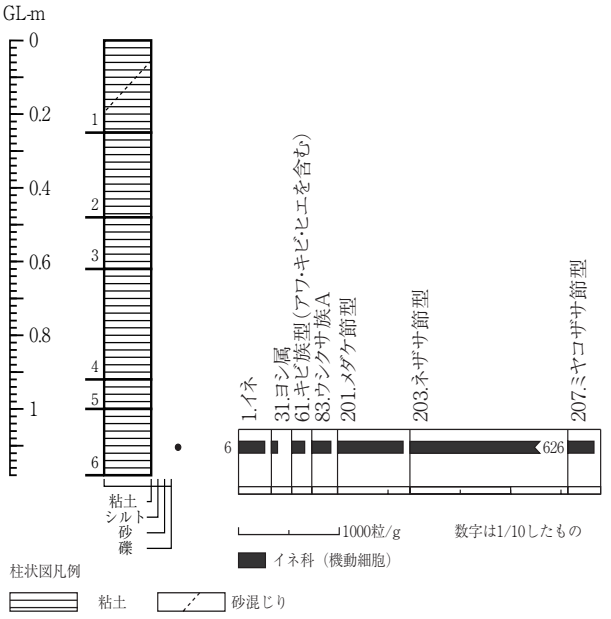


図143　植物珪酸体ダイアグラム（Ⅳ区北壁）

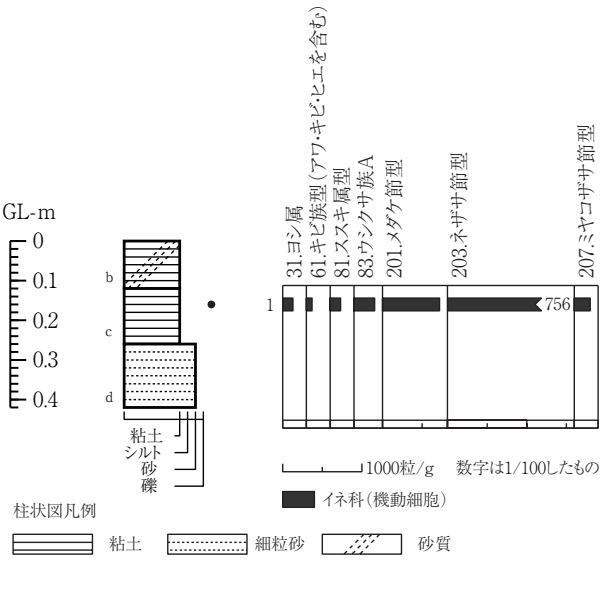


図144　植物珪酸体分析（SD2002）

粉組成表

壁																	
5			6			7			8			SD2002			S073		
			1	0%	11	3	1%	26	6	2%	69				2	2%	22
5	2%	48	9	3%	99	7	2%	62	4	1%	46				8	6%	86
30	10%	289	41	12%	451	26	9%	228	35	12%	400	3	9%	4	9	7%	97
81	27%	780	86	25%	947	57	20%	501	10	3%	114				34	26%	367
19	6%	183	30	9%	330	19	7%	167	44	15%	502	9	26%	11	15	11%	162
31	10%	298	34	10%	374	23	8%	202	30	10%	343	5	14%	6	46	35%	497
9	3%	87	7	2%	77	6	2%	53	4	1%	46				4	3%	43
1	0%	10	3	1%	33	1	0%	9	1	0%	11	1	3%	1			
6	2%	58	2	1%	22	1	0%	9	1	0%	11						
7	2%	67	12	3%	132	12	4%	105	10	3%	114				1	1%	11
5	2%	48	4	1%	44												
4	1%	39	5	1%	55	3	1%	26									
2	1%	19	1	0%	11	2	1%	18	2	1%	23						
2	1%	19	3	1%	33	4	1%	35	2	1%	23	1	3%	1	1	1%	11
24	8%	231	31	9%	341	45	16%	395	117	40%	1336	7	20%	9	7	5%	76
63	21%	607	63	18%	694	62	21%	545	25	9%	285	8	23%	10	6	5%	65
3	1%	29	3	1%	33	4	1%	35	1	0%	11						
2	1%	19	2	1%	22	8	3%	70									
2	1%	19	3	1%	33	3	1%	26	1	0%	11	1	3%	1			
			2	1%	22												
						1	0%	9									
			1	0%	11												
1	0%	10				2	1%	18									
						1	0%	9									
									2	1%	23	1	3%	1			
			2	1%	22	3	1%	26									
132	44%	1271	100	29%	1101	158	55%	1388	69	24%	788	2	6%	2	69	52%	746
243	82%	2340	175	51%	1927	276	96%	2425	49	17%	560				84	63%	908
1	0%	10	10	3%	110				3	1%	34				2	2%	22
															2	2%	22
1	0%	10	1	0%	11	3	1%	26	1	0%	11	2	6%	2	2	2%	22
4	1%	39	1	0%	11	5	2%	44									
			2	1%	22	6	2%	53	1	0%	11	5	14%	6	99	74%	1,070
									1	0%	11				4	3%	43
			1	0%	11												
1	0%	10	5	1%	55	2	1%	18							7	5%	76
8	3%	77	1	0%	11	1	0%	9									
						1	0%	9							19	14%	205
															2	2%	22
6	2%	58	15	4%	165	9	3%	79	4	1%	46	3	9%	4	5	4%	54
1	0%	10				1	0%	9									
6	2%	58	18	5%	198	11	4%	97	14	5%	160	4	11%	5	23	17%	249
12	4%	116	14	4%	154	1	0%	9	6	2%	69	1	3%	1	3	2%	32
												1	3%	1	1	1%	11
1	0%	10				2	1%	18	6	2%	69	11	31%	13	1	1%	11
									1	0%	11	1	3%	1			
2	1%	19	1	0%	11	4	1%	35	3	1%	34	2	6%	2	4	3%	43
			1	0%	11				2	1%	23	1	3%	1			
6	2%	58	2	1%	22	5	2%	44	5	2%	57	4	11%	5	8	6%	86
21	7%	202	20	6%	220	9	3%	79	16	5%	183	22	63%	27	25	19%	270
297		2860	343		3775	289		2539	293		3345	35		43	133		1437
415		3999	345		3798	478		4201	150		1713	18		21	321		3471
30		289	24		264	20		176	33		377	42		50	39		421
742		7148	712		7837	787		6916	476		5435	95		114	493		5329

左よりカウン種数、百分率、含有量 粒数/g

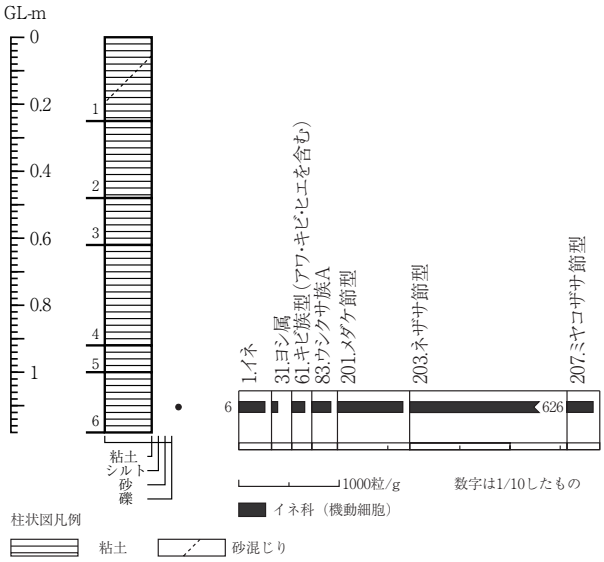


図145　植物珪酸体ダイアグラム（SE2073）

ら、上下（ａ、ｂ亜帯）に細分した。

①ｂ亜帯（試料No.３）：上位のａ亜帯に比べツガ属、スギ属が高率で、コナラ亜属、アカガシ亜属が低率を示す。

②ａ亜帯（試料No.２）：下位のb亜帯に比べツガ属、スギ属が低率で、コナラ亜属、アカガシ亜属が高率を示す。

(5) MK－Ⅰ帯（調査地北壁土層試料No.１）

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、スギ属を伴う。

第６項　既知の結果との比較

松原市内では、松原市ほかにより図146に示す各地点で花粉分析が行われている。これらの結果を概観すると、以下のような傾向を示す。

(1) 近世以降

表11　植物珪酸体組成表

	Ⅳ区北壁							SD2002	SE2073
	2	3	4	5	6	7	8		
1　イネ	2 13 0.392	1 8 0.221	1 8 0.222	2 14 0.397	1 7 0.195	2 13 0.389	1 7 0.219		4 26 0.76
31　ヨシ属								2 13 0.82	1 6 0.41
61 キビ族型（アワ・キビ・ヒエを含む）								1 7	2 13
81　ススキ属型								2 13 0.82	
83　ウシクサ族A								4 26	3 19
201 メダケ 節型								11 72 0.83	10 65 0.75
203　ネザサ節型								116 756 3.63	97 626 3.01
207　ミヤコザサ節型								3 20 0.06	4 26 0.08
プラント・オパール 総数	2	1	1	2	1	2	1	139	121
カウントガラスビーズ数	450	400	400	450	450	450	400	460	465
カウント総数	452	401	401	452	451	452	401	599	586
試料重量(×0.0001g)	7012	6990	7003	7016	7028	7012	7000	7010	7000
ガラスビーズ 重量(×0.0001g)	140	140	141	142	140	139	139	140	140

上段　検出個数
中段　検出密度（単位；×10⁴個 /g）
下段　推定生産量（単位；kg/㎡・cm）

松原市内のいずれの地域も、木本ではマツ属（複維管束亜属）の卓越、草本ではイネ科（40ミクロン以上）の卓越で特徴付けられている。このような傾向は、大阪府内の多くの地点で認められ、近世以降には松原市内も水田域に覆われ、金剛・生駒山地や、泉北丘陵をアカマツ林（里山）が被った事を示唆する。

今回の分析ではMK－Ⅱ帯ａ亜帯、Ⅰ帯がこれに対比できる。

(2) 中世以前

大阪府中部及び南部の多くの遺跡では、古墳時代以降、マツ属（複維管束亜属）の増加が始まり、これに対応するようにアカガシ亜属が減少する。ここでのマツ属（複維管束亜属）の増加は、開発行為に伴う照葉樹林の伐採に由来すると考えられており、遺跡によってその開始時期は異なる。この傾向が現れる最も速い遺跡は東大阪鬼虎川遺跡であり、弥生時代中期にはマツ属が増加している。また、北部では弥生時代にスギ属がやや高率になるが、南部、西部ではこの傾向はそれほど顕著ではない。

松原市内では地点ごとの変異が大きく、中央部の上田町遺跡では弥生時代から中世に至るまでアカガシ亜属が卓越する。上田町遺跡では古墳時代後期以降イネ科（40ミクロン以上）が高率を示し、調査地点近辺に水田が広がっていたと考えられる。大阪平野南部、西部地域との木本花粉群集との比較から、カシ類が遺跡近辺に生育していたと推定され、カシ林が維持管理されていた可能性がある。

北部、西部では、特に中世までの時期に、コウヤマキ属やスギ属などの針葉樹花粉の卓越が、断続的に認められる。このことは、松原市域内（天野川扇状地上）で、激しい浸食、堆積作用や植生の改変（開墾などの人為的な作用を含む）が続いたことを示唆する。しかし、天野川上流では７世紀前半（飛鳥時代）に狭山池（大阪狭山市）が完成し、ある程度の治水がなされていたとされる。このことを尊重すると、植生の頻繁な変化は、河川による浸食、堆積作用ではなく人為的な要素が多いものと推定できる。

既知の結果で今回の調査地点に最も近い南新町遺跡Ｃ６－３－10（図９）では、奈良時代から現代に至る断続的な花粉群集が得られている（図147、148）。今回北壁で得られたMK－Ⅲ帯は、南新町遺跡で欠如していたMM－Ⅲ帯とⅡ帯の間（マツ属（複維管束亜属）の増加、アカガシ亜属の減少を示す）に相当する。また、南新町遺跡では奈良時代にスギ属が卓越する（MM－Ⅲ帯）。スギ属の卓越は、同時期に相当する可能性のあるSE2073底部の試料（MK－Ⅳ帯）で認められた。ただし、マツ属（複維管束亜属）、コナラ亜属、アカガシ亜属の出現率が、遺跡（南新町遺跡内では、遺構によって若干の差が認められていた。）によって異なっている。

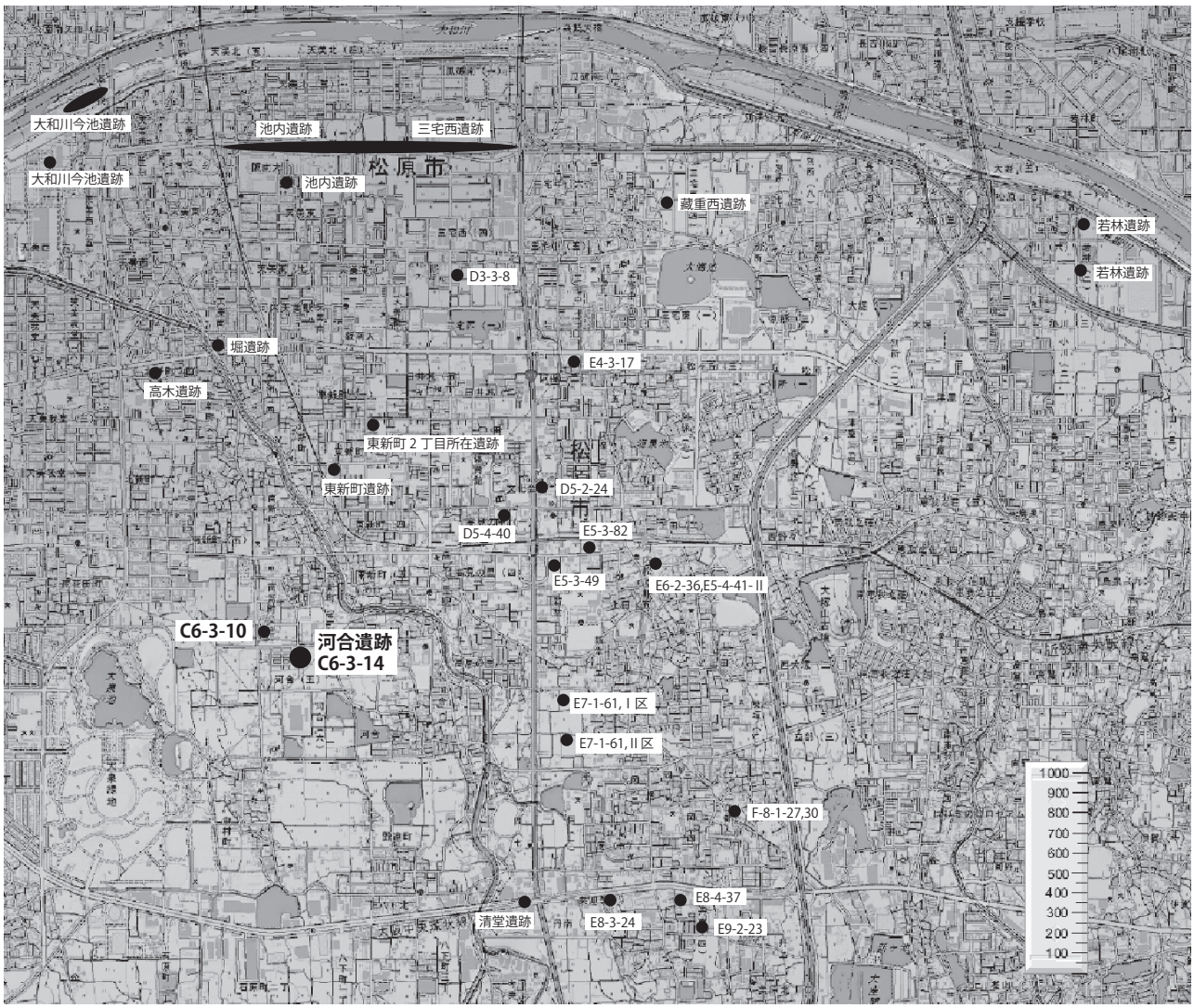


図146　松原市内での花粉分析実施地点

第７項　溝SD2002の性質について

SD2002は、NR2005埋積後に作られ、17層に覆われている。また、遺跡内で検出された古代の長舎との関係は、不明である。

図29の遺構図にあるように、SD2002は遺跡東側から西進しNR2005跡を横切る。その後SD2011跡に突き当たるとほぼ直角に曲がり、SD2011に沿って北に流れを変える。溝内部はほとんどが砂質堆積物で埋められ、数度の激しい流れで埋まっていったと考えられる。分析試料は砂層中に狭在され、酸化鉄の沈着によって黄褐色を帯びる粘土層から採取された。表９の概査結果で示したように、花粉のほか炭、植物片や珪藻（化石）の含有量も少なかった。一方で植物珪酸体の含有量は多いことから、堆積作用の穏やかな時期に堆積し、本来は有機物に富んでいたが土壌の酸化に伴って花粉、植物片、珪藻の多くが溶けたものと推定される。

前述のように花粉群集の特徴では、古代とされるMK－Ⅲ帯や、南新町遺跡での奈良時代の特徴を示すMK－Ⅳ帯での花粉群集の特徴よりも、飛鳥時代後半とされるMK－Ⅴ帯の特徴に近い。したがって、NR2005が埋まった直後掘削され、埋まったものと考えられる。

分析結果ではイネ（40ﾐｸﾛﾝ以上）花粉も、イネ植物珪酸体も全く検出されなかった。花粉の多くが溶けていると考えたとしても、イネ植物珪酸体までも検出されなかったことは、SD2002流域でのイネ栽培の可能性を否定するものであった。

第８項　井戸SE2073の掘削時期と周辺の植生

SE2073は、NR2005（飛鳥時代）の埋積後に掘削されたと考えられている。他の遺構との関係など、現在の所不明な事柄が多い。

前述のように木本花粉群集ではスギ属が卓越し、南新町遺跡でのMM－Ⅲ帯（奈良時代）と似る。またマツ属（複維管束亜属）の出現率が他の針葉樹種に比べ高いこと、コナラ亜属とアカガシ亜属の割合から、古代とされるMK－Ⅲ帯下部（17層）より若干早い時期に埋まり始

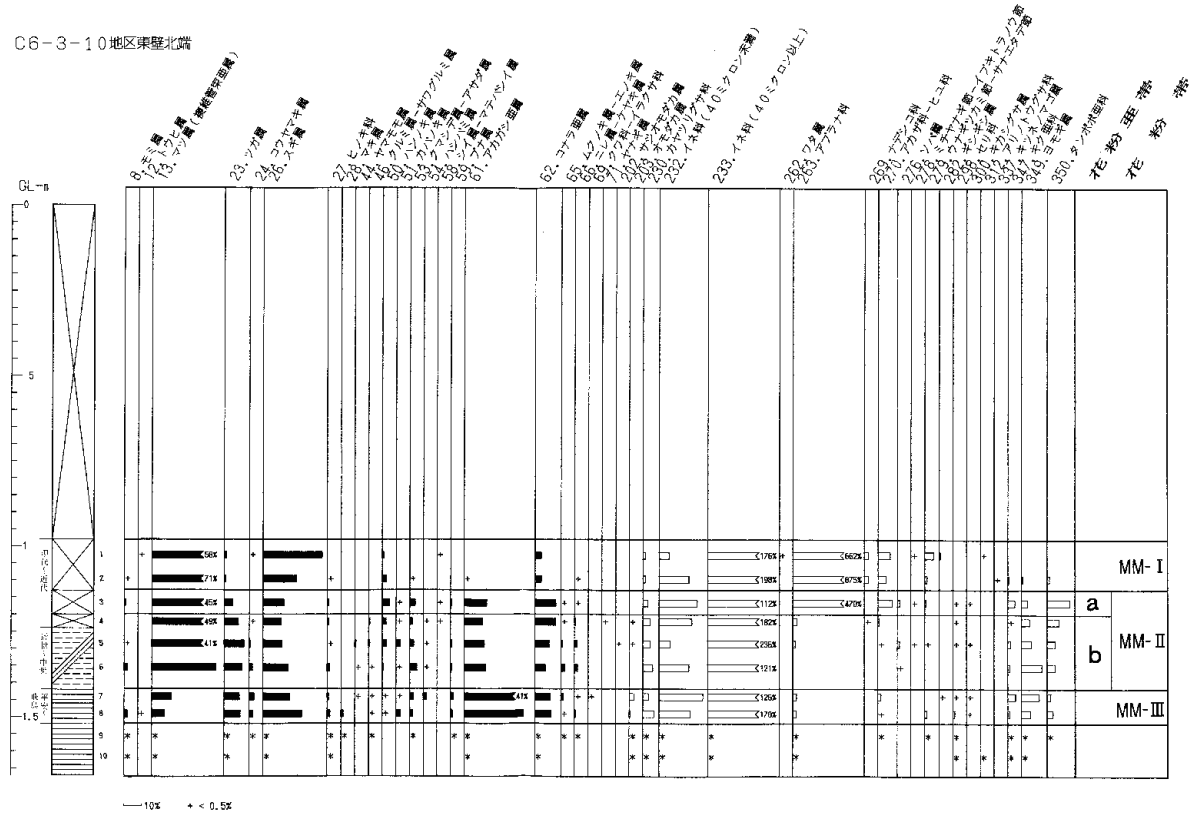


図 147　C6－3－10地区（南新町遺跡）東壁北端の花粉ダイアグラム

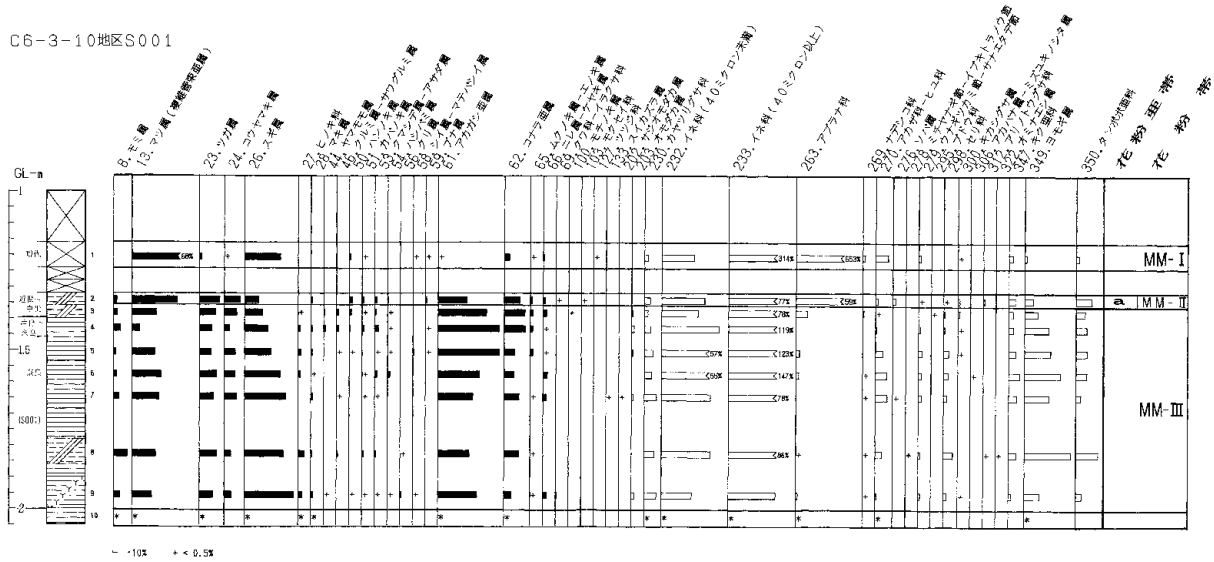


図148　C6－3－10（南新町遺跡）S001の花粉ダイアグラム

めたものと推定できる。南新町遺跡でのMM－Ⅲ帯（奈良時代）に対比されることは、遺物、遺構からの推定と調和的である。

草本花粉では、イネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）、アカザ科－ヒユ科の割合が高く、これらの母植物が井戸の回りに生育していたと考えられる。　植物珪酸体では、ササ類が多量に検出されており、イネ科花粉の多くは、ササ類に由来する可能性が高い。

一方、アカザ科－ヒユ科にはアカザ、ヒユなどは現在では雑草として扱われており、一般的は食習慣はない。しかしヒユ（ヒユ科）は「莧」としての記載が「本草和名」や「延喜式」にあるなど、古代には野菜として栽培されていたと考えられる（青葉，2000ａ）。また、アカザ（アカザ科）は「藜：阿加佐」として「和名抄」に記され、若葉が食されていた。ただし、野草（雑草）として生えてくるものとして、特に栽培されていた様子はな

い。また「徒然草」に「藜の羹：あかざのあつもの」として粗末な食物の例えとされている（青葉，2000b）。あるいは、井戸の近辺で畑が営まれ、ヒユ（あるいはアカザ）が栽培されていた可能性がある。また畑が存在したと仮定すると、先のイネ科（40ミクロン以上）花粉やイネ植物珪酸体には、「陸稲」が母植物であった可能性も指摘できる。

第９項　調査地周辺の古植生の変遷

ここでは、花粉分帯に対応する時期ごとに、調査地周辺と生駒・金剛山地から丘陵部にかけての古植生の復元を試みる。

(1) MK－Ⅴ帯期（飛鳥時代）

コナラ亜属が卓越し、木本花粉では、スギ属、コウヤマキ属を始めとする針葉樹やアカガシ亜属を伴う。また、アカガシ亜属は増加傾向を示す。草本花粉、胞子の割合は地点によって異なるが、堆積環境（あるいは堆積後作用）によると考えられる。

① 調査地周辺の植生

NR2005（試料№８）では、イネ植物珪酸体、イネ科（40ミクロン以上）花粉ともに検出されるが、検出量（含有量）は少ない。特に上部の17層（試料№７）の検出量（含有量）が高いことから、上位から混入した可能性も指摘できる。SD2002では、イネ植物珪酸体、イネ科（40ミクロン以上）花粉ともに検出されない。これらのことから、NR2005上流部での稲作は否定できないが、調査地周辺で稲作が行われていた可能性は極めて低い。

溝内や周囲にはヨシなどのイネ科草本が茂り、溝内の開放的な所にはサジオモダカも生育していたと考えられる。一方、陸域ではササ類、ヨモギ類やタンポポ類などのキク科の草本やシダ植物が生育する草地が広がっていたと考えられる。

大阪府中部での標準的な花粉群集変遷を示しているとされる西大井遺跡（藤井寺市：川崎地質株式会社，1995）では、この時期にはアカガシ亜属が卓越し、マツ属（複維管束亜属）が増加を始める時期でもある。これらは、生駒・金剛山地やこれに続く丘陵部の森林植生を反映していると推定されている。このことと、今回の分析結果でコナラ亜属が卓越することから、松原市東方に位置するこれらの山地、丘陵より近く、あるいはごく近辺にコナラ類が生育していたものと推定できる。

② 山地、丘陵の植生

調査地の周辺には草地の広がりが推定されるほか、コナラ類が近辺に生育してた可能性が指摘できた。一方で、飛来した花粉の多くは紫外線により劣化消滅し、選択的に能集していったものと考えられる。SD2002において針葉樹花粉のうち、特にコウヤマキ属が卓越傾向にあるのは、このようなことが原因であったと考えられる。

したがって森林帯の垂直分布を基本に考えると、カシ類を主要素とする照葉樹林や、ナラ類、シデ類を主要素とする落葉広葉樹林が、丘陵や山地低所に分布していたと考えられる。一方針葉樹はこれらに混淆、あるいは高所に温帯針葉樹林を形成していた可能性がある。

(2) MK－Ⅳ帯期（奈良時代）

① 調査地周辺の植生

井戸（SE2073）の堆積物で花粉の劣化が起こりにくい環境であったと推定できることから、針葉樹花粉の卓越が花粉の劣化による偏りとは考えにくい。井戸の詳細な形状については不明であるが、井戸は一般的には閉鎖系であり、検出された花粉の多くは飛来したものと考えられる。得られた花粉群集は先の西大井遺跡の花粉群集と異なることから、ここで卓越するスギ属やマツ属（複維管束亜属）などの針葉樹種は、比較的近辺に生育していた可能性が高い。したがって、調査地近辺にはスギやアカマツ（クロマツの可能性もある）が生育していたと考えられる。

また前述のように、イネ科（40ミクロン以上）やアカザ科－ヒユ科花粉の高率での検出は、近辺でのイネやヒユなどの栽培（畑作）を示唆する。

② 山地、丘陵の植生

Ⅴ帯と同様にカシ類を主要素とする照葉樹林やナラ類やシデ類を主要素とする落葉広葉樹林が、丘陵や山地低所に分布していたと考えられる。一方で針葉樹は（スギやマツ類にも）これらに混淆、あるいは高所に温帯針葉樹林を形成していた可能性がある。

(3) MK－Ⅲ帯期（古代～中世）

① 調査地周辺の植生

イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で出現し、多くはないもののイネ植物珪酸体が連続して検出される。更に、オモダカ属やカヤツリグサ科、キカシグサ属、アリノトウグサ科などの「水田雑草」が検出されることから、調査地点が水田であった可能性が示唆される。更に、低率でソバ属花粉が検出され、ソバ栽培が示唆される。また、後述のように木本花粉群集の検出傾向から調査地点近辺にまとまった林分があったとは考えにくく、水田が周辺地域に広がっていたか、草地が広がっていたものと考えられる。

② 山地、丘陵の植生

花粉群集では、マツ属（複維管束亜属）が増加傾向を

示し、コナラ亜属、アカガシ亜属が減少傾向を示す。この時期での同様の傾向は西大井遺跡でも認められていることから、今回得られた木本花粉群集のほとんどは遠方飛来したものと考えられる。生駒・金剛山地や泉北丘陵では、カシ林を主要素とする照葉樹林が燃料材として伐採され、里山（薪炭林）としてのアカマツ林へ遷移していったと推定できる。

(4) MK－Ⅱ帯期（中世～近世）

前述のように大阪府中部各地域の花粉群集との比較から、Ⅱ帯ａ亜帯は近世の植生を示していると推定できる。

① 調査地周辺の植生

イネ（40ﾐｸﾛﾝ以上）花粉が高率で出現し、多くはないもののイネ植物珪酸体が検出される。一方で、Ⅲ帯で検出されたオモダカ属やカヤツリグサ科、キカシグサ属、アリノトウグサ科などの「水田雑草」由来の花粉がほとんど検出されなくなる。時期的に陸稲に変化したとは考えにくく、調査地周辺では水田の管理が進み、「雑草」の駆除が徹底された結果と考えられる。また、ソバ属花粉の低率での検出が続き、調査地周辺では引き続きソバ栽培が行われていたと考えられる。

② 山地、丘陵の植生

下位のb亜帯で今回の分析試料中マツ属（複維管束亜属）花粉が最高の出現率を示す。上部のａ亜帯では、針葉樹花粉が全体に減少し、コナラ亜属、アカガシ亜属などの広葉樹花粉が増加する。ｂ亜帯でのマツ属（複維管束亜属）は、Ⅲ帯から続く照葉樹林の伐採とアカマツ主体の二次林化の進行に起因すると考えられる。一方、ａ亜帯でのマツ属（複維管束亜属）の減少とコナラ亜属、アカガシ亜属の増加は、スギなどの針葉樹やアカマツ林も伐採の対象となり、相対的に広葉樹種が増加したものと推定できる。

(5) MK－Ⅰ帯期（現代）

① 調査地周辺の植生

アブラナ科花粉が高率になるほか、イネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）やイネ科（40ﾐｸﾛﾝ未満）花粉が高率を示す。調査地近辺では水田耕作のほか、裏作でナタネなどの栽培が行われたものと考えられる。

② 山地、丘陵の植生

広葉樹花粉の減少が顕著で、スギ属が急増する。このことは、太平洋戦争後に国策としてスギ植林が進められたことに因ると考えられる。

第10項　まとめ

河合遺跡における花粉分析及び植物珪酸体分析の結果、以下のことが明らかになった。

(1) 花粉分析結果から、本地域の花粉帯をⅠ～Ⅴ帯の５粉帯に分帯することができた。更にⅢ帯をａ、ｂ亜帯に細分した。

(2) 松原市内各遺跡での花粉分析結果と比較した結果、今回の分析結果のうち、Ⅲ帯の花粉組成は、南新町遺跡（C6－３－10）で得られたMM－Ⅲ帯とⅡ帯の間に、Ⅳ帯はMM－Ⅲ帯に対比することができた。

(3) SD2002について、農耕に関する花粉、植物珪酸体は得られなかった。このことから、SD2002は農耕に関する溝とは考えにくい。

(4) SE2073は奈良時代の井戸と推定できた。また、イネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）やアカザ科－ヒユ科などの農耕に関連する花粉が検出され、近辺での畑作が示唆された。更に、スギ属花粉の卓越は、近辺でのスギの生育を示唆するものである。

(5) SD2005上流部では、稲作の可能性が示唆される。一方、調査地近辺には草地が広がっていた。

(6) Ⅲ帯の時期（古代）以降、近辺で水田耕作が行われていた。更に、ソバ栽培も行われた。

(7) Ⅰ帯の時期（現代）には、近辺の水田で裏作としてナタネ栽培が行われていた。また、山地や丘陵ではスギ植林が行われた。（渡辺正巳）

引用文献

青葉高（2000ａ）ヒユ. 日本の野菜青葉高著作選Ⅰ, 221-222, 八坂書房, 東京.

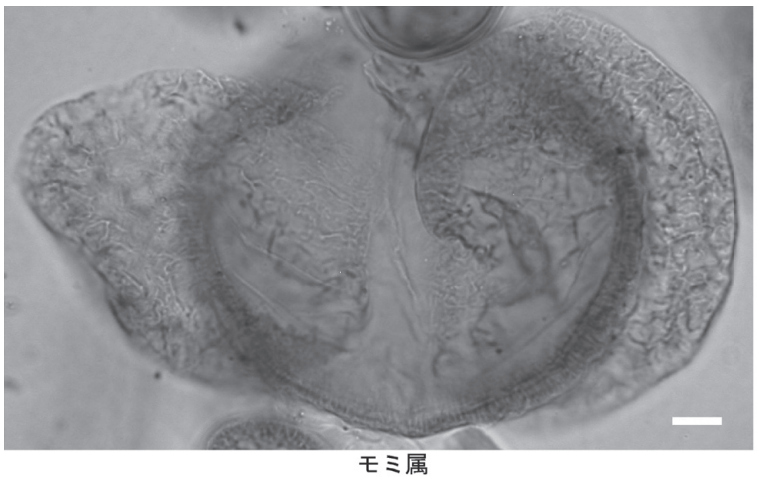
青葉高（2000b）藜（アカザとシロザ）. 野菜の日本史青葉高著作選Ⅱ, 256-259, 八坂書房, 東京.

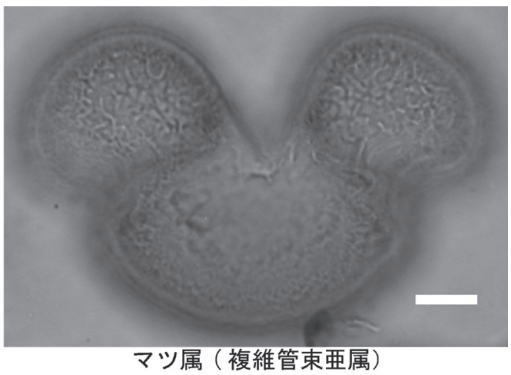
川崎地質株式会社（1995）西大井遺跡(93年度調査)における花粉・珪藻分析. 西大井遺跡-大和川下流東部地域下水道事業大井処理場建設に伴う発掘調査報告書-, (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書1, 149-174.

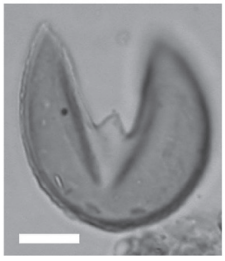
中村純（1974）イネ科花粉について, とくにイネを中心として. 第四紀研究,13, 187-197.

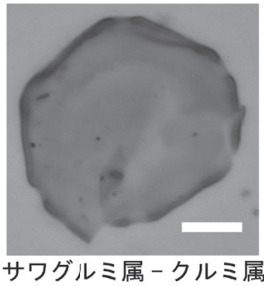
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9, 15-29

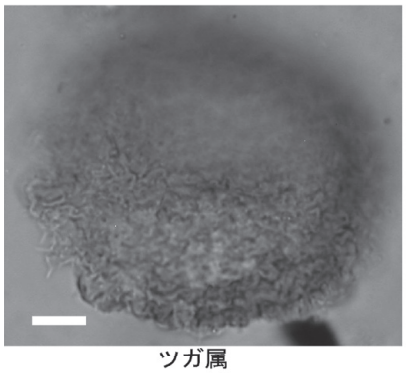
渡辺正巳（2010）花粉分析法. 必携 考古資料の自然科学調査法, 174-177, ニュー・サイエンス社.

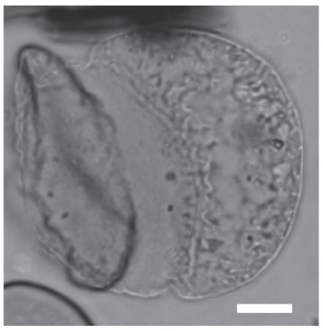

モミ属

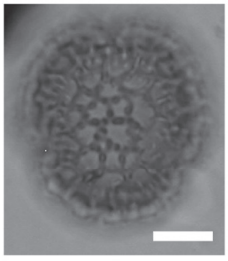

マツ属（複維管束亜属）

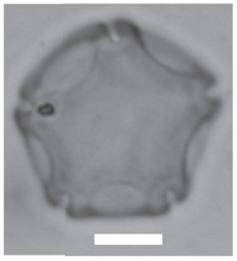

スギ属

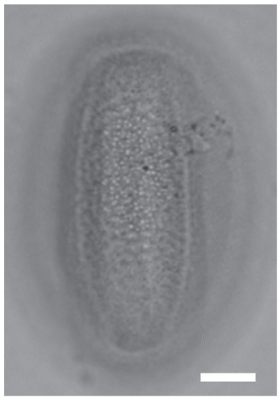

サワグルミ属－クルミ属


ツガ属

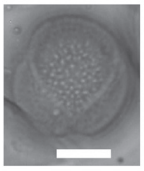

マキ属

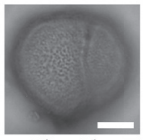

イボタノキ属型

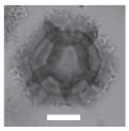

ハンノキ属

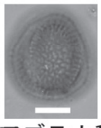

ソバ属

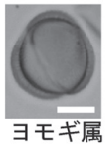
カヤツリグサ科

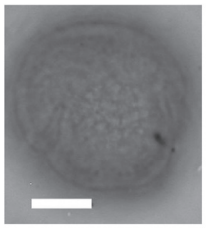

キンポウゲ科

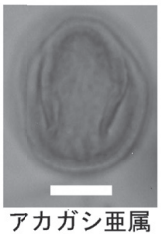

ギシギシ属


タンポポ亜科

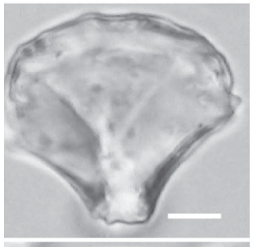

アブラナ科

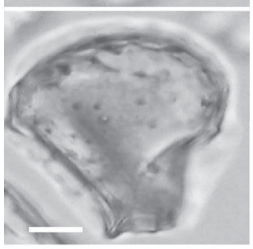

ヨモギ属

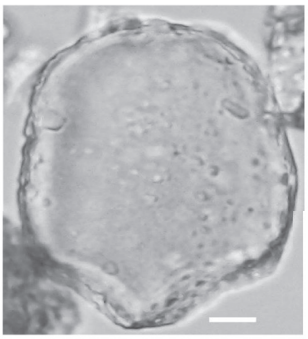

コナラ亜属

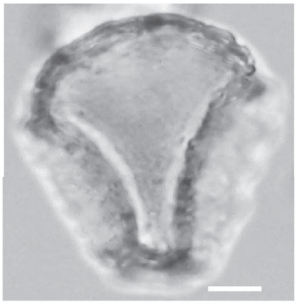

アカガシ亜属

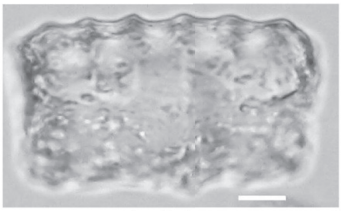
スケールバーはすべて 0.01 ㎜

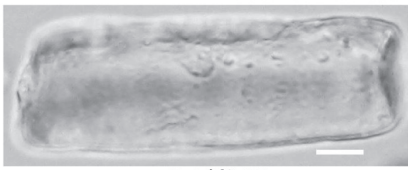



イネ


ヨシ属


メダケ節型


ネザサ節型


キビ族型

スケールバーはすべて 0.01 ㎜

写真12　花粉化石及び植物珪酸体顕微鏡写真

第４節　樹種同定

株式会社古環境研究所

第１項　試料と方法

試料は、河合遺跡（Ｃ６－３－14）より出土した礎板３点（図51－218、59－240・241）である。試料の詳細は、結果とともに表12に記す。

樹種同定の方法は、次のとおりである。試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

第２項　結果

下記の表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表12　河合遺跡における樹種同定結果

遺物番号	品名	結果（学名／和名）	
240	礎板	Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
239	礎板	Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
218	礎板	Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.	コウヤマキ

コウヤマキ　Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科（写真13）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～８細胞高である。

以上の形質よりコウヤマキに同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽性、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

第３項　考察

同定の結果、河合遺跡の礎板３点は全てコウヤマキであった。コウヤマキは木理通直、肌目緻密で、特に耐湿性に優れ、針葉樹の中では最も加工のしやすい材である。温帯に分布する常緑高木である。適潤性であるが乾燥した土壌にも耐え、尾根、急峻地または岩盤上にもよく生育する。水湿に耐えるコウヤマキは礎板や柱に適材であり、平城宮跡や藤原宮跡の礎板や柱として使用されている。当時遺跡周辺の山地部に生育していたか、時期によっては流通によってもたらされたとみなされよう。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞.木材の構造,文永堂出版,p.20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞.木材の構造,文永堂出版,p.49-100.

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧,雄山閣,p.296.

奈良国立文化財研究所(1985)木製品.平城宮発掘調査報告Ⅻ,奈良国立文化財研究所学報第42冊,p.19-125.

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第１号,植生史研究会,p.242.

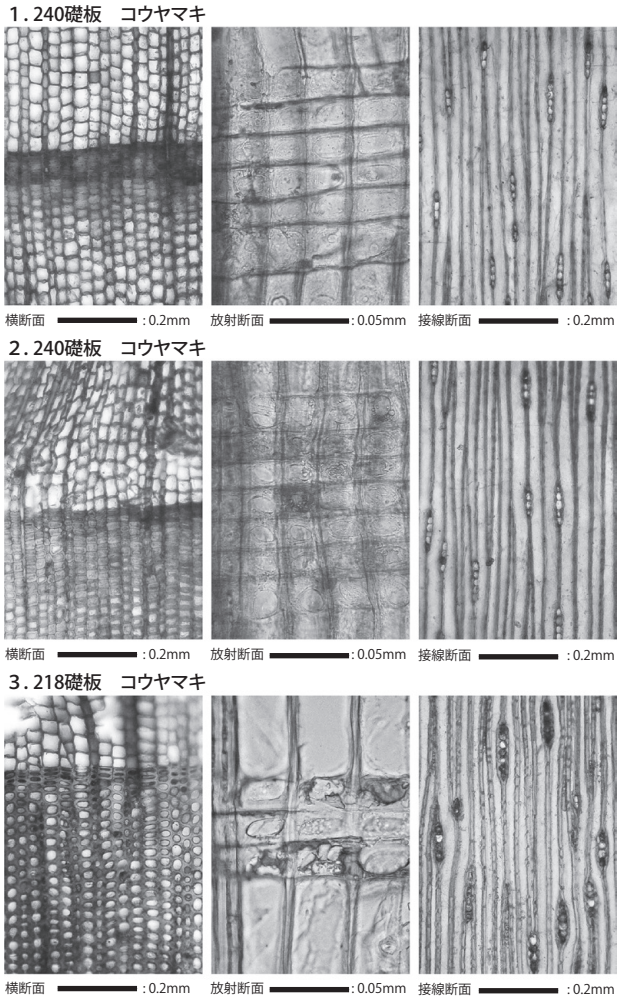


写真13　河合遺跡出土木製品顕微鏡写真

第５章　総括

調査で確認された遺構・遺物について主要なものを以下概観する。遺構は飛鳥時代から平安時代のものがあり、変遷の試案を作成した（図150）。出土遺物がなかった遺構については切り合い関係（表13）と主軸方向で判断している。

古墳時代以前　古墳時代以前の遺物を含む遺構は確認できなかった。縄文時代早期の有舌尖頭器（156）は遊離資料であるが、北側の調査においても縄文時代の石器を含む土坑が検出されており、当地で狩猟採集活動があったことは確実である。弥生時代は土器片が１点出土したのみで、土地利用は確認できなかった。

NR1246・2005などは古墳時代以前の可能性があるが、出土遺物の上限は６世紀である。段丘面に存在する開析谷・構造谷のひとつと考えられ、北区東域を南東－北西方向に伸びる谷状地形の底を北に向かいNR2005が流下するところへ南西よりNR1246が流れ込む。

SD2023は西偏48° 26′ 24″～49° 38′ 24″と自然地形に沿うことと出土遺物（図89）から古墳時代に遡る可能性がある。南新町遺跡C6－３－10で検出された幅約５ｍ斜行道の側溝と接続する可能性があるが、対になる道路側溝が確認されておらず今後検討が必要である。

また、後世の遺構埋土からSB17出土須恵器杯蓋（260）や埴輪（図46・116・120）の破片が出土しており、周囲に古墳が築かれていた可能性がある。

飛鳥時代　先述のNR2005・3110から運搬用の漆容器（図31）が出土している。いずれも打ち欠いたり半割して漆を取り出した後に廃棄している。南区のNR1246・1249からは出土しておらず、集中的に廃棄されたようである。近隣に工房の存在を窺わせるが、パレットに利用された杯類や刷毛などは全く出土していない。谷状地形と自然流路は、埋没後に積極的に土地利用がなされなかったNR2005の出土遺物（図31）から、遅くとも７世紀第４四半期には埋没したと考える。

なお、NR1246からは丹比廃寺式軒丸瓦（180）が出土している。上田（2004）によると、多治比氏の氏寺である黒山廃寺の創建瓦として採用されたもので、７世紀初頭の狭山池築造により灌漑がなされ開発された地域内に分布するとのことである（上田2004）。旧丹比郡八下郷では、河合と同じく狭山池築造以降に大溝が開削された長曽根遺跡（堺市）から出土している。また、流路隣接の落ち込み（SX2006）より天井部内面に「新三」の墨書がある杯H蓋（435）が出土している。

奈良時代　調査地内でコの字形に配置された長舎SB３～６であるが、南辺に長舎が存在することから調査地の西側にも長舎が存在し、ロの字形となるのではないかと推測されている（高島2010、芝田2011）。存続期間については、上限がNR1246が埋め立てられた時期で７世紀第４四半期以降と考える。概観した遺物量からは、遅くとも８世紀前半には長舎が完成したと考える。雨森（2017）によると、近畿から中国地方における郡（評）衙の成立は７世紀末～８世紀初頭と共通している。そして、成立期には長舎（一部は柵の場合もある）を採用し、囲われた内部に一定の空間を持つとのことである（雨森2017）。今回確認された長舎についてもこの時期に成立したと考える。

下限は、北辺のSB３廃絶後に建てられたSB９出土遺

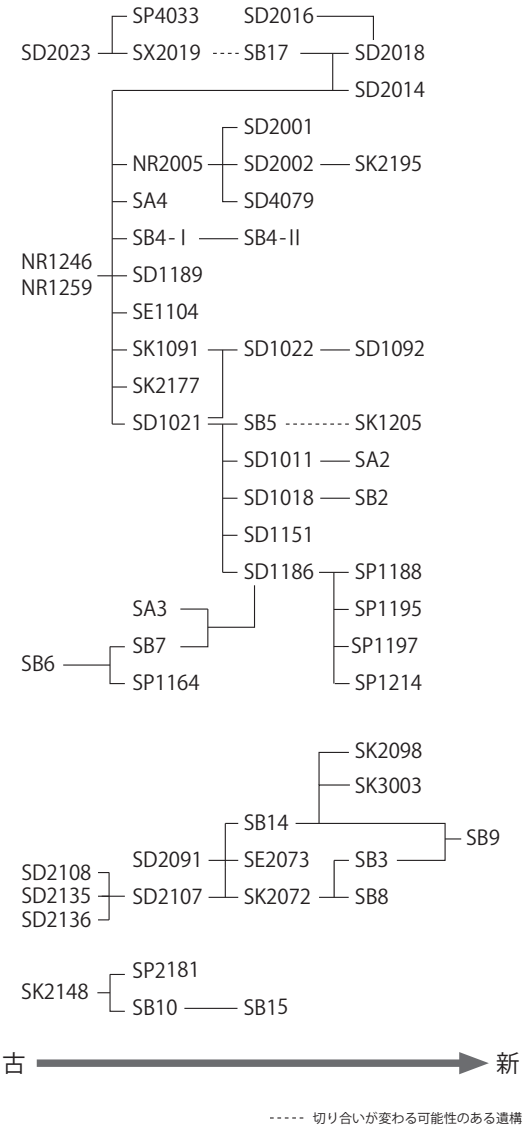
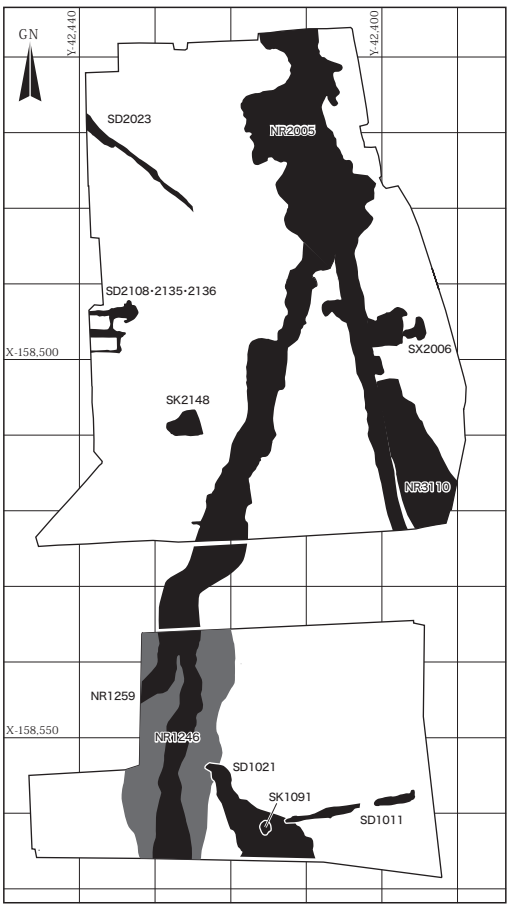
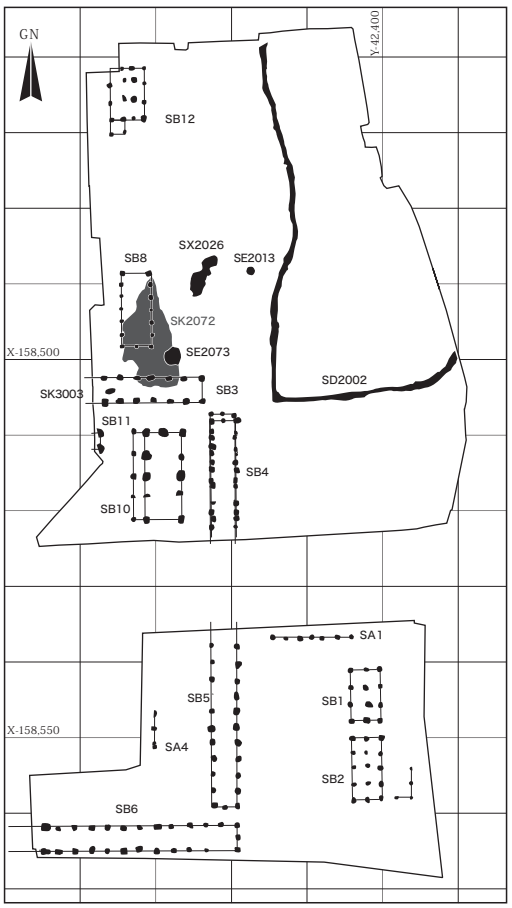


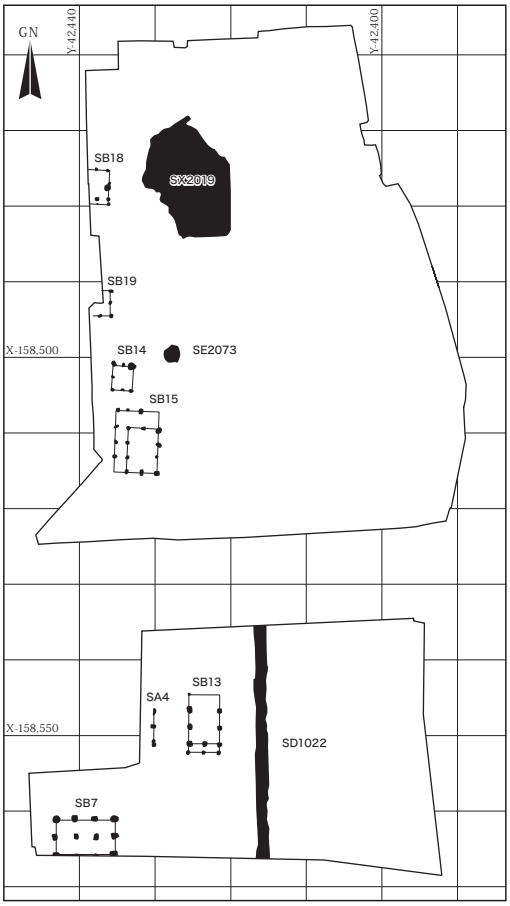
図149　切り合い遺構の変遷



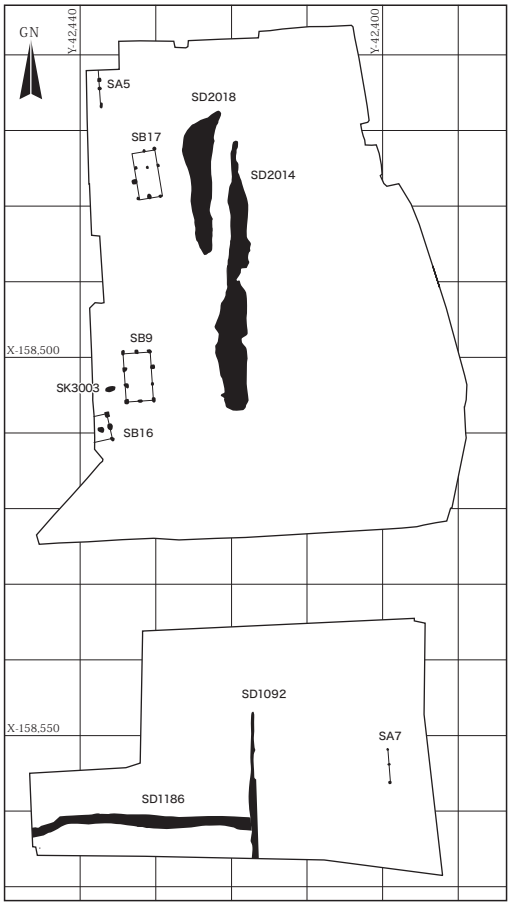
1期（飛鳥時代）



2期（飛鳥時代後半～奈良時代後半）



3期(奈良時代後半～末)



4期（奈良時代末～平安時代前半）

図150　遺構変遷案　1：1000

表13　柱間距離計測値

測点１	測点２	距離(m)	距離(尺) 1尺=0.30m	主軸 (座標北)
SP2168(SB3)	SP1242(SB6)	56.04	186.80	N-0°23'24"-W
SP3009(SB3)	SP1179(SB6)	56.32	187.73	N-0°14'23"-W
SP2100(SB3)	SP1196(SB6)	62.56	208.53	N-0°19'11"-W
SP2169(SB3)	SP1149(SB6)	62.41	208.03	N-0°30'00"-W
SP2094(SB3)	SP1185(SB6)	62.67	208.90	N-0°25'12"-W
SP2075(SB3)	SP1202(SB6)	62.31	207.70	N-0°30'00"-W
SP2178(SB4-Ⅱ)	SP1209(SB5)	50.90	169.66	N-0°30'00"-W
SP2166(SB4-Ⅱ)	SP1206(SB5)	50.97	169.90	N-0°21'35"-W
SP2169(SB3)	SP2100(SB3)	12.88	42.93	E-0°00'00"-N
SP1209(SB5)	SP1101(SB5)	21.34	71.31	N-0°30'00"-W

物（図55）から推測することができる。また、SB３と切り合い関係はないがSB９に先行するSB14（図64）とSK3003（図118）から出土した遺物も手がかりとなる。SB９は８世紀末～９世紀前半の土器が出土しており、この頃には確実に廃絶している。SB３の建物範囲内に掘られらたSK3003が長舎解体に伴う廃棄土坑であるならば、８世紀後半と推測できる。

変遷案では庁舎囲いの空間内に正方位のSB10・11を配したが、建物のない広場であった可能性も十分あり得る。また、長舎の廃絶後はSB７・９・14が建築されるが、空間を遮蔽していない。

確認された長舎は西側へ続くため、今後の参考として造営計画の復元案を作成した（図151）。南北方向の全長は判明しており、北辺のSB3北側柱穴と南辺のSB６南側柱穴との柱間距離は62.31～62.67mで、方向は座標北より西に0° 19′ 11″ ～0° 30′ 00″ 偏る（表３）。長舎SB３～６の柱間寸法を0.3mで割り尺単位に丸めた場合、桁行は７尺を基本とし、部分的に６・８尺となる。梁行は建物隅が検出されているSB４－Ⅰ・５が10尺、SD４－Ⅱ・６が11尺となるが、隅以外の柱間寸法は10～11尺とばらつきがある。各長舎の桁行残存長を等分すると2.13mとなり、0.286mまたは0.304mを１尺とすると完数に近くなる。今回は、2.13mを７尺でほぼ割りきれる3.04mでの復元案を掲載した。門の構造と位置が不明であるため、正方形に近い南北206尺（62.62m）・東西203尺（61.71m）とした。なお、この復元案ではSB４のうち建替後の４－Ⅱを利用しており、建替前の４－Ⅰがどのように配置されたかについては今回検討が及ばなかった。東辺のSB４と５を合わせると偶数間となることも含め今後検討を要する。

官衙の特徴となる遺物は、硯は円面硯（496）が１点出土したのみであるが、土師器高杯と竈が一定出土しており饗宴を窺わせる。また、軒丸瓦が３点出土しており、２点は青谷式軒丸瓦（12・288）で、官衙的要素の強い遺跡からの出土例が多い瓦である。もう１点は黒山廃寺出土瓦と同形の軒丸瓦（13）である。丹比廃寺式軒丸瓦とこれら紋様瓦が出土したことは、遺構群が狭山池造営を契機とする国家主導での大規模開発の一端を担う官衙の一つと考える補強材料となる。

今回確認された官衙的な建物群は、同じく狭山池用水により開発が進められた西除川右岸の河内台地上にも存在する。小山田（2011）によると、飛鳥時代の７世紀中頃に中心的な開発拠点が平尾遺跡に出現し、８世紀前半には衰退する。その後、拠点が丹上遺跡に移り開発範囲が更に北へと広がる。丹上遺跡の拠点がなくなった後は、平安時代末頃に観音寺遺跡（現在は立部遺跡）に屋敷地が出現するまでは開発拠点が見当たらない。開発拠点の移動に併せて一般集落も移動し、近隣に鍛冶工房も付帯するようである。開発拠点の２遺跡は一般集落と異なり建物が正方位を指向し、溝・柵・長舎を用いた方形区画や庇付きの建物、倉庫群などを有する。

このような開発の進展にともない拠点が移動する現象は西除川左岸でも起こったと推測できる。本格的な開発の始点は灌漑水路としての河合（丹比）大溝の開削と想定され、大溝の中心時期は７世紀後半～８世紀中葉頃で、以後徐々に埋没する。河合遺跡と南新町遺跡に広がっていたであろう官衙建物群も同じように盛衰したと考える。今回確認された長舎囲いの空間は周辺で正倉・館・厨などが未確認であり、郡衙と即断し難い。Ｃ７－２－７～９（図７～９）のように大溝に隣接した場所から転用硯・斎串・秤の錘などが出土しており、広域的な配置計画を検討してから判断したい。現状では、芝田（2011）が推測したように郡家付属施設として当地を管轄し、大溝を管理し開発を担ったと考えたい。

引用文献

雨森智美2017「郡庁域の空間構成-西日本の様相-」『第20回古代官衙・集落研究会 郡庁域の空間構成』,独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所,pp.104-105

上田 睦2004「丹比廃寺式軒瓦と丹治比野の開発-出土瓦からみた河内の古代寺院と氏族(四)-」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢刊行会,pp.854-856.

小山田宏一2011「古代東樋筋の台地開発」『古代狭山池と台地開発のはじまり』,大阪府立狭山池博物館,pp.58-62.

芝田和也2011「河合遺跡-地方官衙の発見-」『ヒストリア』第225号,大阪歴史学会,pp.59-63.

高島 徹2010「河合遺跡～大溝と官衙～」『古代西除川沿いの集落景観』大阪府立狭山池博物館図録11,36p.

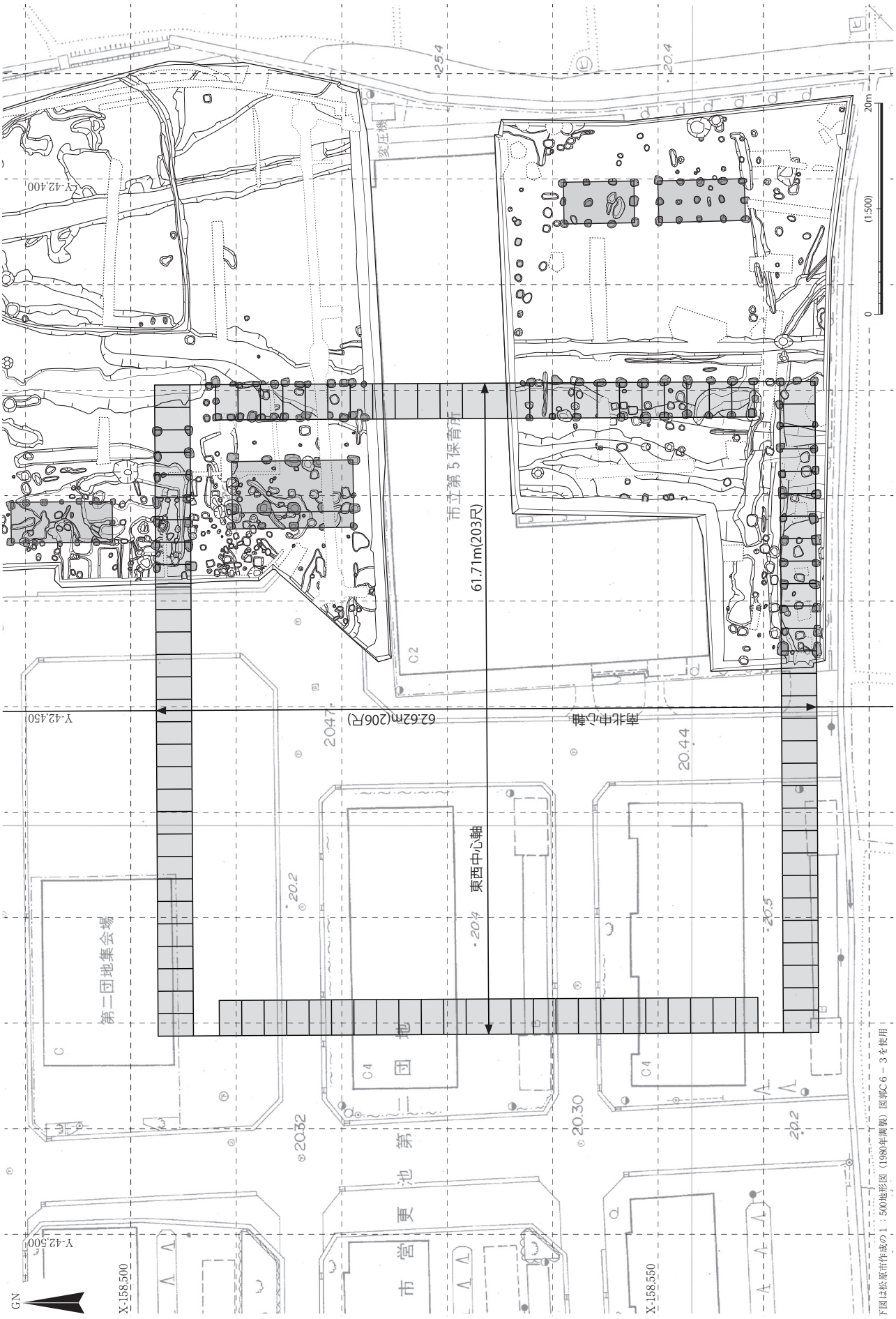


図151　造営計画復元案　1：500

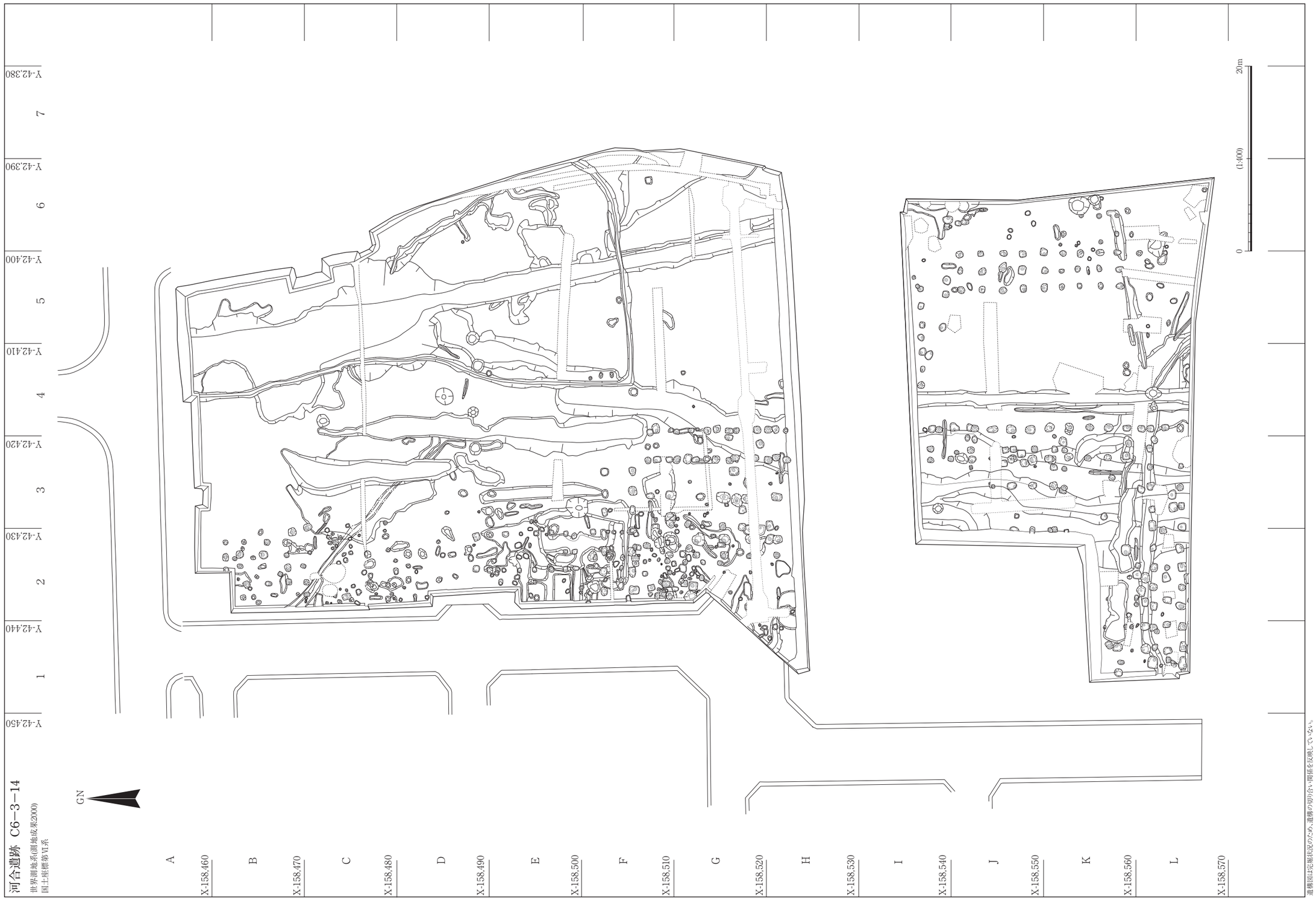
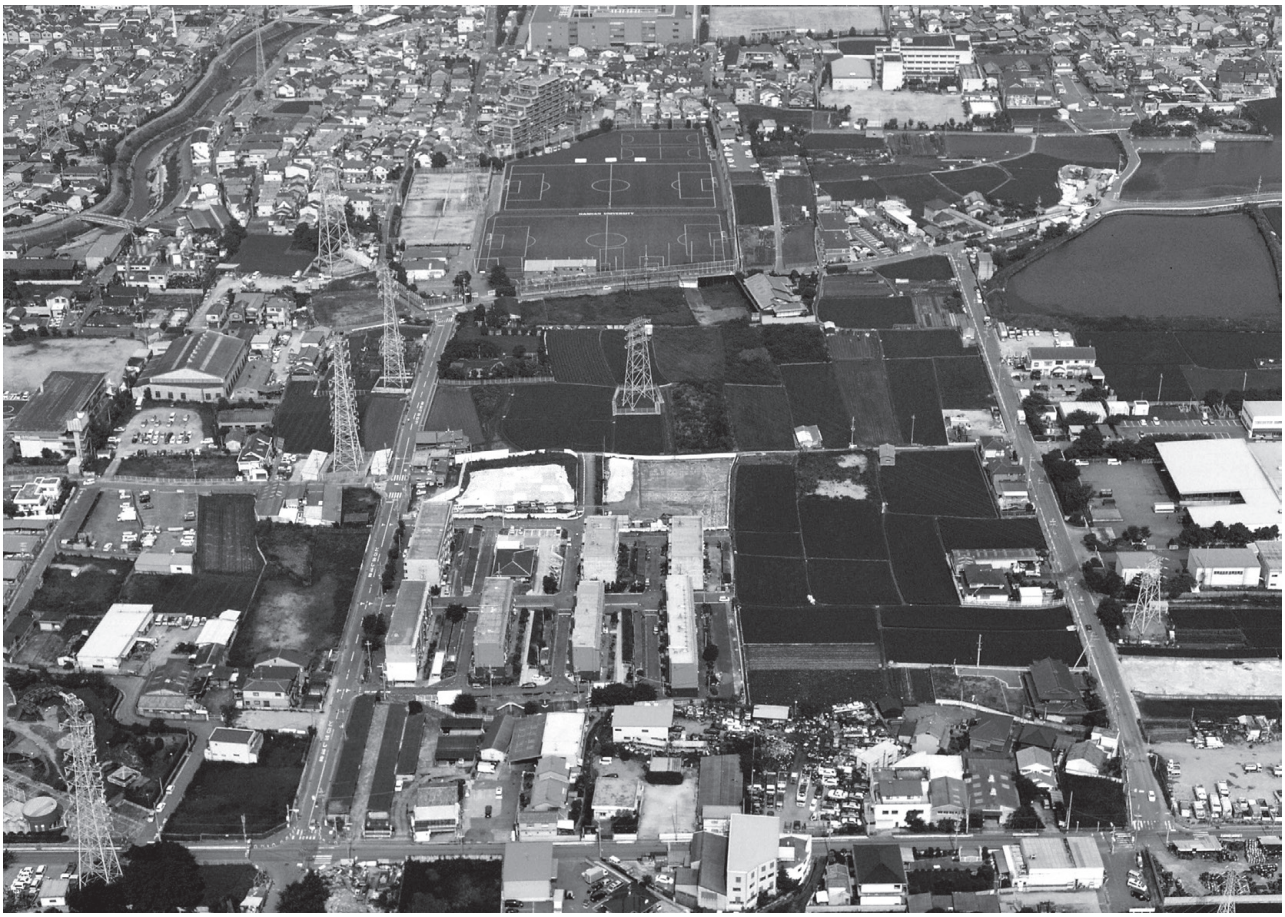


図152　全体遺構図　1：400

図　版

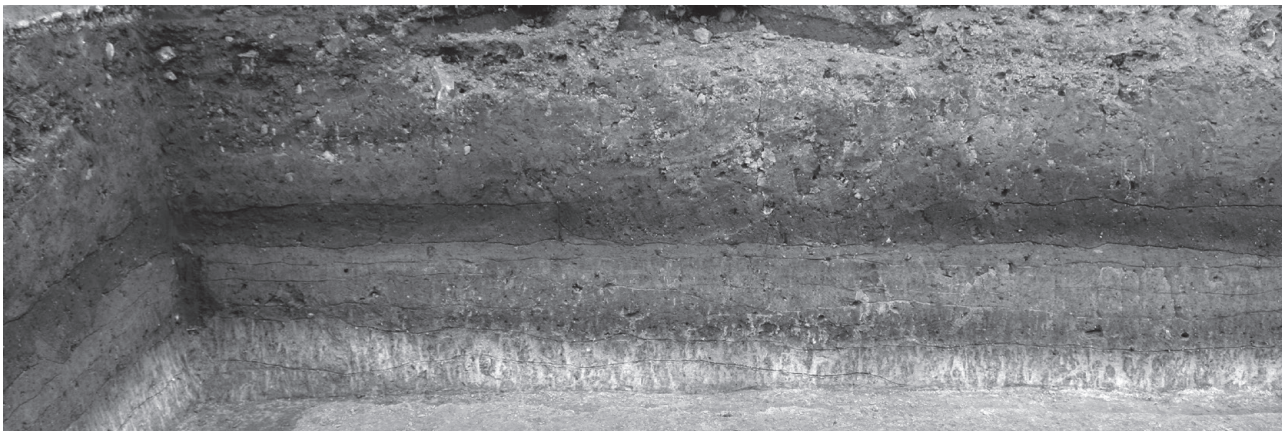
１．調査地遠景・平成21年(2009)７月23日撮影（北から）



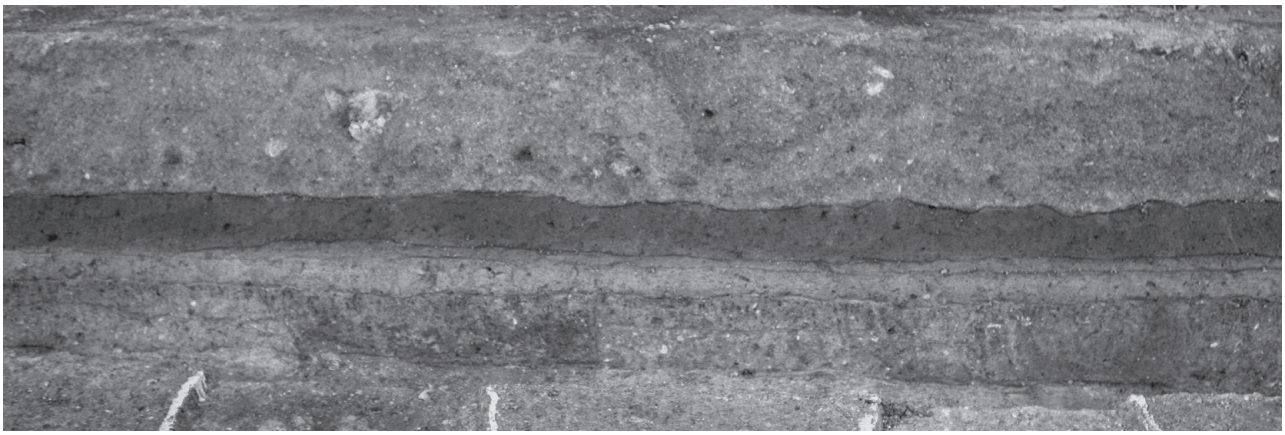
２．調査地遠景・平成21年(2009)７月23日撮影（西から）

調査区壁面地層

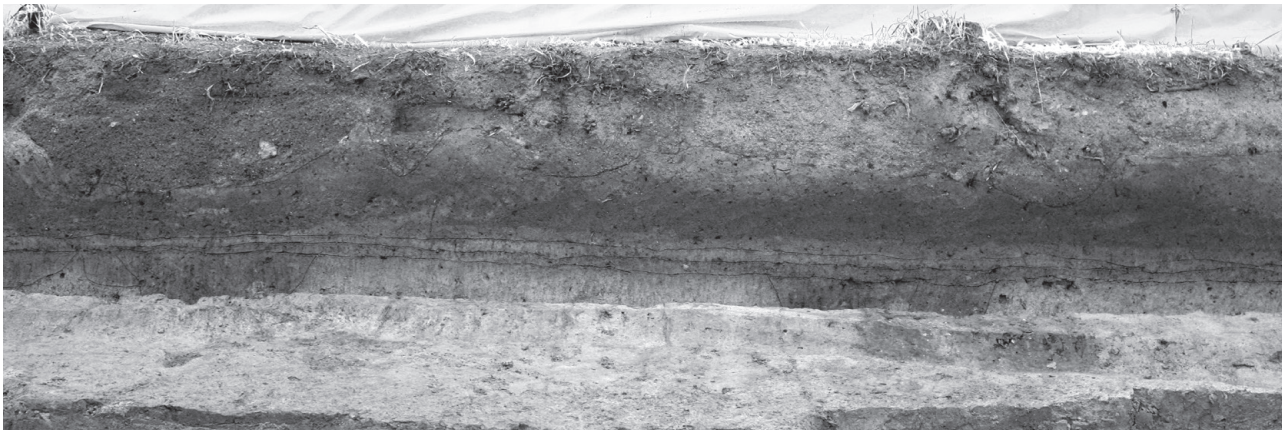
１．Ⅳ区北壁東側NR2005東肩付近（南から）



２．Ⅳ区北壁西端（南から）



３．Ⅲ区西壁（東から）



４．Ⅰ区南壁（北から）

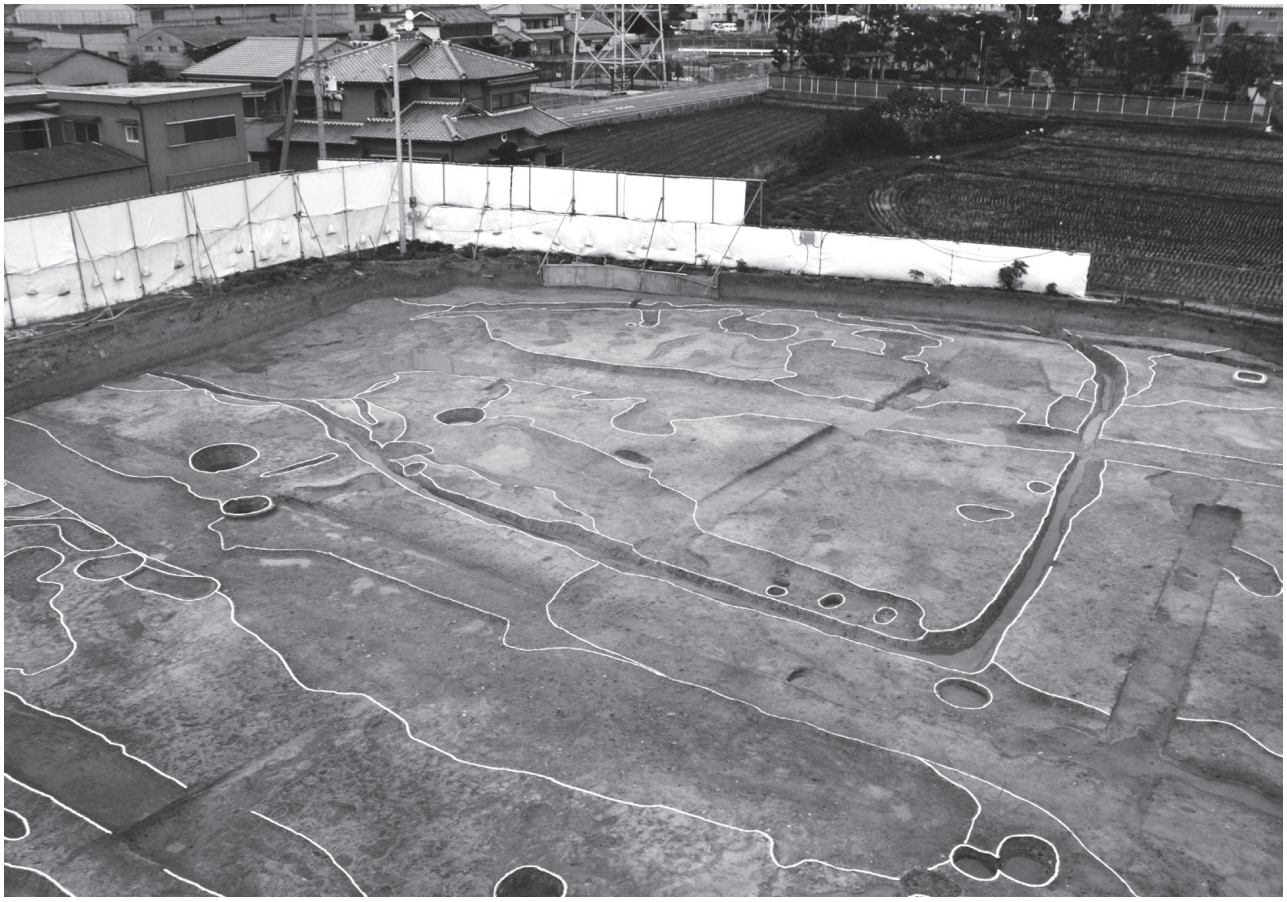
１．Ⅰ区NR1246完掘状況（北から）

２．Ⅰ区NR1246整地範囲完掘状況（北から）

３．Ⅲ区NR1246完掘状況（北から）

４．Ⅰ区NR1246・1259断面B（北から）

５．Ⅰ区NR1246断面C（南西から）



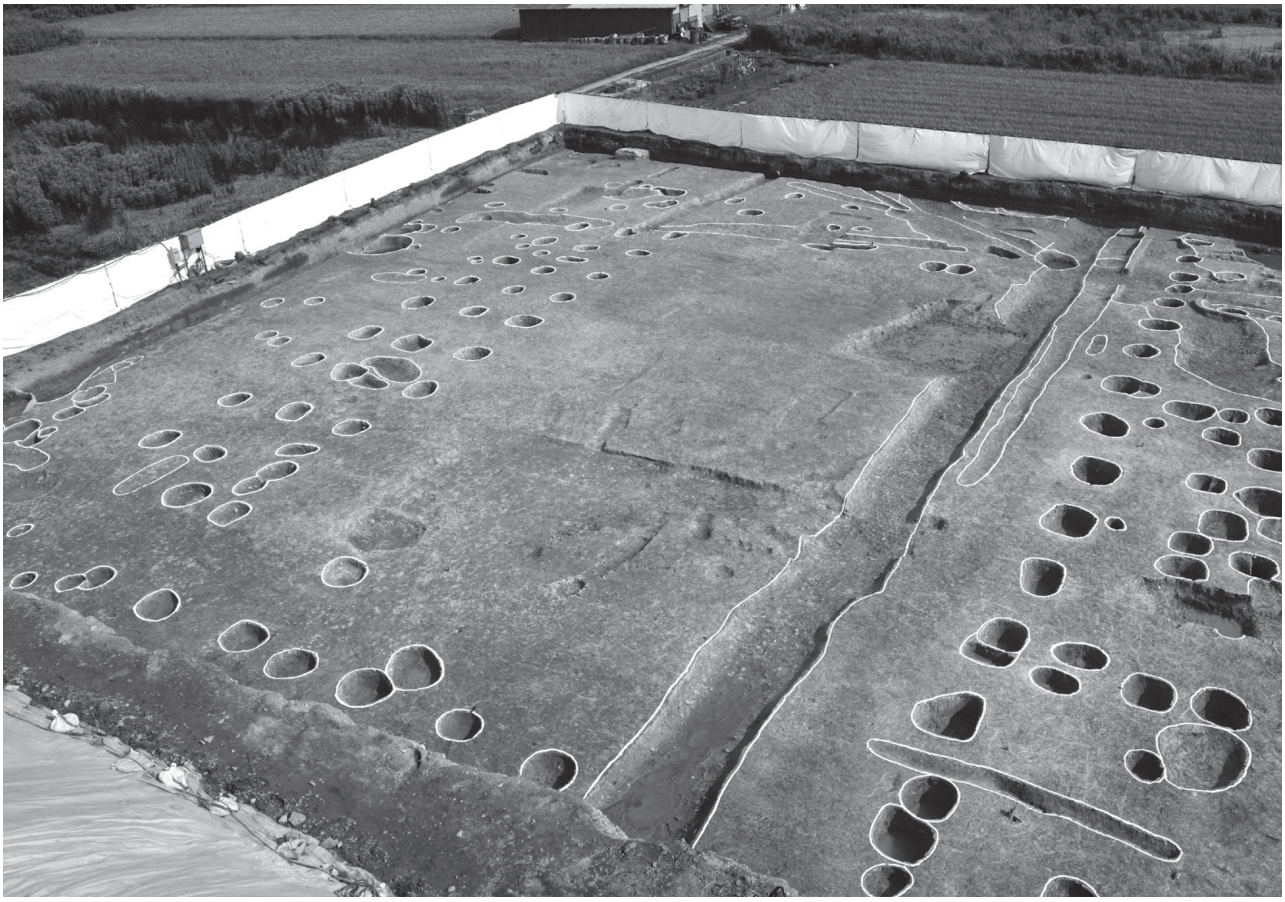
１．Ⅱ区NR1246・NR2005・NR3110完掘状況（西から）

２．Ⅱ区NR2005断面B（南西から）

３．Ⅱ区NR2005断面D（南から）

４．Ⅳ区NR2005[4078]土師器壺出土状況（東から）

５．Ⅲ区NR3110漆壺出土状況（南から）



１．Ⅰ区（南区）東側遺構完掘状況（北から）

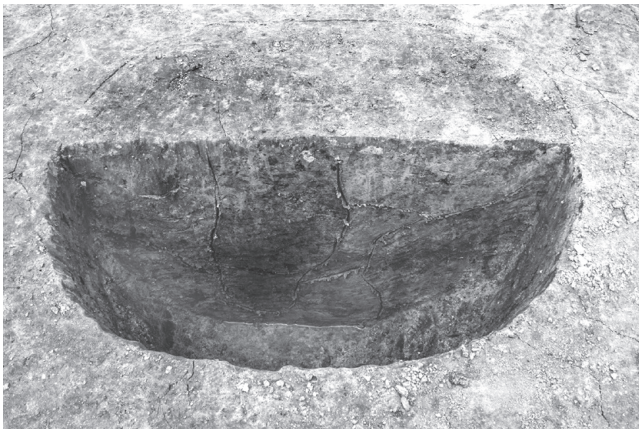
２．SB１・SB２総柱建物検出状況（北から）

３．SP1010（SB２）断面（東から）

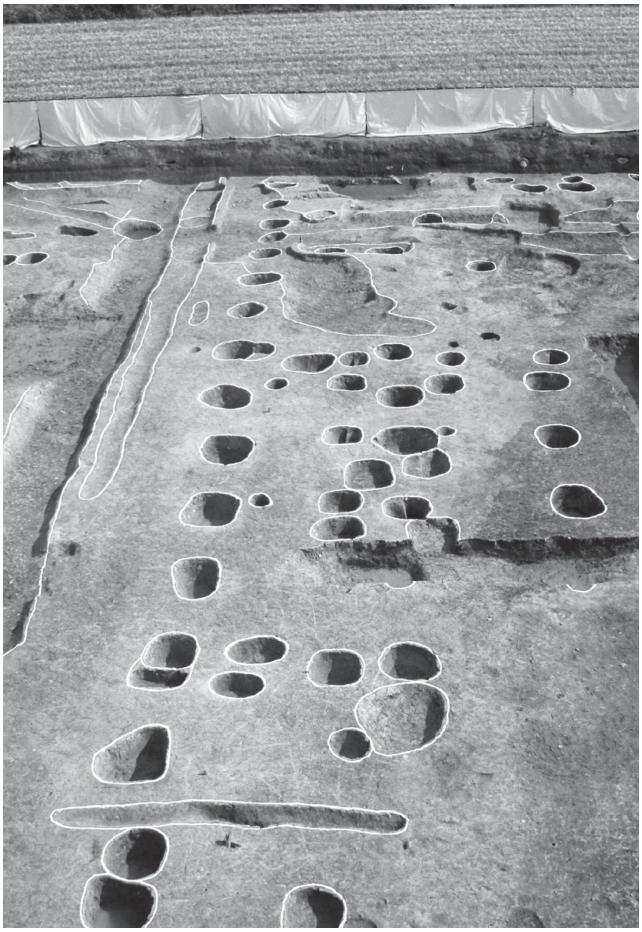
４．SP1031（SB２）断面（東から）

１．SB５・SB13検出状況（北から）

2．SP1254（SB５）断面（東から）

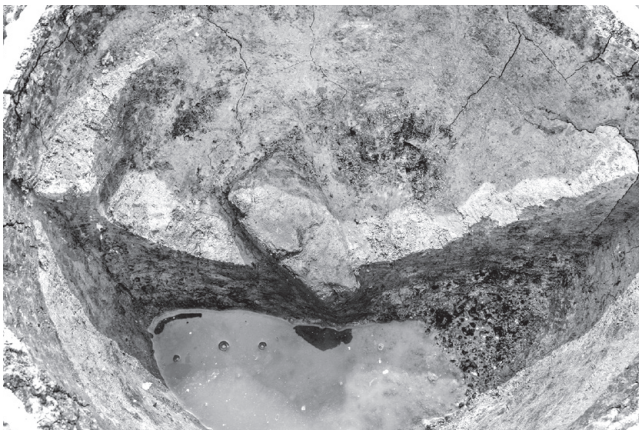


３．SP1167（SB５）断面（東から）



４．SB５・SB13完掘状況（北から）

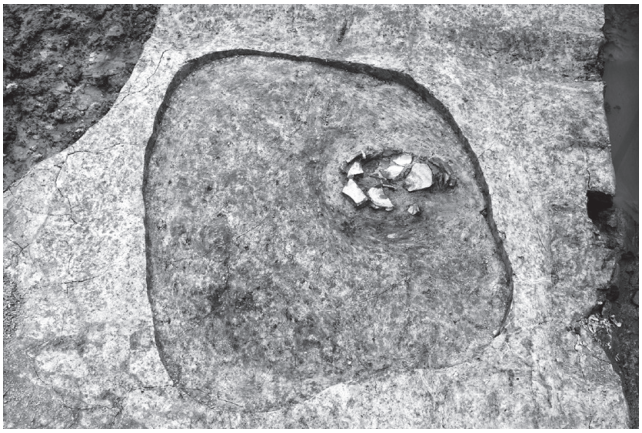
５．SP1139（SB13）断面（西から）



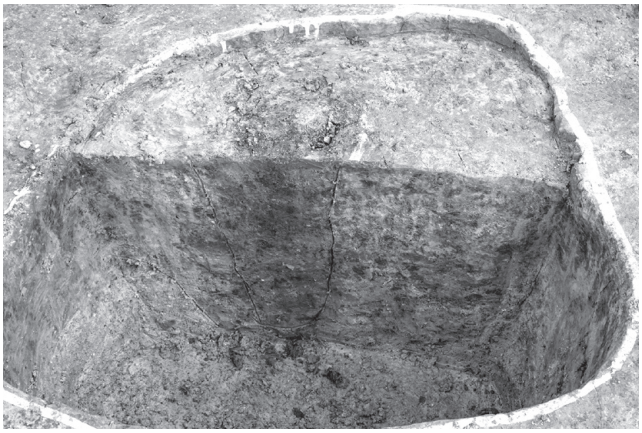
６．SP1140（SB13）断面（西から）

1. SB6・SB7完掘状況（北から）

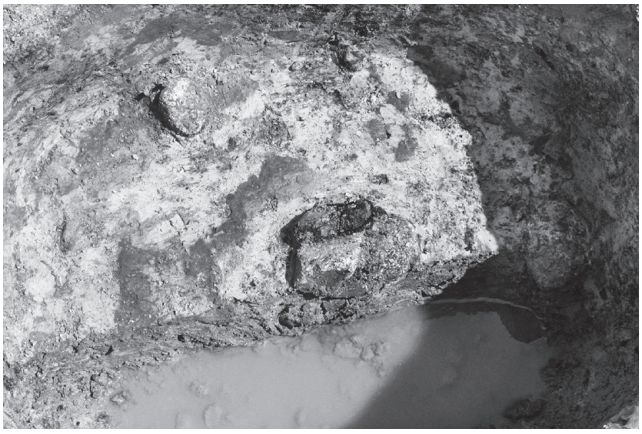
2．SP1173（SB6）断面（南から）



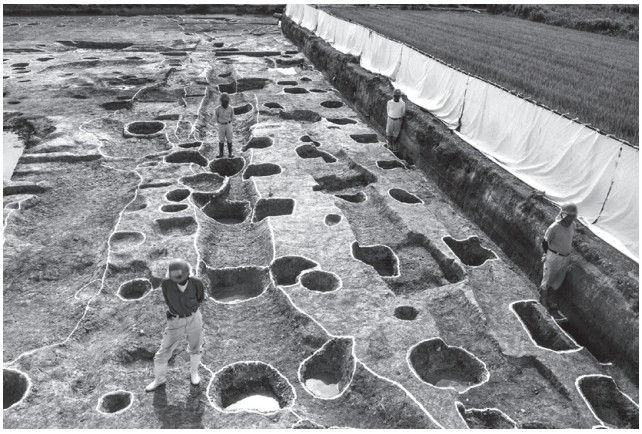
3．SP1185（SB6）遺物出土状況（西から）



4．SP1185（SB6）断面（北から）

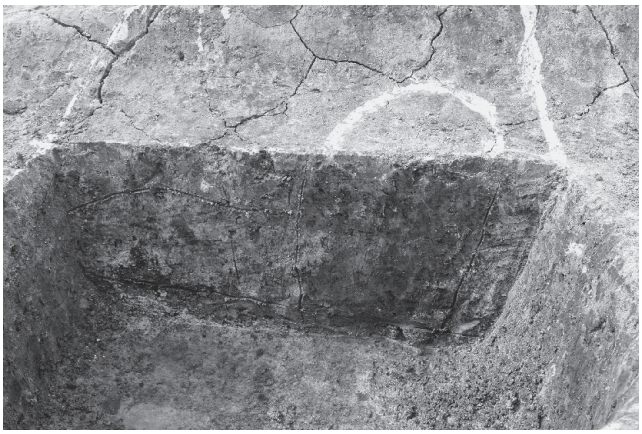


5．SP1183（SB6）礎板出土状況（西から）



6．SB7完掘状況（西から）

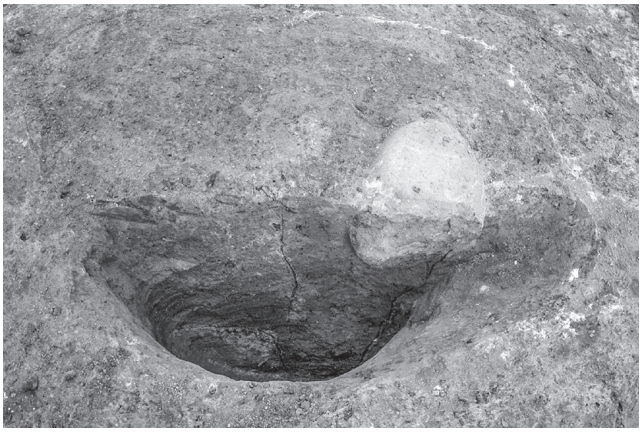
7．SP1174（SB7）断面（南東から）



8．SP1192（SB7）断面（南から）

１．Ⅱ区SB３・SB４完掘状況（東から）

２．Ⅲ区SB10・SB11・SB15・SB16完掘状況（北から）

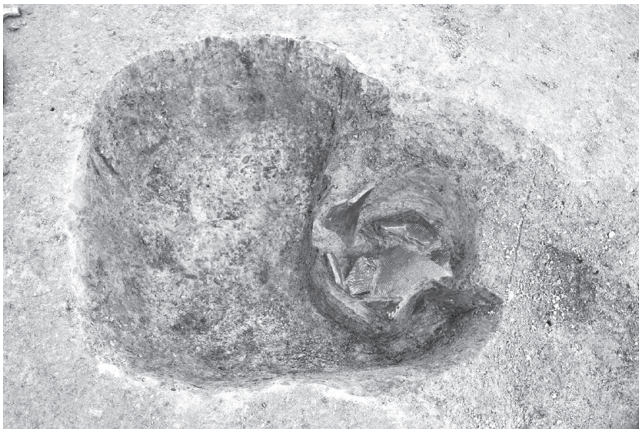


1. SP2117（SB９）断面（南から）

２．SP2144（SB９）礎板出土状況（南から）

３．SP3070（SB11）礎板出土状況（東から）

４．SP3088（SB11）礎板出土状況（南から）



５．SP4057（SB12）遺物出土状況（西から）

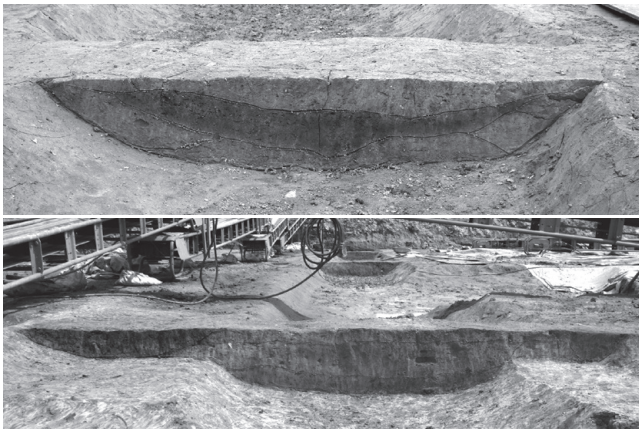
６．SP4057（SB12）断面（西から）

７．SP2096（SB14）断面（南東から）

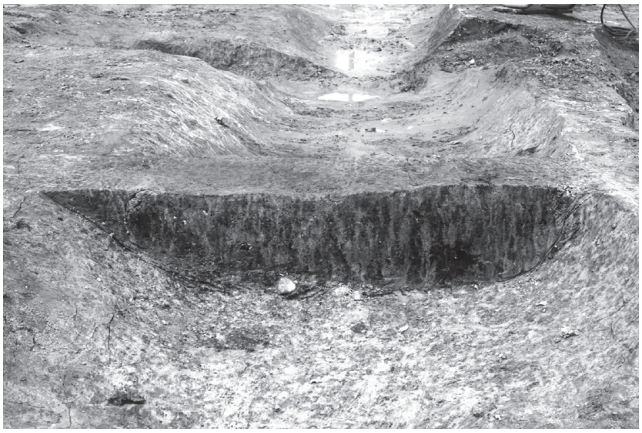
８．SP2025（SB17）断面（南から）

1．SD1011断面A（西から）

2．SD1021断面B（東から）

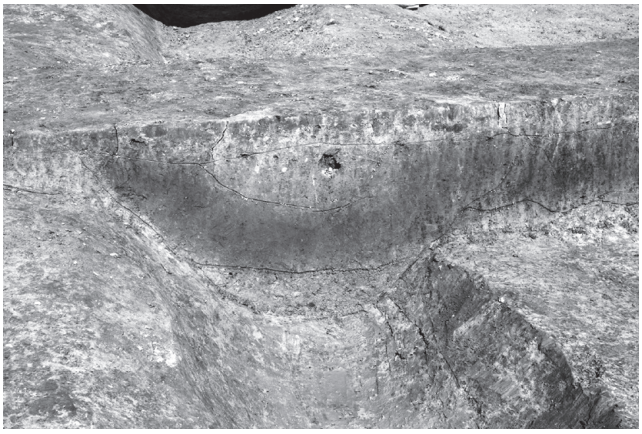


3．SD1022断面（南から）



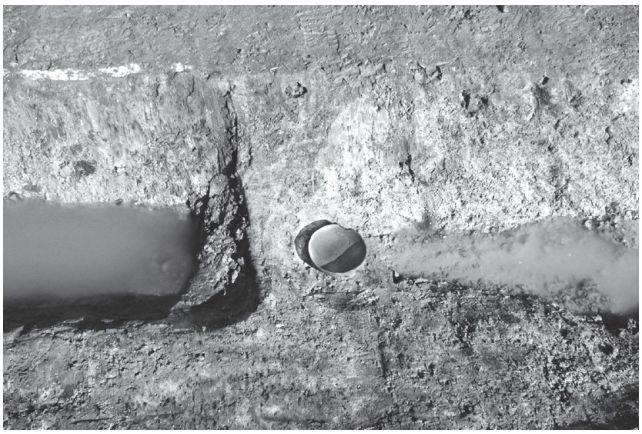
4．SD1186断面B（東から）

5．SD1189断面（東から）

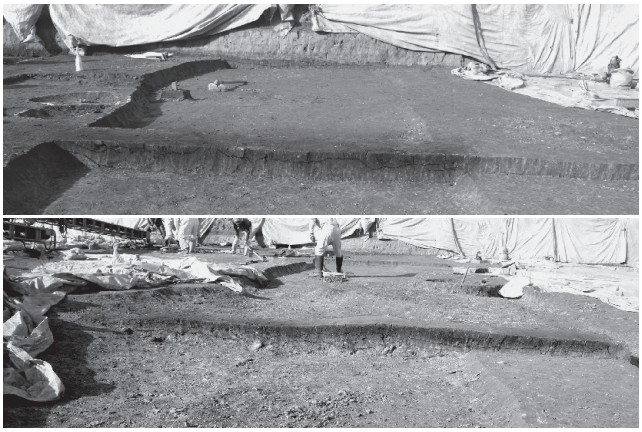


6．SD2002断面B（南から）

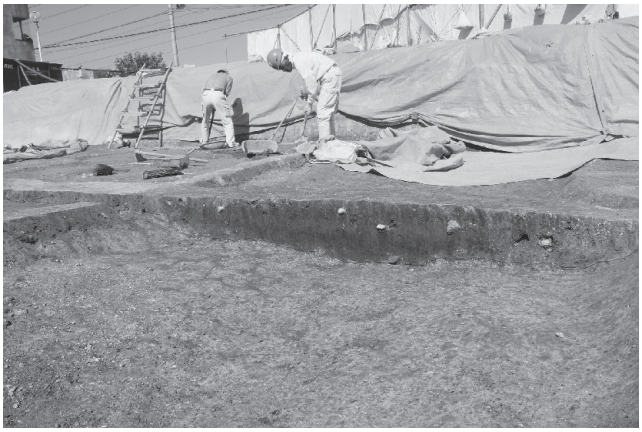
7．SD2002断面D（西から）



8．SD2002遺物出土状況（南から）

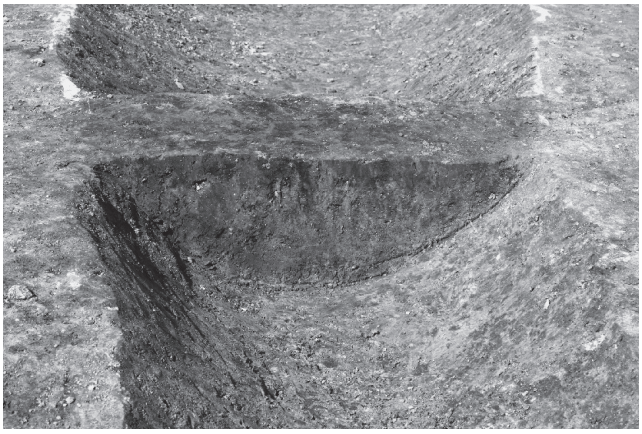


1．SD2014断面（南から）



2．SD2018断面（南から）

3．SD2016断面（東から）

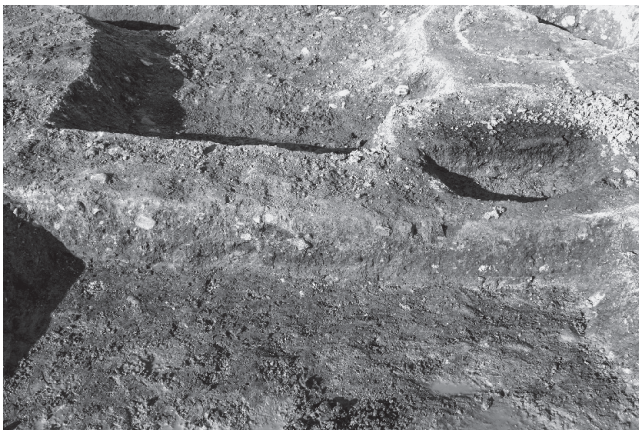


4．SD2017断面（東から）

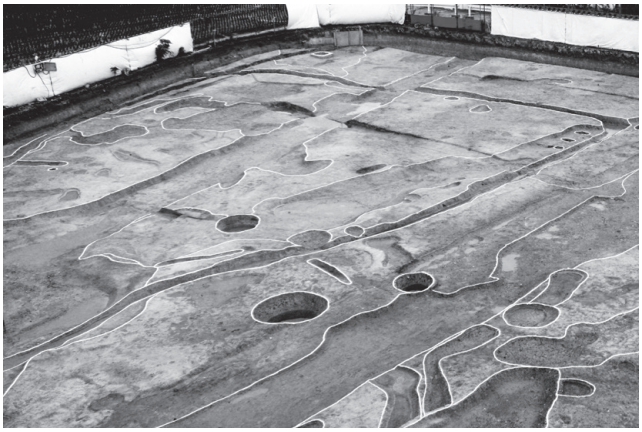
5．SD2023断面A（西から）

6．SD2023断面B（西から）

7．SD2107・SD2108断面（東から）



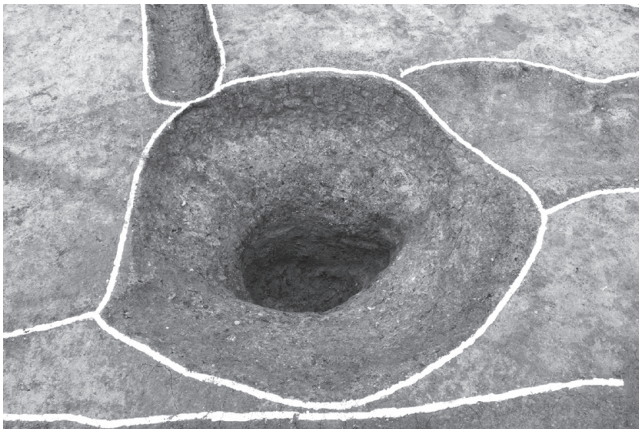
8．SD2136断面（東から）



1．SE2012・SE2013完掘状況（北西から）

2．SE2012断面（東から）

3．SE2013断面（東から）

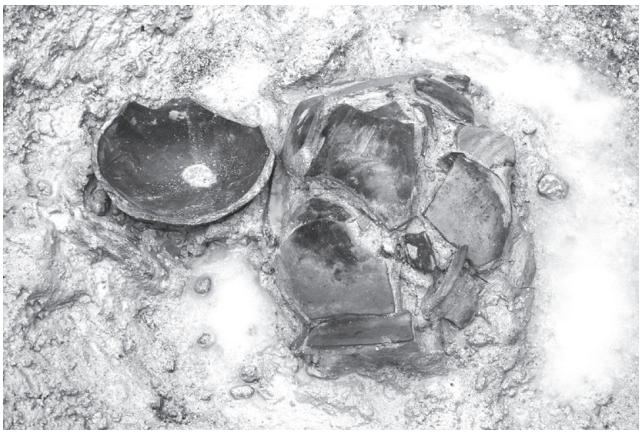


4．SE2073完掘状況（東から）

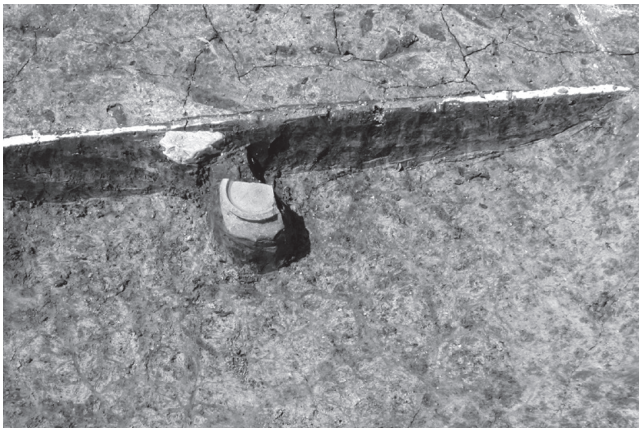
5．SE2073断面（東から）

6．SK1003断面（西から）

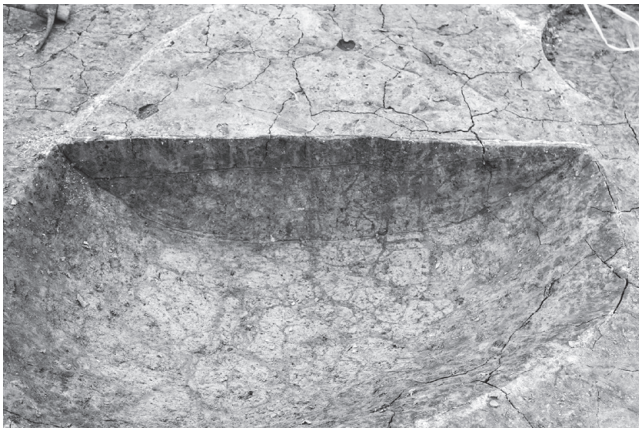
7．SK1091断面（北から）



8．SK1091遺物出土状況（東から）



1．SK1111遺物出土状況（南から）



2．SK1111断面（南から）

3．SK1158東西断面（南東から）

4．SK1158東西断面西半（南から）

5．SK2072断面C（西から）

6．SK2072断面B（北から）

7．SK2072完掘状況（北から）

8．SK2148断面（東から）

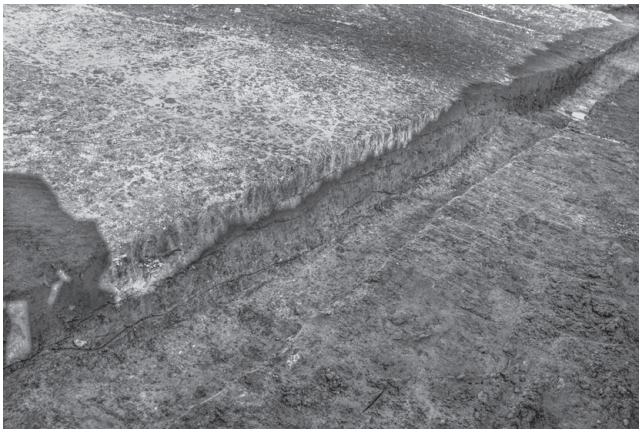
1．SK2177断面（南から）

2．SK3121断面（南から）

3．SK3003断面（西から）

4．SK4076断面（南から）

5．Ⅳ区SX2019[4004]遺物出土状況（西から）



6．Ⅳ区SD2018・SX2019断面A（南東から）

7．Ⅱ区SD2018・SX2019断面B（南西から）

8．Ⅱ区SX2026断面（北から）

41

31

106

322

134

13

12

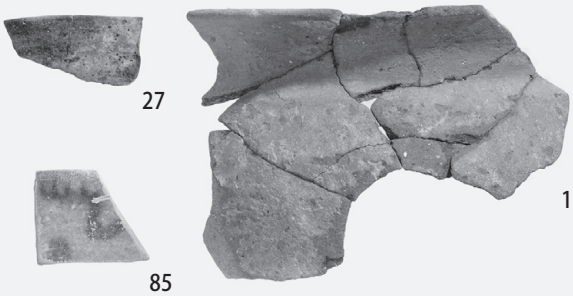
116

97

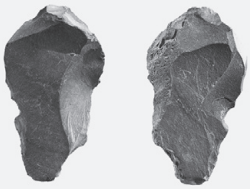
98

99

101


27
113
85
152
29
123

156


124

190

188

193

168

192

198

172

180

181

160

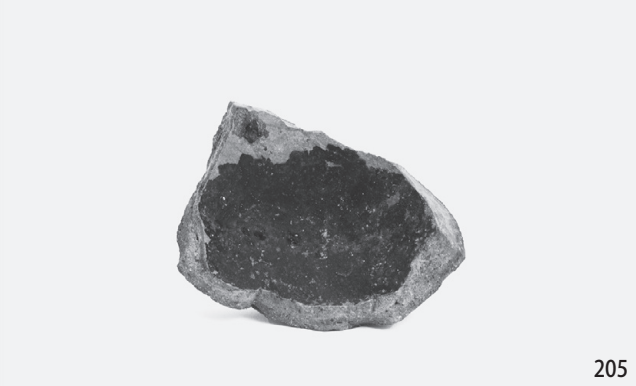
186

183

200

210

201


205

202

213

252

250

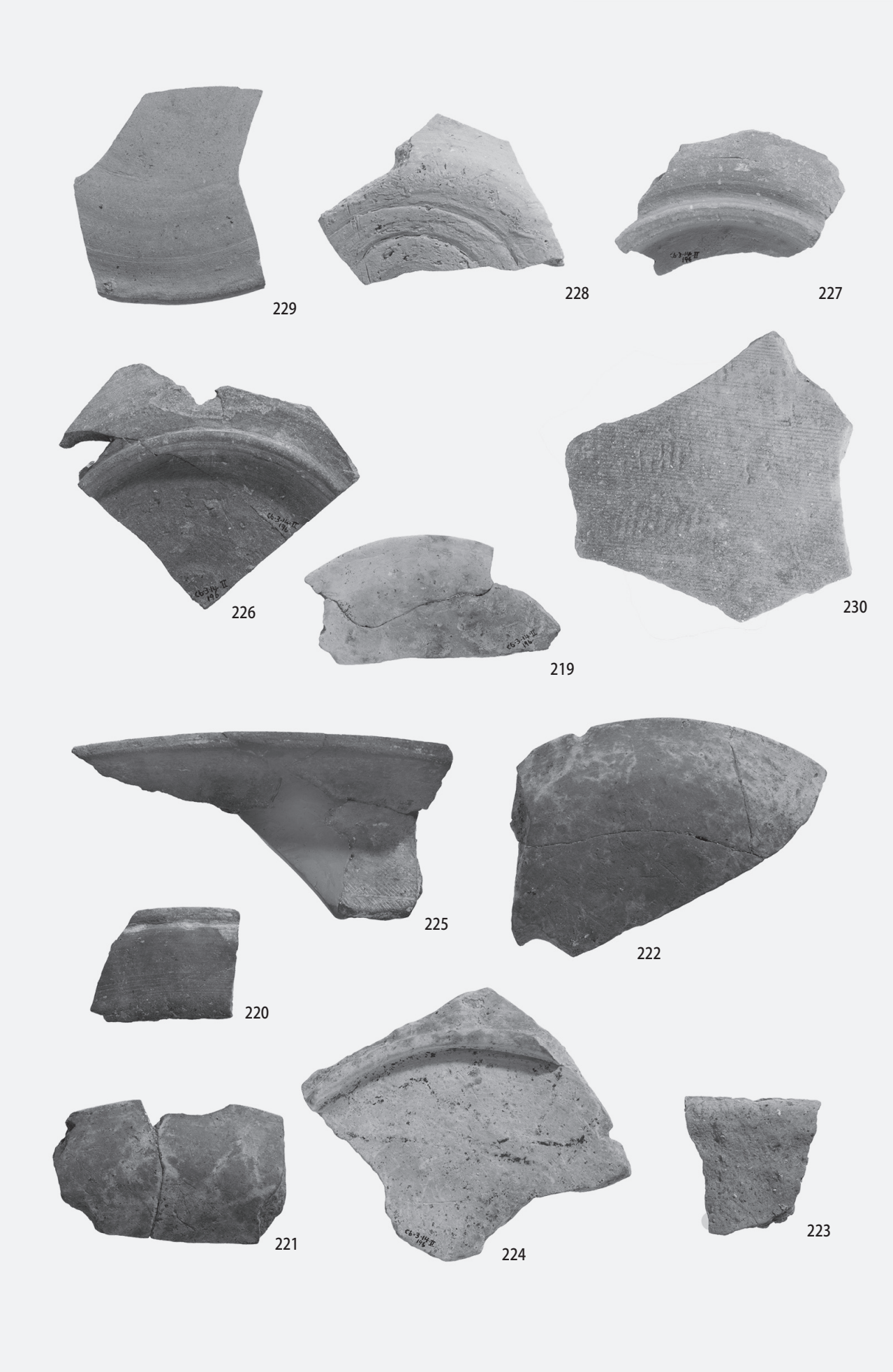
243

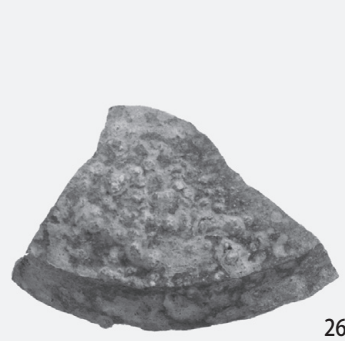
216

266

262

SB8　出土土器

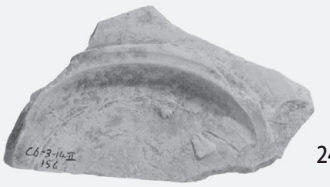


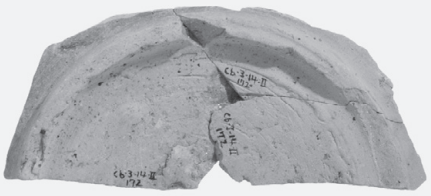

260

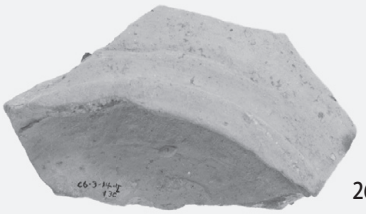
258

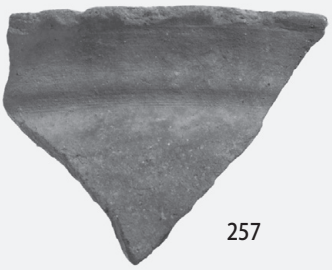
246

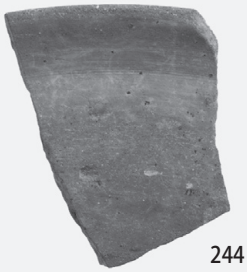
259

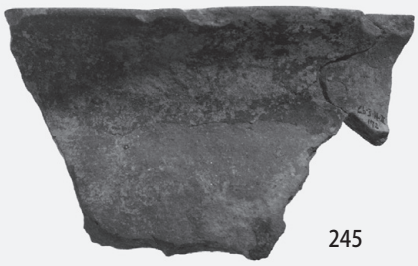

247


248


261


257

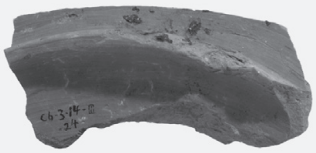

244

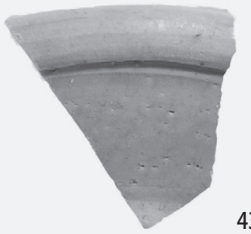

245

253

256

265


249


435

図版 20　SD1021・SD1189・SD2002・SD2003・SD2023・SD2091・SD2135・SD2136　出土土器・瓦

341

342

292

293

274

290

339

336

288

327

346

361

345

395

352

410

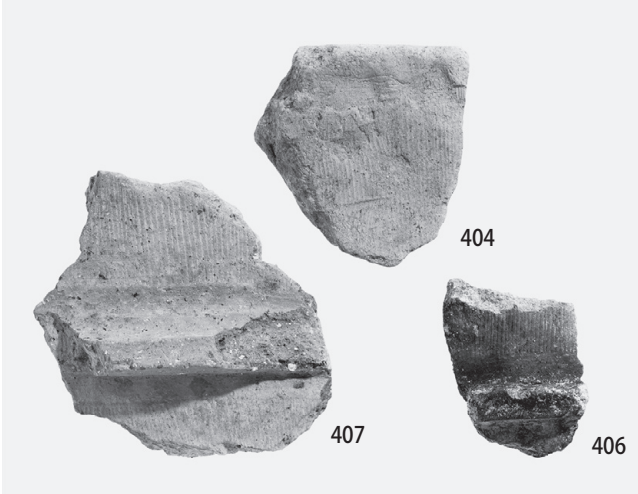
350

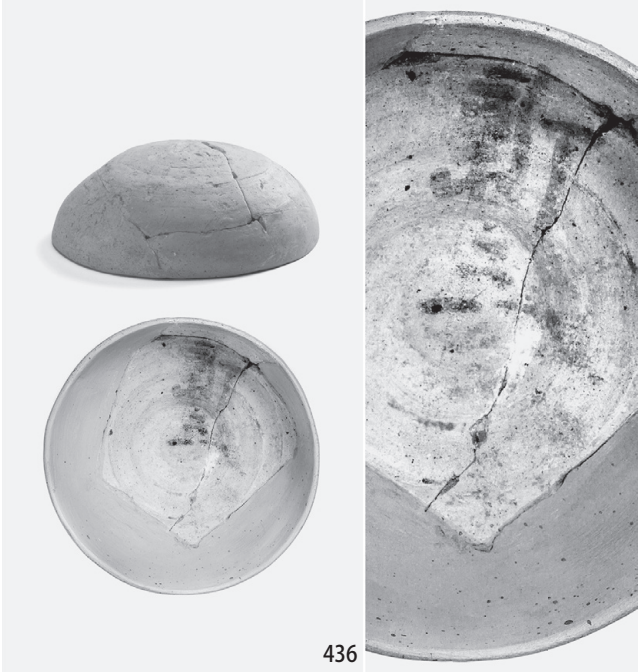
391

416

356

418

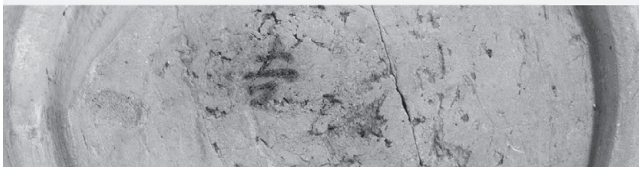



436

476

471

482



481

483

486

496

443

464

460

報告書抄録

ふりがな	かわいいせき
書　　名	河合遺跡
副書名１	松原市立学校給食センター建設工事に伴う河合遺跡C６－３－14発掘調査報告書
副書名２	
シリーズ名	松原市文化財報告
シリーズ番号	第４冊
編著者名	大矢 祐司、芝田 和也、株式会社古環境研究所、株式会社パレオ・ラボ、 文化財調査コンサルタント株式会社
編集機関	松原市教育委員会
所 在 地	〒580－8501 大阪府松原市阿保１丁目１番１号　TEL 072－334－1550　FAX 072－332－8550
発行年月日	令和２年（2020）３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	調査面積	発掘原因
かわいいせき 河合遺跡	おおさかふ 大阪府 まつばらしかわい 松原市河合５丁目 238－1の一部, 238－３，238－４， 238－６	27217	15	34° 34′ 12″ 34. 5701 3477	135° 32′ 15″ 135. 5375 8829	20090511 ～ 20100317	4,490㎡	学校給食センター建設に伴う記録保存調査

収録遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
河合遺跡	散布地	縄文～中世	包含層	石器、土師器、須恵器、埴輪、瓦器、陶磁器、瓦	縄文時代の有舌尖頭器が出土。
	集落	古墳～飛鳥	溝、井戸、落ち込み、自然流路	土師器、須恵器、瓦	自然流路から飛鳥時代の土器と漆容器が出土。また、「新三」と墨書のある須恵器杯蓋と丹比廃寺式軒丸瓦が出土。
	官衙	奈良	柵、掘立柱建物、溝、井戸、土坑、落ち込み	土師器、須恵器、黒色土器、陶器、瓦、金属製品	南北55m、東西23m以上の空間をコの字に囲繞する長舎を検出。 底部に「吉」と墨書のある須恵器杯、円面硯、青谷式軒丸瓦が出土。

要　約

市立学校給食センターの建設に伴う河合遺跡の発掘調査で、4,490㎡を４つに分割し実施した。遺跡は西除川左岸の段丘面上に位置しており、遺構面は１面である。

自然流路（NR1246・2005）からは、飛鳥時代の土器とともに漆容器が出土しており近隣に工房が存在した可能性がある。

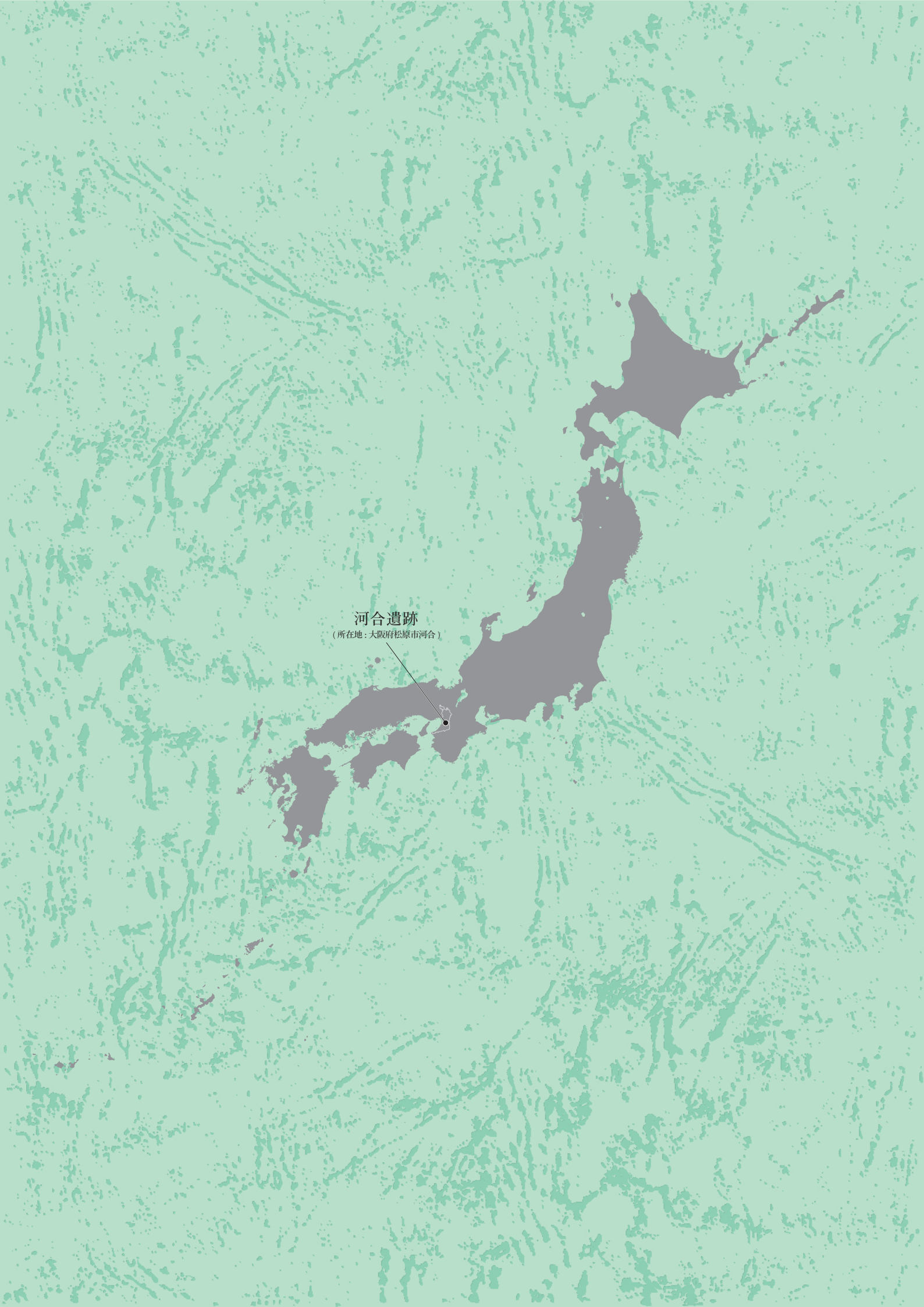
掘立柱建物は19棟検出しており、うち４棟（SB３～６）は奈良時代の長舎でコの字状に配置されている。南辺と北辺の長舎間距離は約63mで、長舎で囲繞された空間は約55m四方に復元できる。８世紀前半には確実に存在しており、存続時期は最大で７世紀後半～８世紀末と考える。長舎廃絶後は８世紀末～９世紀初頭に側柱建物が建てられたが、空間を遮蔽・囲繞していない。また、南北長16m・東西長12mの土器を伴う落ち込み（SX2019）は、長舎廃絶に伴う塵芥処理坑の可能性がある。

松原市文化財報告　第４冊

河　合　遺　跡

松原市立学校給食センター建設工事に伴う河合遺跡Ｃ６－３－14発掘調査報告書

発行年月日　令和２年（2020）３月31日
編集・発行　松原市教育委員会
〒580－8501　大阪府松原市阿保１丁目１番１号
電話072－334－1550（代表）
印刷・製本　能登印刷株式会社
〒920－0855　石川県金沢市武蔵町７番10号


河合遺跡
（所在地：大阪府松原市河合）